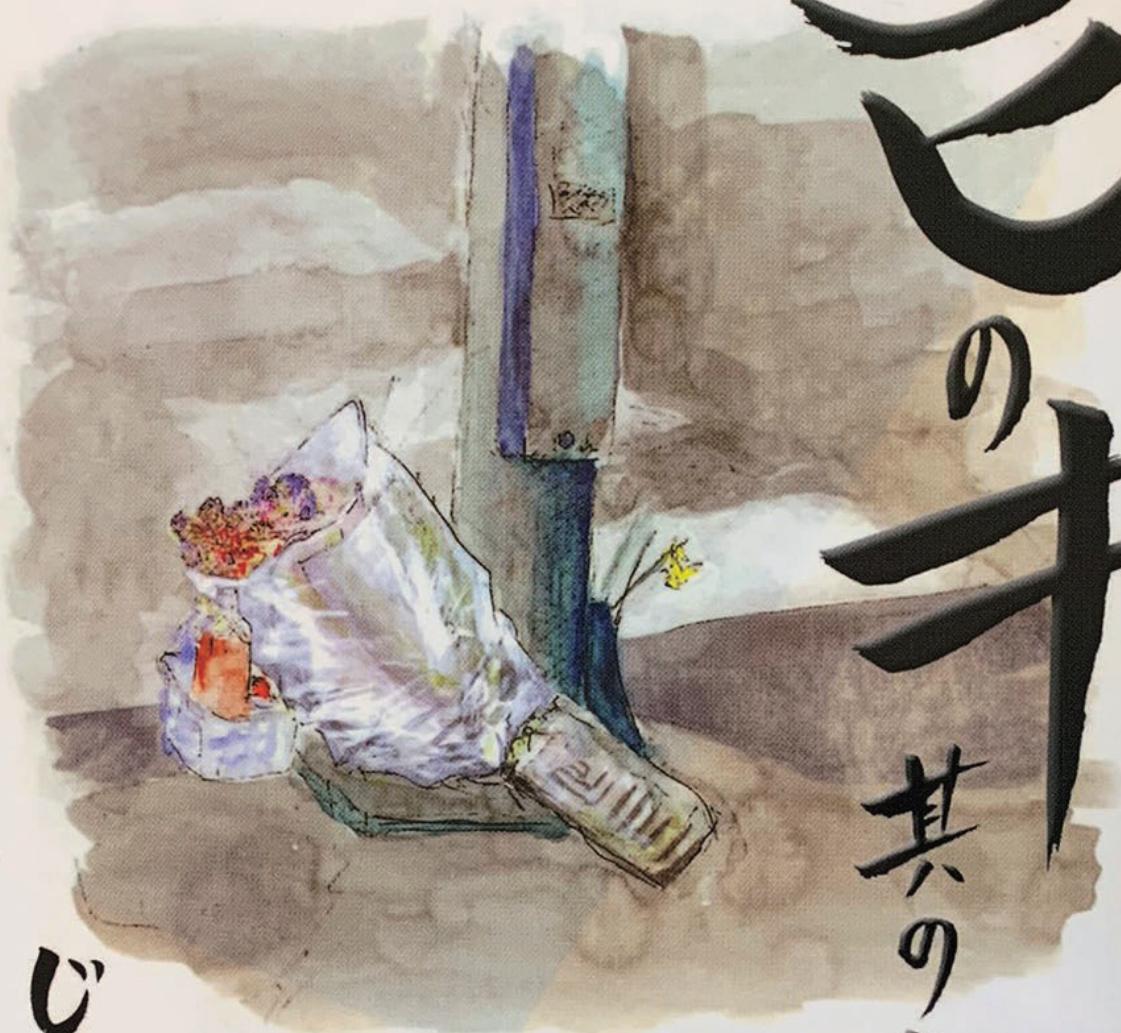


参の井



じろちゅう著

タビのキ

其の参

じろちょう 著



タビのキ

足が動く
足にマメができる

心が動く
心が飛んでいく

命が動く
命がさまよう

多くの多くの得体の知れない何がが
僕らを取り巻いている
僕らの周りの何かを感じ取るため
僕らは歩く

歩く
歩く
歩く
歩く

はじめに／3

お四国遍路編 第一期 · · ·

お四国遍路編 第二期 · · ·

お四国遍路編 第三期 · · ·

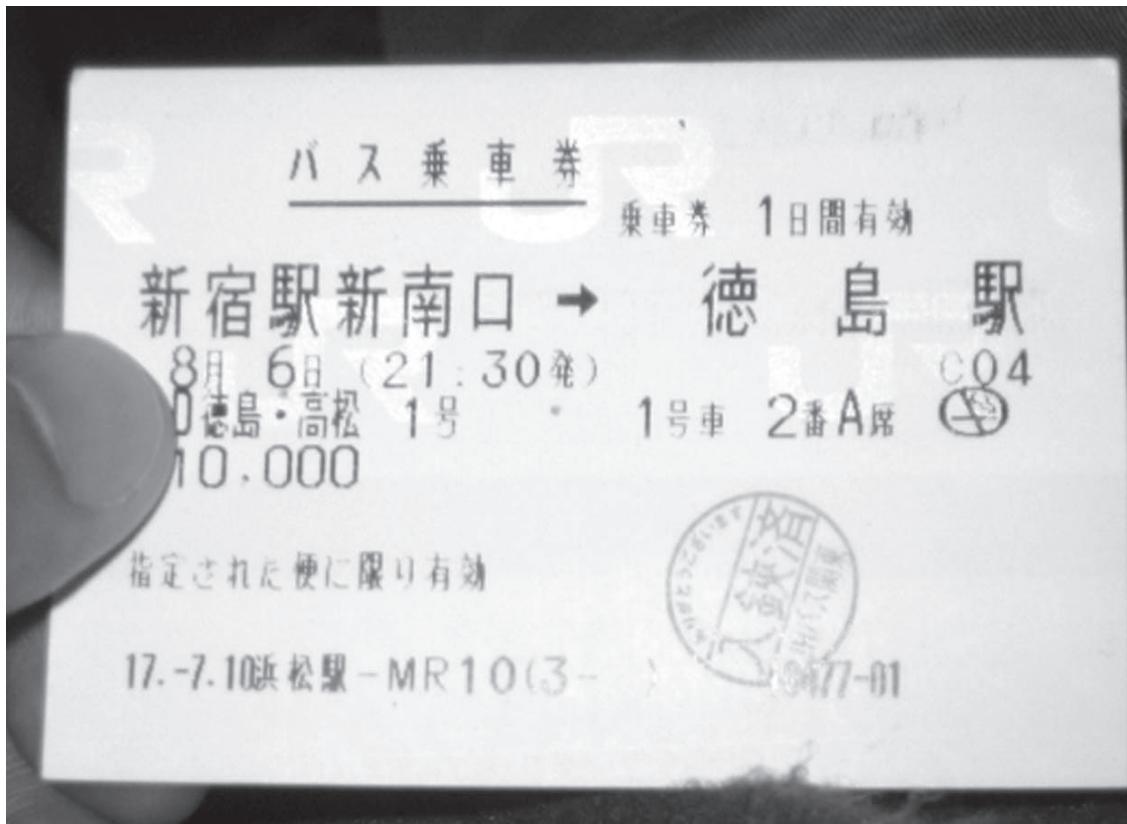
お四国遍路編 第四期 · · ·

213 153 39 5

あとがき／321

お四国遍路編

第一期



計画的犯行といつて言葉があります。まさしくその通り、計画的に事を起します……ちょっとした快感でもあります。

その日、僕は東京にいました。たまたま弟がそこで結婚式をするというので、そりや、兄として参加しないなんてことは考えられず、お祝いの席にいたんです。うれしい席でした。

それで、式が終わって僕の時間です。夏です。旅立ちの時です。事前調査によれば、東京からは夜行バスがたくさん出ています。お四国へもバスが出ているようでした。ゲット……その日のうちにバスに乗れるチケットを手に入れるわけです。日頃、そんなに計画的な行動をするような人間じゃありません。むしろ、無計画が服を着て歩いているようなモンです。そんな無計画人間が、事前調査をして、さらには事前にチケット入手を敢行していたんです。これはすごいことでした。

うれしい出来事の後に続く自分自身の楽しみ……、こんなに美しい流れはありません。ここに緻密な計画の良さを感じさせられました。これから僕が、もう少し計画的な人間に変わっていく可能性を暗示する、貴重なチケットです。たとえ歩き遍路を始める自分が毎日どれだけ歩けるか明確じゃなくてもいいんです。工加減人間からの脱却、記念碑的チケットです。

この後、バスの中……チケットは回収されてしまいました……。



学校では家を出てから家に帰るまでが遠足だ、なんてことを言います。そりや、事実としてはそういうことになるんだけど、僕としては学校を出発して学校に戻つてきただけ、それが一つの遠足っていうセットになるような気がします。

僕の遠足……全部で千二百キロぐらいにもなるという長い遠足の歩き遍路で、出発点はどいになるんでしょうか。ま、普通に考えたら一番札所になるはずです。でも、実際に僕が僕の足を使って進み始める実感をもつたのは、それよりも前、列車を降りた駅からでした。交通機関の足を使わずに自分の足だけが頼りだとう、その出発の場所です。

言うたモン勝ち、なんて、豪語する人がいます。結婚式という場所で「汝は一生愛し続けますか」と神父に問われて「はい」と返事をした友達が、後から「言ったモン勝ちや!」と叫つていました。そんなのもアリなんですかね……。これも一つの出発点かもしれません。出発点なんて他の人が決めるモンじやありません。自分が「よし!」と決意した瞬間に物事が動き始めるんですね。人生の中でもいつだって出発点を見つけられます。八十歳になつてから習い事を始める人だっているくらいですから……。

だから、感覚として、歩き遍路の僕の出発点は、列車から降りたこの駅です。始めの一歩です。

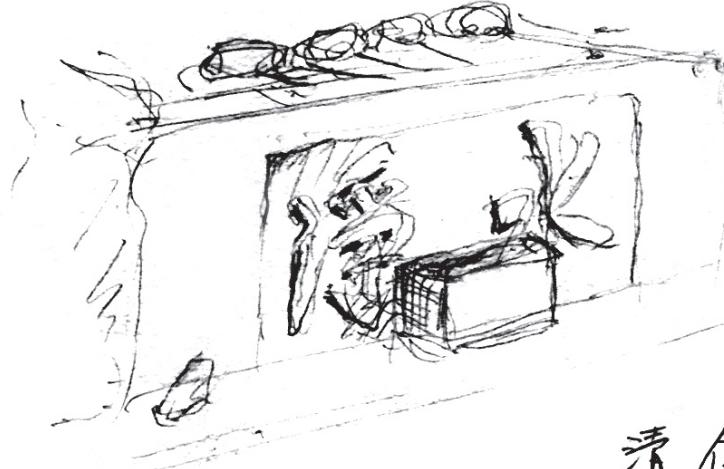


歩き始めた僕は、第一番田の札所への道をじっくり進んでいました。駅を出てからすぐには寺への道が僕を待っていたような、そんな道でした。きっと、これまでにも自分勝手なヤツが「ワタクシのために道を準備してくれてありがとう!」なんて寝言を口にしながら足を進めたと思われる道です。それほど「いらっしゃい感」が強く感じられる空気がありました。

小さい頃新しいノートを買うと、最初のページだけはとにかくきれいな字で書き始めて、しばらく経つとそれがだんだん崩れ始め、そしてとうとうミミズの行進曲になつていく過程を何度もとなくくり返してきました。一番最初つて、ドキドキします。そして、フクフクします。最初だからこそって、妙になりました。

一番札所を田指し、そんなにかんでいたわけじゃないけど、やっぱりドキドキフクフクでした。適度な緊張感をもつていたこところです。自分を高めるのは何なのか、最終的に、その答えは「田舎」だと思います。たとえば、八十八ヶ所の札所を回るのに、最初からアドレナリン出まくって吠えていたって、途中でしほんでしまうはずです。最初からダラダラしてたって、途中でどひかてしまふはずです。

最初の札所、自然体で進めるような、落ち着いた参道でした。



清めの水

しばらく

僕の強欲は
清められぬうちに

2005.8.7

寺に参ると、最初に現れるのが山門です。そこで一礼をして境内へと入り込みます。そしたら、中をキヨロキヨロします。汚れた身を清める水を探すわけです。僕なんかは煩惱のかたまりみたいたなモンだから、いくら神聖な水だつたとしても簡単に清められるとは思いません。それでも多少はマシかと氣は心とばかりに一応の作法に従つて自分自身を清める努力をしてみます。

お寺の水で清めたらホントに自分はきれいになれるのか……、そんな訳やないだろ……とツツコミを入れてしまします。現代科学の知識からすれば、水とは酸素と水素がくっついてできている物質である、と定義されます。それ以上でもそれ以下でもありません。非常に安定した物質であり、溶媒としての有用さが特色として考えられています……それだけです。

仏教の教えに限らず、水が聖なるものという考え方が世の中にはあります。僕には聖なるドブに見えたガンジス川も、その場の人たちにしてみればものすごく貴重な聖地だつたりしました。人は様々なものにありがたさを感じて生きています。どんな物にだって何かの力が宿ると考えることだってあります。それだけ人は周囲の物たちに頼つて生きています。僕はそれを実感しているのか、不安になることがあります。大切なものを大切だと感じていられる、そんな人間の知恵を持ち続けていたいモンです。



本堂へ向かいます。そこで「般若心経」をよんだり、灯明をあげたり……という、まあ、儀式を行います。お経なんて、今まで自分でよんだことなんてありません。本当だつたら学生時代に学んでいたはずなんだけど、なぜか仏教についての知識は身についていません。ダメ男です。だから、お経をあげるのも妙に不自然なんです。時々つつかえながら、自信なさそうに本堂の隅の方で、ボソボソとよんديります。

ああ、やっと終わった……と思えば、次には大師堂へ向かって同じことをもう一度です。お札を納めて、線香をあげて、また、隅の方でボソボソとモゾモゾとあ勤めをします。

こんな感じだから、とにかく時間がかかります。別に緊急事態が発生しているわけじゃないから、のんびりやつていればいいんです。でも、スマーズにいかないのは気持ちが悪いものです。たぶん、周りの人たちの多くも、同じようにゴソゴソしているんだと思います。それが、ものすごく上手に慣れた姿に見えるんだから不思議です。自分に自信がもてないと、全てがうまくいきません。自己肯定感があることの大切さを感じます。僕だつて何かきっと優れたモノがあるはずです。胸を張つて行きましょう。

あれれ……、山門で撮つた写真の情けないと……。人間つてすぐには変われないモンなんですね。



ハシシ、ガンジヤ、チャラス、ハッパ、マリファナ……、いろんな言葉で売り手から声をかけられたことがあります。漢字で書いたら大麻というヤツです。そいつの煙を吸い込むと、酔っぱらつたような感じになるわけです。インドには政府の直営店があると聞いたこともあります。ホントかウソか知りません。

まさか日本国内に堂々とそんなモンを売っている店があるなんて……、と僕は目を疑いました。「大麻店」、しかも産地直送なんか「農家の店」とまで書いてあります。忍るべし……。警察の人たちが来たら、お店の人は取り調べに合ってしまつじやないですか……。でも、みんな健康そうな顔をしています。体つきも頑丈に見えるし、薬物中毒の雰囲気はありません。おう……。そういえば、医大生が「大麻には毒性はない」と断言していました。それでか……。いや、待てよ……、ニュースでは「大麻所持で逮捕」なんてことも報道されていたような気もします。空を飛べる気分になつて、本当に大空へはばたいてしまう人もいるみたいです。自由に飛び回ることはできるが、やっぱり地球が好きだということを証明する結果になるらしいけど……。なんか危険がいっぱい潜んでいるような感じがします。恐ろしいお店です。

あ……「大麻」……地名ですか……。それでたまたま田にした漢字でいれだけアホな発想をしてしまつてスミマセン。



白衣にすげ笠、首に輪袈裟、手には金剛杖を持つているのが昔ながらの遍路姿です。僕も一応の歩き遍路人間なので、それなりのお遍路グッズをそろえました。でも、根性無しなのでいい加減です。頭に物をつけるのがキライだから、すげ笠はかぶりません。信心深い人たちに申し訳ないという気持ちもあって、輪袈裟を身につけるのも遠慮しました。金剛杖をどうしようか、と少し考えたけど、弘法さんの化身だという意味合いがあるらしく、そしたら一緒に歩いた方が頼もしいと思つて入手しました。「同行二人」という言葉もあり、一人で歩いても弘法さんと一緒にです。

金剛杖は歩くのにも力になつてくれました。足への負担が軽減されていたみたいですね。杖ってすごいと思いました。歩き遍路ならではの実感です。

あれつ、とびつべつしました。バスからぞろぞろ降りてくる人たちが、出口ですぐに金剛杖を杖立てに置いていきます。お杖を頼りに歩いているわけでもなく、降りてからすぐ手放すんだったら必要ないような気もします。所詮はシンボルでしかないのかもしきません。自分たちは遍路の旅に出てあり、それが観光バスの団体ツアーだったとしても弘法さんと一緒に回っているというアピールなんだと思います。

僕、こときが指摘する「ことじやないんですかじね……。

共存。



頼ることも頼られることも、両方とも大切なんだと感じます。でも、頼ることも頼られることも、両方とも苦手なんです。どうしようもない人間です。ベタベタと人に甘えて頼つてばかりいる人を見ると、イライラします。自分でやれよ、って怒鳴りたくなります。人の世話ばかりして、頼られてばかりいる人を見ると、ハラハラします。自分のことやれよ、ってなぐさめたくないね。僕はできるだけ人には迷惑をかけないで生きていきたいと考えています。そりや、生きている限りは必ず誰かに迷惑をかけるモノです。でも、可能な限り独立採算制で、自給自足であり、独立独歩だったら、かなり迷惑をかけずに過ごせるんじゃないかなと思えます。……寂しい人生ですね……。

心ゆくまで頼り、納得いくまで頼られ、お互いに支え合って生きていくような人と出会えたら、それが一番いいんだと思います。一人でツツパつてなくてもいいんです。自分の心の中を空氣で感じてもらいたら、ずいぶんと肩の力が抜けていきます。まだまだ、僕には修行が足りません。全然足りません。人って難しい生き物です。

杉は無理をせず、支えられて生きていきました。じく当たり前に支え合つて生きていました……。



休日の午前中は完全に夢の中です。下手をすれば毎週木曜日も夢が続くこともあります。時々、フツと現実の世界も甦るんですけど、後から考えたら何がなんだか分からぬ時間なんですね。夢が現実が、なんて、よく聞つたモノです。

うつらうつらと過ぎていく時間はうれしくもあり、苦しくもあります。最近の僕は苦しみとして感じることがとても多いような気がします。何かやらなきゃいけないことがあって、それでもその現実の世界へと突撃していくのが怖くて、やらなきゃいけないんだけど、ああ……夢とは別れたくなくて……。弱すぎまお。結局、やらなきゃいけないとから逃げ続けていたら、夢の時間が過ぎていいくことが苦しみになつてくんですね。

自分の中にひとりがあつたり……、夢の時間は、まさに夢のような幸せを感じられる楽園になります。無……宗教的に考へたり、何もないことが究極の幸せなんでしょう。そりや、強欲に次から次へといろんな思いが出てきたり、どれだけ物があつても幸せにはなれません。欲さぬ無い無の境地に達していたら、どれだけ楽なことか……。樂を極めた所、極樂です。お経を唱えたら極められるんでしょうか。真言を唱えたら極められるんでしょうか。木魚を抱いて眠れば極められるんでしょうか。これらないじをやつてみます。あ、でも、木魚は持つてない……。



歩くことはとても大変なことです。ちょっとだけ歩くんだったり大したいとはありません。気分転換になるくらいの時間、適度な運動にならうこの距離だったり歩きついで感じます。じゃあ、千キロ以上とかいうレベルで歩いたらどう感じるんでしょうか。そもそもいつたりトランク状態で、何があつてもウフフって思えるのかもしれません。僕はそんなに歩いたことがないから分かりません。一日田、歩き始めて間もないのに疲れてしんどくて嫌になってしまふ僕は、やっぱり軟弱者です。遍路道なんて激しそうな旅路です。

居酒屋ってどんな場所でしょうか。強引にお酒を飲まされるような雰囲気があるんだしたら、僕にとっては地獄です。みんなが和やかに過ごす空間になつてゐるんだしたら、楽園です。僕はお酒が飲めないから、ちょっとだけアルコールが体の中に入つたら、もう別世界になつています。周りの人たちの体にも適量のアルコールが流れたら、適度な潤滑油としての役割を果たすことでしょう。そんな居酒屋はいい場所ですね。

居酒屋のやわらかさと遍路道という名前の厳しさ……、その両方が融合することはあり得るのか、不思議です。光明真言酒とか、弘法カクテルとか……、そんなモンガメーコーに載つているのかもしれないです。そんな訳やないですよね。

何でも描いてやる。

門跡陀堂

おお、
と思ふ描きいたら
個人の草堂です。

と、いわれ
ときどき……
みたびも描いていたら、

ニコニコと、
笑顔をねがはります。
ニコニコ……



自分で勝手に作った宿題は……お寺(?)といつ一つの絵を描くことです。なんでそんなことを自分で決めてしまったのか、ちょっとだけ後悔しました。

そして、その寺で絵を描き始めて、また少し後悔しました。面倒くさいんです。いやまあ、お寺の建築物はだいたい面倒くさいんです。棟の木組みやら屋根の瓦やら、宮大工さんたちががんばつたであろう成果があちこちに表れています。絵を描くのにも、かなりがんばらないといけなくなります。

宮大工という人々……、すごい存在です。昔から日本に伝わる建築方法をずっと受け継ぎ、正確にその技術を伝えていきます。絵を描く僕にとっては涙木口ホロの木組みの技術なんて、いつたいどんな風に作られているのか訳つかめです。クギを使わない方法でお寺を建てて、それでもとても堅固なものになり……、むしろ、クギを使うよりも強い建物になるんだから恐れ入ります。そして、見た目には美しい姿の建物です。内側にどれだけ苦労があつても、外側に見えてくる姿は平然と美しいものなんだから、二クイですよ。宮大工さんが受け継いでいるのはそこかもしけん。技術みたいに形で伝わるモノじゃなくて、内側に秘めた心こそ伝統といえるのかなあ、なんて韓国(?)と思つてしまします。でも、僕にはその建物の価値がよく分からなかつたりして……。

いわゆる遍路道というものがお四国にはあります。遍路道をたどって歩いていけば、八十八ヶ所のお寺を回ることができるという風呂口です。

お四国とは長い長いハイキングコースを設置しているようなモノだと思います。だから、昔ながらの文化とでもいづれか、道が大切なものとして存在しているような気がします。「四国の道」と呼ばれる道も何やらここに存在していました。遍路道と出会つたり別れたり、ぐるぐるに関係をもちながら伸びている道でした。

そんな道が終点を迎えていました。かなりショックでした。僕は歩き始めてまだ一日目、それなのにその道が終わりを迎えていくんですね。じゃ、僕は何を頼りに進んでいかけといんでしょう。案内役がないなれば困ります。僕の荷物の中には正確な地図が入つていません。少しでも軽くするために、家へ置いてきました。案内役がないのは非常に困る、本当に困るんですね。

よく考えてみます。四国を巡る道は、文字通り四国をぐるっと巡つていいんじゃないでしょうか。つまり終点とは同時に始点を表しているんじゃないでしょうか。そうか、それなら何の問題もありません。……物事にはすべて表と裏があるんですね。いやだなあと思ったことでもいいなあと感じ直すことがでめんなぜ……。ぜひ、やつやつといいなあと思える時間を増やしたいのです。





方向音痴とは半分ゴーキみたいなモノかもしません。しかも、なかなか治らないやつかいなモノです。

僕はしばらくの間、京都市に住んでいました。その頃、僕は方向音痴になつていつたような気がします。東西南北に道が走り、それが、まつすぐに伸びているんだからとても便利でした。道はまつすぐなモノなんだ、という情報が体中に染みついてしまったみたいですね。曲がった道なんてあり得ないわがありません……。

山ん中を歩いてると、まつすぐな道なんてほとんどありません。ぐねぐねと曲がりくねった道がずっと続いています。僕は方向を失います。ど、そこに遍路道マークが現れるんですね。迷いそうだと思った頃に出てくれるありがたいマークです。

実は、山ん中に限らずお四国の道には、あちこちに遍路道マークが登場します。心ある人たちが旅人のために作ってくれているようですね。本当にあつがたいことですね。

僕らには道しるべが必要です。それはお四国の中だからじゃない、日本各地、世界各国でもほしいと思います。そして、心の中にも道しるべがあつたらいいと思います。でも、その道しるべは誰かが作ってくれるものとは違います。自分でひとつひとつ作っていかなければいけません。いつぺんに全部はできないけど、少しづつ道しるべを作つて、確かな道のりを探していく感じのモノです。

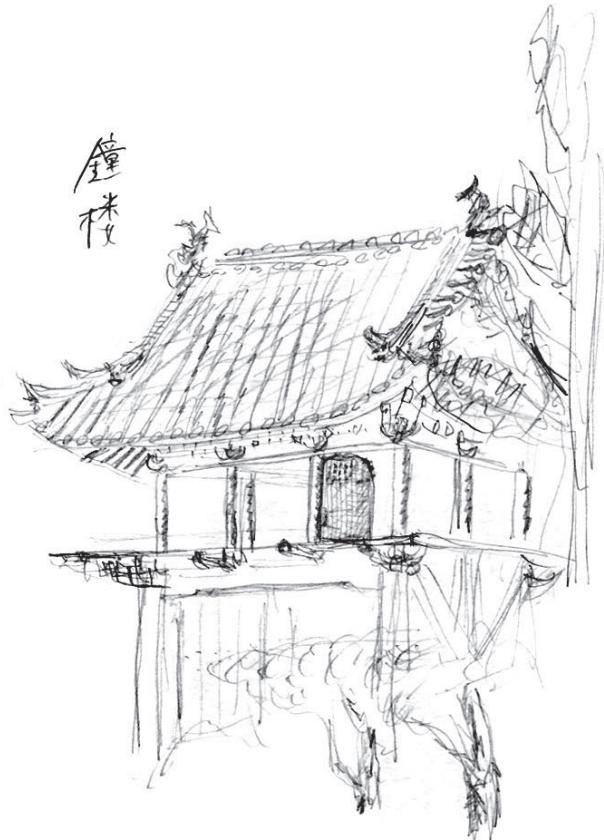


ジパングは金色に輝く国でしょうか。大昔、マルコポーロは日本という国をまぶしい国だと思ったみたいですね。それを聞いた昔の人々がジパングと呼ばれる日本を目指したそうです。そして、小昔、この国は戦争を起こしてボロボロになり、近昔には復興を遂げました。極近昔になつて僕が現れ、この島国を旅するようになつています。

一説ではマルコポーロが見たのは、刈り入れ時の田んぼが広がる日本だったといいます。ものすごく納得できる説だと思うんですね。だって、稻穂が輝く田んぼはとてもとても美しいですから。それに、その田んぼはものすごい価値が込められている場所であり、また価値を高めていく場所でもあります。大切に耕せば耕すほどに人に恩恵を返してくれるなんてすてきなことです。

お四国にも金色が広がっていました。まだ暑い夏のことだから、季節としては早いことです。汗はダラダラでヒイヒイいしながら歩く僕に、豊かな実りを届けてくれました。八月だつたし、メチャメチや早いと思つたけど、ま、僕を幸せにしてくれたんだから何でもあります。輝く稻穂に感謝です。むちむん、それを育ててくれたお百姓さんにも感謝です。

近未来、そして、遠未来にまでずっと、この大昔から続く光景が残つてゐることを望んでこま。



2025.8.7

歩くつてことが大変なことだと気づき始めたのは、歩き始めてから少し経つてからのことです。走って大変なのは想像できるけど、……といふか、走つたら疲れるのは体育の授業などで何回も経験させられています……、長い距離を歩くなんてことは何回も経験したこと�이ありません。どれだけ大変なのか実感として分からりませんでした。

暑い夏、上には元気な太陽が光っています。首筋あたりがジリジリと焦げていく感覚があります。のどがカラカラに渴いていきます。それだけで、もう大変です。そのうえに、荷物が肩に食い込んでくる痛みが加わり、足の疲れもたまってきて、最悪のコンディションになってしまいます。

苦労して歩いて、その先にお寺が見えてきました。ヤツホーなんて叫びたくなるくらいの喜びです。お寺の山門はだいたいどこでも威風堂々のオーラが漂っているから、着いた実感を味わうことができるんです。そのオーラをスケッチブックに写し取ろうと努力をします。最初から無駄な努力だと分かつていいけど、それでもやっぱり挑戦です。こつこつと線をつけ足していくと、そこに鐘がぶら下がっていました。山門だと思っていたのは鐘楼だったみたいですね。

それにしても一田田からこんなに疲れて、先が思いやられます。

鐘がかかるていた。
近づいたら



四天王が餓鬼を踏みつけているお寺があつたりします。悪いやつらを足の下にして四方を守つていいようなオーラが漂います。餓鬼つてすごい字だと思います。カタカナで書いたら「ガキ」で、ちょっととかわいい感じがあるけど、漢字の「餓鬼」は何かキヨーレツな印象です。

屋根を支えている小さいヤツを発見しました。一体、何者なんでしょうか。やっぱり何か悪いことをしてしまったようなヤツなんでしょうね……。

僕は時々悪いと思えぬことをしてしまいます。「メンナサイ。決して人を困らせようとしているわけじゃないんだから、自分のことを最優先させた時、いつの間にか悪いことをしていることが多いみたいですね。……といつても極悪なことはできません。根がセコい人間なので、セコい悪さをちよこちよことしてしまいます。金欠病に悩んでいた時、お店のトイレでは石鹼がポケットに入っていたり、トイレットペーパーがカバンの中に忍び込んだりしていました。チャリンコで走つていたら赤信号を通過してしたり、バイクですり抜けをして自動車をびっくりさせたり……。

弱い自分との闘いです。要するに僕の中にも小さい小さい悪いヤツが住み着いているってことですね。その小さい小さいヤツらが支えていいる僕の体……、上手につまづいてしまつたのです。

描けるものか……。



描けるもいなんて。
最初から
わかる。
えめども
描きたと思ふ。
何百歳とうう
大きな木

旅に出て、そこににあるステキな木を自分のモノにしたくてスケッチブックを開きます。僕なりに一生懸命に描くんだけど、出来上がった絵を見てショックを受けることがよくあります。そんな貧弱な木じゃないはず……にもかかわらず、なんか弱々しくなってしまっているんです。悲しいことです。

大銀杏が大きく枝を広げていました。大銀杏って、お相撲さんのマゲのことを呼んだりするけど、堂々としててかっこいいんですね。僕の頭の上に、あのマゲが乗つかつていたとしたら……、いや、髪の毛の量には問題ないはずなんですけど……、それでもやっぱり貧弱なイメージが残ると思うんです。分不相応ってことなんでしょう。

そこにいた大銀杏にも偉大なオーラが漂っていました。天に向かって伸びていく姿を見上げると、自分の小ささが余計に分かつてしまふような気がしました。僕はいろんなことを相対評価で判断しちゃいけないと考えています。その物の本質を見極める眼をもつて、つまり、絶対評価を大切にしたいと思ってるんです。大切にしたいという思いはあるけど、僕にとってはかなりハードルの高い課題です。

まだまだ修業中、どれだけ考へても同じです。僕はまだまだ修行中、いつまでたっても修行中です。



じいでもいいんだけど、まあ、じこかにたどり着いた時、誰に迎えてもらひのがうれしいんでしょうか。それが家だったら、家族だつたりするわけです。何かで疲れ果ててたどり着いた家に、誰もいない……、そして「ただいま」と言つても寂しさが返つてくるような生活に慣れてしまったくないモンです。

たどり着いた場所があ寺だつたら、そこに必ず仏様が待っています。それは当然のことです。仏様を祀つているのがあ寺の定義なんだろうから、他の何が祀られていたって特にうれしくはありません。んで、山門をくぐつたら弘法さんのが待つていてくれました。この人は仏様じゃないけど、僕らはこの人の後を追つて歩いてくるようなモンだから、迎えてもらつてうれしくないわけがありません。光を浴びて、たたけばカーンとかいつて響くくらいに固くなつて律儀に待つてくれました。

どこかに僕を待つていてくれている人がいるのか、ドキドキします。僕自身はいつも誰でもいらっしゃい、というつもりで準備万端整つていてるんだけど、あんまり僕の懐に飛び込んでくる人はいないんですね……。そりゃ、もちろん仏様やら弘法さんやらのように深い懐を持ち合わせていてるわけじゃないけど、少しあは誰かを待つてみたいとも思います。

待つてるだけじゃダメだ……、ほい、その通りです。

広い歩道。



チャリンコで走るとき、僕は路側帯を走るようになります。時々、歩道を走るチャリンコもいるけど、それを見ると自分までつらくなってしまいます。だって、歩道は途中で切れてガタンガタン上ったり下りたりしなきゃいけなくてケツが痛いんです。長い距離を乗つてないと分からないうことかもしないけど、あのケツ痛は我慢しきれません。それに実は、歩道って意外にテコボコしてるんですね。普段は気づかないけど、ケツイタイ病が発症していくと、それが非常によく分かつてしまうんですね。

そもそも歩道とは、読んで字の如く、歩くための道のはずです。トホダーが最優先されるべきです。弱いモン順に守られるべき場所なんですね。それなのになぜ、なぜ凹の輪の自動車が走るんですねか。信じられません。確かに歩道のくせに妙に広くて、一車線分くらいの幅はあるけど、それをいいことに自動車が走るなんて横暴ですね。信じられません。信じられません。

弱い者いじめはキライです。僕は自分に自信がないこともあって、軟弱者であることを続けています。強くなつてしまつたら、僕は弱い者の心が分からなくなつてしまつたとき、弱い者いじめをしてしまいそうな自分がいます。自動車から見たら弱い者、歩き遍路の者を大切にし続けるお四国であつてしまふことを想つます。



ポンポコリ～ン……、なんてのどかな姿なんでしょう。のどかという言葉が正しいのかどうか、それも分かりません。とりあえず、時間の流れ方がゆっくりしているような印象はあります。なんで、たぬきってそういうイメージになってしまいんでしょうか。

だいたい、瓦についている生き物は龍とか鬼とか怖い生き物のような気がします。しかも、よく考えたら、実際にはいない生き物かもしません。その家を守る役割をもつて、屋根の上から家人を見ているんです。龍は水の象徴でしょうか、火事から家を守るんでしょうか。鬼は畏れの象徴でしょうか、悪霊から家を守るんでしょうか。大きな役割をもつていてます。

じゃ、たぬきは何なんでしょう。葉っぱを頭の上に乗せて化けましょ？ 腹鼓を打ちましょうか。……って、だから何になるんだというのでしょうか。凡人の僕の頭が連想することといえば、のんびりした時間を生み出すようなモノです。何とも愛らしい姿に思えます。本物のたぬきが丸々と太って腹をたたいているとは思いません。頭に葉っぱを乗せて化けるところを見たこともあります。でも、僕の中に植えつけられたイメージは強烈にたぬきの平和っぷりをアピールしてきます。

それぞれの役割を果たすことは大切です。僕の役割は何だろうと、常に考えながら、できるひとをやつていきたいと思つます。

水がない……。



深刻な水不足を伝えるテレビニュースが、ダムの映像とともに僕らに伝えられることがあります。それを見て僕らは「へえ、大変だねえ」なんて思つていたりするわけです。結局、テレビの中のニュースは他人事でしかないのかもしません。

用水路を見て「ああ、水がない！」とリアルに感じ取ることができました。水が流れていしかるべき所がカラカラに干上がつていて、草なんかが生えてしまっているんです。そりやあ、水不足ですよ。どれだけすごい雑草でも、水中に生えるような雑草は見たことがありません。ええ加減長い時間水がなくなっているかを証明しているような草の生え方だったように思うんです。

歩いている僕は、のどがカラカラになっています。暑くてヘロヘロになっています。そんな状態の僕が用水路を見て、その雰囲気の中からにあいまで感じ取るような、そんな感覚で水のなさを目にしたんですね。リアルに感じないわけがありません。誰が何と言おうとライブにかなうものはないんです。たとえば学校の運動会で応援合戦をやつたとしても、その場にいてほこりっぽいグランジの様子や、応援団長が必死の形相で叫ぶ息遣いを感じなければ、応援合戦の迫力は伝わりません。

さて、この用水路、水が流れるのはいつのことでしょう。ま、夏の終わり頃には台風がきてくると思いますけどね……。



でかい生き物って、よく海にいるモンです。今、地球上最大の動物は、シロナガスクジラじゃないかなあと思います。僕のあやしげな記憶では『子ども図鑑』にそう書いてあつたはずです。それで、クジラたちが捕鯨船につかまつてしまつて甲板に上げられた時、その体はベロボロンと何とも言えないかっこ悪い姿になつてしまふみたいです。でかい体だから、海の中で水の力を借りてスマートな体型を保つてゐるんですね。

クジラほどじゃないにしても、でかいヤツらがいます。セイウチなんていうヤツらも結構でかい体をしています。それにヤツらはでかいキバを持っています。迫力あります。図鑑で見たりテレビで見たりする姿は貴様です。

お四国の陸上で出会つたセイウチは、じいか間の抜けた顔をしていました。中途半端なキバで、口の周りはぐま塙ヒゲみたいになつています。皮膚もカピカピに乾いた感じでした。

たぶん、海でセイウチに出会つたら、印象が全然違うんだと思います。ちょっと怖い印象なのかもしません。海で生活しているなら、日々の生計を立てるのにものすごくがんばらなければいけないはずです。血生臭い戦いだってあるでしょう……。

幸か不幸か、僕の出会つたセイウチはコーモアたっぷりで僕を迎えてくれました。いつまでも、その愛嬌を忘れずに……。

焦る……。



今やらながら二一十四時間営業のお店つてかうじこと感心してしまいます。一分一秒たりとも休むことなく、しかも、一年三百六十五日続けて働いているお店なんだから感動モノです。僕にそんな仕事をしろといわれても、五百パーセント無理な相談です。そんなすごいお店に慣れてしまっていぬ自分がいます。
朝七時から夕方五時まで……、それが納経所の営業時間です。それより早く行つても開いていないし、遅く行つたら終わっています。自分の歩く足が遅いことを棚に上げて、営業時間の短さをうらみます。ああ、もう時間だよお~、と悲鳴をあげたくなります。そして、自分に課したノルマをうります。それぞれの寺で何かしらの絵を描いて進んでいくところノルマです。やめときやよかつたと思つても、自分で決めたことだから文句をいついともできません。

超スピードアップです。超手抜きになります。いかに簡単に絵を「描いた」という気分になれるのがガボイントです。要するに自己満足でしかないんだから、別にすごい絵を描かなくていいません。……じゃ、単純な形をしたモノを紙に写し取ってみようと思うわけです。線香の煙が脳裏をかすめます。わうわうあ~、なんとか形が見えるような気がします。これで作品完成です。わ~と、のんびり歩かることがベストなんでしょうけどね……。

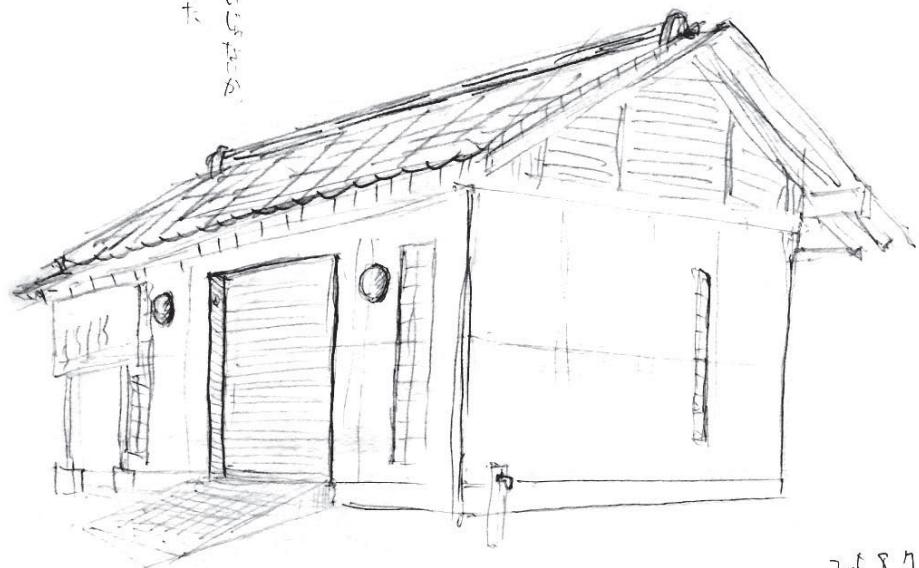


忘れた……、ちょっと悔しい、むりと悲しい忘れ方でした。何を忘れたか、第七番札所、竜宮城のような十楽寺の御本尊さんを忘れたんです。つて、何のいつかやところ世界ですよね……。

フツセフツセと歩きました。時間ギリギリです。お参りも後回しにして納経所へ向かいます。納経の時間は朝七時から夕方五時までに限られているからです。その時間を有効に使うのは歩き遍路としての頭の使い方とイコールになってしまいます。それぞれの札所で、納経帳に達筆すぎて読めないくらいの文字をウーッウーッと書いていただき、御朱印をいただきます。そして、納経するといつに祀られている御本尊さんの御影をいただくことができるわ。で、時間ギリギリで焦りますが、間に合ってホッとしましたが、御影をいただくことを忘れてしまったんですね。御影といつても、所詮は紙切れです。だから何だということはないかもしません。でもね、一応、いただけるものは何であっても自分のものとして取り入れたいじゃないですか……。そりや、しつかりお参りをして、御本尊さんと心が通じていれば即物的な、紙切れに心残りを感じる必要もないけど、僕には信心が欠けています。納経だってスタンプラリーの延長線上にあるようなモンだから、紙切れ一枚が貴重に思えるんです。

はあ……、バタバタして、第一回田のお参り終了です。

開ざされた扉。



野グソ立ちショコンは当たつ前ついえぱ當たり前の人間です。

どいでも出してしまいます。どうにもなりませんから……。ホントにシヤレにならないんですね。もらしてしまうか野グソするかの選択肢があつたら、どつかを選びますか。そりや、野グソを選ぶでしょ。もらしてしまつたら、そのパンツはどうすゐんですか。もう、取り返しのつかない悲劇が待つてます。

野グソ愛好家ではないので、野グソしかしないワケじゅありますせん。できればトイレを使用したいと考えてあります。だいたいはトイレにて用を足すことができてあります。ありがたいことであります。ところが、トイレに営業時間がある場合、くやしい思いをすることになるんです。せっかく文化人への仲間入りができるかと思つたのに……。

営業時間が短いこと……、その原因がその利用者にあるとしたら、やうにくわしく、悲しいことだと思います。看板には「不本意ですが」と書かれていました。僕も不本意です。不本意ですが、野グソをしなければならないかもしれないんですね。よっぽど利用者のマナーが悪かつたんでしよう。夕方、すでにトイレは閉鎖されていました。

来たときよりも美しく……、美しく言葉です。そんな美しい言葉を行動に移すために、野グソはしつかり埋めようと思つます。

構りな……



ただひたすら歩くことは楽しいとか……、まあ、楽しいことには違ひありません。それでも、楽しさといえば食事です。食べることの楽しさは他の何モノにも代えられません。

以前、僕は旅先で自炊していましたがあります。質素儉約です。朝は米を炊いて、夜はインスタントラーメンというのが定番メニューでした。昼はフランスパンと一リットルの牛乳を買い、バクバクと体の中に放り込むような感じです。とても安上がりな生活だったと思います。反面で、とても寂しい食生活でもありました。その土地でしか食べられないような「うまいモノ」に触れることがなく通り過ぎてこよくな旅人だったんですね。

味は自分の舌で感じなければ分かりません。どれだけ言葉で説明されても、分からぬモノは分からぬんです。最近、お金を払ってその幸せが味わえるんだつたら、お金をかけてもいいと思えるようになつてきました。これは僕の文化的レベルが向上した証拠だともいえます。食は文化なんですね。ずっとその土地で培われてきたモノをいただくワケで、そここの文化を少しでも自分の中にかみしめられる機会になるかと懸念するようになりました。

ただひたすら歩いた一日の終わりにいただいた食事が、いつの間にか僕の前から姿を消します。空腹すぎて、ゆっくり味わうだけのゆとりが胃袋にはありませんでした……。



じいじでも寝られる、ところの我が家。僕の自慢でもあります。本当は橋の下が自分の中ではベストポイントではあるけど、橋の下じゃなければ寝られないつけてでもあります。橋の下だつたら雨が降つても水に濡れることなく過ごせるから楽なだけです。んで、少しでも屋根っぽい所を探します。夕飯を食べた後で寝場所を探すとなると周りが暗いので、探すのが大変だったりします。それに、もう、めんじくさくてテキトーに決めて寝てしまつたことが多いります。

この日は、〇〇自治会館みたいな建物を発見しました。夜の寄り合ひもなもその霧囲気だったので、そここの軒先にテントを張らせてもらいました。小型のショベルカーみたいのが置いてある隣から半分くらい外へ飛び出す形でテント設営です。

夜中なのか、明け方だったのか、誰かが用事があったみたいでその場にやつてしまい、「ひー」と、反応があつたよつの気がします。知らんフツをしてテント立てるつもりでつぶつぶました。「メンソナサイ。一応、お杖と白衣をテントの外に配置してそれっぽくアピールはしていました。それでも本当にたら、「歩き遍路です。一晩寝させていただきます。」ハジの張り紙をしていたらよかつたのかわしれません。

朝、メチャヤクチヤ寒くて田が覚め、みんなでひと動かしあつた。



怒るのは精神衛生上あんまりいいセンじゃなやないで。時々、キレるなんて言葉も使われるけど、血管がプチっとなってしまつたらエライことになってしまいます。それでも、怒ることはあります。そんな時に聞こえてくるのが怒鳴り声です。学校の廊下で先生に「×◆▽□☆○……！」などと大きな怒鳴られたことも数知れずあります。怒るのもイヤだけど、怒られるのはもっとイヤなことです。

怒るというと、意識不明になつて怒鳴りまくっている様子が想像できます。感情の高ぶりです。じゃ、叱るという言葉だつたらどうでしょう。冷静に指摘されている様子が思い起しかれます。そりや、理論的に言われたら納得する」とも多いはずです。

ここで、もう一つ真実があるように思います。どんなに正しいことを言つっていても素直に認めたくない人と、ちょっと間違つてるかもしぬないけど「まあ、この人が言うんなら仕方ないか」といつの間にか素直にさせられる人とがいることの真実です。これは、ある人から言われて、ハツとしました。人間性というものになるんでしょうか。僕の中にほんの少しでも出てきてほしい部分です。

さて、漢字で「土成」と書いた時、読みは「じなり」であり、意味を考えたら……、地名として解決です。



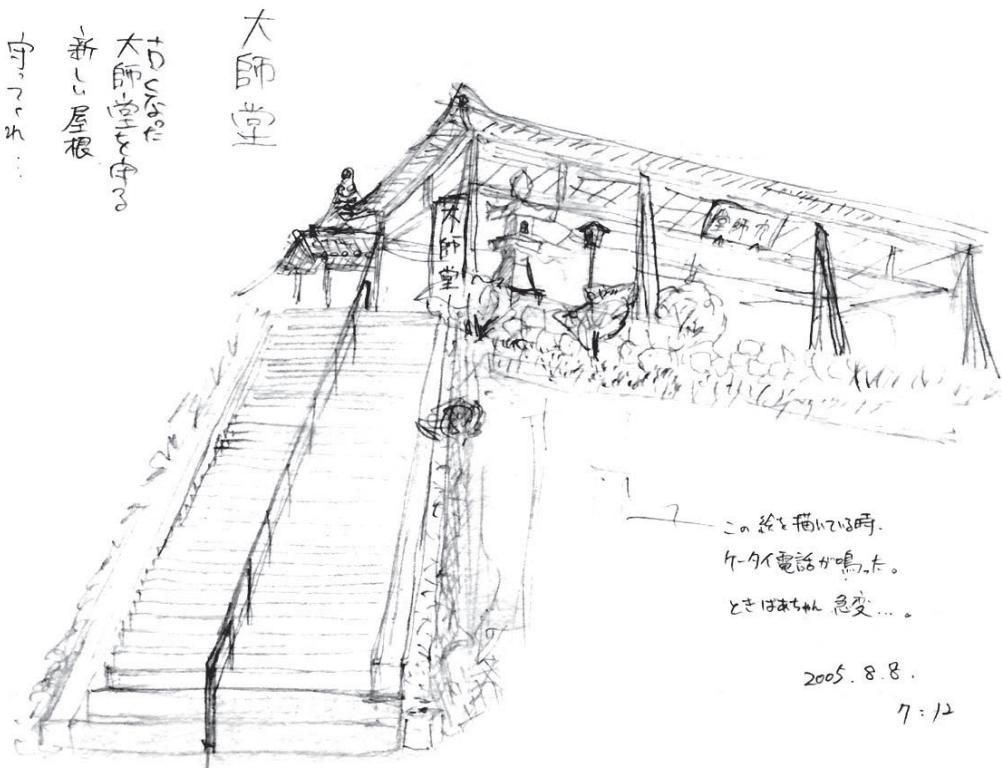
朝一番、歩き始めて自分に酔います。お四国での歩き遍路も二日目の朝を迎え、すがすがしく歩を進め出しました。さあがに昼間ほど暑いわけではなく、気持ちよく歩けそうな気がします。太陽もまた高くなかったから、田の前には自分の姿がじゅうぶんと長く伸びていました。杖を手にした感じも、ちょっとカッコいい姿です。影には顔のつくりも映らないし、朝の影なり長く伸びた足が自己陶酔へと僕を誘ってくれます。

太陽が高く昇つたら、ものすごく暑い日差しが突き刺さります。先のことは先のこと、どんなことが起きるかなんて僕は知りません。一日歩きっぱなしになるであろうことだけは疑いもせずに朝の空氣を感じていました。

影の中に自分の姿を感じた時、自分の本体はじけついでしまつているんでしょう。何だか幽体離脱しているみたいで、変なモンです。心と体が離れてしまったら人間がどうなるのか、僕は経験したことがないから分かりません。命が躍動しているのは体のはずなのに、影の中に自分の存在を感じるんだから、やっぱり本体はそこにいるのかもしれないし……。影は本来の自分を写し取る鏡だと考へたら少しすつきりです。

僕の影は、運命の第八番札所へと伸びていきました。

突然に……。



息が止まつた……と、ケータイ電話から父親の声が聞こえてきた。病院の公衆電話からだつた。

第八番札所熊谷寺の大師堂を描いていた朝、七時十二分。僕のケータイ電話の着信履歴にその時刻が刻まれていた。とにかく家に帰らなければいけないと、足を動かした。頭の中がグルグル回っていた。どうすれば早く家に着けるのか。まずは歩くしかなかつた。グルグル回る頭を必死に抑え、歩いた。たまたま高速バスの停留所があり、たまたま乗り込むことができた。大阪までたどり着き、新幹線に乗つた。昼過ぎに家へ着いた。

僕の記憶の中に熊谷寺の色がない。モノクロの大師堂が浮かんでくるだけの、かすかな記憶。

何なんだろう。よく分からぬ。本当に本当に何なんだろう。よく分からぬ。よく分からぬ。

声が出なかつた。出せなかつた。口を開いて何かを話そうとするが、声ではない、何かがあふれ出し、吹き出ていつた。一人の時間、空間が必要だつた。自分だけの時間、空間が必要だつた。何かを考えようとして、確かに考えてはいたはずなんだけれども、全てが空虚に通り過ぎていつた。ただただ、得も言われぬ何かが、僕に迫つていていた。

僕のばーちゃんが死んだ……。

守り…
大師堂とくわん
大師堂とくわん
新しい屋根

お四国歩き遍路、これはしばらく前から挑戦したいと思つてゐることだつた。その年の春、僕はバイクで徳島県まで走り、第一番札所である靈山寺で白衣や数珠、簡単な経本を購入してゐる。浜松からバイクで突っ走り、ただその買ひ物をしただけで帰つてきた。そして、「般若心経」をブツブツ読む練習をしていたのである。どこで息継ぎをしたらいいのかも分からず、内容を解説した本を読み、自分流のリズムで「般若心経」を読んでいた。

夏がくる頃、僕はチベットへ向かうチケットを手に入れていた。頭の中の計算では、弟の結婚式に出席し、その足で四国へ向かい、十日程お四国を歩くはずだつた。一度、静岡県へ戻り用事を済ませた後、チベットへ向けて出発。完璧なストーリーができあがつていたのである。

徳島に着いた僕は、意氣揚々とお四国を歩き始めた。もちろん、ブツブツと練習したとはいへ「般若心経」は上手に読めるわけもなく、お参りの手順もおぼつかない。何とも頼りない歩き遍路の始まりだつた。頭の上に降り注ぐ太陽がジリジリと僕を焦がしていつたし、のどはカラカラになつたし、身体的にも大変さをかみしめる初日だつたようだ。それでも、札所と札所の間が大きく離れていたため、心地よく歩くことができた。いつでもどこでも同じ、旅の途中で僕の目に留まる変なモノたちを写真に収めながら、ヘラヘラと歩を進めていた。また、それぞれの札所で一枚ずつスケッチをするというノルマを自分に課し、とりあえず自分なりの歩き遍路スタイルを確立させようとしていた。一日目の終わりに自分へのごほうびのつもりで唐揚げのついた定食を食べた。たまたま、そこでは友人のギタリストである白柳淳から電話があり、弟の結婚式で弾いてもらつたギターの話などをしていた。この白柳淳という男、何かと節目となる時に連絡が入る不思議な男である。体は疲れていたが、彼の声を聞き、心にゆとりを取り戻して眠りにつくことができた。

一日目の朝は早起きだつた。第八番札所では納経所が開く前にお参りを済ませ、七時ちょうどのタイミングを見計らつて御朱印を頂こうと考えていた。本堂、大師堂とお参りを済ませてスケッチブックに向かうところまで、全てが順調で計画通りだつた。ところが、突然携帯電話が鳴り、父親からの連絡が入つたのである。「ばーちゃんの息が止まつ

た」という。

とにかく必死だった。爆発しそうな頭を懸命に抑えて、いかに早く実家へ帰るかを考えた。まずは、列車の駅を目指した。地図を見て一番近いであろう駅を目指した。実家のある焼津まで、どんな交通手段を使うのがベストなのか分からなかつたものの、とにかく本州へ渡らなければいけないということを考えた。前日歩いた同じ道を戻るコースだつた。この時、本当に幸運だつたのは、高速バスの停留所を見つけたことである。そして、ほんの少し待つだけでバスに乗車できた。あとは、交通機関のスピードに頼るだけだつた。どれだけ僕が焦つても何も変わらない。冷静さを取り戻す努力だけが、僕にできる全てだつた。

実家に着いた時、ばーちゃんは既に白い服を着てふとんに入つていた。周りには親類が駆けつけて、様々にやるべきことをやつてくれていた。横になつたばーちゃんに手を合わせた。長い時間その場にいることができず、僕は逃げ出した。二階に上がつて自分の部屋に閉じこもつて泣いた。後から後から涙があふれ出た。

その夜、結婚したばかりの弟と嫁さんも一緒に、ばーちゃんが寝ている隣の部屋で夕食をとつた。鰯の唐揚げだつた。涙があふれそつた。そのメニューは、ばーちゃんが献立に困つた時に出てくる切り札のようなものだつたからだ。小さい頃から僕らはばーちゃんの作る夕食で育つてきたようと思う。これは僕の印象だけなのかもしれないが、母は仕事が忙しくて夕食の準備がなかなかできなかつた記憶がある。だから、夕食といえばばーちゃん、というイメージが僕に植え付けられていた。鰯の唐揚げを口に運びながら、またしても泣きそうになり、食べることだけに集中することにした。

僕は、ばーちゃんの隣に寝ることになった。光榮な感じがした。なかなか寝付けない。高ぶる気持ちを整理するために、僕はひたすら文章を綴つた。その時にしか感じられない自分の気持ちをただただ紙の上にぶつけていった。他の家族はどんなことを思つているんだろうと想像しながら、とにかく文字をたたきつけていった。意外に元気な姿を見せていた母親。相変わらず飄々とした姿を見せる父親。結婚式から一日しか経つていないので実家へ戻ってきた弟。それこそ誰

が誰かも分からぬはずの弟の嫁さん。いろんなことが頭の中を飛んでいった。そういえば、僕は三日前にばーちゃんと話をしていた。夏の盛り、「浜松でうなぎを食べたかね」なんてことを聞かれていた。さらにもうちょっと前に実家で、バナナを口へ運んだ時のことも思い出した。口元へ運んだ時の感触がまだ指先に残っていた。横を見ればばーちゃんが寝ている。いきなり起き出して歩きそうなくらいに当たり前の様子で寝ている。額を触つてみた。冷たかつた。でも、やっぱり起きあがりそうだった。そして、やつぱり涙があふれてきた。

次の日、ばーちゃんはだんだん「物」になつていつてしまつた。業者さんが体を洗いに来た。皮膚が弱くなつて風呂で洗うことはできなかつた。グイグイと体を拭いていつた。一緒にいた伯母さんが「見ないで……」と声をかけてくれた。僕はどんな顔をしていたんだろう。「物」になつていくばーちゃんだつた。

父が「喪主をやらせてくれ」と言つたらしい。普段の父からは想像しにくい発言だ。弟が「弔辞を言う」と名乗り出たらしい。ふさわしい人間だつたように思う。葬式の間、僕は「泣くな、泣くな」と自分に言い聞かせていた。隣には母がいる。一番動搖してしまふかもしれない人の隣で僕は泣くわけにはいかないと思つていた。母はばーちゃんと離れて暮らした経験がない。生まれてからずっと一緒に暮らしてきた。どれだけショックなのか想像もできない。だから、僕は泣くわけにはいかない。葬儀場にはたくさんの人人が来てくれた。誰なのか僕には分からぬ人もいた。僕の職場でチームを組んでいる人も来てくれた。一つの命が多くの命と絡み合つていることを感じた。

葬式が終わると、事務的な仕事が待つていた。相続に関する書類やら何やら……。僕も自分にできることをやりたかった。当然のことながら、チベット行きはキヤンセル。家族のためにできることを探した。運転免許を持つていない母を車に乗せ、運転手として市役所へ行つたり法務局へ行つたり、資料をもとに書類を作つたり……。それなりに僕にもできることがあつてうれしかつた。

だんだんにやることがなくなり、心にぽつかりと穴が開いたようになつてしまつた。より大きな心の空虚さを感じているだろう母のことは気になつたが、ばーちゃんの供養という大義名分を掲げて僕は再びお四国へ向かうこととした。

お四國遍路編
第二期



怒濤のように時間が過ぎていきました。線香のにおいが立ち込める日々でした。

少し落ち着いてふと振り返ると、そこにはまだ何かが残されています。引き出しの中を整理していました。下書き段階の短歌の山、詩吟の本、高価には見えないアクセサリー類……、何かしらばーちゃんの影を感じるような物が次々に出てきまわ。

ずつしりと重みのある封筒が出てきました。開けてみると小銭がジャラリといぼれます。金額としては大したモンじゃありません。それでも、僕にはその重みがズンと感じられました。僕はこの小銭をほしいと周りに申し出ました。「ん?」という反応もあつたけど、特に何ということもなく、小銭は僕のもとに納まることがあります。ま、僕のところに来たといつても、それは一時的なことです。小銭は僕と一緒に旅をして、また少しずつ僕とお別れをしていく予定だったからです。お四国の札所に賽銭として生かされていくのです。

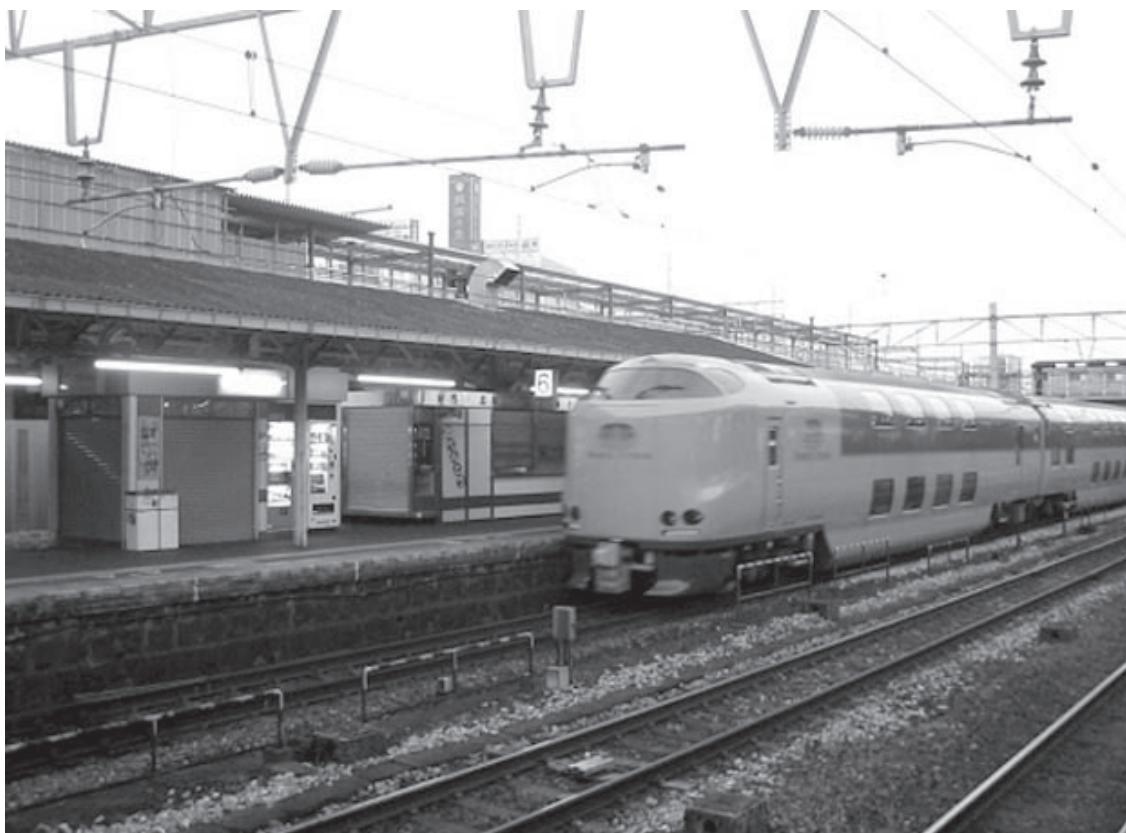
小銭とともに僕は、ばーちゃんとお別れをしてしまいます。ばーちゃんと一緒に歩きながら、お四国の輪廻を体で感じるような日です。小銭が全部なくなつた時、僕がどんなことを思うのか、本当にばーちゃんとお別れができるのか、分かりません。でも、大きなアイテムを手に入れたような気がしました。



たまたまたこの列車でした。どうやつてお四国へ向かおうか……、そんなことは何も考えていません。とりあえずこいつに乗つておけば西へ向かえるというわけで、僕はこの列車に飛び乗りました。駅員さんは「予約いっぽいだよ」と言つていただけど、自分の目で確かめなければ納得できないのはいつものことです。乗り込んでから車掌さんに声をかけると、場所を指定され、自分のスペースを確保することができました。次の停車駅は姫路です。そこまでは降ろされることはないはずです。

初めて乗った寝台列車、もつと計画的に利用したいモノでした。寝台列車といえば、僕の憧れでもあります。そんな憧れの列車に、たまたまそこに来たからといつだけの理由で飛び乗つたことが何とも寂しい気がします。何も考えていののはいつものことだけど、何も考えずに憧れの列車を利用してしまつたことが寂しいんです。ああ……。

壁ぎわに金剛杖を置き、弘法さんと一緒に横になります。ばーちゃんのことを思いながら、自分一人のスペースが得られたことは、とてもありがたいことでした。他の何かに邪魔されずに自分の心と向き合つことができます。あわただしく過ぎ去つていった、何日間かの僕の心を静めるスペースです。眠つている間に僕をあ四国に近づけてくれる、マイ・スペースです。



大阪の駅で、僕は出入り口に立ちました。列車が減速し、停車します。扉は開きません。「開閉」と書いてあるボタンを押してみました。扉は開きません。車掌さんが通り、「次の停車駅は姫路ですよ」と声をかけていきます。チャラリーン、大阪で下車することはできませんでした。それなら、いつそのこと大阪駅で停まらないで通り過ぎてくれたなら心安らかに過ぎすことひができたのに、と自分勝手なことを思います。

そもそも、計画なんてモンがあるわけじゃないし、行き当たりばつたりの行動です。僕の頭の中では、西に向かうんだつたら当然大阪で停車するという思い込みがありました。そりや、東の東京、西の大阪です。停まるかと思いますよ。大阪からならどんな手段だつてあ四国へ渡れるはずです。なんていつても大阪ですから……。

おかしい……、それでもたどり着いたのは姫路です。僕を降ろして列車は走り去っていきます。朝早くの出来事です。なんとなく人気のないホームで僕はそれからのことを考えます。旅に出たら、その時その時が勝負です。何が起きようと、その場で乗り切つていかなければなりません。次に僕がすることは、こっち側のホームから発車する大阪方面行きの列車に乗り込むことです。

とりあえず、西へ送つてくれた寝台列車に、ありがとうございます。



大阪と徳島を結ぶ交通機関として、とてもお世話になつたのが高速バスです。ばーちゃんのもとへ向かうとき、僕はどうやって進めばたどり着けるのか分かりませんでした。とにかく、駅のありそうな方向へと歩を進めるしかない状況です。そこに、ふと現れたのがこのバス停でした。時刻表を確認、営業所の電話番号を確認、乗車可能かを電話で確認……、熱い頭を必死に冷まし、ほんの少し待つだけで乗車可能であることを確認しました。

本当に偶然です。たまたまそこにバス停があり、たまたま時間的にもちょうどよくなっている通りかかりただけなんです。この偶然に僕は感謝しました。おかげでタイムロスもなく、ばーちゃんの所へ帰ることができました。偶然というのに感謝です。

僕は何か超越した力を信じることができます。自分の目に見えないものを信じることができないんです。この偶然が訪れたことについて、僕なりに分析しました。一番大切なことは、僕が冷静に物事を考えられたことなんじゃないかと思います。頭の中は芯まで熱くなりパニックに近かつたけど、それをどうにかコントロールしようとすると頭が残っていたことなんじゃないかと思うんです。逆上してしまいそうな時、客観的に自分自身を見つめられる眼をもつていられるか……、この時の自分に拍手です。

第一期のスタートは、このバス停からに間違いありません。



お寺の山門へ至る曲がり角、いじからお寺に歸りて仏さんにはいさつをして、また出てきます。その後が問題です。門から出できたら体を右に向けなくてはいけません。本当はそうするつもりだったんですね。でも、ばーちゃんに呼ばれてしまつたから、一日の時は左へと体を向けました。今回は曲がり角にたたずみ、何週間か前の自分の影を追い、ばーちゃんへの思いを振り返りつつ、新たな一步を踏み出しました。僕としては未踏の地です。夏の暑さとの戦い、自分の心との戦いのスタートでもあります。

あ肌の曲がり角、なんて言葉を聞いたことがあります。☆歳を境にして肌の張りがなくなつてくるから、より丁寧にお肌の手入れをしてあげなきゃいけないつてことのようですね。僕の肌が曲がり角を迎えているのかどうか分かりません。あんまり気にしたことありません。一般的に女人は少しも眞面目みたいですね。

本当に何かをきっかけにして曲がり角を迎える、コロッとも変わるこひとつあるのか考えます。表面的には劇的に変化しているようでも、実はじわじわと変わつてることが多いんじゃないかなと思うんです。曲がり角なんて要是は気持ちの問題であつて、きっかけとして自分が大切にすべき時があるついでじわじわ。

僕は、お四国第二期への曲がり角をそれなりの勢いをもつて進んでいました。



日差しが強い……夏は暑い……いや、むしろ熱いと表した方がいいような気がします。体は全部がやけどしているような感覚です。いかに日光から自分の身を守るか、大きなテーマになります。そこは、さすがにお百姓さんです。最新の機械を常に導入しています。コンバインもそんなの当たり前です。日傘？そんなにじゃ強力な日光から身を守ることなどできません。でかいヤツです。ビーチパラソルというヤツです。これなら、かなりの守備範囲の広さがあります。強い味方になつてくれます。

お百姓さんは強烈に天候と向き合つて生活をしています。どんなに逃げ出したくたつて、地球上に酸素があり水がある限り、老百姓さんは天候と向き合つことになるはずです。僕なら、つらいことがあつた時に、多少なりともひまかしてその場をやり過ぐすることもあります。そのつか、どうにかなつてしまつといつむ多いですから……。せりや、天候とは全然、質が違います。

僕だって、本当ほんまに生きてこたたいと思つてこまお。でも、自分で、じつにもならなつてあります。全てのことを自分で処理できるような強さが僕にはあります。強くなりたいと常に思いながら、強くなれずに生きてこましだ。

僕は、災難を見極め、それが降りかかるなつように日傘を差して生きてこくしかなつて思つてこま。

教習所では習わなかつたペイントです。

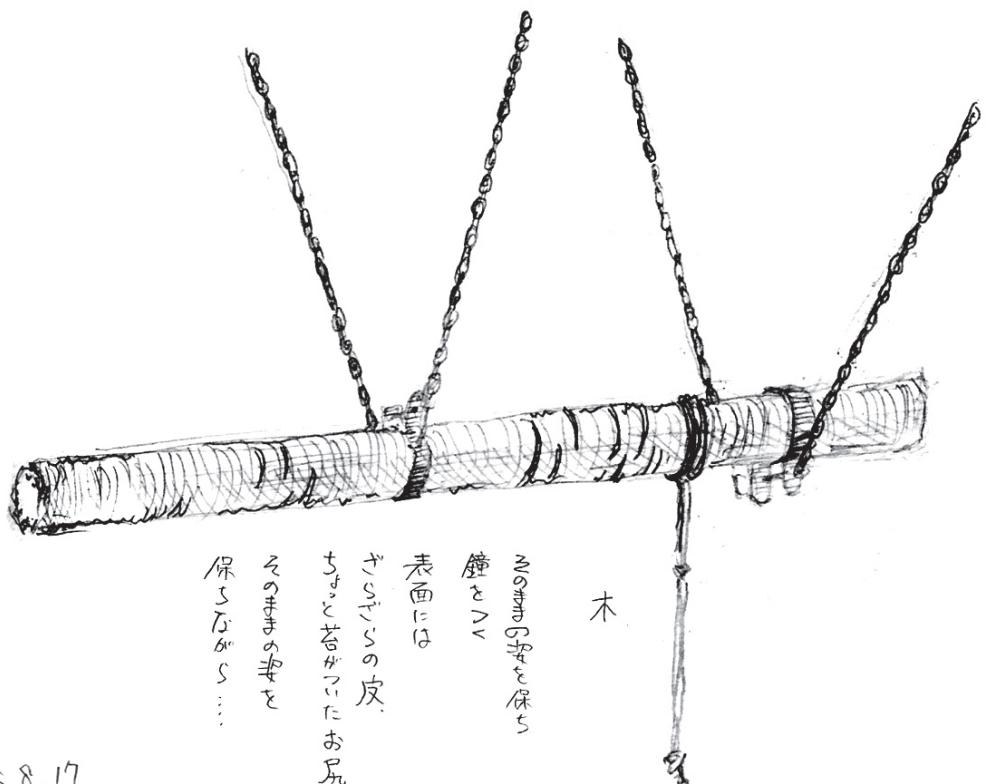


教習所で畠つたいと……畠の田にペイント部分で滑りやすいといふこと……、よく覚えていまお。バイクで走つていると実感するひとでもあるので、忘れることができません。他に何を覚えているのかといえば……何でしょり……。ペイントの意味とか標識の内容なんて、ほじとじ忘れてしまつてこの自信があります。

絶対に、なじと断言であるほど僕が堂々としていられる場面は多くあります。たまにはそんな言葉も使ってみたいんです。よし使つてみます……教習所でこんなペイントについては絶対に教えてもらつてしません。絶対です。ドキドキします。

お四国という場所を歩いていて強く感じるのは、そこそこ遍路といつものガとてつもない影響を与えてくることです。物理的にいえば、遍路道のマークがあちこちにぶら下がつたり方向を示す矢印がガードレールなどにベタベタはつてあることで影響の大きさが感じられます。あわがに公道にドカーンとペイントしてみると、本当にこうのか、と不安にもなるけど、もつと大丈夫なんですね。だつて、お四国ですから……。

影響は人の心にも深く深く染み入つてこます。みんなである僕に対してもやわらかさです。温かいです。気軽に「お遍路さん!」と声をかけられぬほど。つづりへあうがたやを感じました。培われてきた遍路という文化に囲まれて矢印をたどりました。



再スタートしてから一つ田の寺にたどり着きました。手順を思い出しながらお参りを済ませます。鐘は……つきません。朝早ければ「ゴン」という音が響きますが騒音公害にもなります。力いっぱいやりすもて割れてしまつとも……長期的に考えたらあるはずです。「わばり、わばり……」

と何気なく鐘楼が田に入りました。そして、ぞりぞりの表面が気になつてしまつたんですね。だいたい、鐘つきの木はツルツルと磨かれていて丸太のようになつていぬモノだと思つてしまつた。それが、皮のついた形でぶら下がつていたからびっくりです。びっくりしながらも、いいなあ、と思つてしまつました。

女人がいて、化粧をしている人としていない人がいて、どうちがいいのか考えてみます。ベタベタに化粧をしていたらイヤな感じがします。つつあらと化粧をしていたら好感がもてます。これは僕の感覚です。外側の美しさだけを追い求めて本当の自分で勝負できないのは悲しいよつて思つたんですね。化粧なんかしなくなつて内側からこじみ出していく美しさつてのがあるはずです。ま、見るに耐えないほどの醜悪を感じさせてしまつたがつらいですけどね……。

内側から自分を鍛えてこつむつじます。でも、内も外も磨き方があち半端で、見るに耐えない人間にならかれてこまます……。



僕は走りません。

地図を持つて走ることがあり、それを楽しむ人がいます。そんな人の地図にはポイントを示す丸印があり、そんな人の手には方位磁石がにぎられています。オリエンテーリングと呼ばれるモノが世の中には存在するということです。

オリエンテーリングです。時々、オリエンテーションをする人もいます。オリエントエクスプレスなんて乗り物もあるみたいです。……関係ありません。オリエンテーリングです。あれをやつていると、ものすごい一生懸命に地図を見るようになります。いや、見るというよりも読むというレベルで地図を活用します。等高線など細かい情報も必要になるので、国土地理院発行の精密な地図がベストです。目的地を制覇して、いかに早くゴールできるかを競います。

僕は走りません。たとえそこにオリエンテーリング用のポイントが立っていても関係ないんです。僕の歩き遍路はオリエンテーリングとは違います。お寺を回って納経し朱印をもらうだけが僕の目的じゃないんです。一歩一歩に思いを込めて歩いていくのが僕の歩き遍路です。

一応、大義名分として「供養」という思いがあるから、しんどいから走らないなんて絶対に理由にはなりません。絶対に……。

遠近。



観音様

さわいだ……

仏様に對して失礼なんでしょうか……、イメージとしてだけど、美人だと思いました。体全体からオーラを感じるんです。それこそ、失礼かもしれないけど、オーラというよりフエロモンといった方が適切かと思うくらいです。ほれてしまいます。

仏様の姿を見ていろんなことを感じます。厳肅な気持ちになります、励まされるような気がしたり、叱られているように思うこともあります。観音様の姿を見て、照れくさくなるような感じがしました。ちょっと、僕のような者が近寄ってはいけないくらいの美しさを感じたんですね。実際にも近寄つて手で触れられるわけでもないから、名実ともに遠い存在ということになります。

いいなあ、と思つた相手との距離が遠いことつてあります。ひとまず、物理的な距離が遠いとそれだけでもうがっかりです。それに加えて心理的な距離が縮まつてこなかつたら、どうにもなりません。距離……、なんとか縮めようと努力はあるものの、うまくいかないモノだなあと、しみじみ思います。こつちは縮めたいと思っていても、相手がその倍くらい離れていくことがあります。……なんか悲しくなつてしまつた。

せめてスケッチブックの中には入つてしまつたさい。その美しさを僕の力で表現できるかつていつたら無理なんだけど、それでも少しでも距離を縮めてください。観音様へのお願いです。



このはし渡るべからず、と言われて橋の真ん中を歩いて渡つた
という一休さんの話があります。「端」を渡らなかつたんだからい
いじゃないか、つてことです。屁理屈小僧め……。

この橋で、僕は真ん中しか歩きたくありません。別に何かの御
触書があつたわけでもありません。ただ、橋の端に欄干がないん
です。ハプニングが起きたら、そのまま橋の下へ落ちてしまいそ
うな橋でした。有名な橋、お四国では当たり前ともいえる、沈下
橋です。

大雨が降つて、橋が流された「うえり」といふことです。被害甚大です。
流されない工夫をするのにたどり着いた結論が沈下橋だといいま
す。欄干なんてモノがあつたら橋ごと流れるとひどつてあるし、
欄干だけが流されてもショックです。いつのこと最初から欄干
がなければ大雨の被害を受けずに済みます。この発想の転換、す
ごいです。

世の中で、頭がやわらかい人というのを僕は尊敬します。物事
を柔軟に受け止めて、自分の中へ取り込み、より良い形にして外
へ出していく人たちです。凡人には発想できないことを何気なく
発想してしまいます。じつは、固い頭はいりません。地震の時、
頭を守れなくてもいいから、固い頭を捨ててやわらかい頭を手に
入れたいです。どうすればいいんでしよう?……。



ばーちゃんはヘビがきらいでした。テレビの画面にヘビが出てきてもヒヤアヒヤア言つっていました。そのばーちゃんは近くの中学校の横を通り過ぎる時いつも想像してました。上からぼとーん、とヘビが落ちてくる様子です。中学校の横には藤棚があり、五十メートルほど道を覆っています。その先へ行きたければ藤棚の下を歩いて行かなければならぬということです。んで、ばーちゃんとしては、藤棚にはヘビがいて時々ヤツらがぼとーん、と落ちてくるというイメージだつたんですね。よく分かりません。

藤の花房は優雅に揺れます。咲いた花が薄紫に色づいて伸びている姿は本当に美しいモンです。見事な花を咲かせる時、藤が天を覆うかのように枝葉を広げていたら文句無しです。頭上一面に花畠が浮かび上ります。それだけの花を咲かせるためには、幹がしつかりしている必要があるはずです。多くの花たちに豊かな養分を送り出す本流です。

太い幹に僕は驚きます。それはそれは多くの花たちを喜ばせるんだろうと想像します。花盛りの藤を想像しながら、僕はスケッチブックを手に取ります。少しづつペンを動かします。幹から枝が分かれていき、ニコルニコルと先へ伸びていきました。茂る葉っぱの陰から二ヨロ二ヨロとヘビが出てこないか少しだけ不安になりました。

藤
藤の木の幹
こんなに太いんだ
棚に支えてもらってるけど
それで
だんだんの枝葉を使はる
やぱり
着が太いからかな……



自信があります。どんな所でも眠れることです。

今回の寝場所は山の斜面です。ちょっとした倒木があつて、地面にカムフラージュされた昆虫みたいな感じもします。それでも、下には枯れ葉が重なつてフカフカしてクッション性は抜群です。

ガイドブックに「遍路ころがし」と表記されていました。どうやら遍路の者を転がすほどに勾配が急な山道があるということのようです。さらにガイドブックには「歩き遍路、最初にして最大のピンチ！」なんて言葉も書かれています。しかも、データでは第十一番札所の藤井寺から第十二番札所の焼山寺までは十キロ以上も距離があります。恐ろしい限りです。そんな所を無理して歩けるほど僕は強い人間じゃありません。本日の歩き、終了です。

スパッと簡単にその日の終わりを決められるのは、どんな所でも眠れるという自分の特技があるからだと思います。自分に自信があることについては躊躇なく決断ができます。逆に、自分に自信がなかつたら決断なんてできません。たとえば僕は自分の外見に全く自信がないから、小さい頃から人からの視線に怯えてオロオロしていたように思います。だから、押ししが弱いなどとも言わ続けています。ちと、悲しい人生です。

外見なんか気にしなくていいぐらいに自信をもてる人間性を磨きたいモンです……。



ふぐろうつて、あの夜にバサバサ飛んでいる鳥ですよね。そんな鳥がたくさんのいるんですか。僕、見たことないんですけど……。地球上では自然破壊のひどさが叫ばれています。酸性雨が降つてきたり、温暖化が進んだり、絶滅の危機に瀕した生物がいたり、人間によつて壊されていることが多いです。端的にいえば、人間の自分勝手な生活ぶりが地球を痛めつけていることは明らかだということです。つまり、人間は絶滅すべきなんですね。……といったら、「じゃ、お前から消滅しろ」と言われた友達がいます。ああ、なるほど、間違いではありません。

自分では何気なく生きていても、いつの間にか僕らは地球を汚しています。今現在、文章を作つてゐる僕は、パソコンのキーボードを打ちながら電力を消費することで、火力か原子力か、発電所を動かす何かのエネルギーを吸い取つてゐるわけです。そんなことは言い訳にもなりません。自然からの攻撃が浴びせられます。ふぐろうに襲われるかもしれません。お四国にはふぐろうがまだ人間と接するかもしれない近い所に生きていくのです。

ふぐろうが近いというのか、人間が近いというのか、視点によつて全く違います。僕はふぐろうに近づける山へと歩を進めていたんですね。恐るべき人間代表として山へ入り込んでいたんですね。彼らに襲われないよう、謙虚に進んでいました。



山道を歩き、休憩し、足元を見て、そして、足の裏を見ました。ふと思つたんです。「どうなるんだろ?」ということです。お四国を一周するのが目標で、それが終わつた時にどんなことになつているのか想像もできませんでした。というわけで、靴の裏側を撮影です。

縁の下の力持ちといつて言葉があるけど、目に見えない所にある物ほど力いっぱい働いていることが世の中いっぱいです。靴の裏側だつて同じです。僕の全体重を背負つています。足なのに背負うのは変だとしたら、足負つています。あるいは、靴負つてします。ここで支えなかつたら僕は前に進めません。

日本人の美德として、草葉の陰に隠れて善行……、といつ感覺があります。奥ゆかしくていいと思います。自己満足に浸るというのかナルシストというのか、自分で自分をこいつらほめてあげるのがいいんです。日本に生まれ、日本人として育つてよかつたと思います。顔は日本人離れしてると言われても、中身は生糰の日本人なんです。信じてください。うちの両親がうそつきでさえなければ、僕は奥ゆかしい美德を感じた日本人なんですね。

まだまだ修行が足りません。僕自身のことではあります。僕の靴のことです。見えない所での働きが少ないようですが、これら先の長い道のりで、充分に身をすり減らしていくましょ。



山の上、見えてきました。第十一番札所です。夏でありながら、山の中、意外に涼しい到着でした。

朝、何となく明るくなってきた頃、僕はもうひとつする意識の中で騒々しい音に囲まれていました。とにかくうるさいんです。虫の声でした。テントに寝ていると布きれ一枚隔てた向こう側は外界です。まあ、山ん中にそのまま「ロソン」と寝ているのと同じことになります。耳のすぐ横に虫がいてギヤーギヤー騒いでいて、しかもそれが大量の虫たちなんだからエライことなんですね。

天然の目覚まし時計のおかげでこの日は動き出しが早く、いいスタートができました。「夏休み最終日の宿題がんばれ書き取り人間」の僕が出だしをいいモノにでもなるなんて滅多にないことです。それにしても「遍路ころがし」と呼ばれる場所を通ることが僕を不安にさせていたから、札所にたどり着けた実感が湧いた時には妙なほど安心感に包まれたんですね。

名前負けすることがあります。もし、自分が聖徳太子とか名づけられていたら、もうダメだつたと思います。その名前の偉大さを知つただけで無理です。だまされてしまつんです。本当の姿と、上にかぶせられている「名前」というベルの差に気づかないんですね……。もしかして「遍路ころがし」という呼び方を知らなかつたら、到着の喜び方が違つていたかもしません……。

今度来る時には……。



2005.8.18

工事中
本堂へとなら
強い日差しを受けて
おどん・おばなしが
石を割り
石を運び
石を重ねる
もし
次に来るときあたら
何か建てるんだ
うう

ガツチソ「ロッソ」と石を割らむ。ウンショウ「ウシ」と石を運びます。それでもまだ、そこに何が現れるのか全体像は見えてきません。イライラするけれど、何モノかのイメージができることが多いのです。

木を見て森を見ずといつ葉は本当に僕のためにあるようなモノだと思います。そのまんまなんです。たとえ話として……、僕は他の人の顔がだんだん見られなくなつてくることがあります。照れくさいといつ要素は別にしてです。最初は顔が見えています。「話をあぬときには目を見なさい」なんて教えられてきたから、目を見ます。で、そのうちに右田と左田のじつちを見たらいいのか分からなくなります。で、とりあえず左田を見ていたとしても、左田のじつを見たらいいのか分からなくなります。で、とりあえず黒田の真ん中を見ていたりします。もう、顔なんて誰だか分かりません。怒りしい大バカ者です。

工事をしていたのは本堂の隣でした。寺の伽藍を大きな田で見たら、本堂の隣にくるのは大師堂でしょうか。それとも寺務所を新しく作つているんでしょうか。石だけを見たつて僕には何だから分からないけど、寺全体のことを連想したら建物が見えたような気がしました。実際にはまだ工事中……、いつか訪れたとしたら、何が建つてゐるんだろ?と楽しみではあります。いつかまた……。



うちの近くに釣り堀がありました。そこにはコイが泳いでいて、練り餌をつけて釣り上げるというシステムでした。僕ら素人は受付でお金を払って釣り竿と練り餌をセットで手渡され、コイと勝負するということになります。

小学校のプールにもコイがいました。ところでも一緒に泳いだことはありません。冬の間のプールです。夏の初め頃にはみんなでそのコイを捕まえて、学区の川に放流します。今考えると、ものすごい行事だったようにも思えます。

山を下りていぐ時、どう見てもプールの形をしたモノがありました。でも、水はドロドロとアオミドロたちがたくさん住んでいるような感じです。夏の太陽が絶好調で輝いているにも関わらず、そんな微生物たちの天国になっていたんですね。人間は泳がないのか……、ヒツツノリの一つも入れたくなります。で、その環境についての考察が始まります。お、僕の考えはシンプルに一つだけで、以前はそこに学校があったんだということです。校舎も運動場もなくなっていましたけど、プールだけは姿を留めていたんじゃないかなと考えたわけです。

ボツンと残されたプール……、今となつては縁の液体をたたえるだけです。かつて、そこには子どもたちの笑い声が響いていたんでしょうね……。しみじみしてしまいました。



何気なく歩いていて、ふと何かに気づくことがあります。その場の風景の中でとても印象的な物事の時もあります。他の人には何の価値もない物事の時もあります。どっちがって構いません。僕にとつての気づきがあればそれで写真撮影です。

何気なく歩いていて、ふと気づいてしまいました。お杖の先がモシヤモシヤしていました。どうやら少しづつ削られてしまっているようでした。これは今の内に写真に収めなければお杖がなくなってしまう……今まで思ったわけじゃないけど、シャッターをきりました。

お四国道、かなり多くの部分はアスファルトで舗装されています。だから、お杖をつきながら歩いたら木とアスファルトの戦いになるんですね。んで、木はアスファルトに負けてしまい、その身を削っていくことになります。お杖は弘法さんの化身とまでもいわれて大切にされつつ、反面ではその身を削つて僕らをいつも助けてくれているんですね。でも、このお杖について歩いてはいけない場所があります。それは橋です。橋の下には弘法さんが休んでいるかも知れなくて、それをコツコツという音で邪魔してはいけないという理屈です。弘法さんの化身が弘法さんの耳障りな音を出してしまったら何だかよく分からなくなってしまします。まだまだ僕のお杖は美しい……、新参者です……。



旅に出ると人は詩人になると聞いたことがあります。その日の僕は、疲れていて死人に近かつたかも知れないけど、それでも何かを書き残そうと思つていました。ところが、メモ帳がない……、どこかへ落としたようです。かなりのショックです。

しかも気力を抜き取るかのように、とんでもなくあなたが空いていました。お昼はカップラーメンとぶどう汁＝トマトというメニュー……、これが一百円でした。食堂でカップラーメンを出されたのは初めてです。それで、手持ちの食糧はパンが一つだけ。飢えをしのぐというか、あなたがごまかされていふたり寝るしかない……といつりつりの状況でした。

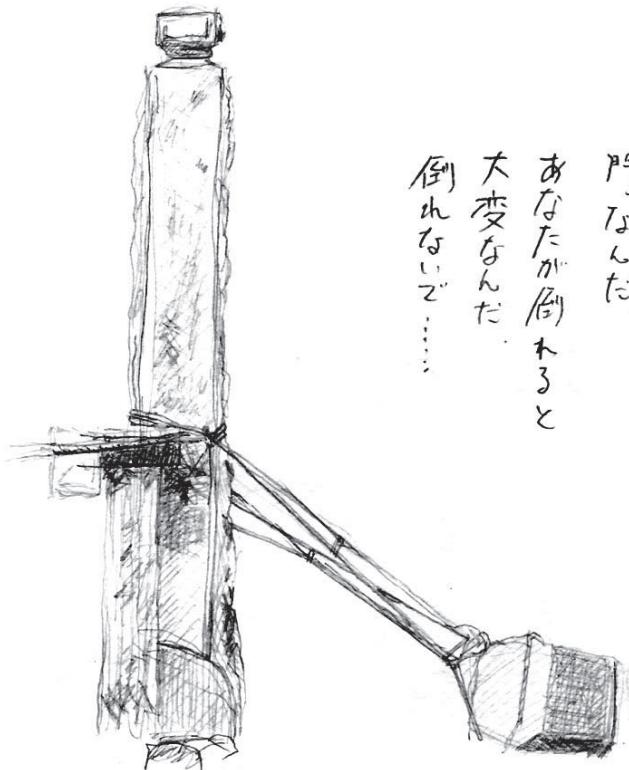
悲しい現実をつきつけられたような感じがします。山から下りてきても近くにお店なんてありません。まあ、あなたと腹中がくつつくくらいに腹が押し寄せてきます。そこにメモ帳を落としたという心理的に大きなダメージを与えられたら立ち直れなくなりそうな感じもします。その日の出来事、これからモノはこれから積み重ねられます。でも、これまでのモノを補充し直すのはものすごく労力がいる作業になるんですね。大変大変……。

自分で分析すると何が正しいのかどんどん分からなくなってしまいます。それでも材料だけはメモ帳に取つておきたいんです。そのメモ帳は探し始めてから三十分で無事に保護されました。

倒れないでね。

倒
れ
な
い

2005.8.11



仕事をしていると、絶対に倒れてはいけない人というのがいます。その人がとてもとても大切な役割を果たしているという状況です。そんな人だからこそたくさんの仕事が回っていくし、また、それを見事にやり遂げていくことが多いように思います。

人間は一人じゃ生きていけないっていいます。その通りです。それに多くの場合は仕事でも、一から十まで全部一人で完成させられるわけでもありません。ここでも一人じゃ生き残れません。

チームを組んで全員が目標に向かって動く時、ものすごく大きな力が発揮されます。それの部分がパワフルに動き、部分と部分が有機的にからみ合つて一つのところを目指すんです。一足す一が二じゃなくて、二にも四にも変化していくとの強さです。

チームにはリーダーが必要になります。絶対に倒れてはいけない柱です。だから、そのチームの柱を倒してはいけません。倒すか倒さないかは、支えがあるかないかにかかっています。どんなだけすごい柱だって持つているモノが重すぎたら倒れるはずです。支える存在の大切さを意識しなきやイカんと思うんです。

僕自身はどう考えたって柱になれる人間じゃありません。そんなことは自分が一番よく分かつています。だから、一生懸命に柱を支える存在になりたいと思うんです。それだつて大切な役割です。僕にできる最高の役割だと考えていました。がんばる……。



境内には砂利道が続き、その上をジヤリジヤリと音を鳴らしながら歩いていくのが僕の寺社仏閣についてのイメージです。そのイメージはたぶん、僕が小さい時に遊びまくった焼津神社のものがそっくりそのまま染みついている証拠だと思います。

この寺では不思議な様相をした境内が僕を待っていました。岩肌がゴツゴツヒツルツルの中間くらいの表情をして寝そべっているんです。テレビでやっていた、火山から流れ出る溶岩みたいな感じです。もしかりん触つたって熱いわけじゃないから大丈夫です。

ゴツゴツなカツルツルなのか、表現者としてはどうちかはつきりしてほしいところではあります。僕の中の正義の味方が白黒をはつきりさせたくないのです。一方で、僕の中の傍観者が灰色のまままかしていこうとねらいいます。最近、思うんです。はつきりさせない方が幸せなことが多いんじゃないかなってことです。

いいあんばいで生活をしていくことは常に楽しけ生きていいくことにいつもながらます。ですがは常楽時です。人と暮らしをするのに、全部の人と仲良くなるのは無理だと思えます。でも、毎日ケンカをして暮らすのはイヤです。そしたら、白黒はつきりさせることなく、なんとななくへうへう上手にやる」とじだつて大切になるはずです。いいあんばいに生きていきたいです。

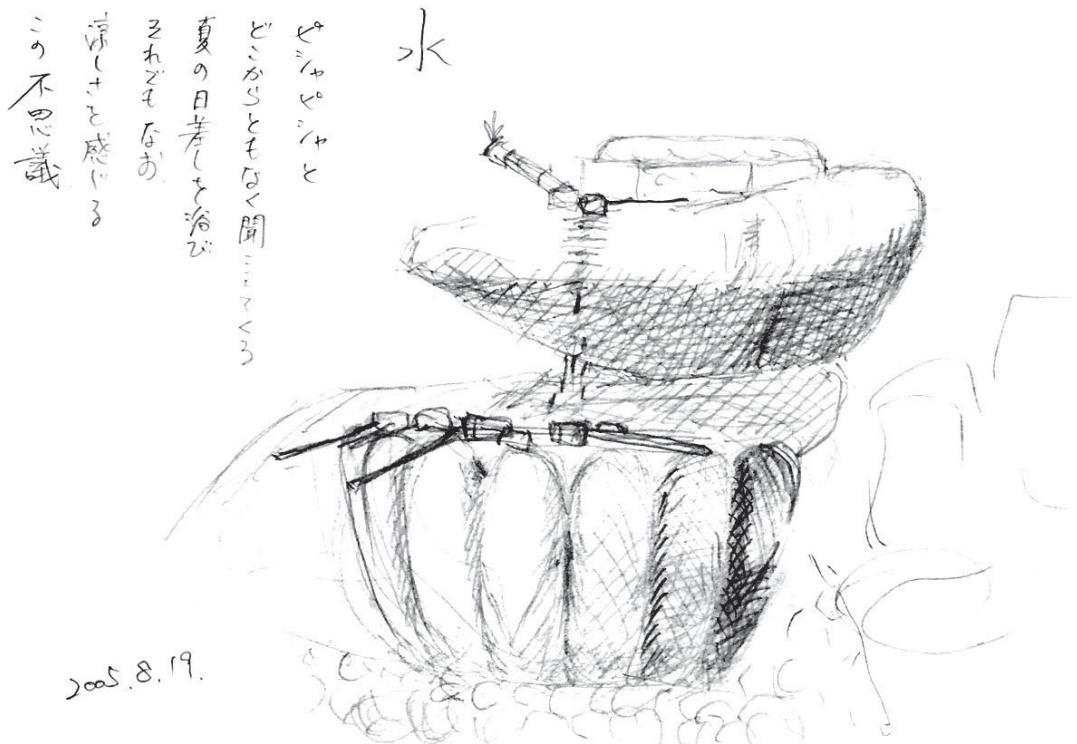
夏です。とうあえず暑いんです。

夏になると時々テレビのニュースで、四国ではダムの貯水率が下がって取水制限をしているなんて伝えたりもします。ダムの底に消えたはずの町が復活しそうなくらいに水が減っている映像が印象的でした。きっとダムができる前まではそこの人人が住み、日々の生活を送っていたはずです。ダムが作られることになってその町を出なければいけなくなつたんですね。あの映像を見たらどう思つんだろうと、他人事ながら気になつてしまひます。

夏です。とりあえず暑いんです。雨はほとんど降っていない様子だし、あちこちがカラカラに乾いた感じがします。のどだつてカラカラに乾いていきます。何もしなくとも干上がつてしまいうです。

ピシヤピシヤと水の音がしました。雲もない空、太陽の光が照りつかる暑さの中、水の音がします。のどが乾き、頭まで干上がりそうな僕の耳に、水の音が流れくるんです。頭の奥の方で響きました。ピシヤピシヤ……、水のしぶきが頭にはじかます。なんででしょう。少し涼しくなつたみたいを感じました。

実際の温度は変わらなくても涼しいと思える……、音つてすごいと思います。そして、そんな音たちを感じるのに工夫した日本人つておげ」と思ひます。語りたいモノですね。



ピシヤピシヤと
どうからともなく聞こえてくる
夏の日差しを浴び
それともなあ
涼しさを感じる
う不思議



どこなのか、どこなのかと町を歩きます。町の中を歩いていると、どこでもだいたいアスファルトの道なのでみんな同じ場所に見えてきます。それで、だんだんに不安になつてくるんです。ガイドブックに載つている何となく表示された地図と、遍路道を示す標識やシールくらいが僕の頼りです。本当に目的地へ向かっているのか全然自信がもてません。

予想外にボンツとお寺が現れました。一瞬、疑います。

人の話を素直に聞きなさいと言われることがあります。そんな中、僕の印象に残つている言葉が、人の話を素直に聞いちやいけない、というモノです。疑つてかかれ、というんです。簡単にいえば、それくらいの問題意識をもつて人の話に耳を傾けなさいといふ気持ちを込めての言葉でした。僕はショックでした。かなり、納得してしまつたんです。確かにそうだ、ケチをつけようとしてたり、あら探しをしている時は、ものすごく人の話をよく聞いています。

いきなり現れた寺を懐疑的に眺めます。「ココハモクテキチデアルコクブンジデアロウカ」と脳が計算を始めます。地図を見るといつぱりそこが目的地のようです。前の札所からそんなに歩いていないけど、確かに到着のようでした。一番信用できないのは、地図を読む自分の力です。門には寺の名前が書いてありました。

大きな支え。



相も変わらず他との比較でしかモノを見られない情けない人間です。いろんなモノ、その本質を見極められる眼がほしいと常に思つてあり、自分なりに何かを鍛えようとしているつもりではあるんだけど、悲しいかな、僕の目は節穴です。

絵を描きました。とてもとても僕の目に飛び込んできた印象が強かつたということです。大きな石、大きな穴という印象です。昔はコンクリートなんていうものは使われていなかつたと思います。大きなお寺、特に国分寺なんていう名前をもらつているようなお寺だつたら壮大な伽藍だつたはずです。柱も太かつたはずです。太い柱を支える礎石だつて、やっぱり大きくなければ支えきれなくなつて崩壊してしまうんです。その大きさを紙の上に描こうとしました。でも、どうも僕の節穴の目で見た印象では、他との比較対照がないと大きさが伝わりません。絵を描く技術の低さと相まって、より臨場感のない絵に仕上がりました。

僕のような小さな人間……だからこそ、大きな物に憧れる気持ちが強いのかもしれません。今は町の中、アスファルトの道に囲まれたお寺かもしれないけど、そこに大伽藍が存在していたことを示す礎石が残されているんですね。かつこいいじゃないですか。今はもう、自己主張するひとはないけど、実は大切な役割を果たしていた石です。しみじみとかつこいいです。



あなかと背中がくつつきそうでした。よく考えたら、その日の朝食は菓子パンを一つだけです。途中で、荷物の奥底に忍ばせておいた携帯食を食べたけど、それは一箱で一百キロカロリーだから、歩いていたらあつてこの間に空腹が押し寄せます。

我慢できなくなつたというのがホントのところです。うどん屋さんへ入りました。まあ食べようとして、ふと違和感を覚えます。うどんがそうめんに見えたんですね。細いんです。大丈夫、味は抜群においしいうどんでした。あなかの中も大満足です。

小さい頃、うどんといえばスーパー・マーケットに袋入りで売っているボコボコとした物、という定義でした。風邪なんかひいた時、温かくてボコボコとしたうどんを食べさせてもらつたことを覚えてています。あれこそが僕のうどんでした。でも、だんだんに以て異なるうどんが存在することに気づき始めました。うどんに腰があるという事実です。おそらく讃岐の国の人気が聞いたら怒ると思います。腰があつておいしいうどんを食べるのが当たり前だからです。

味覚って変わらないモノなのかと考えます。僕の家の味つけはとても薄味でした。周囲の人は「病院食」と称していました。それが僕の味なんです。おいしいおいしい、僕の家の味なんです。腰のあるうどん、ボコボコとしたうどん、どちらも大好きです。



ものすぐ近くにいる、と思いながら発心の道場たる徳島を歩いていました。何しろ雨で降りれることがないつてのが幸せでした。もちろん、お四国という場所は夏に雨が少なくてダラガ干上がりのところの所だから不思議なことじやないんだううナビ、僕ひとつでは本当にラッキーに思えたんですね。

このお寺でもラッキーな自分を感じられました。ちょうどお寺に着く頃このタイミングでにわか雨が降り出したんですね。ところどころは、お寺で絵を描きながら雨宿りができるんですね。本格的に天候が崩れていたわけじゃないから、雨も長く降り続くなつたものとは違いました。しばらくしてからお寺へ向かうと、ここは御神籠石がありました。

やたらひこしぬつて時がおつまか。逆に、やたらひこしてないつて時もあつまむ。なんにだらり、つて考へてみおした。つこしてゐ時つてのは物事をあぐく前向むに考えられる時で、ついてない時つてのは物事をあぐく悲観的に考へてしまつた時なんじやないでしようか。どんな苦しきことでも考え方次第で「この程度ですんだ」と思えるつてことだ。そんな考え方ばかりしてたら脳天氣なアホになつたつだけじ、幸せな考え方だと思いおむ。僕は幸せです。あひこの後、予想通りに雨はやみ、僕はおおず幸せに歩くつじがでもおした。ラッキー！



頭が頭痛で痛かつたら大変です。重傷です。じゃ、犬が狛犬になつてしまつたら、犬度二百パーセントになつてしまひます。どうも漢字に弱くて、石造りなのに犬々してしまひました。

お寺は観音寺、きっと觀音様を大切に想う人たちが多い場所なんでしょう。あるべき存在というものです。外側からおかしなやツらが入つてきては困ります。番犬が必要です。狛犬が石のような意志の固さで守っていました。おかしなやツらなんて寄せつけないこともなれどでした。

日頃は「おかしなヤツ」と指さされるような僕だけ、監視の目をかいぐぐつて境内へと侵入しています。そして、石の番犬の姿を後ろから眺めました。妙にかわいらしいし／見えてしまひました。常に外側を気にしているから、内側に誰がいるとも全く意に介していません。番犬だったら、周囲三百六十度に向けて常にオーラを発していいなあやいけないと思つたのですが……。

世の中一般、正々堂々、小細工を必要としていないたくさんの人たちのはずばりしいと思います。たとえ田の前に狛犬がいたって、堂々と……です。外側なんて氣にすることはありません。一番守らなきやいけないモノは周りには見えない自分の内側にあります。見なければいけない場所、それは心、自分自身を象徴するモノです。守るべき自分の心です。

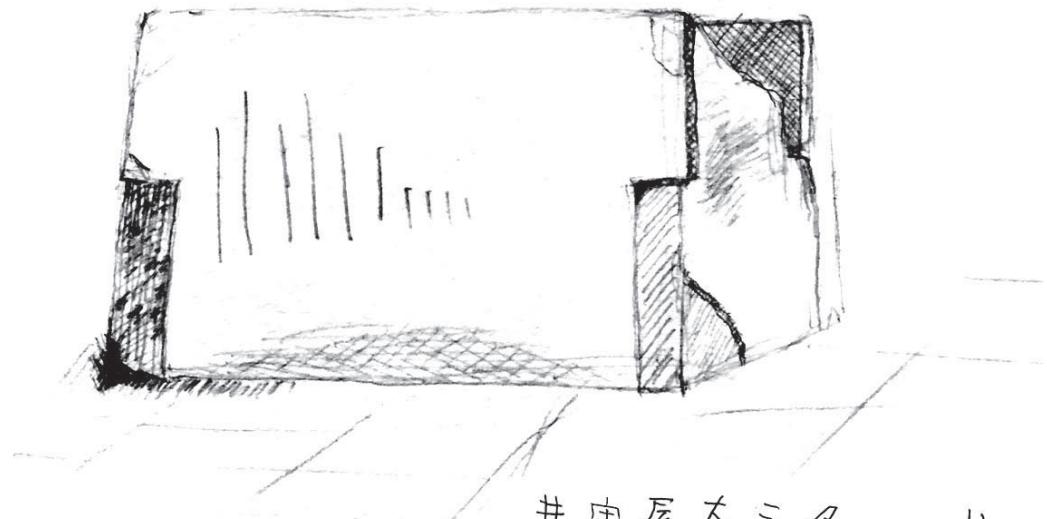


昔からこんな光景が受け継がれているんでしょうか。とても不思議な光景に思えます。田んぼの中にお墓が「ヨキツと頭を出している姿は、それまで見たことのないものでした。

たとえばもし、僕のお墓が田んぼの中にあつたら……、ちよつとうれしいかもせん。僕は百姓さんを尊敬しています。百姓さんが心を込めて育てている稻や、それが生まれてくる田んぼもステキだと思っています。ステキな田んぼの真ん中に、いつまでも眠つていられるのはみんなに多くの人にはできません。

僕のばーちゃんは、家から歩いて何分かの所に眠っています。まあ、フツーのお寺のフツーのお墓です。法事があつたらそこへお参りをします。お寺だから当たり前かもしれません。周りにもお墓があつて線香の煙が漂つてたりもします。みんなでその場の雰囲気を高めているかのようです。線香の香りって、それはそれでステキな感じです。もともと僕の家には仏壇がなくて、線香の煙とは無関係の世界でした。あるいは蚊取り線香くらいのモノでした。それが、ばーちゃんが死んでから、家の中に必ず線香の香りが残るようになりました。家と、お墓と、それぞれの場所でばーちゃんは線香を感じているのです。

田んぼに現れたお墓、周りには黄金の稻穂が揺れています。線香の煙にも通じるような、稻の波でした。



#戸

名は体を表す
ミタ 戸は
太めにされ
屋根下に
守られていた
#戸寺

2005.8.19

雨はキレイです。誰が何と言つても、何回言つても僕は雨がキレイです。もともとガチャリダーライダーライダーライダーライです。トホダーだって同じ……というよりは、屋根じころかお尻を乗せる所もえんじだから、雨が好きなわけがあります。

雨って、ものすごい強い力をもった存在です。天高くから様々なモノに降り注ぎます。それで、少しづつ打ひつけたり染み込んだりしてモノの姿を変えようとしてこきめく。大きな岩だつて、だんだんに形を変えられてしまします。雨ってすごいヤツです。

お寺には仏様がいます。一番大切にわれる存在です。んで、弘法さんがいたり、守り神みたいのがいたり、存在感のあるモノたちがひしめいています。そんな中で井戸を前面に押し出したお寺があつたんですね。その井戸は大切にされている様子がよく分かりました。屋根の下にいて、僕らを迎えてくれる井戸でした。井戸寺をずっと見守つてゐるんだと思つます。

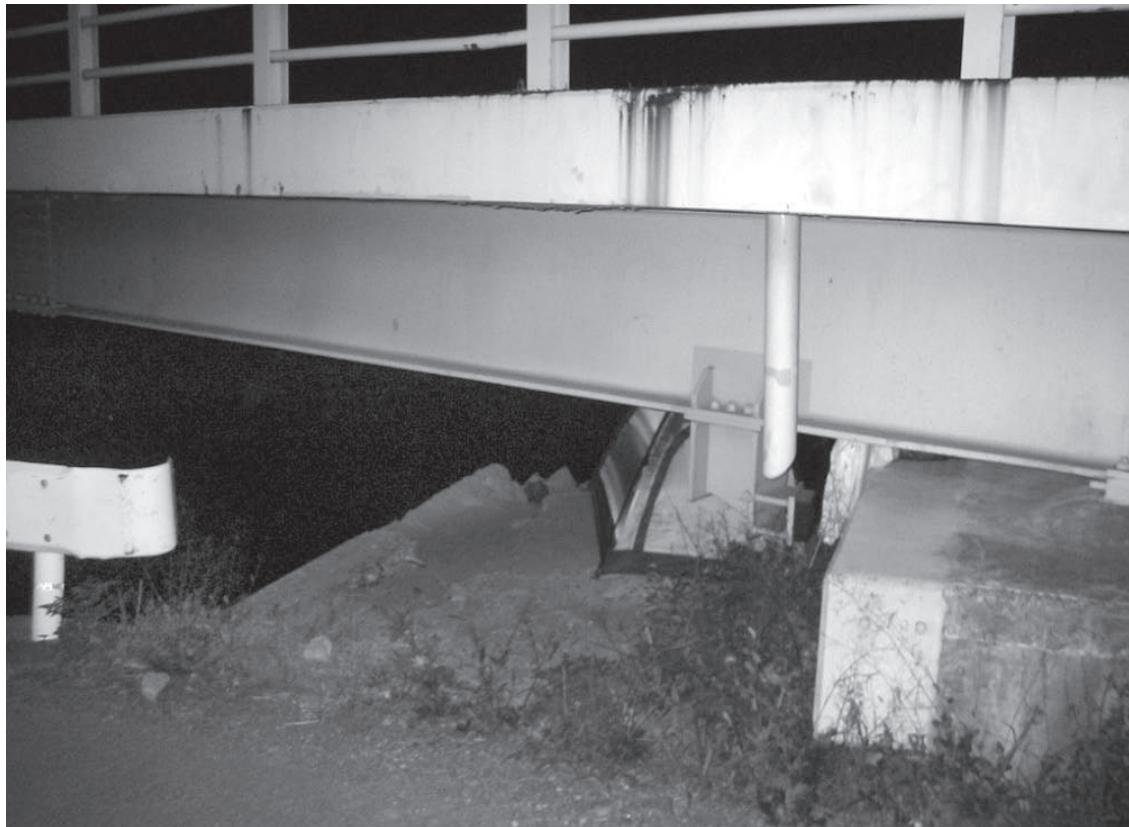
僕らにはそれぞれ名前があります。ふさわしい名前をもつていることがあります。井戸の寺はバツチリです。ふさわしくないこともあります。「名前魚」していることがあるんですね。自分はどうだらうと考えると……まあ、後者でしょうね。それを自覚しているだけマシかと開き直つて、「名は体を表す」状態を田指します。



一番感じるのは入院した時でどうか。病院という場所の質素儉約の精神です。食事が出てきて口にするときの思いが強くなるように思います。いや、別に質素儉約を奨励している場所ってワケじゃないはずだけど、そう思えてしまうんです。ヒジョーに味つけが薄い食事になっています。ま、僕は濃い味が苦手なので、そんなに問題ありません。

病院が贅沢な場所、というイメージはあまりありませんでした。が、その建物を見たらガランガランと病院に対するイメージが崩れていきました。天守閣があります。安土桃山建築でしょうか。派手な特徴をもつた建物です。パッと見て、おびしきつらしました。少なくとも、僕が住んでいる近所に天守閣のある家はありません。ただそれだけでも大いなる驚きです。よくよく見たら、そこに看板が立つてあり、「〇〇病院」みたいなことが書かれています。ものすごい病院です。天守閣が好きな人が建てたんでしょうかね。

おもしろい所、おもしろくない所……いろいろあります。病院つてのはどっちかといえばおもしろくない所の部類に入ります。おもしろくない所にずっと入れられていたら、人間もおもしろくなくなってしまいます。せめて外観くらいはおもしろくていいんじゃないのか……つて、この建物は主張していました。もちろん、僕の勝手な解釈ですけどね……。

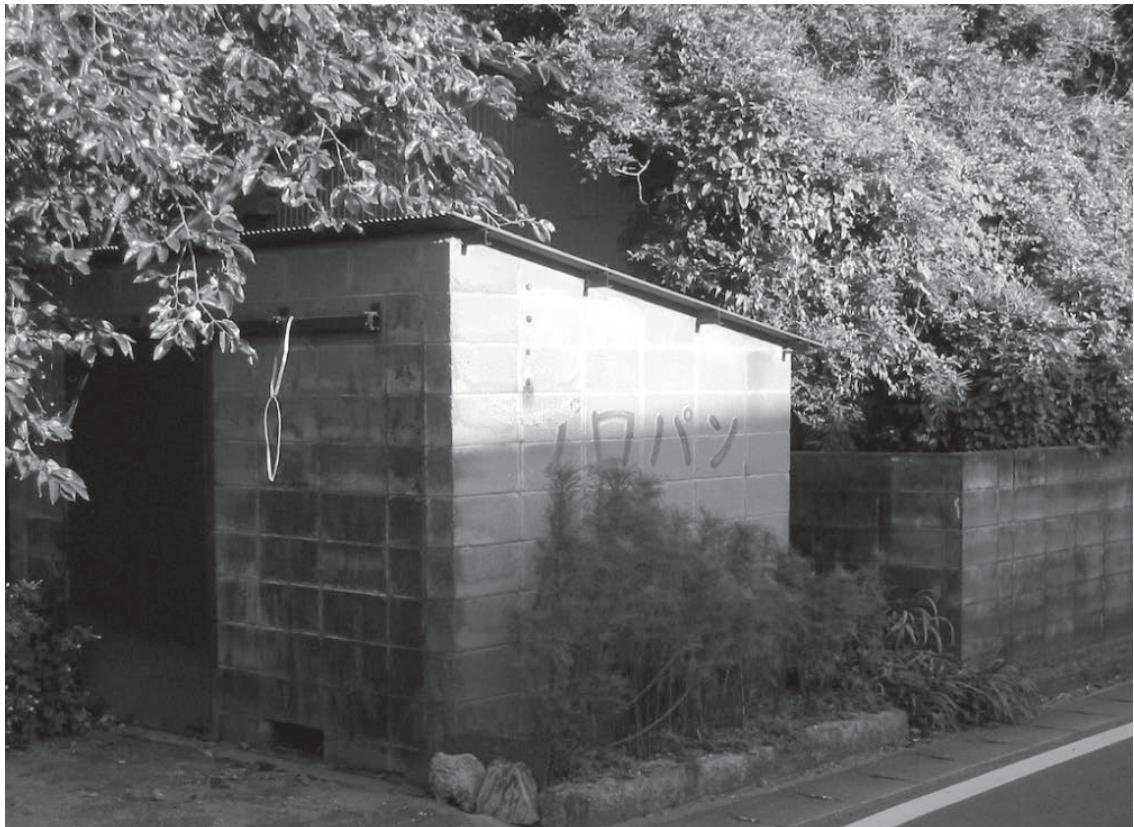


実はちょっと失敗したかな……と思いました。最高の場所、橋の下のはずなのにくやしい感じです。確かに橋の下、雨が降ろうと問題ありません。人目にもつかない所で、シチユエーシヨン的にはかなりいい場所でした。それなのに……。

朝起きて失敗だったと分かった経験、あねしょなんてのも、そのひとつです。いやいや、橋の下テント失敗の経験としては、鳥の糞事件です。撤収しようとしてテントを見たらうんじだらけで、声も出ないくらいにショックを受けたことがあります。忘れようにも忘れられないくらいのショック状態でした。

そう考えたら今回の失敗なんて、ちょっとしたモノです。とにかく暑い、という状況でした。橋はすぐ頭の上まで迫っています。橋げたもすぐ隣までできています。風がまったく通りません。ついでにいうと、今回使用のテントは一人用の物で山岳テントの親戚なので、ガバア～っと大きくメリシユなんてありません。出入り口と、天井部に穴がポンと空いているだけです。アウトです。

バランスなんです。周囲から判断したシチユエーシヨンと、自分が眠るための条件……、どのくらいで妥協し合つかのバランスとなります。眠る場所として他に選択肢が見当たりませんでした。仕方がないので、暑さに耐えることを選びました。仕方がないんです。仕方がないんです。寝不足です……。



イヒヒヒー、いひいつネタが大好きです。言葉遊び系ですね。ブロック塀に囲まれたパン屋さん、どれだけ固いパンを売つているんだろうと思つてしましました。

しばらく前に「ロバのパン屋さん」なるものが僕の周りで話題になりました。といつても、僕はそんなモンを知つてゐるわけでもなく、なんじやんつや、と思つていただけです。どうやら歌を流しながらパン屋さんがそういう辺を回つて歩く、といつ形態があったということです。その歌がとても印象的なモノらしい、「ロバのパン屋さん」の話題で盛り上がつていました。

それでか……、「ロ」とこの文字と「パン」とこの文字が見えた瞬間に、パン屋さんがあるんだだと腑みが反応してしまつたようです。で、よく見たらどうやら「ノロパン」と書いてあるらしい、それはそれで、なんじやんつや、となるわけです。ノロノロと売つて歩いたから名前がそうなつたのか、それとも、何か呪われるようなパンなのか……、得体が知れません。

すみません、僕がバカでした。「プロパン」でした。プロパンガスの置き場なんだしよう。そりや、ブロックの壁でも納得です。でも、見えにくかったんですね。ホントに「ノロパン」って見えたんです。その間違つた気がついた時に、おもしろいのが来ました。イヒヒヒー、いひいつネタが大好きです。



たどり着いたはずなんです。でも、なんとなく着いたという充実感が得られません。だいたいのお寺に着くと、それなりの造りをもつた建造物が僕を迎えてくれます。ところが、到着したはずの十八番札所にはそれらしい建造物が見当たらぬんです。裏側から見るとボロッちい小屋くらいにしか見えないモノがあるのみでした。

いや、本当は分かつてゐるんですよ。どれだけ粗末な造りだつて、門は門なんです。人を迎える最初の場所です。そこに自転車が止めてあつたつて、アスファルトの道から少し外れてたつて、そんなことは小さなことです。思いさえ込められていたら何の問題もありません。……たぶん……。

僕は人からの見た目なんて気にせずに生きていきたいと考えます。それで、ファッショントイの種類の話題に興味をもつことがほとんどありません。身につける物は実用性が何よりも最優先されます。どれだけかっこよくても実用性がなかつたら却下です。逆に、実用性があればどれだけかっこ悪くても採用となります。結果的に、ただでさえかっこ悪い僕が、よりかっこ悪くなつて人の目にふれることになつてしまつうんです。ああ、悲しいことです。門も僕も、少しばかり見た目を気にした方がいいみたいですね。中身を見てもうらうための最低限のマナーハックのようですね。



門のすぐそばに立派な木がありました。いわゆる神木ってやつじやないかと思います。毎度のように「こんなに立派には描ききれない！」と感じながら、それでも僕のペンは動き出してしまいます。

この木、「立派な」という表現だけでは足りない姿をしていました。うまく言葉にならないんだけど、表面がザラザラつて感じとデコボコつて感じの中間みたいな感じです。ツルツルつていうときれいちゃんね、ヌルヌルつてこうと気持ち悪いし、擬態語つて難しいと思います。

僕もそうだけど、擬態語や擬音語が会話の中でメチャクチャ登場するタイプの人間がいます。「ユーヤー」とか「シゴシゴシゴツ」とか、何を言いたいのか分からないことも時々あります。身振りがセットになっていることがほとんどです。体いっぱい効果音までつけて何かを伝えようと/orる姿なんだろうと好意的にうなづくと幸せになります。

そこに現れたあつちやんは、物静かにこの言いました。「人肌みたいや」と……。擬態語や身振りでは表せないことをズバリ分かりやすく伝える言葉でした。決して難しい言葉じゃありません。でも、その言葉をこの場面で上手に使う力が必要なんです。感性なんでしょうな。努力して磨かれたんだよなうつか……。



昔々からお四国遍路はあつたんですね。それがいつのことなのか知りません。人々が家を建てる前から遍路道があるわけです。輪廻を作る道があ四国を巡つてゐるわけです。

メビウスの輪なんて変なモノもあるけど、僕らがいつも田にするような輪つてのはそんなに珍しいモノでもありません。たとえば、僕の目の前には輪ゴムがあります。ビヨヨーンと伸びてはピチンと縮んできます。いつをハサミで切つたらピロローンと長いだけのモノになってしまします。輪は輪であり、一周ぐるんとつながつてこねかういふ意味があるんですけど。

遍路道のある場所へ家を建てようとしても、その道は動じません。敷地の中を悠々と道が伸びてきます。それはいいんだけど、遍路道を歩く者にしてみると非常にドキドキする現象が起きてします。僕はこの敷地に足を踏み入れて良いのだろうか、と自問しながら先を眺め、道しるべを見つめました。確かにその道は敷地内へと進んでいるようです。ああ、ドキドキです。入り込んで不審者と思わないでください。

結果的に僕は不審者として捕らえられることもなく、遍路道を前に向かって行くことができました。輪廻の道を進むことを許されたと思ったら、ちよつとカツコイイ感じがします。輪廻から解脱するいとはできないみたいですね。

見えます……。



もちろん着いたときにはつれしく思います。でも、さすがの僕にも十メートル先は見えます。十メートル先には田的田有りです。遍路道を表す札や、シール、道標など、とてもありがたいものです。昔だったらそんな物はたくさんなかつたということも分かります。お地蔵さんにあ参りをし、近所の人たちに道を何度も尋ねて札所を探していましたはずです。そう考えたら、印がたくさんあることはとてもとてもあります。よく分かります。でも……、でもですよ……、これはどうなのかとツツツツをいれたくなります。そして、あとはツツツツ笑うだけです。

笑って、大きな力をもつているモノだと思います。何もかもを超越してプラスの方向へ導くべらにすごい力を感じます。どんなに苦しい時だって笑いを絶やさないでいると、いつの間にか自分自身が、そして、周りがみんな楽しくなってきます。中身が整う前にまず環境から……、笑いの環境が中身の楽しさを持つてくれるのです。樂しくなつたら余計に笑いが出てきます。そうするとまたまた楽しさが増して笑いがあふれてきます。幸せな循環です。

苦しい苦しい歩き遍路、そんなことをする義務も必要性も、あんまりありません。でも、歩くから苦しいし、苦しさが分かるから樂しさも生まれてきます。十メートルでも充実の前進です。



橋

2005.8.20

川め向いにあるのは
極樂淨土か
橋は乗せて渡れない

人が生きる道の教え、それが仏教というものだと思います。歩きで寺の中に足を踏み入れたら、人の在り方として理想とされる世界へと近づいていけそうな気もします。人は悟りを開き四苦から解き放たれたら仏陀になれるみたいです。きっとものすごい修行が必要になるんじゃないでしょうか。楽をして悟りの境地に行き着くのは至難の業なんだということになります。

この橋渡るべからず……です。車の人たちです。人の足で一歩ずつ進む者たちだけが前へ進める場所なんです。そりや、人の道を照らすヒントあふれるお寺へと簡単にエンジンふかして入っていけるようじゃ困ります。なんか、価値がうすれてしまいます。また、価値のあるなしを考えてしまつこと自体がもう世俗に染まつた感じはあるけど、それでも僕は自分の足で歩いています。それだけの見返りがあつてもよそれでなモノです。

実際のところ、何かしらの見返りを求めてしまつのが人間というモノのように思っています。どれだけ心を冷静に保とうとしても、自分の身はかわいいんです。周囲のいろんな状況と比較してしまいます。資本主義の中で生まれ育つてきていることの象徴かもしれません。がんばつたらがんばつた分の見返りを期待するんですね。それからも解脱できるか……、簡単にできるなら僕らの生き方はもっと楽になるんですけどね……。無理です……。



僕、基本的に自分勝手でわがままなんです。だから歩く時にもかなり自分勝手に歩きます。歩くペースもエエ加減だし、歩き方だってスマーズとは言い難い様子でダラダラとしていると思います。そうすると、自分勝手に歩けない状況が現れるとストレスがたまり始めます。階段がいい例です。誰の歩幅に合わせてあるのか知らないけど、とにかく僕の足にピタッと合う階段はそんなにありません。階段が僕に合わせないなんてないから当たり前、仕方がありません。

目の前には階段が続いている。先がどこまであるのか見えないくらいに続いています。もう、ガツソリです。山道の階段はまた余計に歩きにくじょうな気がします。横に渡してある丸太が少し高さを増していく、その分高く足を上げなきやならないから気も遣うし大変です。

お寺が山のてっぺんにあることは珍しくありません。階段を上り始めてしまったら、てっぺんまで山を登らなければいけないと覚悟を決めます。逆に考えると、山が過激に高くなれば、ゴール近いわけです。十メートルの山でも、てっぺんはてっぺんですから……。氣休めです……。実際に田の前にある階段は、何百メートルというレベルでてっぺんまで伸びている感じがします。自分に修行の苦を課して、ペースだけは自分勝手に上の階段でした。

まだ、あつた……。



山のてっぺんに着いたら、そこにお寺があるってのがイメージ通りの展開です。なのになぜ、山門が見えないんでしょうか。山道の階段が終わつたかと思つたら、現れたのは石段です。残念、僕のイメージは崩れ去りました。

時々、心の中で思い出す。「百里の道も、九十九里をもつて半ばとせよ」という諺葉のありがたみです。「ゴールが頭にちらりつき始めるとい、じつしたつて気持ちがうわづこしてしまつます。」それで、九十九里ところの中間地点を思い出すわけです。ほととぎ終わつているはずの道のりが実はまだ半分だけしか過ぎてあらず先に同じだけの距離があるとしたらショックだけど、それくらいの気持ちでいたら緊張感を保つてこなすことができるわ。

つらこんでわ。それが標高二二メートルくらいの山なら全然じつてことありません。でも、長い時間かけて登つたはずなのに、しかも、歩きにくい階段を歩いたのに……また階段なんです。どれだけ自分をだませるかということにかかっていると思います。物理的に考えたら、百里の道は百里なんです。それ以上でもそれ以下でもないんです。それを「まだ半分だ」と自分をだまして歩き続けるテクニックといえるのかもしれません。どれだけ正しくてもしんどい時にはしんどいし、どれだけウソでも楽な時には楽だと感じられるんですね。そり、だましだまし、あと少し……。

続々と

トトサ・タ…ヒ
トトサ・ペニサガサヘ
キヤナ・ジ・ムノ



じいかに「あと五百メートル」なんて表示がありました。よつしゃ、と思つ気持ちと、うくえ、と思つ気持ちがぶつかります。そもそもここまでの道がつらすぎたんですね。山道を登つたり下つたり、五時に閉まる納経所を意識したら急ぐことも必要になります。山道でも下りの道は走りました。お杖をちよつとだけ先に着地させて転ばないよう注意しつつ、全速力です。

ばーちゃんがついてきてしまつた……と思つのはいの頃からでした。走つていねじチャリン」とこの音があるんで見てみると、ばーちゃんの小銭が落ちていてるんですね。全速力の下り、しかも土がふかふかの山道でその音が聞こえたのには感謝しました。本当にありがたさを感じました。ばーちゃんが教えてくれたような気がしました。偶然にしても、何にしても、ありがたいのはありがたいモノなんです。同行一人じゃなくて、同行二人になつてます。

さて、五百メートルを残した上り坂、今度は陸上選手を思います。ヤツは四百メートルの選手でした。ま、同じぐらいの距離です。そうすると、ヤツには負けられないという感じが湧いてきました。ヤツが四百メートル走れるんだから自分にできないわけがない、と勝手に思つわけです。実際、運動神経に大きな差があつて、同じ土俵で比べると自体が無理なんだけど……。

ラストスパート、五時まであとわずかでした。

ギリギリ

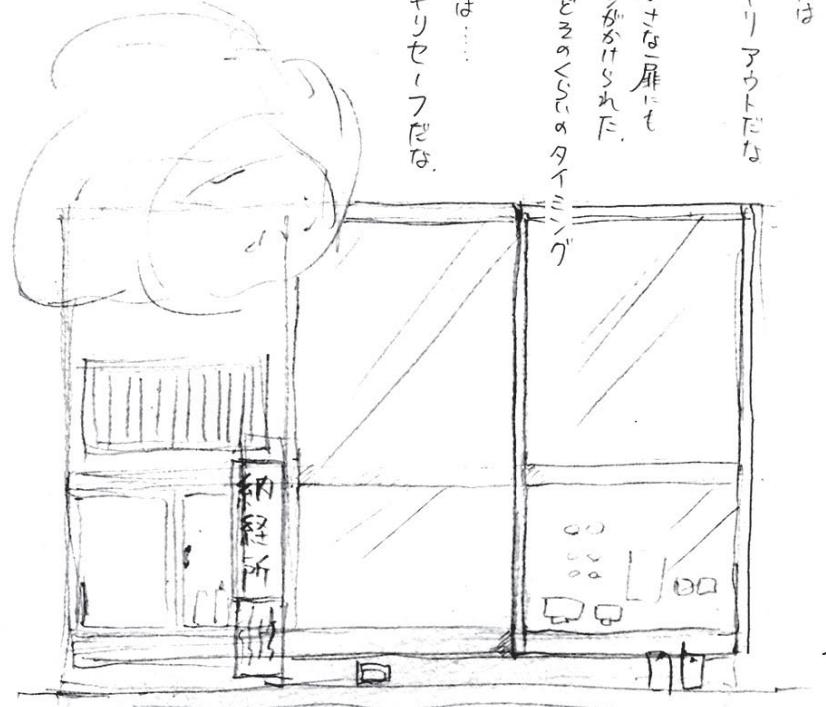
ギリギリセーフ
いや
正確には

ギリギリアウトだな

一席小さな扉にも
カーテンがかけられて
ちづらうどきくじらタイミング

結果は……
ギリギリセーフだな。

2005. 8.20



ギリギリのところで生きているような人間です。ちつちゅい頃からギリギリの人間でした。特に印象的なギリギリは高校生の時のことです。自転車通学でガシヤガシヤとチヤリを駐輪場に放り込み、そのまま昇降口へ……、先生に腕をつかまれるもの振り払って教室まで逃亡したギリギリです。結果、高校三年間は無遅刻無欠席無早退の皆勤賞を獲得しました。

ラスト五百メートルを走り抜けた時、太龍寺の納経所は閉まる時間でした。お守りのようなものは片づけられ、大きな窓はカーテンまでかけられ、小さな受け付け窓もカーテンが閉じられる途中でした。そこに顔をすり寄せ、両手を合わせ、お願いをし、納経させていただきました。

時間的にはギリギリだらうと何だらうと、アウトでした。でも、実際には納経帳に御朱印もいただきいたし、セーフです。終わりなければすべてよし……、この日もいい日だつたと終わっていくことができます。

ギリギリで何とかその場をしのいで今までの人生を歩んできました。困ったことに、だいたいの場合ギリギリでセーフになってしまいます。一度、大きなアウトをもらわないと学習しないと思うんだけど、幸か不幸かギリギリセーフでごまかしています。しばらくは、ギリギリセーフの甘い考え方方が治つむつにあります。

ギリギリ人間。



所々で歩き遍路のための場所を見ることがでもある。お四国は精神が今でもあちこちに息づいていることを感じる時です。ここは「ヘンロ小屋」であり、しかも「第一回」と記されていました。どうやらありがたいことに「第〇号」と番号をつけながら、たくさんの休憩所を作ってくれている人がいるのです。

休憩所にはいろんなモノたちが集います。この時いた先客は犬でした。のんびりと自分の時間を過ごしていました。これは邪魔してはいけないと想い、静かに写真だけを撮つて通過です。心を込めて作ったであろう休憩所、人間が過ごしやすいんだから犬が過ごしやすくなわけがありません。リラックスしまくりです。

僕は少しだけ謙虚になれたような気がします。もし、心が荒んでいたら、犬をどかしても自分が座ろうと考えたかもされません。心にゆとりがなかつたら、犬をからかっていじめっていたかもしれません。僕は、歩き遍路の者として周囲のモノへ広く心配りができるっていましたように思います。僕はいつもいつでも広い心配りができるほどすうまいヤツじゃないけど、時々そういう瞬間がやつてくるんですね。それでもお四国を歩いていて、そんな瞬間がやつてくる回数が増えたような気がします。ありがたいことですね。

先客はそもそも当然のようにいました。僕は単に「犬だ」と思い、「じゃー」と当然のようにあいさつをして写真を撮りました。



プロレスの世界で電流爆破デスマッチなんてモノが行われていると、もう血沸き肉踊る感じがします。プロレスはものすごいスポーツです。ほんと我慢比べの様子を呈していて、相手がどれだけ遅い攻撃を仕掛けてきても「おうりや！」と正面から迎え撃ちます。んで、ダメだと思ったら倒れるし、大丈夫だと思つたらもう一回攻撃されることを望んだりもします。電流爆破だつたらロープに吹つ飛ばされると「ゾン！」と火花が散つてやけどです。田んぼでプロレスをする人は多くないと思います。でも、そこには電流が流れているようでした。そこへ吹つ飛ばされたら火花が散つてやけどするんでしょう。目的がプロレスラーじゃないとしたら、誰なんでしょう。山の動物たちになるんでしょうか。イノシシとかサルとか他にはスズメとか……？田んぼに設置してあるつてことは米を守りたいといつ気持ちのばあです。

興味津々でそこに触つてみました。「つづりつづくのか」と思いきや、あれれ、全く何事も起つりません。お休み中なんでしょうか。ただの齧しだつたんでしょうか。……といつことは、字を読める者をターゲットにしてつるのか……。

後から情報ゲット……電力がものすごく弱いけど動物を目標にしているんだと教えてもらいました。ついでに、舐めたらしびれるだろうことも教えてもらいました。



色のもつ力ってのも大きなモノがあります。パッと見たら辛いが口の中に広がるカレー屋さんの色、口の中に炭酸飲料がシコツシコツとほじけるような自動販売機の色……いろいろあります。色は何かを具体的に説明してくれるわけじゃないけど、感覚的に僕らの中へ訴えてきます。理論的に説明されるわけじゃないから、よけいにザックザックと心の奥の方にまで入り込んでくるような感じです。でも、その色たちにも背景となる文化みたいなものがあるように思います。カレー屋さんの色が黄色っぽいと見事に「カレー屋さん」というイメージを得るのが僕ら日本人です。縁っぽいカレー屋さんを見ても辛い雰囲気を感じられません。あるんですね、緑の色をしたカレーが……。ものすごく辛かつたりするんですね。そもそもカレーなんて、じいじの国へ行つたらみそ汁と同じ感覚です。毎日のおかずの一品で、中に何を入れるかなんて決まつていません。香辛料で味つけしてあつたらカレーになってしまつんですね……たぶん……。

仏教にも色があります。虹のように配色された布が風になびきます。仏教が生活の中に深く入り込んでいない僕にはあまり感動的なものじゃないけど、その道をじんわり歩き続けている人にしてみたら「仏教」と何かを訴える配色なんだと思います。山門を見て「やつと着いた」と思つだがじやないんでしょうね……。

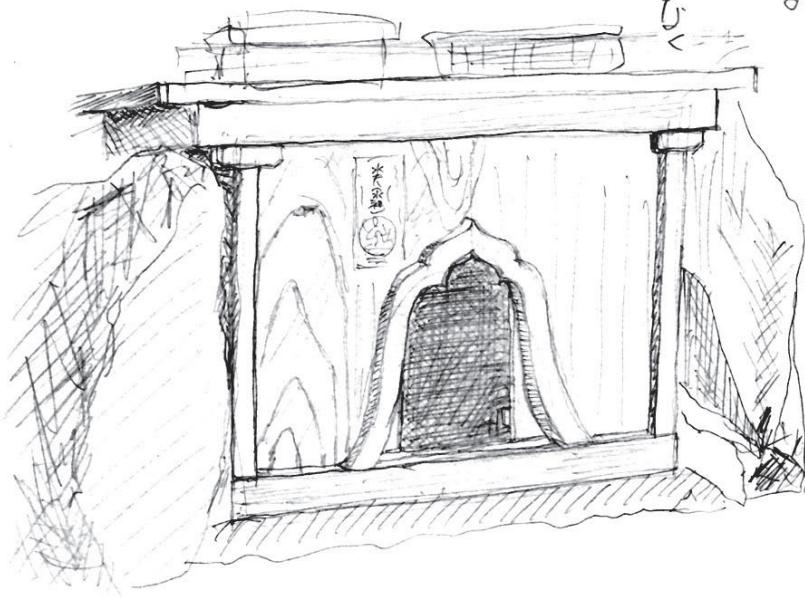
祠

空の奥

暗闇の中には

水湧き出する

水絶えることなく



奥。

2005.8.21

大切なものはどこにあるのか、奥の方です。簡単に見えるような所に大切なものがあるってのは、なんとなくありがたみがあります。これ、ただの感覚です。日本人的な感覚として奥ゆかしさといつ美徳が根付いているということでしょう。

窓を開けるとそこには暗闇があり、その暗闇の中には水が湧き出ています。平等寺の祠の奥です。神聖な場所、すぐに手が届くような所に水が湧き出るわけじゃありません。よく目を凝らさないと見えないくらいの所に湧き出ているから、よけいに価値があるような気がします。

表に出ていて、あぐに手が届くものに大切なものがいるのかつて、そんなことはないと思います。そりやそうです。大切なものが全て手の届かない所にあるんだつたら、僕らは大切なものを得ることが不可能になってしまします。ま、逆に表に出ている方がものの大きさを見落としてしまうこともあるかも知れないけど、だいたいは表に出ているものってのはスパンと僕らの目に飛び込んできます。見えない所のもの、見えにくいものこそ明確に見極められる力が必要になります。

それにしてもこの祠、水が大切にされていることを感じます。僕らを清めてくれる水の力、その力にどれだけの価値を見出しているかということだと思います。水の力、あなどれません。



必要以上に汚い雰囲気が漂っています。なんでか分からぬけど、何をやっていても僕は「汚れ」というモノと仲良くなつてしまふ傾向があります。ホント、ナゾトダロウ……。

本格的に雨が降り、本格的にカツバを着て、本格的にイヤになりました。カツバを着て山道を歩くなんて、最悪です。できる限り山道を避け、アスファルト舗装された国道を歩く軟弱さです。国道を歩いていると山をドカンと突き抜けているトンネルが登場します。昔の人だつたら上まで登つて行かなきや越えられなかつた山だつて、直線の道をスイスイです。それにトンネルの中はとりあえず雨が降つていません。軟弱者には手頃なルートだといえます。

どこかで見たことのある光景が登場しました。歩道の片隅に室戸までの距離が書かれた標識があり、そこで怪しげな顔が吠えてる光景です。ガイドブックに載つていた写真です。本来ならそこで全く同じ写真を撮るべきだったと思います。それが芸人魂というモノです。……いや僕は芸人じゃないんですけど……。気分が滅入つてたんですね。ついで記念撮影をするのが精一杯でした。気持ち次第で人の行動なんてすぐに変わつてしまふんです。どんなだけアホなことでも、そこに価値を見出してやれてしまうステキなエネルギー……プラス方向以外へは御土産でいきたいです。

高野山



ありがたいお言葉。

なんか違うような気がします、「上」の使い方……。まあいいか、分かることが大切です。注意しなければいけないんです。赤い文字で書かれているから、意識を上方へと向けやすくなっています。蜂は怖いなあと思います。刺されたことがないような気がします。だから、想像の域を出ではいらないんだけど、だからこそ、よけいに怖さが頭の中を駆け巡つていふのかもしません。

僕が蜂を相手にして痛い目にあったのは幼稚園に通っていた頃です。その相手はミツバチでした。たぶん、その相手は僕よりももつと痛い目にあつてこらねばずです。なんといつても僕の体重を感じてしまつたから……。いくら幼稚園児でもミツバチと比べたら大巨人です。大巨人が何気なく体を支えようとして置く手の下に何気なく入り込んでしまつたミツバチは、自分の針を大巨人の手に突き刺しました。「痛い！」……大巨人の泣きべそです。同時にミツバチはペッたんこ状態です……。

痛い目にはあいたくありません。だから、そこにあつた注意書きはとても価値のあるものだつたと思います。危険認知能力の低いアホな歩き遍路の者にも、文字は確実に情報を伝えていました。言葉や文字の持つている「伝える」という力は大きなものですが、僕の場合、その力をもてあましてこることが多いですが……。



かなりの恐怖でした。いいでもしつラッシュが光ってしまったから、僕は多量の蜂に襲われてしまつたことになります。それでも、義務感の強いつもりの僕だから、なんとしても記録を残さなければいけないと思つたのです。

頭の上にはでっかい蜂の巣……、ありがたいお言葉が記されていたおかげで存在を意識して見上げる事ができました。ショックアブソーバーという言葉がある、と何かのマンガで見たことがあります。たとえば自分で「失敗する、失敗する……」とあらかじめ思つてあいたら、実際に失敗してもそのショックが少なく済むというヤツのことだそうです。同じこと……、「蜂の巣がある、蜂の巣がある……」ありかじめ思いながら見上げたんですね。それにしてもいかずきもした。ユルツボヅラ。

ミツバチだったり僕の手の平でプチツツとなつて、チクツとしておしまいです。でも、でかいヤツらです。何匹か飛んでいます。巣の中にはそんなヤツらがうじゃうじゃ動いてるのかと思つたら、怖くて仕方がありませんでした。刺されたら死にます。

報道カメラマンたちは危険ないことに對してカメラを向かせます。その結果、命を落とすことがあります。僕にはそんなことはできません。命が惜しいです。先に逝つてしまつた人たちの分まで充実した命を燃やしてこわしたいと思つて生きっこまおむ。



カニ、おいしいですねえ。長くて太い足、そこからツルツルと上手に身が出てきたら感激です。口の中で感じる身の充実感はたまりません。お金持ちはもちろん、お金持ちの知り合いが食べさせてくれるわけでもなく、自分で捕まえる力もない僕にとってのカニは少しばかり遠い存在です。

巨大なカニガワシヤフシヤと道を横断していくことはないと思います。イメージの中では小さいカニです。そんなカニたちを注意して車を運転するのは、なかなか大変なことでしょう。僕は歩き遍路だから、もしもカニが現れてもひょいひょい足の踏み場を考えてあげられます。時速四キロくらいだから難しくありません。でも、車のスピードじゃ、「あ、カニ！」……グシヤ……、合掌……という結末をたどります。

看板によると、ここは「自然の恵みによつて成り立つ」町だそうです。カニを助けたら「覗かないでくださいね」とか言つて、自分の殻で何かを作つてくれるんでしょうか。ま、それはないでしよう。それでも、このカニがいることがこの町の誇りなんです。カニたちに敬意を表しているところがステキに思います。

僕は自分の生まれ育つた町が大好きです。だから、同じように、カニと共に自分の町を大切にしているこの町のことも大好きになりました。



いつたい彼らに何が起じたのか……、いや、たぶん何も起じつてはいなんですね。ここは無人島でもないし、漂流してしまったわけでもないと思います。それでも彼らは海岸に大きく自分たちをアピールしていました。

冒険物の物語を読んでいると、だいたい漂流先は無人島であり、そこに「S・O・S」なんて文字を地面上に記して助けを求める。それでも助けを見込むことはできず、自分の生活を作り出していくストーリー展開です。僕はワクワクしながらそんな物語を読んでいました。もしも自分自身にそんなアクシデントが降りかかってきたら、まあメガネを失うことで生き残りの可能性が下がりそうですねが……。

落書きのネタとしてメジャーなのは相合い傘だつたり、放送禁止用語だつたり、また、そのシンボルマークだつたり、だんだん下ネタ度が増していく傾向にあるようです。海岸に書かれた言葉、下ネタとしてはかわいい方です。でも、僕としては語尾が「わ」よりも「こ」の方がなじみがあります。

言葉はその地域の文化を象徴します。海水パンツをはいた一人の男の子らが砂浜に大きな文字を書いてても、地域性が出てくるんです。言葉は大切なものの……、丁寧に丁寧に書いてこわおしそうたとえ下ネタでも……。



山越え谷越え、やつとここまでたどり着いた……と、なんとか気持ちが一段落してしまいました。雨の山道のしんどかったこと……。体への負担がグワーンと倍増した感じです。特に、足への負担が大きかつたようです。結果として、初のマメができてしましました。かかとの部分にできたのは存在感のあるマメでした。

山道を抜け出して視界が開けた時、柵の向こう側に朱色の建造物が見えました。自信はなかつたけど歩いた時間を考えると、二十三番札所である可能性が限りなく高いはずです。お四国の札所となるお寺なんだから、立派なお寺がたくさんあります。そりや、全国から遍路道を訪ねてやつてくるし、失礼なもてなしはできません。

自分の部屋に誰かを招くことができるか考えます。いい/いいです。あらかじめ予定があつて、誰かが来るんだと分かっていたら、かなりのエネルギーを費やして掃除をすると思います。かなり大きなエネルギーが必要になります。もし、いきなり来られたら、かなり危険です。居場所がありません。

心はいつでもきれいなつもりです。でも、心の表れが環境に見えることも多いんですね。できれば、逆に、環境をきれいにすることから始めて、心もきれいにしていきたいと思っています。

毎度毎度のことです。別に遍路に限つたことではないんだけど、とにかくギリギリなんですね。高校の時は遅刻ギリギリ……反則ありでセーフだつたり、二十一番札所ではアウトになりかけのところを救つてもらつたり、進歩のない人間です。学校に入るタイミングとして考えるなら、チャイムがキーンコーンカーンコーンと鳴つている最後のコーンぐらいで正門をくぐるかどうかという瀬戸際です。基本的に今でも変わっていません。

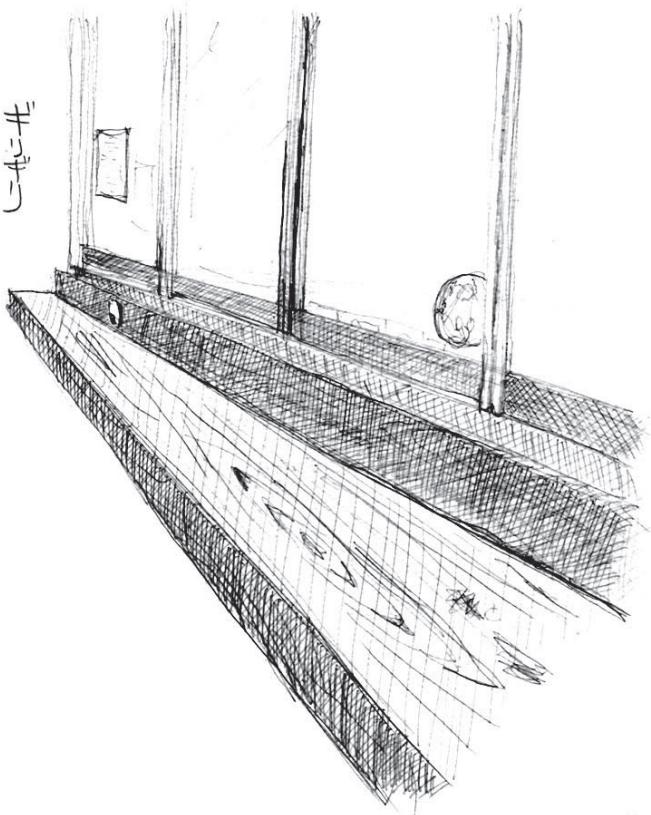
二十二番札所である薬王寺はギリギリセーフです。納経所は間違いなく開いていました。微妙な反則としては、本来、まず先に行うべきお参りを後回しにしたことです。線香をあげたり「般若心経」を唱えたり、また、それを本堂と大師堂と二回通りやつていふと、それなりに時間がかかるんですね。お経などといふものは普段あれ合つ機会もないでの、もたもたしてしまいます。……といふい訳をしながら、とにかく納経所が先です。御朱印をいただいてあれば、五時を過ぎても安心してお参つができます。

名を取るか実を取るか……、重要な選択です。どちらもといえばどちらもです。今回は、むしろ反則技を使つたけれども、御朱印はいただけだし、ゆつぐり丁寧にお参りもできだし、名も実も取れたと考えることにします。何を先に行うか、優先順位を間違えずにできた結果だと思つます。大切なことですね。

ギリギリセーフですか
せんせいにないセーフですか
でも

お参つせし後回しにしていなかつたら
アワトでした
まわがになつアワトでした

結果は……
ギリギリセーフですか



2005.8.21



ズボン乾燥機。

僕の歩き遍路史上初、有料宿泊施設利用です。雨にめげました。雨降りの中でテントを張るのにいい場所を探す努力もえしないで、もう、泊まりのつゝと思つました。口和佐のコースホステルです。何だかティープな雰囲気が漂う宿でした。洗濯機を使あうとするべ、手で押さないと一層式の脱水機の部分がポコーンと開いてしおります。風呂に入れば、やつれたシャワーがポトーンと水滴を落とします。部屋に入れば、「扇風機」という空調設備が一台ポツーンと置いてあります。もちろん、部屋のカギはあります。どんな状態であろうと、屋根の下で眠れるることは幸せなことです。洗濯ができる、風呂に入ることができる、風が吹く環境が待つています。風が吹く道具は乾燥機として利用できます。風呂では体を癒すことができまます。洗濯をしたズボンや服を気持ちよく着ることができます。幸せなことです。

明るい部屋の中で足のマメを取つねあ。直徑約三三三・五……、大きなものではあります。ものの大きさで大きな違和感があつたのに、そんな小さめでした。「山椒は小粒でもぱりと辛い」なんて言つたが。「マメは三三三つとも」つづり痛い」って感じです。電風で吹くとなれば、その小ささが分からなかつたかもしません。屋根の下、手紙も書き、だめな限りのことをして床につきました。朝に向かひ、ズボンも順調に乾いてしまった……。



人から「行動全部がギヤグになつてるねえ」と言われたことがあります。これはほめ言葉なんでしょうか。複雑な心境です。どうも、僕には僕にしか分からぬ世界が頭の中に渦巻いています。うな気がします。

そんな僕には「二輪にシートベルトを着けよう」という文字が目に飛び込んできました。普段はバイクを乗り回すライダーとして、「そんなアホな!」とツッコミを入れる必要があります。二輪にシートベルトがあったら、よけいに危険な乗り物になります。コケたら最後、一緒にずるずるドカンで痛い目に遭います。これは、運転が下手な僕としては実感です。僕には唯一の財産である貴重なバイクでも、コケた時にはあつといつ間に蹴飛ばされ、僕とは離ればなれになつてしまます。コケる確率が高いだけに、僕のバイクはボロボロです。ごめんよ……。

看板のパンダが本当に伝えたかったのは、「二輪にヘルメット」の文字だったんですね。色やレイアウトに関係なく、自動的に右から中央、左へと順番を追つて読んでしまった僕は、自動的にギヤグ的発想へと導かれてしまつたことになります。自分の意識とは関係なく自動的に何かができるというの、当たり前のようですが、実は貴重なことです。アホな勘違いをしたとしても、それはきっと貴重な能力……なんですね……たぶん……。



人の顔を描くのに「へのへのもへじ」なんて言いながら筆を走らせます。他にも「つるーハ〇〇ムシ」なんてモノもあります。定番です。

顔はその人の内面を表すことがよくあります。僕が中学生の頃、常に恐怖のオーラを発している先生がいて、その人の眉間には深いしわが刻まれていました。メチャクチヤ怖い先生でした。常に不機嫌な様子で、授業中も何やら不思議な時間が流れていったことを思い出します。先生なりにおもしろいことを言つた後、「笑え！……せくのっ！」と音頭をとるんです。僕は、そのこと 자체がおもしろくてクスクス笑っていました。笑うことが苦手な先生でした。

スズメが笑つても仕方がありません。恐怖を感じてくれたら任務完了です。むしろ、スズメよりも人間に對しての方が効果的かもしれないヤツが立つていました。そんな表情をしたヤツが僕の隣にいたら、僕はその場を立ち去ります。怖いですから……。

顔と共に名前も表立つてそのものを表すことがあります。でも、読みなかつたら意味がありません。「かかし」と読みなかつたら漢字で「案山子」と書いてもどうにもならなくなります。なんでそんな字を使うのか知らないけど、何かきっと由来があるんでしょう。マネキン的な固い表情をもつ案山子でした。



ただただ歩きます。なんとこゝで寝てお騒ぐまでは札所がなく、中間田標になるようなものもあつません。そして、ただただ歩いているヒメチャクチャクへたゞら着くまでは疲れもあるからだと思うけど、とにかく寝たくなつてしましました。睡眠時間はどうだか長くても寝足りないと感じてしまつた僕の、まあ、半分病気みたいな感じです。

で、海岸で寝ました。

で、その間に僕の財布がフナムシの御馳走になつていきました。僕はズボンの後ろポケットに財布を入れるといつていています。歩いていると汗をかき、ポケットに入れておいた財布はグチャグチヤに濡れてしまします。そこで、眠つている間に乾かそうと、そこら辺に干しておいたんです。パツと田が覚めて僕はびっくりしました。財布が埋もれていました。フナムシの大群でした。

小さい頃、海辺の堤防で変な虫たちを見ました。ダンゴムシを大きくしたようなコソコソと動く連中です。僕らはヤツらをフナムシと呼んでいました。本名は知りません。そんなヤツらが僕の財布を埋め戻していく……、ひえ、勘弁してください。ヤツらが去った財布には、食べられた跡が点々と残っています。そんなにうまいモンなのか……、わあがに試食はじめました。

長い道中の、ひとつひとつの物語。



ゆつぐりと……つて、そんなにゆつぐりしていられる身分じゃありません。次へ次へと歩を進めなければ僕の夏休みは終わってしまう。期限というものがあるんです。それなのに、ゆつぐりと時間を過ごしてしまつよつの場所でした。

外から見たお店の霧園氣が僕を呼んでいるよつの氣がしたんですね。おいしい水でおいしいコーヒーを淹れてくれるよつです。

中へ入ると、木の霧園氣で満たされていました。何氣なくそこには置いてあつた文芸作品集を手に取り文字を追います。ぐいぐいとその文章に引き込まれてしまつました。人の命を思い、遍路道を歩く文章が目に飛び込んできたからです。他人事とは思えませんでした。まぶたの奥の方が熱くなつてしまつました。

おばちゃんが淹れてくれたドリップコーヒーは、やわらかい味がしました。おいしいという一言でもますのがもつたいないような味わいです。こだわりなんですね。細かい所に気を配ろうという意識が自然に感じられました。おばちゃんの人柄が出ているんだと思います。空氣で味わえるよつなお店……もっとゆつぐり時間を使つこしたい場所でした。

お店をあとに、また歩き始めます。さわやかな心地でした。近所の川岸を散歩する氣分です。川岸を歩いているのは、僕と……ばーちゃんでした。同行三人、さわやかな午後でした。



下ネタはダメであります……、よく思ひます。でも、頭の中がきつと、そんな風に作られてるんですよ。おめりめしそう。

だいたい、小さい子供でも笑つてしまつて、大人気のネタは決まってます。「〇んち」ネタです。笑わせようとして困つた時には、間違いありません。うん、このネタで攻めるべきです。

それにしても、なんでおもしきこんでしよう。不思議です。毎日、誰もが同じようにつき合つてゐるはずの存在なんです。僕もそうだけじ、どれだけきれいな女人だつて、密室での孤独を充実させる時間があるんですね。人間だけじゃなくて、いろんな生き物も同じようにつき合つてゐる存在。

ちょっと前までは体内にいた「排泄物」も、この世に出た瞬間に「汚い物」に認定されてしまいます。生まれてすぐマイナスのレッテルをはられてしまう悲しい存在です。人間は、それを外出する前は、おなかの中にたっぷりため込んでいるのに、なんか理不尽な扱いを受けてるよのにも思ひます。

だからいふ、ケラケラと笑い飛ばしてしまつのが一番すつきります。いつだって笑いがあつたら、たぶん、それだけで幸せになれます。ま、常に下ネタが渦巻いている頭じゃ、どうにもならないかも知れないけど、いいんです。「〇んち」が「うんち」に見えたとしても……。



お四国は曼陀羅だといいます。八十八の札所を一周ぐるっと回ることで曼陀羅が完成するシステムになつてゐるようです。一番札所のある徳島は発心の道場として始まり、次の修行の道場たる高知へと続きます。

僕は、夜中に修行の道場へと入門しました。まさに修行中といった感じです。この辺りは一日中歩いていても次の札所が出てこない道だし、もつ、ひたすら歩くんです。オーバーナイトウォークっていうヤツです。フナムシに財布をかじられながら寝ましたし、そんなに眠くなることはありません。何よりも、昼間の直射日光ビシバシの中を歩くよりはマシ、多少は涼しく歩くことができす。

暗い道、車もほとんど通らないような道を歩いていると、自分がバカなんじゃないかと思えてきます。物事を深く考えるだけの回転が脳みそから奪われてしまふ気配を感じるんです。留つり慣れろ……いやいや、考えるより感じる、という世界かもしません。周囲は真っ暗、視覚さえも奪われていく夜道だから、何から感じ取るセンサーは鋭くなつていて違ひないです。さすがは価値ある修行の道場です。ばーちゃんが一緒についてくる感覚もあります。

でも所詮、僕は僕……、どんどん眠くなつてしましました。



だいぶ、コレコレの足取りになつていました。夜通し歩くことのしんどさです。僕の場合は、とにかく眠くなることに恐怖を感じました。いつの間にやら道の真ん中をフラフラ歩いていることの恐ろしさです。どうにもならずに、明け方、橋の下で少しだけ仮眠を取りました。熟睡してしまつとその後の札所に間に合わなくなりそうで、それはそれで恐ろしかつたのですが……。

そして、室戸岬。空海が悟りを開いたという岩の割れ目に入り込みました。修行中、明けの明星が口から入つて体を貫いていつたんだそうです。何のことやら凡人の僕にはよく分かりません。

大切な場所はたくさんの人たちが拝みます。ここに限らず、世界中あちこちに大切な場所があります。象徴的なのはメッカです。イスラム教を信じる人々にとって、メッカがどの方角なのか知ることはとても重要なことになります。一日に五回、メッカの方角に向かって礼拝をする必要があるからです。道に迷つている時に礼拝の時間になり、アザーンが鳴り響いてしまつたらどうするんでしよう。これも凡人の僕には分かりません。でも、場所を大切にしようとする気持ちは分かります。場所というものがもつ、独特の雰囲気に圧倒されそうです。

少しでも空海に近づくべく、岩の割れ目を振り返りました。そこにはバスがあり、口の中へは排気ガスがたっぷり注がれました。



データによると、二十三番札所から二十四番札所までの距離は約八十三キロということになります。単純に、時速八十三キロで走り続けたら一時間で着くことになります。バイクだったら、時速八十三キロも何とかなりそうです。チャリンコだったら、僕の平均時速は約二十キロだから、単純計算で四時間くらいでしょうか。トホダーとしての僕の足は平均時速にしたら四キロほどのスピードしか出せません。つまり、休憩なしで歩き続けたら約二十時間で着ける距離だということになります。

目的地、最御崎寺まであと百五十メートルくらいまで迫った頃でしようか。行き先を示す矢印が登場しました。完全なる山道でした。標識には「登山道」とはつきり書かれており、「自転車通行不可」と謳われています。自転車も通れないよな山道がラストスパートとして残されていましたなんて、もう感謝感激ブチ切れ状態です。勘弁してください……。

苦労してたどり着くと、ありがたさが数百万倍くらいあるような気がします。山門の前にたたずむ弘法さんごとてもやさしく見えました。歩き遍路ならではの喜びです。時速八十三キロで走つていたら分からぬるう喜びです。買ってでも苦労はするべきなんて言つことがあるけど、少しだけ、……そつ、少しだけ……、苦労することの喜びを得たことができました。

信じること。



読経

心にお経を読む
何度も何度もくり返す。
蚊の攻撃をしのぐ
心にお経を読む。

2005.8.23

修行の道は厳しい……言葉では分かります。自分の中の弱い心と戦いながら、自分自身を追いつめる上で本質をつかもうとしているんじゃないかと思います。そして、お経を読むことで理論的にも正しさを得て、生き方を正しいとひつなげていく修行です。僕は目に見えるものを信じようと考へています。だから、逆にいうと、「見えない物は、無きものと心得よ」というような感覚です。そりや、見えない物は見えないんです。周りには普通見えないだろうモノが見えてしまった人もいます。僕には全く見えません。見えないから、僕はその存在を感じるのですができません。そんなモノたちが存在してもおかしくないと想ひたび、僕には見えないからおもしろくも何ともないんですね。

そこで、ひたすらお経を讀んでいた人がいました。本当に、他のことには目もくれず、何度も何度もくり返してしまった。僕も、隣にお邪魔してお参りです。ん? 何かが僕の周りに寄つてしまおう。大キライな蚊です。どうからともなくやつて来て、周囲を囲んでいました。耐えられません。バタバタワタワタしながら逃げまわると退散です。讀経の声はひたすら続いたしました。

僕はワタワタしながら、その人の姿を写し取りました。その集中力と信仰心、そして、蚊の攻撃に耐える力の忍耐力に感心しつつ、やつぱり自分に厳しい修行は無理だと感じました。



お四国へ発つ前から僕にはいくつかの指令が下されていました。その一つに「津照寺では住職さんと出会い、車についての話をすること」というものがありました。これは僕の知り合いであるフジケンという人からの指令です。

例によって時間ギリギリ何とか納経を済ませ、まずは納経書きのあっちゃんと話をします。どっちかといえば一方的に話されただけかもしれないけど……。そして、住職さんと話すべく奥の方に声をかけます。

住職さんは氣さくに対応してくれました。フジケンからの指令で車について話すと、とてもうれしそうです。車が大好きなんですね。話を聞いていると、機械の類が好きみたいですね。そういえば本堂へ向かう階段を歩いていたら突然電灯がついたり、清めの水がいきなり流れ出したりしてびっくりのお寺でした。気づかれにくい位置に防犯カメラもたくさん仕掛けられているのです。それじゃ、僕が光や水にびっくりしている姿も見られていたってことでしょうか……。それもびっくりです。

その後、フジケンの知り合いなら……と、「いらっしゃりに泊まつていらっしゃいますよ」と旅館に案内されました。人の縁とはありがたいモノです。人の心を温かくする空気があふれる場所、お四国がより多くの縁を感じさせてくれるのかとしみじみしました。



歩いてすぐ、山門から何メートルというくらいの場所に案内されました。そこは人の縁が作り出した僕の居場所です。ありがとうございます。ことに、屋根の下で眠る夜を迎えられます。

旅館という場所に泊まつたことが何回あるか、自分で考えてみます。小さい頃、家族で旅行に行って泊まっていたのは旅館と呼ばれる種類のものだつたんでしょうか。あほろげながらに思い出すのは、宿泊部屋のすぐ横に小さなテーブルといすが置いてあって、そのまた上にはお茶とお茶菓子があいてあって、障子でそこが仕切られるようになつて……、んで、そこには一ちゃんがすわってたような映像です。たぶん、旅館というものの光景だと思います。旅先なのに落ち着いた雰囲気があって家族と一緒に過ごす場所、というのが僕にとっての旅館の定義なかもしれません。

遍路の途中、僕が泊まつた部屋には一人しかいません。みすぼらしい姿の僕がいるだけです。でも、存在感としてのばーちゃんが一緒に泊まつていた、ともいえます。山道を歩いていたら、海辺の道を歩いていたりする時、なぜか存在感が出てきていきました。ばーちゃんは僕を旅館に泊まらせたかったのかもしれません。生前、僕が旅に出ようとすると必ず反対した人です。僕がろくでもない貧乏旅をすると知つていたからです。

ばーちゃんに隠し事、できなくなつてしまつたようのです。



夏の暑いとき、フハア～なんて言いながらビールを飲んでいる人がいます。それを見て僕は、何で幸せそうなんだろう、とうらやましく思います。僕は、お酒が飲めません。飲んでも頭が痛くなるし気持ち悪くなるし、うれしいことひとつもありません。じゃ、夏の暑いとき、僕がフハア～なんて言えるのは……、たとえば麦茶ってのがあります。「ククク何杯でも飲めてしまおむ。あばちゃんが麦茶を持ってきてくれました。冷たい麦茶です。怒濤のように飲み干してしまおむした。飲み干した後、ふと、このじぬられた心を絵にできなかとかと想えるわけです。

食事をしながらも、あばちゃんと話をしました。室戸の港、造船所、そこに集う人の話……、なぜか懐かしい感じがしました。焼津の海を語る、僕のばーちゃんの姿と重なってしまいました。家族と話す温かさを想つてしました。すげえすげえ幸せな、ほつとすの時間だったよつて思いました。

僕はばーちゃんとそんなにたくわん話をしたのかな、と想えます。口うるさい人だったから、ずっと一緒に住んでいたときは自分の場所へさつさと逃げていたような気もします。耳も遠くなつてたし、めんどくわこという思いもありました。仕方ないとは思います。でもむづ、それさえもできない人になつてしましました。しみじみと、できるだけの想いを紙の上に残しました。

お接待
お寺に行こうと決心したら
お接待させてくれました
宿をあせぎになる
マード冷たい麦茶



厄年つて何歳のいじをこづんでしょう。男と女で違うらしきから、僕の場合はいつもいろんな厄介ごとが降りかかっているから、いつだつて同じです。

じゃ、厄払いをしなかりやいかないか、と考へねじになつます。目の前に現れたのが「厄坂」。これは都合がいい感じです。上つていぐ時、一段ずつ注意して足元を見ます。一段ずつ、お金が置かれています。この階段、全部でいくつあるんでしょう。結構たくさんあるように見えます。それぞれの段にお金を置いていったら、その金額も結構なものになりそうです。やめます。僕に降りかかる厄介ごとなんて大したモノじゃありません。しばらくは厄介ごとと共存共榮を図つま。

氣楽に考えたら、苦楽はそんなに大きな違いがありません。どれだけつらっこしがあっても、「その程度で済んだか」と考え直せばラッキーなことに変身してしまいます。なんて単純な頭なんだろうと自分の頭を疑うけど、それで日々平穀に過ぎることができるんだつたら非常にありがたいことです。てくてく遍路道を歩いていると、細かなことが気にならなくなつてしましました。ついでに仕方がなかつた出来事も、少しあつやわらかなものになつてきました。

遍路道のものが厄坂と同じだったのかもしかません。

パツと見ただけで「そりゃ、マズイでしょ」と思うことがあります。だいたい、骨折などをした時なんかが、そう思う瞬間です。僕が覚えているのは剥離骨折をしてしまった時、やたら、足がふくれあがつてきました。もちろん痛いから大変なんだけれど、それが視覚効果と共に押し寄せてくるんだからマズイ感も倍増です。

パツと見て、「何じゃ、何じゃ」というのが素直な感想でした。木の肌がテロントロンのポコンポコンだつたんです。人間の肌だとしたら、絶対お医者さんみてもうることをお勧めするくらいの状態でした。樹皮に傷がつき、そこから樹液が出てきて修復しようとしていたものだとは思います。それにしても溶けだして途中で固まってしまった溶岩のような姿は印象的でした。

その名前に「がん封じ」という言葉が冠せられていきました。人間にとつてのがんを自分の体の中に取り込んで、身代わりになつてくれているような木でした。とても日本人的な発想かもしけないけど、自分の身を挺して他者を生かすことを僕は美しいと感じます。その木はその通りのことを実践していると評されていました。人々の尊敬を集め人々に大切にされてきたんだと思います。

世間の大勢から敬われたいとまでは思いません。でも、身近な人からは本当に大切な存在だと思われる人間になりたいです。

2005.8.24





学生時代、蔵に住んでいたことがあります。もちろん、人間が住めるような環境にはなつていませんでしたが、夏は暑く冬は寒いという過酷な空間でもありました。でも、そこは大家さんがとてもステキな人で、とにかくいろいろお世話をなつていました。僕の部屋になつていたのは、蔵の一階部分で、そのまた半分の六畳のスペースでした。以前は二畳間だった所を一つにくつつけて六畳間にしたみたいです。

蔵には関心があるんです。……で、この蔵はいつたい何なんですか。屋根が四層にもなつています。豪華な感じがします。僕が住んでいた所とは少し印象が違うものです。まあ、きっと中身は同じようなモンだと思います。外側だけ、かつこいつかれてるだけですよ……きっと。

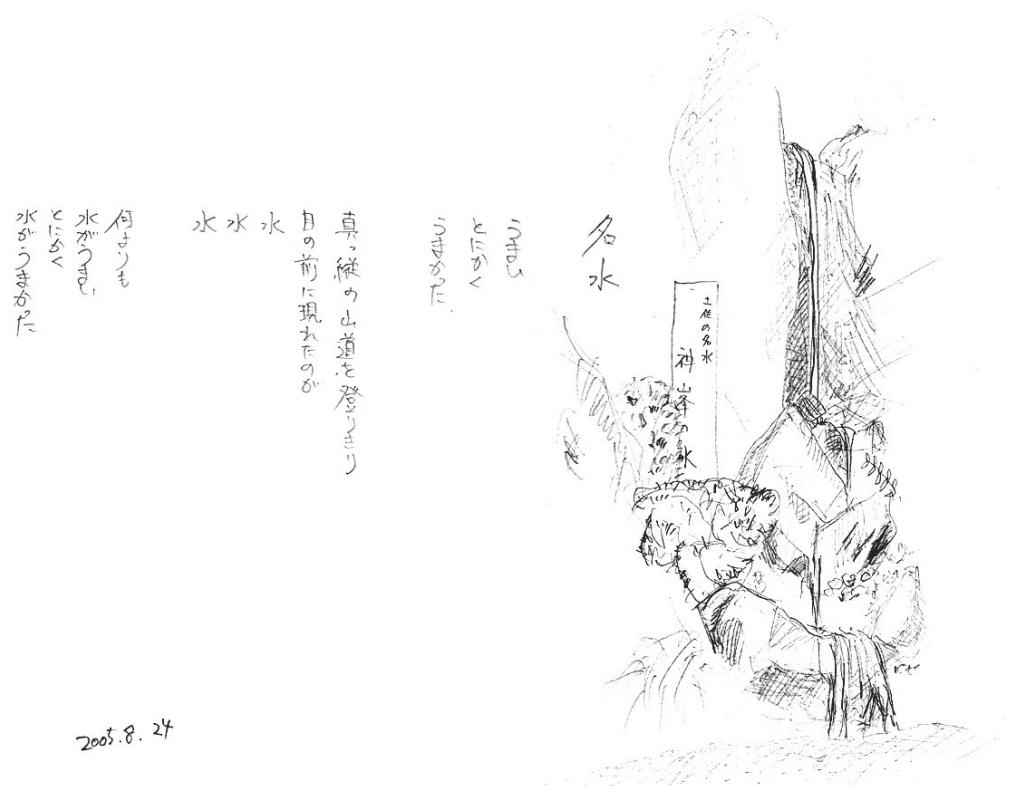
外側の飾りだけ……と思いつつ、それでも意味を詮索してみます。壁の強化につながるか、それとも、雨よけとして大きな役割を果たすか……眞実はわかりません。でも、何かの役割があるとして、それが姿としても美しい物だつたら嫉妬してしまいます。僕自身の外側は明らかにきれいじゃありません。だから、昔から中身で勝負しようとしてきました。中身もダメだからボロボロだけど……。中も外もステキな物だつたら、うらやましい限りです。天は二物を与えるんでしょう。不公平です……。



道を歩きながら「○▲×☆□！」と叫び、メエメエ泣いた夜がありました。サイレンを鳴らす救急車の前を、普通の車が平然と走り続いているのを見た時です。僕の頭には、ばーちゃんが浮かびます。そして、涙があふれ出しきります……。

第八番札所でケータイ電話が鳴る前の日、僕のばーちゃんは救急車に乗せられていました。自宅で急変し、病院へ搬送されたんです。一刻も早く病院へ、と考えます。そんな、一分一秒を争うような救急車が、アホな車一台のために前へ進めないなんてふざけています。救急車への思いが僕の中をいっぱいにしてしまった。いっぱいになつて、こりこりえきれなくなつて、涙があふれてしまいました。救急車が通り過ぎた後も、僕の涙は止まらなかつたし、僕の思いはまだまだあふれ続けていました。

しばらく経ったこの日、また、救急車を見ました。心臓がドキドキしてしまいます。心は癒えていません。でも、隣に隊員さんが控えていました。いつでも出動できます。他の誰かが身代わりになることもあります。少しだけ心の奥の方が温かくなりました。いつも緊張感でピリピリしている場所のはずです。人の命が直に関わっていく最前線です。そこに、心を和ませる平面の隊員さんがいました。張っているだけじゃダメなんですね。僕に心のゆとりを少し分けてくれてありますとうございました。



僕は怯えていました。「真ツ縦」という言葉が紹介されていました。第一二十七番札所への参道のことです。海拔〇メートルから四百メートルを一気に登り切る道を進むなんて信じられません。「真ツ縦」ということは、ストレートの道が延びてゐるということ……、ストレートと云ふことは階段と云ふこと……、と頭の中のイメージが最悪な状況を連想させます。自分の歩幅で好き勝手に上るにいのできない階段なんて、大嫌いです。

札所にたどり着いた時、僕はかなり疲れていました。でも、思つたほどのやめられません。「ラッキーなことに、「真ツ縦」とはいながら、「ヨロコブ」の意味合いでのネーリングだつたりして、ワネクネと曲がる登山道みたいな所だつたからです。しかも、階段ではありますませんでした。助かりました。疲れたといつても、まあ、許してあげられるくらいの疲れ方です。ただ、時間はギリギリで、ようやく納経所へ間に合つたくらいのタイリングでした。そして、焦つて到着したから、のびもカラカラでした。

水の「うまいこと」……、どんな飲み物もかないません。誰が何と言おうと、世の中で一番うまい飲み物は水だと思ってます。あらゆる生物が何億年も飲み続けて、飽きない飲み物です。「ぬ水」と呼ばれるものであつたら、そりや、なあやうで。シンプル・イズ・ベスト……、「真ツ縦」を登り切った最高の「う飛び」でした。

一日じゃ着けません……。



原動機付きのモノたちであつたら一時間ほどで買い物ができるんでしょうか。四十五キロ先のお店です。

大きな看板が立っていました。きっと大きなお店なんでしょう。専門店がたくさん集まっているようです。きっと魅力的な場所なんでしょう。もしかしたら夜も遅くまで営業しているかもしねません。とても便利な所なんでしょう。……たゞら書きもえすれば。

一晩歩いたって、足の遅い僕だつたら田を見張るほどの前進はありません。そもそも、眠気と疲労に襲われていねだらうから、一晩中休まず歩くことなんてできません。そんな僕だつて、車やバイクに乗れば格段に違うスピードを手に入れることができます。二酸化炭素をはき出して、騒音をまき散らし、地球の環境破壊に協力しながら進めば、その分のスピードが自分のものになるんです。

人間が元来自分がもつている力以上のものを手に入れた時、何か勘違いをしてしまうことがあります。僕はライダーに変身してしばらくすると、そのスピードが自分自身のものであるかのように思ってしまう傾向があります。頭では違うと分かっていながらいつの間にか力を過信してしまいます。そうなりたいという希望もあるのかもしれません。自分の力は自分の力……、それを見失うことがないようにしていきたいと思います。



ものを食べている時ほど幸せなことはありません。めういな食べ物もないし、どんな物を食べてもおしゃべを感じられる人間です。別におなかが空いていたわけじゃないんだけど、僕の頭の中には天ぷらや茶碗蒸しなどのメニューイメージされます。

和食です。特に朝ごはんは和食です。外国の映画でコーンフレークなどというモノで食事を済ましている場面があります。信じられない。何よりもごはんです。米です。米こそが食事です。日本の食事がすごいと思うのは、主食としての白ごはんがあるとあらゆるおかずを仲間にしてしまいます。どんな物だって、だいたいごはんと食べたらあじしそが倍増します。そんな風に思うのは僕だけでしょうか。

そんなすてきな食事が集まつてしまふのでしょうか。駅といえど、いろんなものを呼ぶ場所のような気がします。しかも、あちこちの方角から駅を訪れるモノたちがいます。その駅の名前に「和食」とあつたら、魅力的すぎます。日本人サイコー、アイラブ日本人です。日本人だけど、ローマ字でだつて読んでみます。「Wajiki」です……。「わしづく」じゃなかつたんですね……。

日本人は漢字を使います。見た目だけでモノのイメージまでできてしまうすごい文字です。一文字合わせるだけで天ぷらや茶碗蒸しだって想像できる、ものすごい力をもつた文字です。



お杖立てに
立派な
力サ
それもあり?

おじいなあ、と思つたことの一つは札所それぞれに石でできた
お杖立てがあつたことです。それなりに立派な雰囲気を醸し出さ
れているお杖立てが、そのお寺の名前入りで標準装備されていました。んで、僕らはお参りをする時には線香をあげたり「般若心経」を唱えたりするから、お杖立てに自分のお杖を立てさせていただ
きいてお参りをするんです。ありがたや、ありがたや……。

傘……、お杖立てに一本だけ立てられていました。傘立てじゃ
ないで。お杖立てです。ああ、悲しいかなお役違い……。

遍路を歩く者にとって、お杖は弘法さんの中身だし自分と共に
お四国を歩く大切な存在です。宿に泊まるときすれば最初にお杖を
清めてから上がり込むくらいの大切さです。お杖は自分の身を削
りつつ僕らの歩きを助けてくれます。そんざいに扱ってはバチが
当たります。お杖立ても分相応に立派な物になつてゐるわけです。
そんなお杖立てに傘……、傘が立てられていました。決して傘
の役割を軽んずるつもりはありません。雨の中ずぶぬれで歩かず
に済むんだから、そりや、傘は大切です。でも、お杖立てに傘が
入り込むのは領域侵犯じゃないでしょうか。そりや、ちよつどい
い具合に立てられます。でも、でも……。

傘も一緒に受け入れているお杖立て、そんな寛大な心を見習いたいと思います。



滝のような汗という表現があります。剣道をやつていたりすると、そりやもつ、次から次へと汗が出てきて怒濤のように流れていきます。臭いわけです。ハードな動きがあつたら、汗は滝のように噴出します。

じわ～じわ～っと出でてくる汗もあります。じんわりと体が動いているような時には、一気に流れるような感じじゃありません。いつの間にか皮膚の表面が湿ってきて、いつの間にか服が水浸しになってしまいます。質の悪い汗のかき方だと思います。

どっちかといえば、歩くという動きは後者に近いようです。気がついたらダラ～ンと汗が滴つてこます。気がついたら服はびしょぬれだし、気がついたらパンツまで……もうしてしまったかのような状態です。そして、気がつかないうちにザックにまで侵出していました。そして、ふと気がいたら、そこには塩ができるあがつていたんですね。なめたらしそっぽう正真正銘の塩でした。

気がつかないうちに何かをしていろって、実はちょっとカッコいいようにも感じます。他の人が見ていない所でひたむきな努力を続けて、何かの機会にその成果が現れてみんなが感動するんです。カッコイイです。誰かが見ているから努力するんじゃなくて、自分の信念に基づいて行動している感じがカッコイイです。地味だけど、じわじわ染み渡る人生……カッコイイです。

もう、闘いでした。その相手の一つは足のマメでした。一歩進むとズキン、二歩進めばズキンズキンとする痛みです。そして、もう一つの相手とは、見えない闘いを繰り広げます。例によつて時間との闘いです。納経所が閉まる時刻が午後五時、何としてでもお参りをしたいポイントでした。

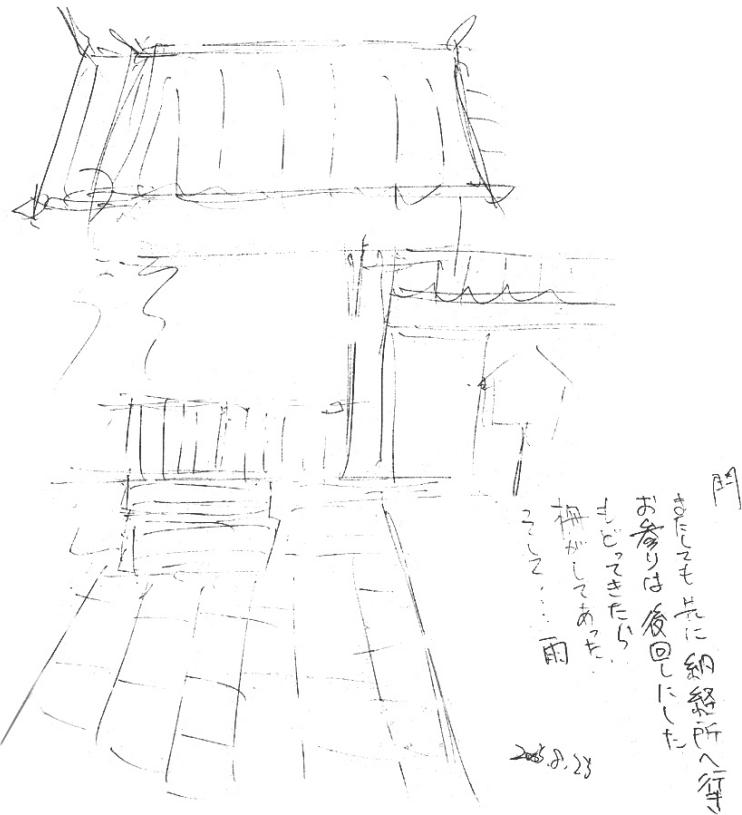
ラストスパートは第二十八番札所を出た時から始まつていました。そこから第二十九番札所までは約九キロ、歩いて二時間ほどの距離です。寺を出たのは午後三時過ぎ、普通に歩いたら間に合わない時間でした。しかも、足の痛みが襲います。難しい判断です。でも、往生際の悪い僕だから、行ける所までがんばらないと納得できません。ギシギシと歯を食いしばりながら前へ進みました。

ガイドブックの地図を見ると、どうやら残りが一キロくらいの場所まで来ていました。通りかかった人に道を尋ねます。そこから迷つたら致命的、絶対に間に合いません。正確に情報ゲットです。そして、走り始めました。自分が信じられませんでした。足は痛がつたはずです。でも、痛みは麻痺していました。体全体も疲れ切つていたはずです。でも、走り続けました。

川の土手を走りながら顔を上げると、どうやら第二十九番札所らしい所が見えてきました。あきらめちゃいけないんです。ギリギリセーフ、自分で自分をほめてあげたくなの瞬間でした。



幻のようだ……。



踏んだり蹴つたりとやり回つんでしょうか、僕のスケッチブックは情けないページを残しています。このページに限つたことはないんだけど、最高級の部類に入る情けなさです。ほんと線さえ見えないほどの悲しいです。

かろうじて午後五時、納経所営業中に間に合つた第二十九番札所でした。ひとまず御朱印を頂くことを優先させます。そして、その後にお参り……、仏様ゴメンナサイ。おかげさまで、ゆっくりスケッチブックを開ける状況が生まれました。ふと見ると、門には柵がされており、以後は入れないようになつています。何度経験することか……、ギリギリセーフなのかギリギリアウトなんか、とにかく瀬戸際の絵を残そうと思いました。

ポタポタッという音が響きました。水滴がスケッチブックを叩きます。僕の手がいぐら動こうとしても線が伸びません。こちらはギリギリアウトだつたようです。幽様様です。仕方ありません。構いません。僕はお参りを後にしたいことで、大切な時間を充実させたいとがでました。そのお寺で、ばーちゃんの小銭が全部、お四国へと納められたんです。たこした金額じゃないはずですが。幸か不幸か時間ギリギリだつたからお参りは後回し、時間を気にするいとなくお参りがでました。だんだんに、ばーちゃんの面影も薄くなつてこよみつな気がしました。

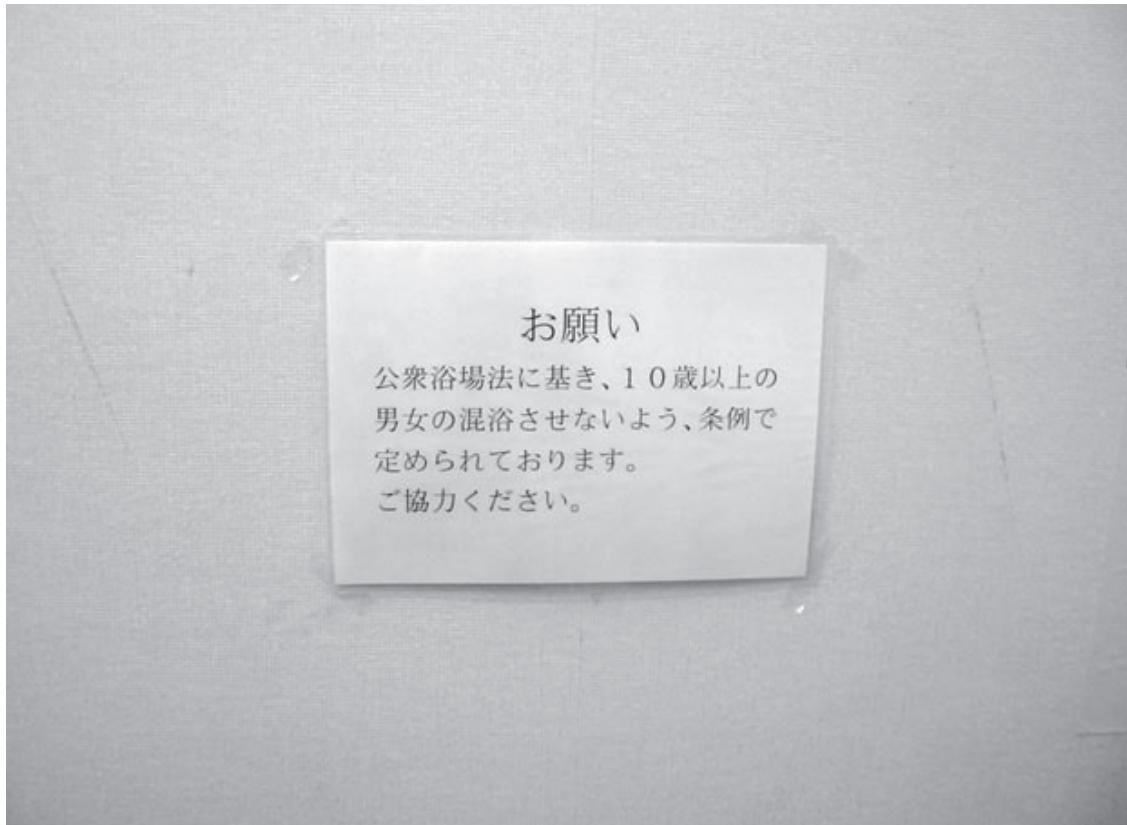


遊園地といえば観覧車、動物園といえばサル山、ぶどう園といえばウォータースライダーです。いえ、僕の頭の中では違うイメージの物がいます。ぶどう園にウォータースライダーって、あんまりないパターンじゃないでしょうか。うちの近くのぶどう園にはないような気がします。

ぶどう狩りを企画しているような農園はどこか近所でも見たことがあります。ぶどうの中でも巨峰など、粒のでかいヤツは食べていて幸せです。中に種がなかつたら最高においしく感じられます。そして、同じような気候なわけだから、だいたい半径一キロの範囲に回じようにおいしいぶどうを作っている農家があるんですね。それは全国共通、お四国でも同じでした。

わざと近くの場所にぶどう園を発見です。んで、僕のイメージが変えられていくことになります。もつ、ぶどう園といえばウォータースライダーなんですね。ぶどう園には必要な物のようですね。

ぶどう園が先か、ウォータースライダーが先か分かりません。でも、どっちかが先にあって、そこにもう一つの要素を組み合わせたんだと推測します。そこを訪れた多くの人が「うりやイイね」と思つたんでしょう。それで、そちら辺の人々には「ぶどう園といえばウォータースライダー」という定義が成立するわけですね、きっと……。



時間がもつとたっぷりあつたらなあ、と旅に出て思います。

旅人の種類として何パターンかあります。わりと人口が多いのが、学生旅人です。夏休みなどの長期休業を利用して旅をしまくる人たちです。この人たちには、ある程度の時間は保障されているけどお金がないという弱点もあります。僕の場合は逆パターンです。いわゆる「リーマンパッカー」と呼ばれるものに近い形、お盆休みや正月休みなどをギリギリいっぱいまで使い切つて集中的に旅をこなすような感じになります。学生旅人にはない金銭的な力を武器に強引なスケジュールを組んだりします。他には、仕事を辞めて、貯金してきた資金を少しづつ放出していく人たちや、お金がなくなったら日本で稼いだ後に物価の安い国でだらだら過ごす「外（）も」り」と呼ばれるタイプなどなど……。

時間はお金で買うことができません。いつの間にか過ぎ去ってしまうのです。大切にしなきや、と思つても気がついたら時は経ち、歳をとつていきます。僕が十歳だった頃、小学校高学年だった僕は何をしていたのか……、ひたすら外で遊びつつ、それでも自分の嫌な所をウジウジ考へていたような気がします。……今思えば、もっともっといろいろなことをしておけばよかつたんですね。銭湯にも行っておけばよかつた……。十歳までが勝負、「公衆浴場法」などといつものがあるんですね……。



うちのばーちゃんはよく焼津の川沿いを散歩していました。小石川という、まあ何とも汚い川です。それでも、桜の季節には花びらが舞い、歩いていても気持ちがいいようでした。僕は、歩くなんて小さい頃は全然おもしろく感じたことがありません。ばーちゃんが散歩から帰ってきて幸せそうな顔をしていろいとが理解できませんでした。

日常生活の一部としての散歩、どんな場所でもある風景みたいです。健康増進ということで義務を課してやつている人もいるかもしれませんけど、かなりの散歩人口が認められるんじゃないかと思います。もちろん、お四国にも一般散歩人がいました。足のマメが痛くて、疲れ切った足を引きずつて、コタコタ歩いている僕を、何食わぬ顔でスイスイと追い抜いていく人がいます。……いぐら超長距離を歩いているとほいえ、散歩中の「おばちゃん」に追い抜かれること、悲しい現実でした。

普段、僕らは何気なくそこら辺を歩いています。でも、何気なく歩くのが大変だと感じる経験も必要です。ものすごい重労働に感じられるんです。晩年、うちのばーちゃんはどんどん老人化していました。いや、それは当たり前なんだけど、あれだけ歩き回っていた人が、歩かなくなつていったんですね。足のマメの痛みと疲れて重たい足が、ばーちゃんの動かない体を想像させました。



何か、とつてても困った時に「神さま仏さま」と手を合わせたことがあります。溺れる者は藁をもつかむ……、まさに困った時の神だのみ、って感じです。普段は全く信心なんてない人間なんだから助けてくれる雰囲気はありませんでした。それでも小さい頃の僕は、思わずそんな風に唱えてしまつたんです。ポイントは「神さま」と「仏さま」にすがっている所です。もちろん、それぞれの違いなんて知りません。今でも深く理解しているわけじゃありません。でも、神社に祀られているのと、お寺に祀られているとの違いくらいは分かっています。

神社では鳥居、お寺では山門が堂々と僕らを迎えてくれます。第三十一番札所の山門があります。でも、その内側に神社がありました。さて、確かに僕は山門を見ているはずです。神社、お寺……どっちでもいいです。とにかく僕よりも遙かに偉大な存在にお参りをすることに間違いはありません。門をくぐって建物に向かって歩きさえすれば、それだけでありがたい存在に近づくことができます。山門から境内まで百メートルくらいはあつたかもしれません。遠いかな、とも感じました。だけど、その距離さえ歩けば偉大なものに近づかるんだから、贅沢言つちやイカンのです。神仏混淆、「神さま」と「仏さま」が仲良ぐぐじ近所づき合ひをしているんだから、平和の象徴なんだと思えます。



古代インカからの伝承技術か、そこには壁から突き出した階段がありました。マチュピチュで見た物と同じタイプです。マチュピチュで見た時、そのデザイン性の高さに僕は目を見張りました。石垣の石組みから「ヨキーヨキ」と出っ張った部分が飛び出していて、それを人間が歩いて上れるようになっていたんですね。

現代日本にも通じる美しさがあるのかと、少し感動してしまいました。コンクリートで塗り固められて植木も設えてあるような壁だけど、基本原理は古代インカの物と同じです。美しい物は美しいんですね。

美しい物を追い求める心って大切だと思います。人間だって醜いよりは美しい方がいいような気がします。いやらしい話かもしれないけど、女の人を見て「きれい」と思つことかよくあります。そんな人と一緒にいられたら幸せなんだろうと想像して「ヤニヤ」することもあります。んで、自分の姿を振り返るんです。悲しくなります。今までに人からの評価で外見をほめられた記憶はありません。小さい頃から鏡で自分の顔を見るのが大キライでした。そこには変なヤツが変な顔をしてこっちを見ているんです。イヤでした。

無い物ねだりといふんでしょうが。自分にないモノ……美しさに強く憧れてしまひます……。

樂あれば苦あら、苦あれば樂あり……、どうがになるのか、人の生きる道です。



2005.8.26

歩いていたらしんどいわけです。んで、とどめに上り坂があつたりするわけです。びっくりしました。地図を眺めて、第三十一番札所が山の上有るだらうことは予測可能でした。だから、しんどいしんどいと苦しみながらも覚悟の上で山道をクネクネ登っていました。アスファルト舗装された山道だから歩きにくいくことはありません。ダラダラ歩いていつたら上にたどり着きました。ああ、山道終了、と思ったら、山のてっぺんから上に石段が伸びていました。……とじめでした。一度、氣を抜いてしまうと、その後が大変なんですね。じゃ、いつそのひと一気に登り切ってしまおう、となります。「(い)の恨み、忘れるな!」などと思いつつ、石段を登つてお参りを済ませました。

苦あれば樂あり……この時の僕は弱い自分に勝つことができました。いわゆる克己というヤツです。実はこれ、僕にとっては珍しい現象なんですね。H工加減人間として生き続けているから、苦しいことがいつの間にか後回しになつてこることがほとんどなんですね。ほんのちよつとがんばれば僕にもできるんですね……。

心もさわやかに冷たいお茶など飲みながら、門前の売店から、自分自身が恨みを忘れないつむじ、石段を描きました。

店の中
僕も苦一歩だ
階段が見える
なつか
やま
涼しげだ……



……だけ……。

確かにそうである。一般的に人間は一足歩行をすることができます。特筆すべきことではないかもしません。それだけなんです。「その『歩くだけ』つてのが大変なんですね！」と何回ツッコミを入れたことか……。そのポスターを目にし、目にするとたびに僕は一人で激しくつぶやいていました。

そういうえば日常生活では意識して「歩く」なんて作業をしません。どちらかといえばダラダラした雰囲気の中で「歩く」という行動が出てくることの方が多いくらいです。まだまだ自分の行動を表面しか見られない眼だなあ、と感じます。

僕らは一歳から já ジャラで歩くことを始め、不自由なく暮らしing ます。でも、よく考えると生まれてから一度も歩くことができない人たちもいるんですね。手を動かすことを知らない人たちもいるんですね。最近ではノーマライゼーションなどといった言葉が駆け巡り、近所でそういう人たちとふれ合う機会だつて増えています。見てているはずなのに見えていない僕の眼、情けない話です。

じつくり考えなきゃいけない言葉なんだと学びました。「だけ」という言葉。どうえ方によつて、その「だけ」に含まれる内容が大きく変わってしまうところ……。何か、「だけ」でも「できる」のが大切なんですね。僕の中にある、ほんの少し「だけ」の能力も尊重される日がくるのことを待つていました。

眺め
ども思えます
ども行きまます



2005.8.26

夕暮れ時、小高い場所から眺める景色は疲れた僕を癒してくれたようです。海岸線の遙か向こうから歩いてきた遍路道、風に揺れる草の影から行き交う自動車の姿も見えてきます。今日はどこで眠るか……、確約された寝場所はありません。しみじみと日が傾いてくる時間を味わいました。

その日、こゝより先へ進むのに急ぐ必要はありませんでした。次の第三十三番札所へ着いたとしても夜になつてゐるはずで、当然のことながら納経所が開いている時間には間に合わないからです。自分をしばつていた時間というモノから開放され、身も心も軽やかになつていきます。心が軽くなると、こうも体に影響する力というほどに、僕の肉体は疲れを忘れていきました。なめらかな曲線を描いて自動車が走ります。道の曲線が美しく、美しい道を走る自動車の流れも美しいんですね。全てのものを包み込んで緩やかな流れは景色をつくります。

日常生活の場でこんなに心が安らかになることって、あんまりありません。いつも仕事に追われ、時間に追われ、しがらみに追われ……、いいことでも悪いことでも、とにかく追われるところこそが日常生活になつているようにも思えます。安らかに、穏やかに……そんな心が絶対必要なんだ……、分かっています。僕は束の間の充実を味わつていました。



夜、てくてく歩き続け、桂浜へたどり着きました。ずいぶん前にチャリダーとして四国を走っていた時には立ち寄ることができず、後からくやしい思いをした場所です。桂浜といえば、かつて土佐と呼ばれていた頃の英雄で有名な所です。坂本龍馬です。現在では高知県と呼ばれている所だけど、こここの空港からしてスゴイと思われるモノです。その名も「高知龍馬空港」……本当に英雄であり、郷土の誇りなんだろうと思ふます。

坂本龍馬は広い海原に思いを馳せ、「日本の夜明けは近いぜよ」と口にしたといいます。明治という時代を迎える日本という国将来を真剣に考え、力強く動き続けた人なんだと思います。その行動力は注意欠陥多動性症候群かとも思えるほどです。

注意欠陥という点では僕も負けではないられません。カメラを構えて上手に撮つたつもりが、なぜか変な顔が撮れるのみ……。本当なら、僕の後に大きな坂本龍馬が腕組みをして立っているはずでした。坂本龍馬の銅像は、僕が想像していたよりも大きくて、ぜひ一緒に写真に入りたいと思つたんです。でも、彼の体は大きすぎ、カメラのフラッシュは長すぎる僕の顔を光らせるのみで、姿を画像に残すことができなかつたんです。ポケットカメラじゃ限界がありました……。

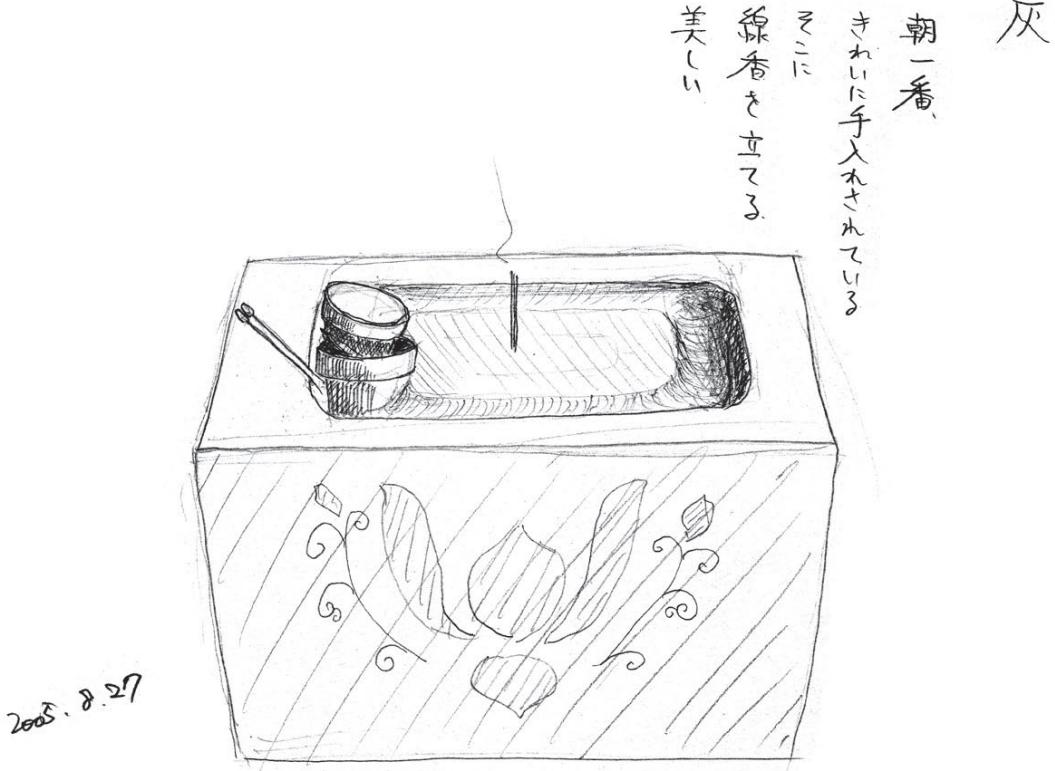
坂本龍馬殿、こんな顔に光を奪われてしまい、すみません。



日本語つて難しいと思います。他の国の言葉をしゃべれるわけじやないから比較できないけど、なんかそんな気がするんです。同音異義語がメチャクチヤ多かつたりして、日本語を知らない人が聞いたり同じことをくり返してくるんじゃないかと勘違いするかもしれません。

この前、「トドのまつり」とこの言葉を見ました。書類に「今週のことわざ」なんて銘打ってあります。まつり、ここにはどんな思ひが込められているんだろうと想像しました。図太いやツラでも体を動かして楽しむことができる、いや、もっと動けということか……、勘ぐつてしまいます。その怪しげなことわざはイラストに描かれてあり、トドたちがどんどんで遊んでいました。ことわざ複合技です。「ドングリのせくらべ」です。「ドングリ乗せ比べ」ということですね。なんとお馬鹿なトドたちでしよう……。

言葉遊びは大好きです。じゃ、この川はギャグで名付けられたんでしょうか。「しんかわ川」って、漢字で書いたら「新川川」ですかね。ああ、いいのか本当に……と思いました。名付けられた根拠を深く知る由もありません。地名になるくらいだから、きっと何かしらの背景があるんだと思います。地名に限らず、名前とはそれだけの意味を負ったものだと思うんですね。「名は体を表す」……名に恥じない人間を目指します。



早朝つて気持ちがいいモノです。やわやかな空氣を吸い込んで、今日も一日「ガンバロー」と思える感じがします。「起きは三文の得」なんて、よくいったモノです。日頃、早起きなんて全然できない僕だからこそ、そこら辺の価値が分かるというものです。ま、全然自慢にならないけど……。

第三十二番札所に着き、お参りをします。手、口を清め、お札を納め、灯明をあげ……と、一連のお参り作業の中で、それぞれのパーツがとても美しく輝いてくるような気がしました。特に、印象的だったのが、線香をあげた時のことです。一面が真っ平らに整えられていて、その真ん中に線香を立てるのは恐れ多いような気持ちにさせられました。

新学期、新しい教科書とノートをパリパリッと開き学校が始まります。予定帳の最初のページに鉛筆を走らせる時のドキドキ感です。これ以上ないといぐらの気合いを入れて、神聖な場所に丁寧に字を書きます。修了式の頃には読むこともできないくらいに汚くなるかもしねれない予定帳への最初の儀式なんです。初めが肝心なんです。最初からできないより、最初くらいはできた方がいいんですね。

要所要所で自分自身の確認作業をしながら少しだけリセットをして、気持ちよく「ガンバロー」と歩き出したいです。



とにかく水がきれい、といつのはお四国を歩いていて何度も何度も感じたことです。山、川、海……どこを見てもきれいな水が僕を魅了してくれました。

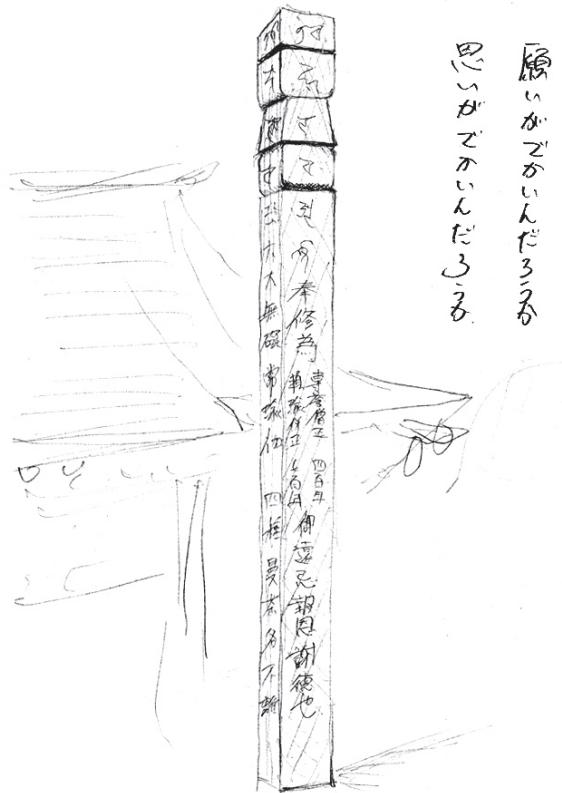
そして、街の中にもきれいな水を発見です。テレビ番組なんかで見るような光景でした。一番上の方には野菜やらの食べ物が冷やしてあり、下の方では洗濯をしているような映像が頭にちらつきます。キラキラと輝く水面を通して、底にある物たちが同じようく輝くようです。木枠の中に何が入っているのか、僕には分かりません。でも、間違なく水の中へ沈めてあり、流れる水を有効活用している様子でした。

水を活用するにも、規模がとんでもなくカクテダムみたいにすごいこともあります。僕の貧弱な想像力では収まりきれない、不自然な代物です。小さくセコく僕のイメージできぬ、自然に流れれる水の姿はステキでした。活用という言葉さえ申し訳ないような、「使わせていただたい」といふ感覚の水でした。

どうも、自分が偉くなつたような錯覚に陥ることがあります。こりやイカんと思います。本当に偉い人間だつたらいいけど、僕は本当に偉い人間とは違います。偉いというよりは違うといふタイプのはずです。分をわきまえよ……、小さな水路の下の方で構いません。ここで少しだけキラリと輝けたり少し満足です。

か

香りが立ちだらう
願いがかいんだらる
ぬいがでかじんだらる



でかつ！

境内にドカーンと大きなモノが立っていました。第三十四番札所のことです。これは卒塔婆っていうんでしょうか。よく分かりません。そもそも卒塔婆って、インドの仏塔か何かのストゥーパが訛つてそんな名前になつたんだと習つた記憶があります。

そういうえば、ばーちゃんのお墓の後ろ側に平べつたい木の板を供えました。あれ、卒塔婆って呼んでたように思います。法名が書いてあって、ばーちゃん専用のモノでした。香服院日時ナント力いう法名をいただいていたはずです。ずっと和裁をやつていたばーちゃんにふさわしい名前だと和尚さんが言つていました。別にどんな名前でもいいです。ばーちゃんは、ばーちゃんです。

そういうえば、もう一つ、金剛杖の頭の部分が境内でかいモノと同じような形をしていました。お杖の頭は普段カバーがかぶせてあるから分からぬけど、カバーをはがしたらポコポコと形が彫られていました。僕と一緒に旅をしてくれているお杖です。常に手に握っている頭の部分です。なんか大切な意味があるんですね。かつこいいデザインだから何でもいいです。

本当の意味は分からぬけど、いろんな思いを受け止めているモノであることは間違ひありません。何千年という長い間、人々は同じような形のモノに信仰心を集め、それを大きなモノに仕上げ、信仰心も大きくなつたはずです。心から拝みます……。

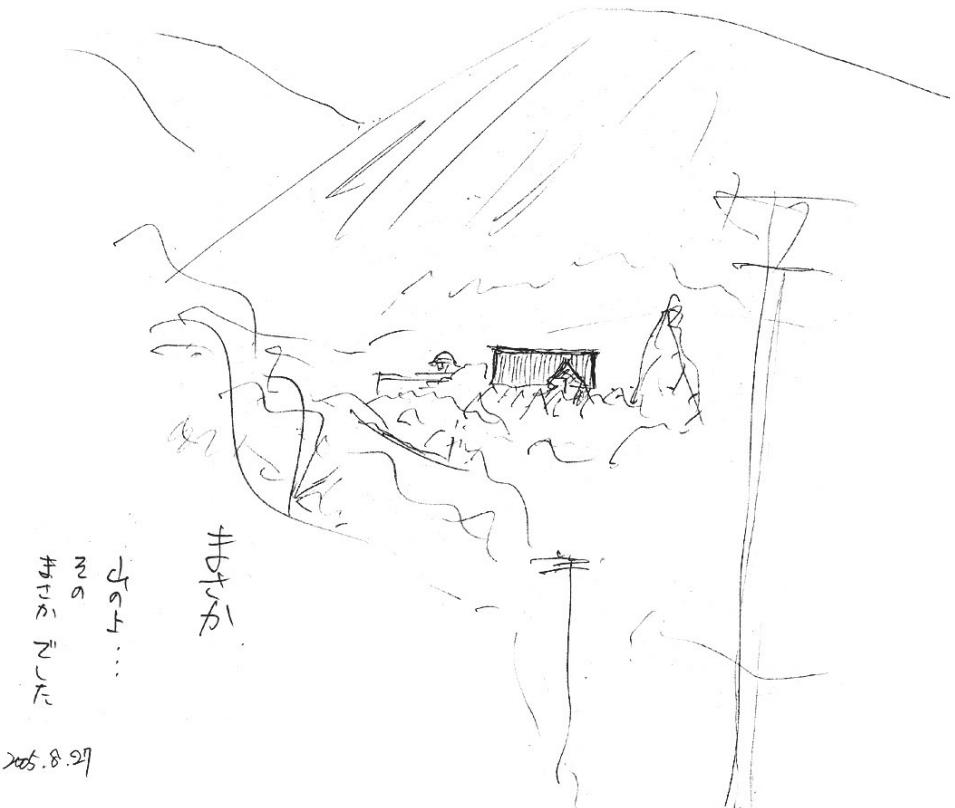


この川もきれいでした。透き通った水がゆるやかに流れていって、川底の石がやらやらと見えています。橋の上から見たらそれなりに深さもあるみたいで、時間にゆとりがあればそこから飛び込んでいたかもしません。夏の暑さを少しだけ忘れさせてくれる美しさがありました。

仁淀川という名前は頭の隅のどこかに眠っていたようです。地図を見てハツと思い出しました。チャリダーの僕がテントを張ろうとしたら、なぜか軽ワゴン車に「オラオラア」と追いかけ回された場所だったんですね。あれは、いったい何だったのか、謎の出来事でした。ある夕暮れのことです……。

真っ昼間、輝く水面の誘惑が強く感じられました。そもそも僕は水が大好きなんです。泳ぐのは最高です。生まれ故郷の焼津の海では、海水パンツと水中メガネだけを持ってひたすら潜りまくるというアホな日々もありました。何をするでもなく泳ぐ魚を見ながらドボンドボンと海底へと向かって沈んでいくんです。キラキラ光る魚と一緒にいるだけで幸せでした。キラキラ輝く水面の向こう側にキラキラ光る魚たちが仁淀川でも待っています。ホントに時間に制約がなければ……。高知を過ぎる頃、僕は夏の旅をどこで終えようかと考えながら歩いていました。そして、できる限り遠くまで歩きたい、と歩くことを最優先にしました。

遠いよ……。



2005.8.27

山を見上げます。高い所に屋根が見えます。立派な屋根です。大きい建物のようです。……「さつそり」です……。

旅の感覚というモノがあります。どんな街へ行つても、どんな国へ行つても、だいたいの雰囲気や勘で方角が分かつたり、物価が分かつたり、目的地の当たりをつけたり……、不思議なほどに分かることが増えてくるんです。旅の感覚です。旅を続けてしばらくすると見えてくる自分の力です。

歩きの旅人として遍路道をたどっていた僕に、歩き旅の感覚というモノが舞い降りてきました。距離感や方向感覚はかなり正確になつていたと思います。んで、ついでに身についていったのが、札所を見分ける感覚です。お寺はたくさんあります。いろんな宗派のいろんなタイプのお寺があります。でも、お四国巡礼八十八ヶ所の札所のオーラが感じられるようになつっていました、地図を見ながら歩いているわけだから、当然といえば当然なんだけど、遠くからでも札所を見分けられたように思います。

三十五番札所らしきモノを発見です。最初は「まさか……」と思いました。山登りをしなければ着けないような所に見えます。遍路道をたどっていくり、じんじん山の方へ……。坂道を上ります。上ります。そして、登ります。そこに見えある屋根が表れ、遠くからの観察が正しかつたことを知りました。



蚊取り線香のヒト……それが第一印象でした。第三十四番札所へたどり着いた時、僕と前後して姿を現した人です。ザックのベルトに蚊取り線香をぶら下げて歩く姿に、何とも言えないインパクトを受けました。

その後、第三十五番札所でもすれ違つたけど、何を話すこともありませんでした。……と、次の寺を目指していたら、向こうからあの蚊取り線香が歩いてきたんです。なんで逆方向から？ここで初めて話をしました。彼は道を間違えて進んでいたんです。

そこから、しばらく一緒に歩き始めます。かなり疲れがたまつていた僕ではありましたが、何かと話をしながら進むと、意外に歩けてしまうモンです。ラッキーでした。ここで、この蚊取り線香のヒトの名前が明らかになります。タカハシさんです。

タカハシさんは、その時の靴との相性があまり良くなかったみたいで、何やらいいろいろ工夫をしていました。ゴムゾーリで歩いたらどうか、と試したりもしていました。他に……、笠はかぶつていたけど、白衣は着ていません。最初は白衣も着ていたけど、あまりに臭かったのでやめてしまったみたいです。

工夫するってことはとても大切なことだと思います。それは自分にとって何が大切なのか見極めて、不要な物をそぎ落としていくことなのかもしれません。シンプル・イズ・ベストです。

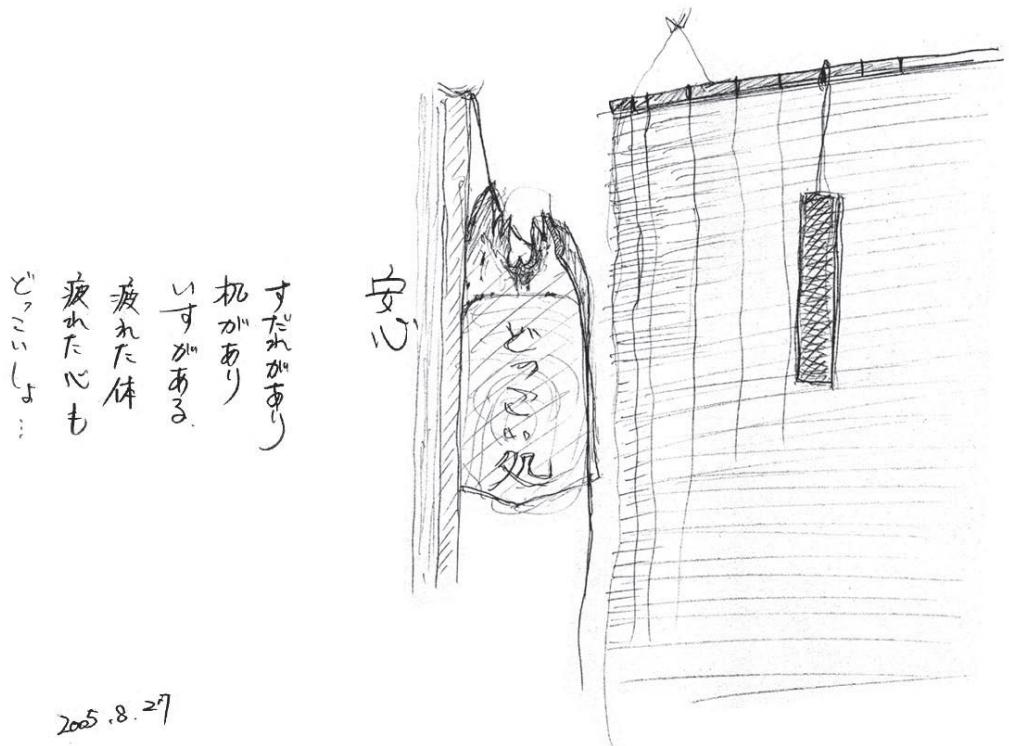


たどり着けて、とにかくラツキーでした。何しろ疲労感たっぷりだったから、歩くことが苦痛でしかないほどの道のりです。歩くことができた一番の要素はタカハシさんと一緒にいたということです。たぶん、時速五キロくらいのスピードで歩くことに成功していたと思います。

第三十六番札所は「ヨウ」と突き出した半島の先っちょにあるんだけど、幸いなことに大きな橋が架かっていて行きやすいんです。これもラツキーでした。そこまでの道にしても、僕らはできる限り樂をしようと努力しました。遍路道としては峠を越えて行かなきやならないような場所でも、新しいトンネルがあることを知つて当然のようにトンネルを通ります。こちら辺の感覚が僕とタカハシさんは意見が合つたので一緒にいても居心地がよかつたんですね。

札所へのラストスパートは階段です。さすがにここを避けて通るわけにはいきません。最後の力をふりしぼつて僕はタカハシさんについていきます。一人じゃできないことが誰かと一緒にならできるってステキなことだと思います。残念ながらタカハシさんは男の人だつたけど、もし女人だつたら三倍くらい頑張つていたかもしれません……。いやいや、そういう視点じゃなくて……。
一人じやなくてよかつたと思つラストスパートでした。

ちょっと一息。



2005.8.27

思わず口に出してしまった言葉つてのがあります。ちょっと気持ちが楽になり体が楽になりそうな時、それまでの緊張感と共に、ふと言葉がこぼれてしまいます。

何とか札所にたどり着き、お参りも済ませました。んで、ふとそこを見ると、居心地の良さそうな場所があつたんですね。もう、日本も傾いてきてはいたけど、場所の涼しげな様子が僕を誘います。日本の夏の風景で、すだれのもつイメージが僕の中ではとても涼しさをアピールしていくんですね。そして、「あわってね!」と呼びかけるかのようにいすがあるわけです。

思わず口に出してしまった言葉が……ああ、やつぱう……。「どつこいしょ」といはれてしました。看板を見て、もう一度「どつこいしょ」といはれてしました。その言葉を心あきなく使ってもいい処なんですね。「どつこい」の「處」でもから……。

スケッチブックを取り出し、ペンを動かします。タカハシやん、ちよつと待つてくださいね。絵を描くのは下手くそだから、時間がかかります。まあ、夜は長いし、疲れでシャキシャキ歩く気にもならないから大丈夫ですね。そう、夜は長いんですね。泊まるうかと思っていた宿はいっぽいで、必殺ナイトウォークを決行することにしました。

束の間の休息……、どつこいしょ……。



闇夜に浮かぶ秘密要塞みたいなモノが視界に入つてきました。怪しげな光をまとい、夜空を照らします。戦闘機でも出撃してきてたつておかしくないシチュエーションです。むしろ、映画だつたら、何も起つこないこの方があり得ないって感じの光景です。

じいかの街で「二十五時間営業」なんて看板を見たことがあります。それは極端な例にしても、日本には夜中までひたすら営業しているお店がたくさんあります。逆に夜遅くにお店が閉まつていふと、イライラしてしまうことだつてあります。おかしな話です。自分自身は夜の時間をゆづらうとんの中で過ごしたいと思つてゐる／＼せん、都合のいい時……しかも、自分以外の対象にはいつもでも休みなしで稼働していくほしーと思うわけです。人間って自分勝手な生き物だと、自分を見てゐるとつづり／＼感じてしまひます。

その夜に見えた秘密要塞は、でかいコンクリート工場です。コンクリートは固まります。固まつたらカチンコチンになつて、どうにもならなくなります。工場を止めるわけにはいきません。コンクリート工場の便秘なんて嫌すぎます。カチンコチンに固まつたうん／＼が自分の中にたまつて／＼のと同じです。最悪です。

確かに異様な工場の光景だけど、その異様な工場達たちが僕らを支えて／＼の現実を受け止めて生きてい／＼しかありません。



水の音がします。わざと耳から近い所で聞こえてくる音です。でも、前に聞いたことがあるようなタイプのモノではありません。前に聞いたようなパチヤパチヤ流れるような音じゃなくて、チャポーンチャポーンと間隔をあけて聞こえる音でした。

今までに聞いた耳元で聞こえる水の音の中で、印象的なものが多いつかあります。パチヤパチヤ流れるような音……が聞こえた時は、寝ぼけた頭で事態を正確に把握し速やかな対応が求められる場面でした。次は台風を計算に入れてテントを張ろうと思いました。ジャットと流れ出てくる音……が聞こえたかと思うと、なま温かい黄色い液体が芳しい匂いと共に降り注いできました。我慢できなかつたんだから仕方ないことです。次はタイミングよくトイレへ誘つてあげようと思いました。

夜、歩き続けていたタカハシさんと僕は、疲労と眠気が限界まで近づいてしまった。ひかりからともなく、「わづ、やめよ!」というオーラが満ちてしま、「寝よ!」といつ結論に達しました。ここならきっと大丈夫、と判断したのが堤防の横でした。周りが暗いからはつもつ分からぬことじ、面積としては問題ないはずですが、朝、じこにじるのか一瞬分からなかつた、といつのは僕らに共通の感想だつたと思います。テント無しのタカハシさんの方が、数倍その思いは強かつたと思つますが……。



確かに、僕は、お四国を、歩いて、いた、はず、です。それで、日本で、一番、大きな、湖は、滋賀県に、あつた、はず、です。その、名前は、確かに、琵琶湖、だつた、はず、です。何が、なぜ、こんな風に、起きる、ことに、なつて、しまつた、ので、しよう。

意味不明の出来事に対面した時、人間って自分自身も意味不明になつてしまふのかと思いました。他の人たちは何も思わないんでしょうか。もしも車のスピードで走つていたら、気づかなかつたんでしょうか。歩き遍路のみぞ知る穴場的なおかしさなんでしょう。

自分がおかしいのか周りがおかしいのか、時々そんなことを考えます。僕は昔から「変なヤツ」と言われる機会がたくさんありました。なんでなのか、よく分かりません。よく分からない……ということは、少しは分かるつてことです。分かる部分としては、自分が周りと一緒にるのがイヤだと感じるあたりです。小学校の図工の時間、みんなと同じような絵を描くのがイヤでイヤで仕方がありませんでした。いかに他の人が描かないような絵で勝負するのかがポイントでした。人と違うほどに上手に描けるわけじゃないかったから、とにかく人と違う視点を探していました。

たぶんこの場所で明らかに違う視点でモノを見てしまった人がいるんです。だから、「琵琶湖」という名前が生まれたんでしょう。



確かに琵琶湖の北の方はこんな雰囲気だつたかもしねりな……などと思わされてしまいました。「琵琶湖」という看板にだまされているだけなんでしょう。ま、それでもいいかと思います。

昔、梅の花の匂いが風に乗つてきただらなあ、なんて都を思つて歌を詠んだ人いるといいます。まさか、九州にまで梅の花が香るわけもないし、まさか本物が飛んでくるなんてありえません。でも、その人には見えたのかもしません。思いを強くもつと、見えないモノが見えてしまうこともあるような気がします。僕には全くそんな能力はないけど、見えてはいけないモノが見えてしまう人だっているんだから、人によってモノの見え方なんていろいろあって不思議じゃありません。

僕の生まれ故郷も、だんだんに姿を変えつつあります。小さい頃は田んぼだつた所に建物が建ち、実家のすぐ前にあつた伊達巻屋さんの工場も何件かの家に変わつてしましました。友達と泳ぎに行つたチャリソソで十分くらいの所にある海も、コンクリートで固まっています。でも、僕の頭には、あの頃の様子がビツタリとくっついていて離れません。もし、同じような風景の場所があれば、きっと「あああああ~！」と叫び出すんじゃないかなと思うんです。

人間の田つて、工工加減なモノみたいですね……。

いい国です。



英語で書いた「The United States of Shimanoto」になるんでしょうか。このへんなのめつのじか。うちのじかひい感じがします。「States」……この「系」ここで繋がるのかのじか、貴様があつたも。

アメリカだと、州それをねがアイデンティティをもつて機能してこなもつたと聞いたことがあつたも。みんな違う特色をもつて生活をつづつ出来てこなじこいじだと感じまわ。んで、それがバラバラになつてしまつてこじやなべ、一つの国として成り立つてこなじは魅力的で。お互いの個性を尊重してこなじとの表れで。クラスの人が一人一人みんな違う所を「あじこねえ」と書つてねじのれぬなんじ、ねじ「あじこねえ」と絶賛してしまは。理想的なクラスで。かくらん、アメリカ合衆国が全てこまくこつこなむかじやねつまかくじよ……。

個性を大切にしながい、みんなでおじがつに幅ぬじゆじこいじといつ気持ちが伝わつてもおす。四万十川といえど、多くの人たちが憧れる清流です。清らかな流れです。美しい四万十川を囲む人たちが一致団結したら、めひと美しい団結力が生まれるんでしょうね。お互ひ、汚い所はあれいな所に変えてしおこ、あれいな所をさらに伸ばし合ひしこたのよつたな関係を想像してしまは。そんなステキな合衆国、是非、住んでみたいものだ。

屋根の下。



寝る場所には困りません。なんといつてもテントといつて強い味方がいます。どこだつて眠ることができます。これは旅をする人間として非常に重要なことです。でも、屋根がある所でふとんに入つて眠れたら、そんなに幸せなことはありません。それがベストなんですね。

岩本寺に着いた時、もう、納経所が開いている時間ではありますでした。僕とタカハシさんは相談をして、宿坊に泊まることにしました。その宿坊に泊まれば都合良く次の日も動きが取れます。しかも、岩本寺の宿坊はコースホステルを兼ねている所で、普通に快適な夜を提供してくれる所でした。僕が勝手に想像していたような怖い所……、木の枕に板張りの寝床というような宿坊とは全然違う所だったんですね。

屋根のある所に泊まつたら、まあやうじたことは洗濯でした。屋根がある所には大体クーラーがあります。クーラーがあるということは部屋の中は乾燥していて、洗濯物がよく乾くんです。もう、うれしくてうれしくて……。自分の苦労も一緒に詰まつている白衣ではあるけど、何より臭くて汚い衣服になり果てています。ゴシゴシ洗濯です。清き白衣は洗濯からです。

心地よく眠つてつきました。

翌朝、お経をあげる、お勤めの時間を寝過ぎてしましました……。



ブルブルと怒りに燃える時があります。その気持ちをどうにもできないこともあります。拳が震えます。でも、だいたいの場合はその拳をじっくへ向けたらいのか分からずに、よけいに怒りが高まってしまいます。くやしいことです。人間だから怒りという感情があります。人間だからそれをコントロールする理性もあるはずです。あるはすなのじうともなりないんです。

人に對して怒りが生まれてしまった時、人間だから言葉で何とかその気持ちを伝えようとします。言葉が足りないと相手からの反撃に会い、もつ言葉では伝えられないほどの感情の高ぶりが訪れてしまふんですね。僕の場合、飽くまでも人間をなぐっちゃいけないと思うから、壁をなぐります。できれば適度な硬さと適度なやわらかさを兼ね備えた所を目標にしてこきたいんです。……が、怒りに任せて壁をなぐると、適度な硬さのことはほとんどありません。メチャクチヤ硬くて自分の拳が出発するか、メチャクチヤやらわかくて壁が壊れるかのどちらかです。そして、自己嫌悪に陥るという結末を迎えるのです。

川が怒り拳をあげたんでしょうか。流域に怒りに満ちた人たちが多く住んでいたんでしょうか。もつと単純に河原が拳のような岩石だらけだったんでしょうか。本当だつたら、もつとやせしく拳ノ川にしたい人たちもこゝぽいこいたと思つておカジね……。

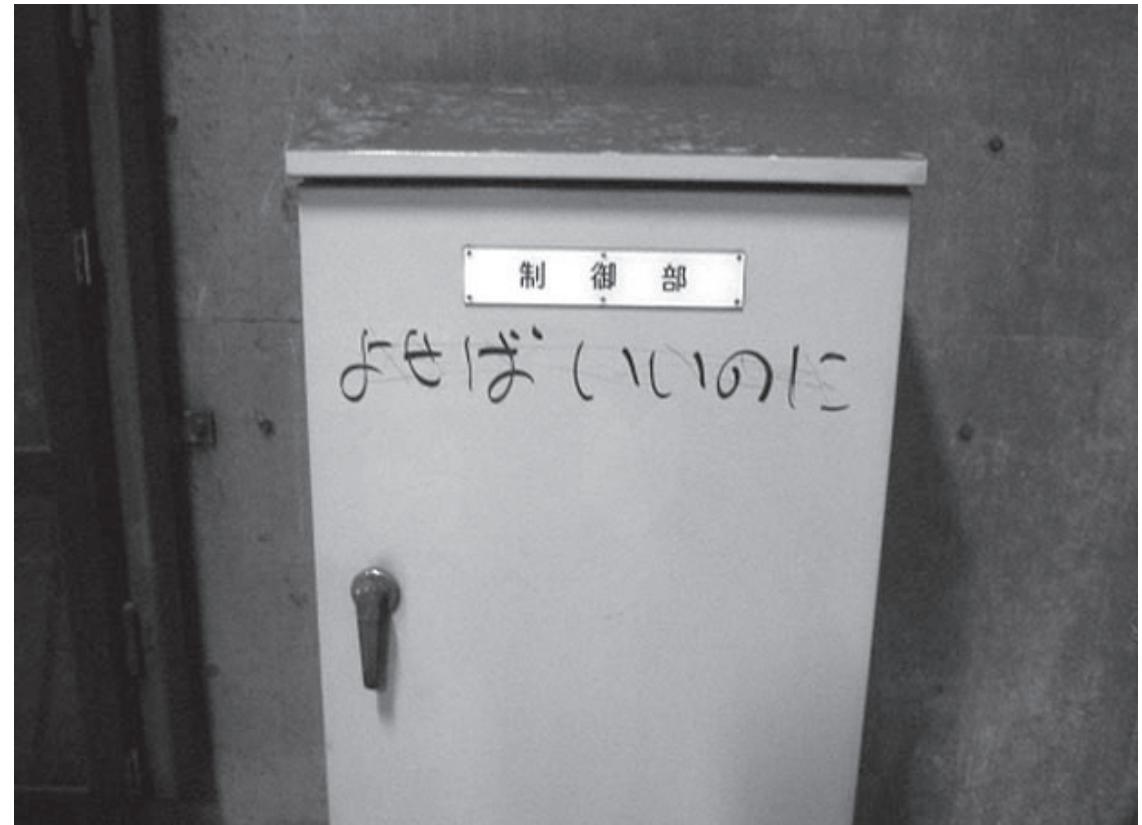


五三〇運動つて小さい頃によく言われたような気がします。ゴミゼロということで、地球上にやさしい運動ですね。体力がない僕にでもできる運動です。本当にシャレにならないほどに劣悪な地球環境のためにどんどん進めていくべき運動だと思います。

と、頭では分かっていながら自分の生活を省みると、地球上に厳しい生活をしていることが恥ずかしい限りです。ゴミの分別って苦手なんです。そもそもゴミを捨てることが苦手なのかもしません。テレビでゴミ屋敷と紹介されている映像を見て、あそこまでいかないうちにどうにかしよう、と考えさせられます。ありがたい番組です。分別の区分けがとても細かくて、どこまで燃えるゴミで、どこまで燃えないゴミで……ああ、分からなくなります。

看板には「粗大ゴミ集積所」と書いてあるようですが。どういふことは、ここにある物はゴミなんですね。ステキなゴミでも。是非、もらってしまいたいくらいです。僕はトホダーであり、ライダーであり、チャリダーだから自動車には乗らないけど、ただならもうらつてもいいかな、と思います。ゴミ捨て場には、その人の価値が捨てられます。僕には必要でもその人には不要なんです。まだ使える物が捨てられていたりすることだってあります。その人は不要なんです。かわいそうなゴミたちがいっぱいです。

ま、いこの場合はたまたま車を停めただけだと思いますが……。



せり、やめられません……。

なんで始めてしまったんだのうと思つことはよくあります。今までそれをよく感じたのはチャリダーに変身した時です。とりあえず尻が痛いことが第一、当然ながら足は疲れる、隣を走り抜ける車たちが怖い……、拳げだしたらもうがありますん。

遍路道を歩きながら、なんで始めてしまったんだろうと思うこともあります。足は痛いし、のどは渴くし、背中の荷物は肩に食い込むし……、しかも第三十七番札所から第三十八番札所までは遍路道最長、約九十キロという道のりです。歩いても歩いても次の札所までたどり着かないのは、かなりの苦痛でした。そんな時「よせばいいのに」などと、もつともなツッコミが入つたら、ゴメンナサイと思つしかなくなります。もう、始めてしまったんだから、歩くしかない状況なんですね。

とはいっても、歩くといつ行為は対象年齢の幅がものすごく広いモノです。車のように免許もいらないし、電車のようにお金もいらない、万民に平等に与えられたチャンスといえます。その手軽さのおかげか、チャリダーの時ほど僕の苦痛は激しくならなかつたような気がします。欲をいえば、もつとのんびり歩けたらよかつたなあとは思います。そうしたら「よせばいいのに」というツッコミにも、そんなことないよ、と速攻で反撃できたのに、と思つのです。



タカハシさんは「だから、やめた方がいいって言ったのに……」と言ふけど、仕方ないんです。興味津々だつたんです。自分の目に見えないモノたちには、その存在感は主張するけど実態がつかめなくてくやしい思いをします。もし、それが見られるチャンスがきたら、生かさない手はないんですね。

好機到来、中身がクシヤクシヤと違和感を伝えていました。それまでは何も感じなかつた部分が少しだけ変化を見せていて。雨水がテロンテロンにしみたからだと思います。思い切って中身を引っ張り出してみました。何かしら尊いモノが感じられるかと期待していたんです。何が出るかな、何が出るかな……、ショック、出てきたのはただの段ボールでした……。

金剛杖は弘法大師として敬うもの、非常に大切なものだつたはずです。当然、カバーがつけられていて、守られるものでした。でも、そのカバーの中には段ボールが巻かれているだけであり、所詮、木の杖は木の杖か……。偶像崇拜を禁じたイスラムの教えが分かるような気がしました。僕らは何かを信じて支えにします。心の支えです。それをイメージしやすいように物を代理にして信じる自分の気持ちを守ります。どれだけ信じる気持ちが強いのか、そこが自分の気持ちを左右するんだと思います。

僕のお杖からは余分な物が取られ、純粋になつたことにします。



歩けど歩けど店はなし……、からうじて自動販売機が現れるのを心の支えに修行の道を歩き続けます。

さあ、どこでメシにしようか、何を食べようかと思うわけです。市街地だつたらあちこちにコンビ二なんというモノが存在し、食べ物屋さんも選べるほどにたくさんのあります。でも、そんな贅沢を言えるわけがありません。何といっても修行の道場です。

タカハシさんが地図を見ます。僕は見せてもらいます。そこには「食」マークがついていました。どうやらファミリーレストランがあるようでした。これは刺激的な情報です。ファミリーレストランといえば、冷房完備であり、いろんなメニューがそろつてあり、それがお手軽な値段で食べられ、しかも、営業時間が極めて長いため利用しやすいという、ありがたい施設があります。このようないいがたいモノが地図上に明確に記されているのです。俄然、元気が出でてくるというのが道理というものなのです。

日常の中で、僕はファミリーレストランのようなチェーン店的な食べ物屋さんを、必要以上に低いモノとしてとらえているかもしれません。コスト削減のため、店員さんはアルバイト多め、食材はおそらく安い輸入品ばかりのはずです。そんな所に敬意をはらってたまるか、とひねくれているのかもしません。

ゴメンナサイ。ファミリーレストランは偉大です……。



僕の頭の中には、鉄板の上でジユ~ジユ~しつている肉のイメージ画像がリアルに再現されていました。冷たい飲み物もついています。あ、至極のひとときです。

あなたはペコペコ、こぐらでも食べられそうな状態で、「ファミレス~、ファミレス~」と半ばうめき声のようにつぶやいていたかもしません。

それが、「ふざけるなあ~」という叫び声に変わっていました。
あるべき所にあるべき物がないんです。

だいたい、駐車場があり、植木か何かがあり、ちょっととした段やスロープを進むと、入り口の扉があるモノです。そこに入るとい様ですか」と質問され、「おタバコは吸われますか」なんて聞かれるんですね。

それなのに……、それなのに……、駐車場しかないんですね。「ふざけるなあ~、建物はどこへ行つたあ~、俺のメシはどうなるんだあ~」……渾身の雄叫びです。明らかに想像ができる造つでした。ここに駐車場があるところじゃなくて、いつち側が喫煙席、あっち側が禁煙席……、とうとうついに、ファミレスレストランが遺跡のように感じられる一画でした。

期待をしすぎたんですね。まさかつぶれていくとは……。
諸行無常、やはり、修行の道場です。



濃い宿でした。遍路とはいりこりものかと思ひ知らわれたような感じです。足摺岬まであと少しといふ遍路小屋でのことです。おっちゃんはおっちゃんがいました。その小屋の説明をしてくれます。風呂はびうなつてゐるのか、洗濯はこうだとか、寝る場所はこんなだとか、細かく教えてくれます。遍路小屋だから宿代は不要だけど、一応の維持費として百円払つてくれるとうれしいなんてことも教えてくれました。その人は管理人さんじやありません。僕と同じ遍路道をたゞるおっちゃんです。

おっちゃんは語ります。腹を摘出してしまつたから栄養補給も大変で、体に取り込みやすい物を少しづつ何回にも分けて摂取しているとのことでした。また、おっちゃんは語ります。時々、自分の家に帰らなければならぬ用事もあるけど、ほとんどはお四国を歩いているとのことでした。わざわざおっちゃんは語ります。いつ倒れても構わないし、お四国を巡り続けることにしました。

お四国とはものすごい所です。輪廻転生とはいつかれど、お四国の輪廻は僕らの心をつかまして放してくれません。おっちゃんの納経帳は隙間もないくらいにビッシリと朱印が残されていました。何周お四国を巡ったんでしょう……。

自分の思いをといとん追究していくおっちゃんをひいちゃんへ思ひます。いか、僕も自分の道を悠々歩いていたものです。



夏休み最終日、八月三十一日は毎年のように地獄の苦しみを味わっていました。家にある科学雑誌を丸写しして理科の自由研究を終わらせ、泣きながら漢字の書き取りを進めながら夜を迎えるパターンです。そして、この年の八月三十一日は、お四国最南端の地である足摺岬にいました。

第三十八番札所金剛福寺へ到着して記念写真を撮ります。同じようなポーズを取つていた場所があるな、と記憶をたどります。第一番札所でも杖をつき、山門の前で記念写真を撮つていました。でも、明らかに雰囲気が違います。日焼けで黒くなっているだけの違いじゃありません。一やりと笑つた表情を始めとして、立ち足の広げ方、胸の張り方、腕の降ろし方、全てが堂々としてる、ただ者ではないオーラを感じられます。

自分のことをかっこいいなんて思うことはありません。本当にかっこいい人がうらやましいと思します。そんな僕が写真を見て、自分自身に好印象を抱きました。何かをやり遂げた時の充実感があふれ出でていて、すがすがしい姿に見えるからです。歩き遍路に限ったことじやなく、達成感が味わえた時には、誰でも少しあつこよくなつたり強くなつたりするんじゃないかと思えました。よくもここまで歩いてこれたモンだと、自分で自分をほめてあげたいと思います。

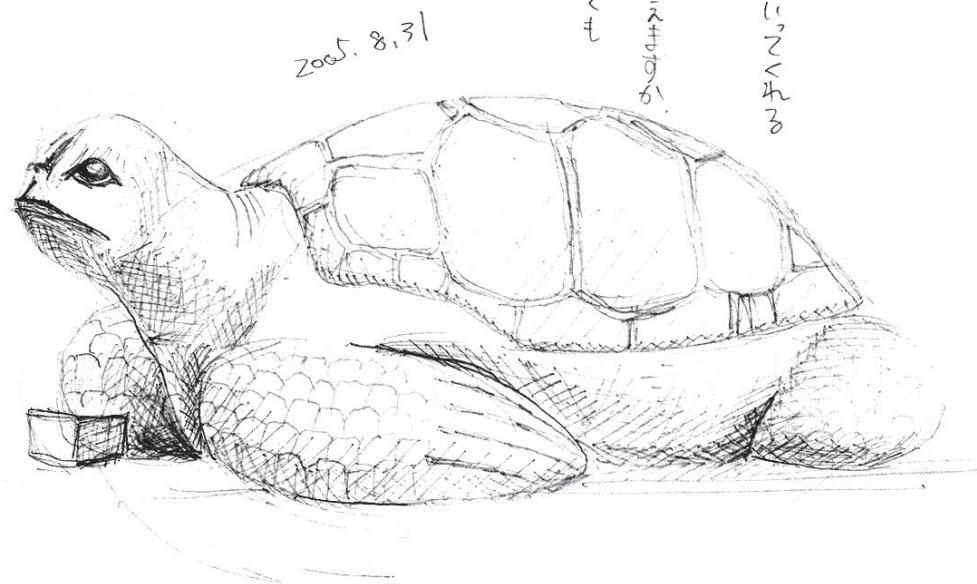
お亀さん

鶴は千年
亀は万年……
おめでたい生き物として昔から大切に
されている亀たちです。「お亀さん」として祀られるのも当然かも
しれません。亀は万年っていうけど、実際は何歳くらいまで生き
ているんでしょうか。分かりません。もし、人間が「一万歳おめ
あなたが連れていってくれる
竜宮城とは
極楽ともいえますが
やべりゅうこくとも
いじんですね

鶴は千年亀は万年……、おめでたい生き物として昔から大切に
されている亀たちです。「お亀さん」として祀られるのも当然かも
しれません。亀は万年っていうけど、実際は何歳くらいまで生き
ているんでしょうか。分かりません。もし、人間が「一万歳おめ
でとう」なんていうような時代がきたら、びっくりです。僕がそ
んなに長く生きていたら、たぶん興味の対象が消え去つて抜け殻
状態になつてゐんじゃないかといつ氣がします。

人間に限らず生き物には寿命があります。生まれたときから間
違ひなく死に近づいているんです。分かつちやいるけど、親しい
人の命が失われた時には悲しさが押し寄せます。うちのばーちゃん
んは九十一歳でした。客観的には、まあ大往生といえるみたいです。
けど、孫として思うのには、あのばーちゃんに「死」なんて全然
似合わない……、いつでも元気に歩き回っている姿しか想像でき
なかつたんです。ばーちゃんは自分勝手で頑固で、やりたいこと
はそれなりにやりきつて逝つたようにも見えます。幸せだつたん
だと思います。

竜宮城へ行つた浦島太郎は、玉手箱を開けて本当の自分の時間
軸へと戻ります。僕は三十八番札所のお亀さんに参りをして、
日常の自分の世界へと戻ります。非日常の世界も終わりがあるか
らこそ輝きを放つんですね。輝ける「時」に乾杯！





前へ前へと進む姿はかつてのモノだと思います。後ろへ後ろへと逃げて行きたくなるような僕はいつも思ってます。

自分では攻めの姿勢を忘れていたつもりはあります。それなのにどうしてか、結果的に弱々しいことになつてしまふ。セコくて軟弱者である僕の宿命なんでしょうか。悲しいことですね。

夏の終わり、僕はどうしてもお四国を去らなければなりませんでした。足摺岬といつ、一番遠くにある場所から戻すんだから、悲しいこととつたりの上あつません。

自動的に、しばらく一緒に歩いていたタカハシさんとも別れです。タカハシさんは通し遍路としてまだ歩き続ける人でした。いろんなことをたくさん話して、いろんなことをたくさん考えさせてくれた人だったので、僕は別れるのを寂しく思つていました。それでも、タカハシさんは淡々と自分の道を歩んでいっていました。自分としては寂しいんだけど、あごくかつこよく見えてしまいました。バスの中から、撮った後の姿が必要以上に堂々と見えてしまいました。

旅という非日常の世界のさらに先へと進んでいく人を見送る僕を、日常という当たり前にそれでも刺激的な世界へとバスは引き戻していました。日常と非日常の狭間、それがあることは幸せなのか違うのか……、またタカハシさんには教えてもらいました。

身近な人の命が亡くなる経験をあまりしたことがない。小さい頃、じーちゃんが亡くなつて葬式に出たことはある。でも、じーちゃんは僕と一緒に住んでる人じゃなかつたし、「死」というもののイメージが全くつかめずにいた。じーちゃんが生きていたとしても僕の生活にはほとんど関係のない所にあつたから、無関係に近かつた。

ばーちゃんは違つた。ずっと同じ家で暮らしてきた人だから、その人の命が亡くなるなんて現実味がなかつた。ただひたすら涙があふれ出てきた。葬式が終わり慌ただしさが過ぎ去ると、心にぽつかり穴が開いたような感覚に陥り、何かをしなければ自分が保てないような感覚が訪れた。そして、再びお四国を目指す。

ずっと僕の感覚は異常だつた。感情の起伏が激しくて涙が無意味に流れる道のりが続く。ことあるたびに「ばーちゃんが見たらどう思うか」などと考えていた。それでも基本的に楽観的な人間である僕は、旅をすることでの心の平静を取り戻していくかのような気がする。自分の心をコントロールするのに、日常的に僕は文章を綴るという方法をとる。特に、悲しかつたり落ち込んだり怒りが収まらなかつたりすると、ひたすら文章を綴る。そしてもう一つ、旅の中で心を開放させる。歩くことはその時の僕にとつて一番適切な活動だつた。

真夏、太陽がジリジリと僕に照りつける。熱い。のどが渴く。足にまめができる。荷物が肩に食い込む。「発心の道場」と呼ばれる徳島から「修行の道場」と呼ばれる高知へ入り、苦しさが体の奥まで染み渡つていった。高知では札所と札所の間隔が広い所が多い。一日歩いても札所に巡り会わないこともある。長距離を朦朧として歩きながら、時々ばーちゃんのことを思い出した。ふとした瞬間に心の中に現れるのである。そういうえば、母や伯母の夢の中にも登場していただしい。四十九日も済んでいない頃だから、まだその辺をフラフラしていたのかもしれない。いろんな所に出張して御苦労な話だ。僕には靈感というものが全くない。勝手にばーちゃんを登場させて喜んでいた。そして、返事が返つてこないばーちゃんに勝手に話しかけては気を紛らわせていた。

物事を忘ることに関して、僕はものすごい能力を備えているように思う。いいことも悪いことも次から次

へと忘れ去ってしまう。あれだけ僕の心に衝撃を走らせたばーちゃんの死からの痛手さえも、お四国を歩いているうちにだんだんに薄れていった。ピンポイントでばーちゃんを思い出させる出来事が現れることもあつたが、心の波は少しずつ凧いでいった。心の平静が訪れようとしている頃、高知・「修行の道場」を半ば程まで歩き進んだ頃に僕はタカハシさんと出会った。

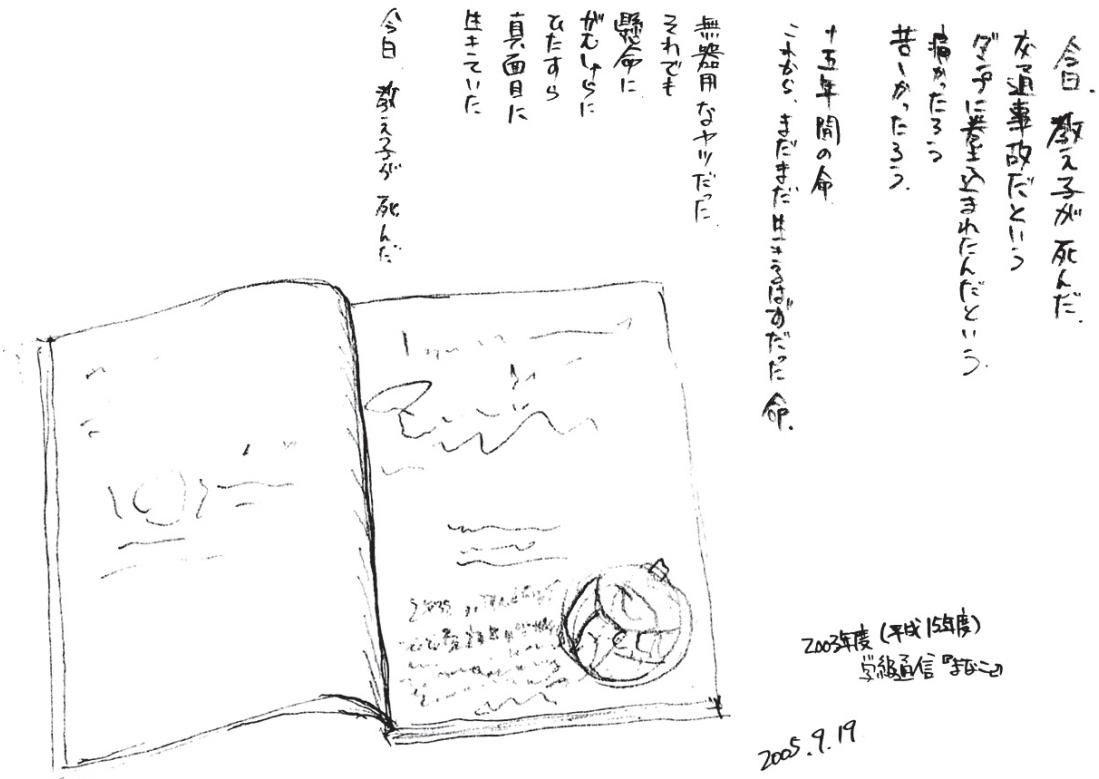
彼はどうやらすごい人のようだった。歳は僕とそんなに違わないのに、放つオーラが僕を圧倒した。いろんな話をした。歩きながら僕はたくさんのことを見た。タカハシさんに投げかけ、帰ってくるモノを吸収しようと一つ一つの言葉を拾い続けた。僕にはない知的なスマートさを感じながら、しばらく一緒に歩くことになる。不思議なもので、一緒に歩いていると、自分一人で歩いているよりも苦しさが少なくなったように思えた。歩くペースも少し速くなつた。苦痛を忘れさせるほどにタカハシさんとの時間は楽しく魅力的だつた。歩き遍路をする中でタカハシさんほど親しく話をした人は他にいない。向こうはどう思っているのか知らないが、僕はタカハシさんと出会えてとてもよかつたと思つてゐる。

夏休み最終日まで一人で歩き、足摺岬で僕とタカハシさんは別れた。僕は翌日から始まる職場へ戻らなければならなかつた。

お四國遍路編

第三期

冊子に込められた想い。



体に力が入らない。何かしら動いている自分の体なのに、全然自分の意志を感じないこの体。

言葉が意味を成して入っていない。聞いている音は確かに流れ込んでくるのに、全然感じることのない自分の耳。

ばーちゃんがあの世に逝つてしまつて約一ヶ月。またしても自分が関わりのある命がこの世を去つた。つい半年前までは中学生だったコースケの死だ。

かつて、彼の家には稻があつた。母親がこつそり教えてくれた稻だつた。僕は、お百姓さんという職業を心底尊敬している。僕にはできない仕事だと思う。こつこつ地道に命と共に歩んでいく生活だ。……コースケは稻を大切に思つていた……。

不器用な男だつたが、ひたすら真面目だつた。努力を重ね、高校へ入学し、勉強に運動に力を注いだ。彼のがんばりを思うと、涙が止まらなかつた。以前、僕は彼の文章を読んだ。固い文章だつた。ストレート過ぎるくらいに出来事を綴つていた。

コースケの文章も載つているが、かつて僕は自分の小冊子を作つた。それを関わりの深い人たちに贈つた。もちろんコースケの手元にも届いている。その頃の僕が精一杯の気持ちをぶつけていた、そんな小冊子……。「大切にしないと」というコースケの母親の言葉が、聞こえない耳を通り、頭の中で「つづ」り響いている。



ふかふかと壁に何かが浮いていました。

僕の心も、じいをやまよつてこむのか分からぬ感じでした。僕の中で命といつものが、まだまだ理解できない状態で、それでも確かに命といつものがじいかへいつてしまつたといつ事実だけがグルグル回つていました。

形ばかりは命といつものをじいかへ送り出しました。そして僕の足は、お四国へと向かつてしまお。ところよつも、お四国へと向かう電車……に乗るための駅へ向かつてしました。

ふかふかと空に何かが浮いていました。秋晴れの美しい空に、気分もよさそうに、飛行船です。僕は飛行船に乗つたことがあります。ちょっと憧れます。空でのんびりと優雅な時間を過ごすことができるのです。僕が体験した空は、ヒコーキの中、空氣を切り裂いてヒコーンヒコーン進んでいくよつな空でした。せわしない、地上での時間が空にも流れていました。のんびりとした時間を過ごせそうな飛行船は遙か遠くに浮かんでいました。

本当だつたら意氣揚々と向かうんだらうつ場所、お四国へ、自分の気持ちも分からずに旅立ちます。そんな僕をも受け入れてくれる場所……、勝手にだけど、そんな風に思えるお四国つてすごいと思います。輪廻転生、曼陀羅の地、お四国です。区切り打ちの歩き遍路が、また、お四国へと向かいます。



足は、お四国へと向かつてしまお。……といつても、新幹線というモノに頼つて前へ進んでいく段階です。重い足取りの僕の前を、ビュンビュンと新幹線が走り去つていきました。僕の気持ちと新幹線のスピードが全然合み合わず、その速さについでいたません。

僕がいるのは新幹線の車両から一メートル弱の距離です。手を伸ばせば、その体にさわることもできるくらいのところです。なんとなく僕は、怖くなってしまいました。柵もないホームを平然と歩いていることにに対する恐怖です。もしも、何かの拍子に新幹線の方へ近づきやすめてしまつたらい……、僕の体は吹き飛びます。

今まで気づかなかつたことなんだかど、ホームに柵があるって大切なことみたいですね。よく考えたら簡単なことです。いつでも誰でも思いつくなめのひと、それに気づかなかつた僕……、それには気づけた僕の心……、そんな心をもつことができたことを喜びたいと思ひます。

きっかけに感謝です。つらつらと、悲しいこと、これまでのあります。その全てが自分を高めるきっかけになるんだと思つことにしています。それでなきや、やつてられないこともたくさんあります。……し、感謝してござり、そのあつかひが、本当にすばらしい財産を呼んでくれるといつむかべこんであります。感謝感謝……。



最寄り駅から遙か彼方、スタートラインは遠くにありました。区切り打ちの歩き遍路、前回までにたどり着いていたのは足摺岬です。そこまで行かなきや始まりません。駅の周りをフラフラしてみます。でも、どうしたらいいのか分かりません。バス停の時刻表を確かめます。でも、すでに最終バスもありません。何台かタクシーが停まっています。どうも、それに乗るしかありません。タクシーに乗って運転手さんのお話を聞きながら、闇の中を進んでいきます。いろんな話をしてくれました。夏に来た台風で四万十川がドバーっとなつてしまつたこと、四国沖のジンベイザメが大阪に運ばれて見世物になつていふところと、毎間だつたらものすごい景色がいい所もあるけど夜だとこうひと、そして、目的地、足摺岬は自殺なんかする人もいるといふこと、など……。話し好きな運転手さんのおかげで、眠るのもできないまま足摺岬に到着しました。そこには、懐かしくも感じられる寺の様子が闇に浮かんできました。

いよいよ歩き始めます。つい歩きの道が前にあります。それなのに、また、歩き始めてしまうんです。しかも、夜通し歩こうとしている自分がいます。何が僕を動かしているんでしょう。目には見えない、言葉にならないモノが僕を包んでいました。そして、タクシー代は一万円……、仕方ないのかな……。

冷たく温かい……。



夜歩きをします。夏の日差しが残る頃、毎間に歩いているとからビンの光線を浴びてしまいます。札所と札所の間の距離は長いけど、夜歩きなら納経所のオープンしている時間帯なんか考える必要もありません。多少でも夜の涼しいうちに次の場所まで近づいていたらラッキーだと思えます。

毎回よりはマシ、でも、ジトーツと暑い夜を歩いていると、だんだん頭がボートとしてきて、意識が飛んでしまったりもします。そこで、なけなしのお金を投入です。自動販売機の缶コーヒーでも飲んで、リフレッシュさせなきゃ、やつてられません。……で、ふと見ると、「あつたかミルクココア」などというモノがあります。……が、そのコーナーの表示は「つめた~い」なんですね。やられてしましました。これは買わないわけにはいかないでしょ。このココアが田の前に現れた時点で、かなり田が覚めてしましました。僕の気持ちをよく分かつてくれてる自動販売機です。

人が話をあるじも、他者にどれだけ理解してもらえるか、それはものすごくポイントになる部分だと思います。いくら正確に話をしても、それが分かつてもうえなかつたら意味がありません。どれだけ簡単に話をしても、ばつちり伝わればそれでいいんです。僕が冷たい飲み物を飲めたら、それで任務完了なんです。僕が手にした缶ココアはしつかり冷えていました。



小学生の頃、学区の自動販売機を渡り歩いたことがあります。それってどういうことか……、もしも今の自分がその時の自分の姿を見たら、ハア、とため息をついてしまうかもしません。あたりの返却口に指を突っ込み、地面に顔をつけてそこをのぞき込んでいる姿です。仲間にぐついて歩き回り、収益金でお菓子を買うという姿です。

自動販売機で買い物をして、おつりの返却口からお金を取り出します。ぐくぐく当たり前の行動です。それを忘れてしおうことだってあります。お金持ちのミスですね。僕はお金持ちじゃないから、そんなミスを犯すことはありません。確実におつりの返却口に指を突っ込み、あわよくば地面に顔をくつむかよつとあるくらいの人間です。

さて、おつりを手にした僕は、アメリカへ飛んだ気分になりました。アメリカで見るようなコインが手の上にあつたからです。僕が買ったのが輸入品だったとも思えないんですけど、少しだけ余分にあつりが返ってきました。なんで、そんなコインがあつたのか、そんなことは分かりません。でも、旅先から、さらにまた旅に飛び立つたようで、すいしゅれしくなりました。

外国からの小銭、後から、どこかの札所で費錢になつてしましました。費錢に国境はありません……。



だんだんに夜が明けていきました。街灯も少ない足摺岬からの道も、周りの様子が見えるようになります。いよいよ本格的に第三期の始まりを実感する時間です。疲れと眠気で僕の頭は相変わらずボケボケだけど、それでも、太陽の光を浴びるところしきくなつてきました。

薄暗い中でも僕の歩いている道が「サニーロード」と呼ばれるものであることは目に入っていました。明るくなりかけの標識を見て、僕が夜中のうちに約二十八キロ歩いていたことを知りました。いつの間にか歩いているモンなんですねえ……、などと考えながら、あ、その道が名づけられる由来が明確に分かりました。正式には「国道三二一号线」だと思われます。そして、「三」だから「サ」「二」だから「二」「一」だから「イ」となり、合わせたら「サニイ」になるんですね。ぼけた頭で、必要以上に納得してしまいました。

ダジヤしつて好きです。何か言うたびに「あやじギヤグ」とも言われますが、それでもいいんです。国語的なセンスで考えれば、それは掛け言葉なんです。昔からの日本の伝統文化なんです。頭を使わなければできない高等技術なんです。……いや、分かつています。僕のユーモアセンスの欠如が救いようのないダジヤし発生の原因になっています。でも、努力は認めてください……。



鯉や鮎は泳ぎ続ければ死んでしまうんだと聞いたことがあります。じゃ、眠らないのかというとそうでもなく、泳ぎながら眠っているみたいですね。器用なモンです。人間が同じようなことをしようとしても無理です。少なくとも僕には無理です。バイクでは走りながら眠つてしまふこともあるし、信号待ちをしながらバタンと倒れたりもありますが……。

歩き遍路の最中といえどもそれは例外ではなく、僕はとにかく眠たくなる人間みたいです。このときも夜間ウォーキングをしており、いつの間にやら道の真ん中を歩くこともしていました。フラフラしている自分の感覚がなんとなく分かり、これはイカシムと思いながらも打つ手がなく、結局ヨレヨレの状態で進んでいくわけです。毎晩、普通に起きていても眠つてて見るより見えてしあう僕の目だから、眠くなつた時の僕の目なんか、発見するのも難しくなつてしまつぱりです。なのに、鯉さんたちは、カツと目を開いてこれでもかと泳ぎ続けるんです。体の三分の一くらいの大きさまで目を開いてしまつ鯉が道端にいるのを見たときには、感動して僕の目も二三度くらいは大きくなつたかもしません。そして、居眠り注意を呼びかけてくれました。さすがは鯉です。

どんな方法でもいいんだと思います。注目してもらいたいけど、その役割を果たすことが肝心なことなんだと思います。



こっち側とあっち側、何だかよく分からぬけど、明らかに違う世界が存在しています。ボーッとむやもや漠然と違う世界です。あっち側といふことは彼方の岸、彼岸ということになります。インドでは聖なるドブとして有名なガンガーだったら、あっち側の岸には人の気配が全くありません。最大の聖地と呼ばれるグラナシの様子です。こっち側では人々が洗濯をし、体を洗い、身を清め、死体を流し、ウンコをし、そして、うがいをします。修行僧から貧乏旅行者まで、いろんな人がいろんな思いをもつて様々なことをするのが、こっちの岸でのことです。小舟に乗せてもらつてあっち側へ様子を見に行つたら、ホント何もありませんでした。あっち側、彼方の地、彼岸……、そんな名前をもつ花、彼岸花。誰がそんな名前をつけたんでしょう。ワサワサとした草の中でも凜として咲いている姿は、何ものにも搖るがない芯の強さを感じさせてくれます。世の無常を知っているんでしょうか。モノクロの世界では分からぬけど、赤く輝いていました。

諸行無常……、僕はそんなことを理解できずに生きていました。そりや、言葉は分かるけど、実感として分かるほどに立派な人間じゃありません。お四国といふ輪廻を巡りながら、まだまだ修行の身、分からぬことだらけです。ま、僕にそれがしつかり理解できたら、世界がひつべつ返り咲くのですけどね……。



ビリビリしひれる。

原子力って人類にとつてプラスなんでしょうか。ものすごい電力を生み出すこと、やるなあ、って感じです。まさに核の平和利用です。平和なときに平和な電気が生まれてくることは、すばらしいことだと思います。じゃ、その平和が崩れたら……、悲劇が待っています。そんな確率は低いとも思うけど、ゼロパーセントじゃないんですよね。 Chernobyl の事故だつて起こったし、ちょっとこちよこと事故が起きて一コースになつています。そう考えたら、臆病者の僕は原子力発電所のそばには住みたくないありません。

牛力って人類にとつてプラスなんでしょうか。牛が発電するわけじゃないし、めざましい効果は見えないように思います。それでも、可能性つてヤツがあるんです。「牛力による林地等の周年管理システム実証実験」と看板には書かれていました。牛が草を食べることで、下草刈りの労力を軽減しようとしているものなのよつです。やるなあ、つて感じです。

牛たちは電流の流れる囲いの中でウロウロしていました。電流爆破のプロレスみたいに闘ついたら、もつと下草をたくさん食べるんだろうけどなあ、それに、牛たちがコブラツイストなんかの技を繰り出していたらおもしろいんだけどなあ、とぐだらないことを思つてしましました。

のんびりと世の役に立つ働きができるならいいと思つます……。



田の前に馬があり、それがクルクル回るのも分かるような情景でした。それなのに僕の頭にはグルングルン縦回転するカゴがイメージされていました。すべて、そこにある小ささがいけないんです。

電気のコードが自分の命の源を求めるべく、ひょろひょろと横たわっていました。そのコードが電源にまで届いていたら、小さなメリーゴーランドは回っていたんでしょう。もしも、夜であれば、子どもりを夢の世界へと導いてくれたのかもしれません。でも、僕が見たのは風、誰もない場所のことです。以前、どこかの国で、やっぱり小さい小さい、その時は、観覧車を見ました。グルングルン縦回転して、そこじくついていた蛍光灯の光をギラギラんぶりまいていました。小さな遊具がガツチリ結びついて、僕の頭の中では遊園地になってしまったのです。

田の前にいながら、ありながら、心でとらえられないことがあります。しばらく前まで関わりのあつた人たちが、今、自分の前にいながらも環境が変わったことで、無関係の人になってしまふ経験……。田の前にいるのに直接関わることのできない種類の人間になつてしまふということ……。僕は、そんな簡単に気持ちの整理をすることができません。不器用なかもしれないけど、それならそれでいいと思えてします。



2005.9.24.

眼洗井戸

僕の眼は何を見ているんでしょう。節穴かもしません。見るべきものが見えず、見えなくてもいいものが見えてくることがあります。自動感知センサーが故障している感じです。

学校みたいな視力検査をすると、印を見る以前にどいを指しているのか分かりません。一步前に出て、やるにもう一歩前に出て、だんだんに検査可能射程距離圏内に到達です。いつからこんなに視力が落ちたのか……中学の後半くらいからです。原因も単純明快、マンガの見過ぎです。本当だったら勉強のし過ぎといきたいところだけじ、あまりにうそがひどいのでそれは無理です。勉強は大きらいでした。今でも勉強はきらいです。特に受験勉強のような機械的にものを見るような勉強は拷問にしか感じられません。で、中学生当時は、ひたすらマンガへと逃げていたんですね。

視力回復センターなんてものがあって、そこへ通つている友達もいました。僕は……無策でした。まあまあ視力は落ちてきます。何かできることをしておけばよかつたと思つても後の祭りです。今からでもできることがあります。お金はかけられないですけど……。だから、第三十九番札所の井戸水が眼病に効くと知り、とにかくも洗眼してみました。

第三十八番札所から六十キロ弱、久しぶりの札所です。眼の大



疲れた体には温泉が一番、何よりも幸せな時間がやつてしまおむ。最近はスーパー銭湯などと呼ばれるお風呂屋さんも増えてきて、夜遅くまで大きな浴槽につかって体を癒すことがであります。ガイドブックにも載つているような所だから、と油断したのがいかませんでした。

足は棒のようになり、なかなかスピードをあげて歩くことができません。無理しようと思えれば走るといともできるだけだつたけど、弱い心に打ち勝つことができず、結局はダラダラ歩いていました。

第三期歩き遍路は三連休を利用した短期決戦です。だから、そんなに慎重な歩き方をしなくても大丈夫なはずでした。コースケの葬式に参列してから浜松を発ち、お四国へ着いたのがその日の夜。歩き始めたのは翌朝だから、実際に足を使うのはたったの二日間だけです。一日間だけで壊れてしまうほどに弱い足じゃないし、そんなにハードな道でもあつません。でも、なんか疲れます。チャリダーに変身した時も、始めた一田田や二田田は体が対応せず、非常につらじひと感じられます。三田田以降、おとはほとんど同じ感覚で進むことができます。歩き遍路にも同じことが当てはまつたのかもしれません。歩くことの少ない日常から突然ひたすら歩くだけの生活へ、体がついてこあからんでしました。

それにしておあと五分……。営業時刻を調べておべぐめでした。



写真を撮る時、わざとその構図を考えました。『』っていいる文字は「あほのグランド」となつています。

僕の友達で、好きな人間は「アホなヤツ」、きらいな人間は「本当にアホなヤツ」とプロフィールに書いていた人がいます。これはなるほど納得でした。自分のアホ加減を客観的に理解できている人は、そのアホ度を踏まえてアホの姿を披露することができます。自分のアホ加減が分からない人は、救いようのないほどにアホの醜態をさらすことになります。見ぬに耐えません。

さて、このグランドを使用できるのはどんな種類のアホなんでしょうか。最低限のルールを守れることが条件になると感じます。とすると、ある程度の冷静さを持ち合わせたアホでないとその条件をクリアできません。やうに、グランドという環境要因をプラスすると、活動的なアホが望まれているような気がします。「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにゃ損、損」と評されることがあります。見ているだけだつたら損なんです。活動的なアホは得をするということです。

こんなことを考えている人間の方がよっぽどアホみたいだけど、もし僕だつたら賢いだけの人間にはなりたくありません。賢くない人間のひがみかもしれないけど、アホ万歳なんです。
あ、ここは「あけぼのグランド」が正式名称でした……。



流域からは少し外れてしまったかもしねません。ま、それはそれで構わないでしょう。近くを歩いているんだから五十歩百歩です。憧れの清流、四万十川のぬをむつおにぎりです。

旅路では行く先々とに何かしらの名産品があります。静岡といえばお茶とみかん、というような感じです。その場所ならではの収穫物があり、そこでしか味わえないようなおいしさが詰まっています。水や土、空気や気候、様々な要因が折り重なっていて、オリジナルの風味が誕生するんですね。

カヌーに乗つてみたいと思いながら、いまだに経験したことがないません。そして、カヌーにうまく乗れるようになつたら、ぜひ四万十川をゆっくりと下つてみたいと夢見ています。上流から下流までずっと川の流れに身を任せて時間を過ごしてみたいんです。歩きの視点とは違う視点で物事を見られそうな気がします。

四万十海苔のおにぎりを自分の口で食べていきます。僕にとって「食べた」という事実は大きな意味をもちます。何事も経験していくなかつたら偉そうに語ることができません。実際に経験してこそ思いを込めて語ることができるんですね。そり、思いを込めて語ります。……コツツーのおにぎりじゃ、感動すらほどのすぐさは味わえませんでした……。

ほんぽこ。

人間は…

最近 ごは
狸 さえも、信するものがあるらしい。



僕は何をやつてているんだろう、と考え直します。たかが狸の置物ごときにたくさんの時間を費やしてしまいました。考えた末、思い当たることが浮かんできます。それは、お参りの人たちが僕の横を通るという事実があつたことです。要するに絵を描いている自分の姿を、「どうだ、かっこいいだろ」とばかりにアピールしたくなってしまったんだと思います。絵が上手なわけでもないのに自信過剰です。ついでにいうと、久々に絵を描いたから、手際よくできなかつたといつともあつたのかもしません。

モデルの狸は笠をかぶり、経本を持っています。僕なんかよりもずっと信仰心が厚いように見えました。首を少しかしげてお参りする姿は、何も考えていない僕とは違う、思慮深さを醸し出しています。第四十番札所の狸です。

人が心の支えにするモノにはいくつかあると思います。世間一般に広く支持されているのが宗教というモノに当たるわけです。特に世界三大宗教は、誰にでも門戸を開いていて寛容さがあります。信じるか信じないかは個人の自由です。信じた時にどれだけ信じ抜くことができるか、そこに信仰心が見て取れます。僕はお経を読んでお四国を回っていても、強い信仰心はありません。逆に、僕が一番信じているのは何か考へても答えは出ません。あるがままに物事を受け止めて生きていけば大丈夫です。



ものすごく大変なものを見てしまった、異様なものを見てしました。たような感じでした。何よりもその眼……得体の知れないものが宿っていました。

僕の前に現れた像は、激しく何かを訴えてきました。人の命といふものを感じ、自分の感覚が研ぎ澄まされていたことにも何か原因があったのかもしません。本来ならいるべき人がいない、本来ならあるべき所にない……、そんな違和感を体が敏感に察知していましたようにも思います。

世の中には、物理的に見えてはいけないモノが見えてしまう人がいるみたいです。あの世のモノたちを近くに感じる人たちです。僕にはそんなセンスがありません。僕に見えるのは、物理的に目の前にある物です。

左目と右目、様子が全然違いました。左目は非常にきれいで透明感があり、白黒のコントラストがはっきりしてしまいます。右目は、よじんだ光にくすんでいます。白があり黒がある、当然といつてはすなのに違つんです。対極的な両眼が並んでいました。

逆に考えたら……、／＼あくまで右目は物理的に見えない物をキャッチする眼なんでしょうか。その眼をもてば、この世を旅立つた魂が見えるんでしょうか。もしでもゐなひ、その眼で見つめ、この世へと戻したい魂があるのですが……。



お四国は水がきれいでした。それは川であり、海であり、自然の美しさに直結するものです。天気がいいと美しさが際立つて、それを見ているだけで幸せな気分になります。

きれいな水上に浮いている建物がありました。人間が住んでいるわけじゃないと思います。きっと物置です。魚を捕るために網だつたり浮きだつたり、生活を支える道具が詰まっているんだと想像しました。もしも、僕が海上の建物に住むことになったとしたら……、毎日お魚さんたちに餌をばらまく人になってしまいます。自分が食べた物を細かくして口から海へと放出するに違いません。あの、絶えず揺れている感覚の中で普通に生活できるとは思えないんです。

世界のどこかには、水上の家で生まれ育ち、死ぬまでゆらゆらした環境で過ごす人たちもいるんだと聞きます。生活環境には体が適応していくものみたいですね。逆に水上の民が陸上で生活を試したら、おかしくなってしまうかもしません。僕らが思つていい当たり前の生活は、場所によつては全くそういうこともあります。物事を一面だけで考えるのは危険ですね……。
ちよつとだけなら海上倉庫で暮らしてみたいとも思いました。朝、起きて一番に海へドボンと飛び込んで浮遊感を楽しむんです。ホント、ちよつとだけなら、こんな幸せなことがあります。



アシヒコの魚は味がいいからこんな夕前がついたんだと聞いたことがある。僕にとってアシヒコを一番に感じられるのは干物です。それで、骨ほりつけた、あのペリペリの部分をめくつて食べるのが最高にうれしいと思える、そんな魚です。他の食べ方としては、刺身がいいですね。透明感のある光に満ちた刺身に醤油をつかひ口に運んで七ヶ七ヶあるいは、適度な弾力が歯を押しつぶさないでこそね。アシヒコの味が口中に広がります。

刺身にあるのに鱗度が大切です。でも限ったくぐられぬ直前まで生きてるヤシガおいしいんですね。料亭の氷槽で泳いでいるヤシガ、人間にとって都合よくおこしこヤシガを演出します。もしや、夜に家で食べたいと思つたら、タカハシの水から揚げられておな板へ向かうのがいい頃合いになります。その条件をかなえるために、一十四時営業の魚屋さんが作ったのステキです。看板には「24時間セルフサービス」と書いてあるのです。これなら鮮度の高い味を手に入れないとダメですね。……つい、どんなステムなんでしょう。想像もつかないですが、「自分で捕まえてください」ついでにうつせんかね……。しかしして、釣り堀でしょつか。何にしてわいのやつを宣伝文句を考えた人は天才だと感じます。発想力が抜群です。発想力がX群の僕とはえらい違いですね……。



「さくら」マイ・スペース。

夢の寝台特急にも乗り慣れた感があります。自分の場所が確保でき、しつかり横になつて眠れる列車のステキさが非常にいいんです。それで、眠つている間に僕を浜松まで送り届けてくれるんだから、こんなおいしい話はありますん。

一応、まだワビにはならず、職をもち、お金をいただいている身です。三連休をつかつてお四国へ行くのは、かなり厳しいスケジュールだけど、自主的に四連休にしてしまつたら自分の席がなくなっていても文句は言えません。ただでさえ働きが悪いのに、自分勝手なことなどでもねつけてはいけがないんですね。この寝台列車が浜松駅に停車してくれることに大いなる感謝です。

だんだん外が明るくなつてきます。そもそも、僕が乗車した時、この列車は十五分ほど遅れています。この遅れが広がつていたとするべく、僕は仕事に遅刻してしまつります。時刻表によれば、六時三十分に浜松駅到着となっています。それでも少し焦る必要があります。仕事が始まる時刻は八時十五分、二時間弱しかつなぎの部分がない状態です。逆に考えると、僕はこの上ないほどに上手な時間の使い方をしているつてことです。お四国遍路のためなら自分のもつている力の全てを注げる感じをえました。思いつくのはじんな場合でも必要なんですね。

何はともあれ、第二期の前半は終了してしまいます。



第三期後半戦開始……、それは勤務時間終了後すぐに突入していきました。まずは大阪を目指します。大阪から宇和島までの高速バスに乗り込みます。本当はその先、岩松までのチケットが欲しかったんだけ、「ない」とのこと。一台田のバスを増発してくれただけでもありがたいし、夜の寝ている間にお四国へ向かい、朝には少なくとも宇和島に着いているんだから贅沢はいえません。

夜中、バスは走り続け、気がついた時にはお四国にいました。宇和島です。一台田のバスに連なるように走ってきた夜の旅もあしまいで。……ん？ そこで挑戦する価値のあることに気づきます。一台田からも乗客が降りていている……ということは、空席が生まれ、僕が乗車できることだって考えられます。一台田が出発する前に係のあつちやんに交渉です。結果はすんなり成功。「車内補充券」という物を作ってくれました。追加料金は五百十円、お手頃価格です。いそいそと乗り込みました。さすが、この年、ペナントレースを制した球団系列だけのことはあります。

他者との交渉って、ものすごくエネルギーが必要になります。疲れるんです。でも、その壁を乗り越えた時、何かのプラスが自分に訪れる……ともたくさんあります。ダメで元々……という感覚で、もつと気楽に交渉すればいいんですよね。もつともつと自分のエネルギーを外向きに発していく必要があるのかもしれません。



一般名詞としてではなく、固有名詞として僕にとっては大きな意味のある名前を目にしました。「とまり木」です。

学生時代から僕がずっと行ってみたい場所がありました。それは屋久島です。屋久島へ行って縄文杉に会いたい、という願いがずっとずっと僕の中で温められていました。初めて行つた屋久島、僕はチャリダーとして乗り込みました。だから、ライダーハウスという場所に宿泊することには全く抵抗がありません。テントを張つて一泊七百円です。屋内のベッド泊だったら、一千円……、朝食付きは魅力的だけど、僕にとつては七百円のテント泊で充分です。そのライダーハウスには様々な種類の人間が寄り集まつていました。とても人間くさい宿という空気を醸し出しています。夜な夜な何かを真剣に語り、宿泊者みんなで餅つきをし、年明けソフトボール大会を行い、みんな仲のいい宿でした。そんな宿の名前が「とまり木」だったんです。思い入れの深い固有名詞なんです。

お四国に同じ名前のお店がありました。屋久島の「とまり木」とは全然関係ないと思います。でも、その名前を見ただけで、僕はうれしくなってしまいました。難しいことは考えなくていいんです。ほんの少し、羽根休めができる「とまり木」のような場所の存在がうれしいんです。ステキな名前に感謝です。



わうと昔から、僕はでんでん虫が好きです。何とも愛嬌のある姿だし、ゆうぐりゅうへりへり進んでいく雰囲気があなたの奥の方をポカポカさせてくれるような感じがします。

ふと、足もとを見たらでんでん虫がいました。小さい小さいでん虫でした。お杖を横に並べたら、大きな壁になってしまいくらいの大きさのでんでん虫でした。そいつはちよつとずつ歩いていました。いや、そもそも歩いているという表現は間違いなんでしょうが。進んでいました。

僕はどんな時でも前を向いて進んでいたいと思つていました。もちろん、時々悲しいことがあります。落ち込んだりすることもあります。でも、そこで立ち止まることがないよつてしていきました。ほんの少しだけ立ち止まつてしまつて、ああ……と、どよどよして、それでもまた前を覗き直します。僕の前に何があるのか、よく分からないうともかならなくやんあります。どうも、僕は先のことを見通すのが拙手なんです。行き当たりばつたりで、本当にバッタリ倒れてしまいそうです。倒れそうになりながら、あつといと……と自分を支えながら生きています。見ている先は前です。具体的にはどこのか分からなくて、とにかく前です。

でんでん虫は前へ前へと進んでいました……。



特別に有名な所ではありません。一般的なバス停です。僕以外のほとんどの人にとっては何てこともないバス停だと思います。そんなモンです。それぞれ個人の感じ方次第で、人の価値観なんて高くも低くもなるってことです。

写真や絵の価値観なんて、本当に見事にバラバラなんじやないかと思います。だから、僕は自分の価値観に自信をもって写真を撮ります。後から、撮った理由も分からなくなつたとしても、それはそれで価値があるはずなんです。僕がこのバス停の写真を撮った理由は……、「ここ」が第三期歩き遍路の前半後半をつなげる場所だったからです。

前半最終日、できれば宇和島まで歩いてあきたかったんだけど、もし、それを実行していたら僕は仕事を失つたピータローになつていたと思います。むしろ、その方が幸せだったかも知れないけど、もう少しは働きたいという未練があるから仕方がないません。つなぎつなぎの区切り打ち、お四国を一つの輪につなげていくために前回打ち止めになつたバス停までテクテク歩きました。朝早かつたので、バスには乗れず、この区間だけ逆打ち遍路です。そしてまた、偶然にもタイミングよくバスが到着したので、その日の逆打ちをバスで順打ちして進み、いよいよ本格的に第三期後半がスタートしました。



古代人だろうが、現代人だろうが関係ないような気がします。いつの時代でも人の感情には普遍性があるんじゃないかと思うんです。特に、命というモノを肌で感じ取った時には、いつでもどこでも誰でも心に波が押し寄せるんじゃないでしょうか。

新しい命がこの世に産まれ出てきた時、やさしくて温かくも力強い波が心の中に広がります。予どもは宝です。これからという時間を体一杯に可能性という光に輝かせます。命が肌を震わせます。

消えゆく命の灯が灭いた時、虚無が冷たく激しい波になつて心を碎きます。それがどんな形をとつていても、周りに大打撃を与えます。それが突然のモノであれば、その影響は果てしなく大きく広がるモノになるはずですよ。

でも、現代人は命を実体のあるモノとしてとらえることが苦手みたいですね。命がつくり出して心に起こした波も、いつの間にか忘れてってしまいます。だから、現代人には適度に命の存在を思い出させてくれるようなお墓が必要なのかもしれません。どんなお墓がいいのか分かりません。僕としては、自分に少しでもプラスになるようなきつかけをくれるお墓があつたらありがたいと思います。地球よりも重いといわれる命というモノを、少しづつ思いい出させてくれるようなお墓があつたらあうがたいと思います。



古代人だろうが、現代人だろうが、人間だろうが、ゴジラだろうが関係ないような気がします。……えつ、ゴジラは守備範囲外じゃないですか。ペット霊園の前には墓石が並び、厳かな雰囲気が漂つてはいるんだけど、何か違和感がありました。亡くなつた犬を偲んで犬の像を建てたり、猫を偲んで招き猫の像を建てたり、そこら辺はありそうな気がします。でも、亡くなつたゴジラを偲んで……なんて話は聞いたことがありません。

そこにはゴジラの像が立つっていました。しかも、一体のゴジラ像です。世の中には「ゴジラをペットにしている人がいるんでしょうか。僕の身の回りにはいないんですけど……」

僕自身は本格的にペットというモノたちを飼つたことがないのに分からぬけど、愛情を注いだペットが亡くなつたら、それは悲しい思いをするんだと聞いたことがあります。知り合いの家では犬を飼つていて、その家へ行くと必ず僕と遊んでくれるやツがいます。かわいいヤツです。確かにヤツが亡くなつたら悲しく思います。それに、よく考えたら、犬も含めてペットにされるようなモノたちは人間よりも寿命が短いような気がします。ほぼ確実に僕ら人間が彼らの死に向き合うことになるんです。家族の一員として生きてきたモノが亡くなることは悲しいことです。僕は……悲しい思いをあんまりしたくありません。



そういえば焼津神社にも鳥居があつたなあ、などと思い出しました。入り口には鳥居があります。……て、それは神社というモノであつて、お寺とは違うんじゃないかな……と、一人でボケとツツコミを組み合わせていました。なんだかなあ、寂しい感じです。

僕は第四十一番札所にたどり着いたはずでした。参道と思われるモノが伸びています。向こう側には朱色の山門も見えるような気がします。なのに、入り口にあるのは鳥居なんです。まあ、どうでもいいことです。前へ進んでいくんです。

神様仏様……と、窮屈でお願いする言葉に違和感を覚えません。これは僕の感覚です。そんなにいつもそんな言葉を唱えているわけじゃないけど、神様と仏様は似たようなモノであり、どこかが違っていても、別にどうでもいい話なんです。神仏混淆という日本独自のツケの分からん状態によつて僕の感覚も作り出されたんだと思います。

とにかく、偉大なモノを尊重しようといつづれ持ちがあります。神様や仏様を直接信じているんじゃありません。でも、それが長い間人間の中で敬われてきたことは事実です。だから、何かすごいことが含まれているんだろうと思つんですね。理屈では説明できないことでも、大切にすべきことがあるんだと思うつています。これからもういろいろなへんてこへお願いします、神様仏様……。

じいの札所へ行つても同じような顔をした人が立つていて、「(ちり、本堂」とか「(い)から、大師堂」などと案内をしてくれました。僕は勝手に「お大師くん」と名づけていました。



めくもつ

平面のお大師くんが

ふわふわの帽子をかぶっている。

平面ではあるけれども
彼はいつもほほ笑んでいる

なぜか
あたたかい

2005.10.8

みんな同じような顔をしていましたが、この第四十一番札所の彼は少しだけ様子が違いました。何とも温かそうな雰囲気を漂わせていました。もともと、本体は板きれで、べつたんじです。そこに丸みを感じ温かさを感じたポイントは、一つ、帽子をかぶっていたというだけが原因です。毛糸の帽子を頭にかぶつて、フカフカした感触が僕に伝わってきました。僕自身はチクチクするような気がして毛糸製品は身につけないけど、他の人の姿を見るだけで温かくなれるんだから、かわいい製品です。恐るべし毛糸。物事には何かしらポイントがあります。それが外せないし、そこを外したら以て異なるものになってしまふ場合もあります。僕はよく、「(い)だかね……」といつといふを外して惨めな思いをします。周りからも「他はほとんどいいのに、なんでそいつを……」と同情されたりします。間が悪いというか、要領が悪いというか、とにかく情けなくなります。僕とは逆にポイントだけを押さえて要領よく社会をわたつていぐ人もいるんですね。僕はあるいな、と思いながらそんな人を見ます。人間的にどつちが上なのか、分かりません。でも、僕は僕のバカさ加減がキライじゃありません。

見えない……。



ある程度、近くに札所が集まっているエリアだなあ、と感じながら歩いてしまった。心地よく次の札所が現れてくるから、歩くモチベーションを高く保つことができたのでした。

もし、次は……と歩きながら、僕は遍路道表示をあてにして探し出す。ガードレールやら電柱やらに矢印のマークがついていることを当たり前に思うようになっていました。それから、道路標識です。青地に白文字で書かれたヤツです。前方に道路標識発見、確認を忘れる。何か書かれているけど、イマイチはつまら読み取ることができません。また一段と視力が落ちたのかと、悲しくなります。さらに近づいても文字を読み取ることができません。頭も一段と悪くなっているようだ。さらに近づいて……、ダメだ!! や……とつぶやきました。表面がはがれかけてしまった。寺の名前を知っている者として、かるべじて「仏」「木」「寺」という文字が読めたよつな気がしました。意味があつません……。

普段仕事をしてくると、自分の力のなさに悲しくなります。何かをやるうとしている自分がいるんだけど、それが何の意味もなかつたりあるんですね。こぐらやつても無駄な仕事であり、もっとやるべき仕事があるはずなんですね。優先順位が分からないんですね。何ひなく坂つづり、それでも仕事のでもが、自己嫌悪です……。一応、自分なりにねやつてこむつむつの僕を認めてください……。



ひょえ〜面倒くさ〜……と思いながら、それでも僕の興味はその方向へ向かつてしましました。絵を描き始めた重なりの部分を上手に表現できない自分にイライラ感まで上乗せされていきました。どこかのおっちゃんは「珍しいよねえ」などと言ひながら、パチリと写真を撮つて終了です。

夕方になつていのし、次の札所まで歩くことは無理だし、のんびりと絵を描くことにしました。何層にも何層にも積み重なつた茅葺き屋根を持つ鐘楼の姿がとても新鮮に感じられました。今までも、もしかしたらこんな様式のものがあつたのかも知れないけど、意識して見たのは初めてのことです。茅葺きの屋根は維持するのにものすごく金がかかると聞いたことがあります。古くなつた屋根を葺き替えるのにかかる費用と手間は半端じゃないみたいで。それを本堂ならともかく、鐘楼の屋根を維持せらるのにはそれなりの熱意がなかつたらいいよ! な気がします。

熱意があつたら何でもできる……ホントかウソか……。実は僕、これはウソだと思っています。気持ちだけで何でもできるわけがないと思うんです。でも、熱意がなかつたら何もできないというのはホントのことでしょう。そして、熱意があつたらかなりいろんなことができてしまうこともホントでしょう。可能性を引き出すための熱意、それを大切にしてきたいと思ふます。



何事でもひとまず疑つてみるのは僕の思考回路として普段からよく行うことです。疑つてみると、物事の本質を見抜く一つとする方法だと思います。

田の前に現れたのは「もつじのは最初だけ」という言葉です。当然、疑いの対象になります。甘い言葉にだまされではないかません。「きつじ」と思いながら登ったのは誰なんでしょう。しかも「最初だけ」そう思つたなんて、アンケートで調査でもしたんでしょうか。何人が登り、何人がそう思つたんでしょう。ただ単に言葉を書いた人がそう思つただけじゃないんでしょうか。さらにガイドブックを見ると、この先には鎖場という表示がされています。疑いはますます深まります。

根性がひねくれていますね……。折れ曲がつたらせん階段のようです。いやいや、純粋に疲れていただけなんですね。これ以上精神的ダメージを受けたくないなかつたんですね。事前に大変だと思つてあれば、後から多少の大変さが現れても「ああ、この程度か」と思うことができます。ショックアブソーバーってやつです。実際にこの道、鎖のある所が登場しました。でも、僕が受けた衝撃は微少で済みました。山道も「確かに『もつじのは最初だけ』だ」と思えるくらいでした。表示のおかげです。いろいろ教えてくれる情報を印えてくれたことに感謝です。



〇〇と煙は高い所が好きなんていいますが、僕もきらいじゃないです。高い所から見下ろす景色がきれいだと幸せになれるような気がします。だからといって、夕暮れ時に峠のてっぺんにいるという状況は歓迎すべきことではありません。前に進もうが後ろに戻ろうが、坂道を下っていかなければならぬからです。これから暗くなろうとしている山道を下るのは精神的につらいものがあります。

というわけで、美しい夕暮れを感じながら、僕はここで夜を明かすことにしました。暗くてよく見えないけど、何やら小屋があります。そこにテントを張り、モソモソと入り込みました。スマセソ、実は見えていました。そこにはお地蔵さんが祀られています。でもね、旅の途中で困っている者に助けの手を差し出すのがお地蔵さんってモノだと思うんですね。これは言い訳でしょうが。お地蔵さんと一緒に眠る安心感つけてのも悪くありません。

峠の上に一人だけ……、お地蔵さんに見つめられながら眠ると考えた時、少し怖い感じもありました。それは、少しだけです。旅の道中で一番怖いのは人間です。動物だったら、こちら側から攻撃しなければまず大丈夫。僕は怪奇現象には縁のない人間だからこれも大丈夫。何をしてかすか見当もつかない人間が最悪です。それでも、きっとお地蔵さんが守ってくれるはず……、安眠です。

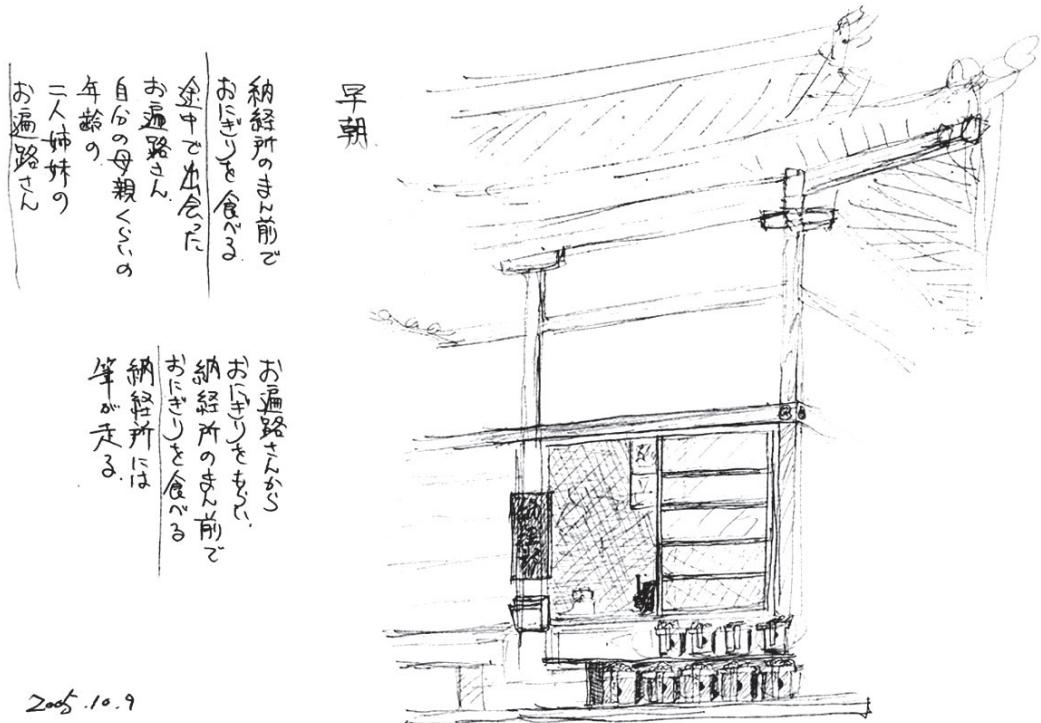


峠の上で泊めてくれたお地蔵さんは、天候まで僕好みにはしてくれませんでした。もう、メチャクチヤ寒くて耐えられなくなってしまったんです。夏に歩き始めた頃を思い出すと、季節が移り変わつていいくことを空気が教えてくれます。田頃、建物の中にいることが多いので、微妙な季節の変わり目などは感じられずにいました。でも、テントの中にいると、布一枚を隔てた向こう側は外気なんですね。肌で感じた季節の移り変わりでした。

寒くて寒くて、せひ寝ていられなくなつた僕は歩くことになります。時刻は午前三時半……、僕以外に人間の気配は感じられません。ヘッドライトの光を頼りに歩を進めました。

道の向こう側に自動販売機発見です。温かい飲み物を買い求めます……が選択肢の少ないこと……。夜中以外の時間だと、まだまだ暑い季節なんです。冷たいものばかりなのも仕方ないことです。またしばらく歩くと、休憩所発見です。そこにはカゴの中にたくさんのみかんがあふれています。小さい小さいやイズのもので、売り物にはならないんでしょう。遠慮なくバクバクいたしました。寒い上におなかが肚立つたのです。

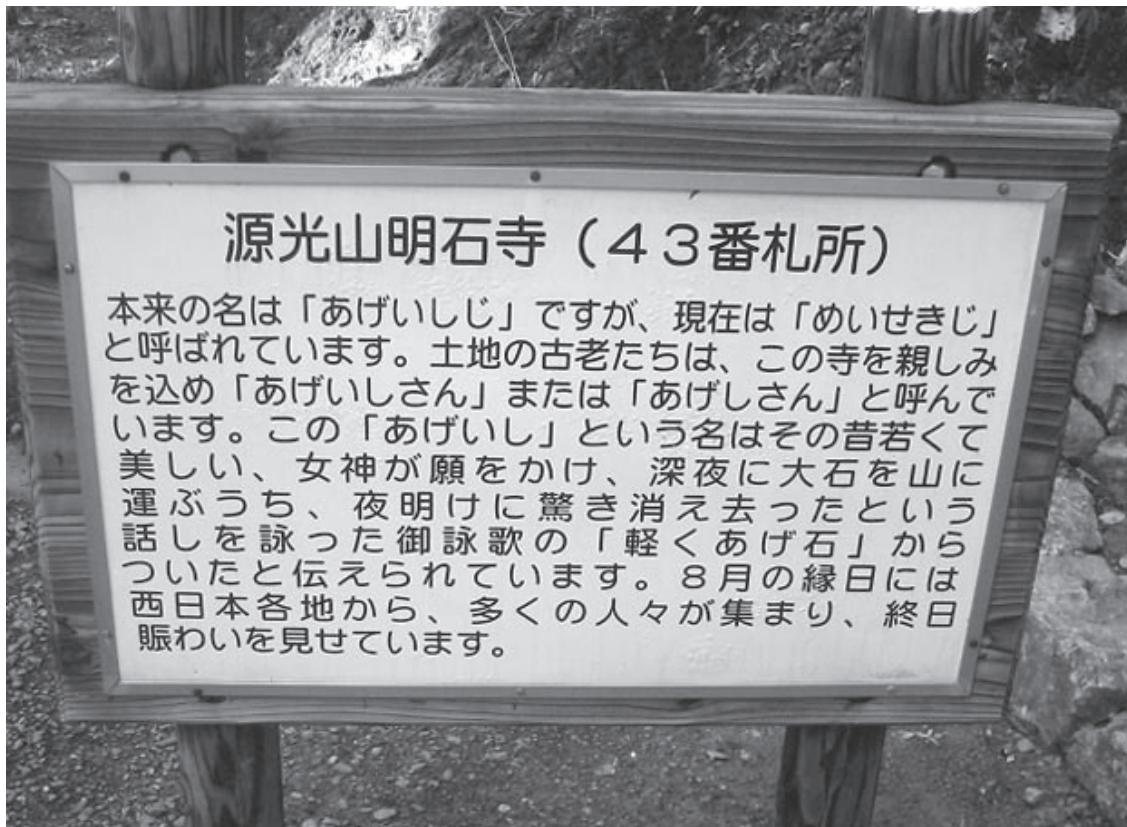
暗いうちに歩く……、短期決戦の第三期においては有意義に感じられる道のりでした。三日しか時間がないんだから少しぐらい無理したって平氣です。みかんも食べられたし、いい気分です。



朝、というよりは夜に歩き始めたおかげで、すがすがしい時間をさわやかに歩くことができました。途中、道を間違えて分からなくなっていた頃、二人のおばちゃん遍路と出会いました。この二人は姉妹で仲良く歩いているということでした。話をしていると何ともおもしろい人たちで、足取りも軽くなる感じです。あつちだこつちだ言いながら、ノソノソ歩いていました。

どうやら第四十三番札所に到着です。お参りをしてから納経所の前で一休み……、と思つたら、一人のおばちゃんが「お接待」と言つておにぎりを差し出してくれます。むう……、ついに歩き遍路の人からもお接待を受けるようになつてしまつました。相當に貧相な雰囲気を醸し出していたんだと思います。僕の辞書に遠慮といつ言葉はありません。ねじめつけめつけたくなりました。

お接待を受けたのに抵抗を感じなくなつてこの自分がこもる。道すがら「お遍路さん！」と顔をかけてもらひえたりともうれしくなります。昔からの風習とはいえ、ありがたいものです。遍路道を行く一人のおばちゃんもあちこちでお接待を受けってきたのかもしれません。そして、おばちゃんから見たら僕の年齢は、ちょうど自分の子どもくらいの年代なんでしょう。気にしてくれたんですね。ありがたいことです。自分の両親のことを考えます。親孝行をしなきゃイカンなあ、としみじみ感じさせられました。



お四国への道として明石海峡大橋なんてモノがあります。僕が下準備のためにライダーとしてお四国へ渡った時にはこの橋を使いました。本州から橋を渡り、淡路島を走り、大鳴門橋を抜けて到着です。明石です。たこ焼きの親戚みたいな明石焼きもあります。「あかし」です。

明るい石と書いてどう読むか、日本の標準時間だって「あかし」を通っています。それ以外の読み方はイメージできませんでした。ところが、ここでは「あげいし」だつたり「めいせき」だつたりと、読み方の可能性を広げています。やるな「明石」……です。

同じ漢字を書いても、読み方がいくつもあるってのはやっかいなものですね。外国籍の人たちが漢字の勉強をしたら、一番いやな種類の壁になるんだと想います。僕ら日本人にしたって、小学生でアホほど漢字の書き取りをやらされてやつと覚えられるモノだとと言えます。今となつてはあの書き取りにありがとうというお礼の気持ちを絶やすわけにはいきません。手が勝手に漢字を書くほどに宿題を出してくれてありがとう……ですか。

漢字を完全マスターするにはものすごい努力が必要になります。せめて読めるようにはなりたいモノです。パッと見て瞬間に内容をイメージできる表意文字である漢字の価値はとても高いものがあります。漢字はすうじんです。漢字はすうじんです……。



何が、おもしろいと思えることが現れました。と、ちょうどその時、何かの具合で、鏡の中から僕の顔をのぞく自分の顔が見えました。そして愕然としました。表情がない……、そんな顔を見ることとは初めてだつたかもしません。

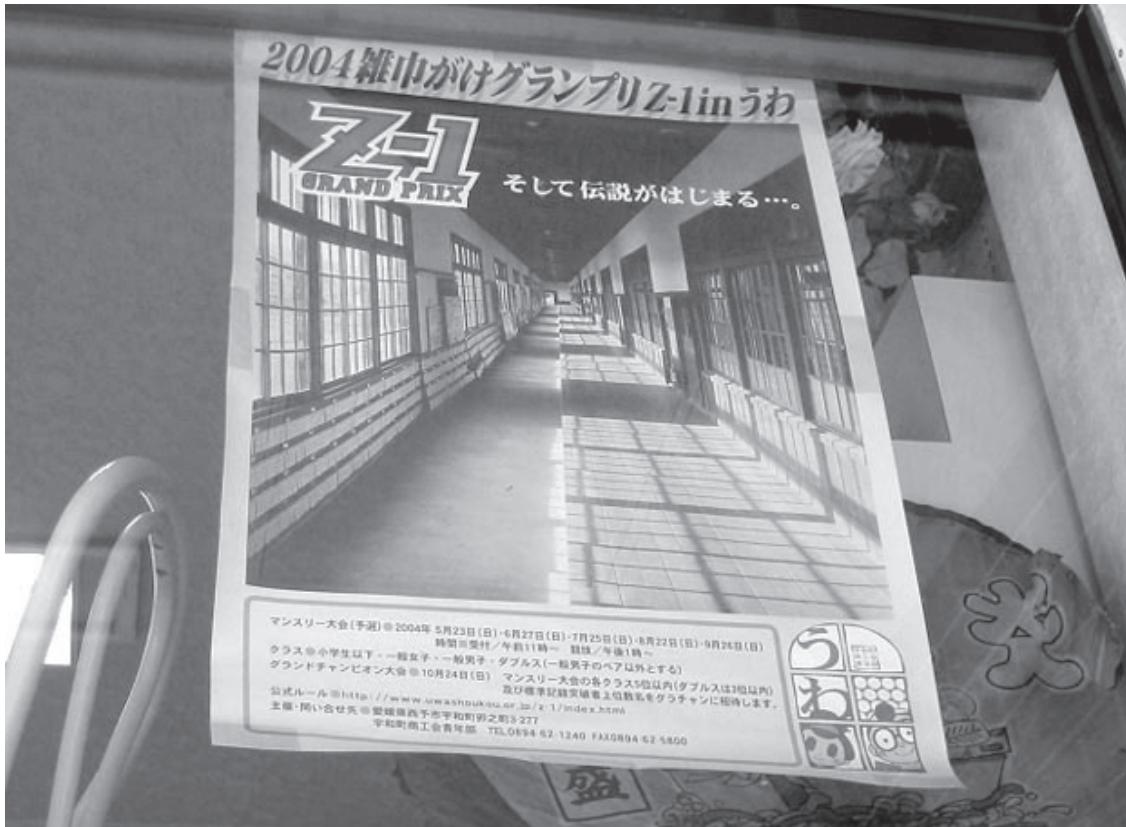
笑顔が好きです。自分のものも、他の人のものも、笑顔が好きです。自然に笑いがこぼれる時つて、やさしい幸せが心の中に訪れた時じゃないかって気がします。泣き顔は好きじゃありません。感情が高ぶつて、堰を切つたように涙があふれてしまつ時です。

僕は、その秋、お四国を目指す直前に涙の洪水にあつていました。自分も周りも、本当に涙の洪水でした。若い命がこの世から去つてしまつた悲しみの涙です。やりきれませんでした。でも、後からちよつとだけ思つたんです。涙を流すことが貴重なんだということ……。

感情が高ぶり過ぎて、涙を流し過ぎて、僕の心はヘトヘトになつていきました。喪失感でいっぱいでした。喜怒哀楽が心に届かなくなつていきました。だから、頭で「おもしろい」と思つても、それが体に行き届かなかつたんですね。感情が一番表現できる顔でさえ反応することができないなかつたんですね。表情がない顔でした。

僕よりもっと表情を失つた人たち……、そんな人たちに豊かな表情が戻るのことを願つてやみません。

すばらしきレース哉。



テレビ放送では深夜のことが多いような気がします。僕が高校生の頃、月曜日に眠そうな顔で話すみんなの話題はだいたい前の日の晚のことでした。F1グランプリの様子についてです。どこが勝ったとか、スタートの瞬間がどうだとか、コーナーでクラッシュしていくとか、こと細かく話をしていました。

スピードとしてはそんなに早くはないはずです。でも、これは白熱するんじゃないかと思われるポスターを発見しました。すごいです。初めて見ました。世の中にZ1グランプリなどというモノがあるなんて、驚愕です。Z1の「Z」は雑巾の「Z」ということですよね。雑巾がけでレースをしようだなんて、そんなことを考えつく人はすごいです。僕にはない発想力です。うらやましい限りです。

砂でジヤリジヤリの体育館はモップがけなんかじゃ効きません。やつぱり雑巾がけです。一列に並んでみんなで隙間を作らないようにはたらきます。かなりしんどい作業です。でも、バスク部やバレー部にしてみると死活問題なわけで、滑らない安全なコート作りのために絶対に必要な場合もあります。それに、このしんどさは足腰のトレーニングとしての威力も抜群です。だから、先輩後輩構わずみんなで雑巾がけです。

さあ、体育館であるいつも長い廊下であるうじ、常に真剣勝負！

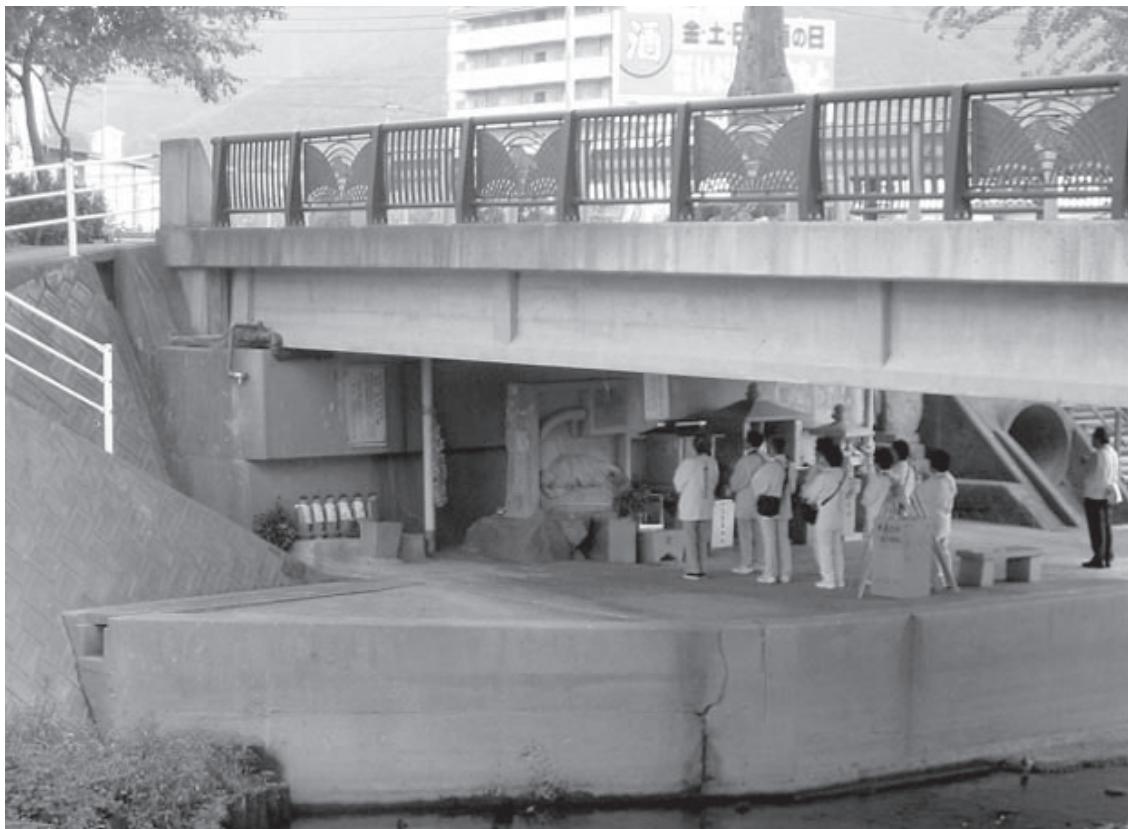


クレオパトラの鼻がほんの少し低かつたら世界の歴史は変わったかもしね、なんて言われます。美人の力はすごいものがあります。人間には元来美を求める心があるだろうと僕は思っています。どんなものに美を感じるか、それは人それぞれかもしれませんけど、それぞれの基準や判断で「きれい！」と感じるわけです。もう、本能的なモノで、どうしようもありません。

もし、メチャクチャきれいな人が道端にいたら、そりや、思わず目を奪われるんじゃないかと思います。看板に「美人多し」と宣言されたら、必要以上に期待して道端を見てしまふねうです。僕は歩き遍路だから、ゆつくりのスピードで安心してじつくり美人を眺めることができます。ラッキーなことです。きれいな人はきれいだし、そんな人は見ていろだけでも幸せになります。

美女と野獣と評されるカップルは世の中にたくさんいるようです。これは僕にとってもチヤンス、チヤンスです。僕は……野獣になりきれていない変な生き物……ぐらいの立場だけど、それでも美女と仲良くなれるかもしれない、という希望を持たせてくれるような感じがします。野獣は内面がすぐれていることが条件です。イカソ、それは大きな問題です。内側も外側も野獣に近い僕にチヤンスは……。

高嶺の花……、この言葉を胸に刻むことにします……。



高級ホテルに泊まりたいなんて全然思いません。テントで充分です。テントだったら他の人に何の気兼ねもせずに自分の空間を確保できます。橋の下が大好きです。遍路のマナーとして橋の上で杖をコツコツつかないというものがあります。そこで休む弘法さんが眠れないといけないから、といつてます。

昔、弘法さんはあちこちのお宅に泊めてもらひながらお四国行脚をしていました。ところが、何かの拍子に宿が取れなくて、橋の下に寝たそうです。それで有名になつたという橋の下には、今、石造りの弘法さんが横になっています。お約束としてはそこで一緒に横になつて写真を撮ることになるんだろうけど、そこの光景を見たらもうイヤになりました。集団で「般若心経」を唱えているようでした。橋の下まで降りてきて「わあ！」とか言ってすぐ立ち去つたおばちゃんもいました。気持ちがよく分かります。集団で何か一つのことをしているのは、日常生活の中だと気持ち悪い光景なのかもしれません。あれじや、安眠妨害です。

学校などで集団行動をします。みんなで暮らすためだからルールが必要で、自分勝手は許されないこともあります。みんな一緒であることの大切さです。でも、何より大切なのは、その一員として自分の頭で判断した集団行動なんじゃないかと思いました。



やつぱり地図はいいなあと思います。自分がどこにいてこれからどこへ向かうのか、見通しをはつきりさせるための情報がわんさか詰まっています。

僕はコンビニの前にたたずみました。そこガラスにとて親切で分かりやすい地図が貼られていたからです。鈍い頭で考えます。分かりやすく、且つ、安全な道はどこかを判断しなければいけません。おもしろみがあつたら、さらにいい感じです。時間はもう夕暮れ、徹夜で歩くための情報収集です。ガイドブックによると、第四十三番札所から第四十四番札所までの距離は、約七十キロです。そんな距離をかせぐには、必殺ナイトウォークしかありません。

ない知恵を働かせて僕が下した結論は、先に第四十五番の札所を通り、ぐるっと回つて第四十四番札所へ向かうといつ少しだけ逆打ちするコースでした。

どんな結果であろうと、自分で充分に吟味したものなら後悔はないと思います。この時、コンビニに地図が貼つてあったことが僕を納得できる判断へと導きました。情報があって、それを自分の中に取り込み、処理をすること……心の中にそれを見極める眼が必要になります。自分で決めたことだから、誰にも文句は言えません。トボトボと夜道を歩きます。



最低でも一つ、僕はパンを荷物の中に忍ばせねよつてしていました。いつでもどこでもお店に出会えるわけもなく、出会ったお店が閉店後だつたりすることも多いし、そのまま食べられる食糧にありつけないこともあります。車にはガソリン、人間には食糧という燃料が必要なんです。なくなつたら動けなくなります。食べ物は常備する必要があるんですね。

これからナイトウォークで山登りです。食糧も調達しました。と思つて歩き始めたら夕食中のモノがありました。ガードレールに陣取っています。充実の時なんでしょう。近寄つてカメラを構えて何の反応もなく、集中しているようでした。何を食してあられたのか分からぬかび、他者の命を自分の中に取り込んでいる姿です。クモが何かを食べてござました。

お肉屋さんで買う時は「お肉」という商品を手に入れることができます。魚屋さんで買う時は「お刺身」だつたりします。そのモノたちに命があつた時のことは遠い過去のことになつている商品です。牛を殺したり、鮪を殺したり、命を奪うこととともに残酷だと語ることもあります。その場に立ち会うことの回数が少ないから、自分のことのように感じられません。でも、僕らは確実に他者の命をいただいています。クモが何かを食べる姿も、僕らがお肉や魚を食べぐるのも同じこと……、感謝していただきます。

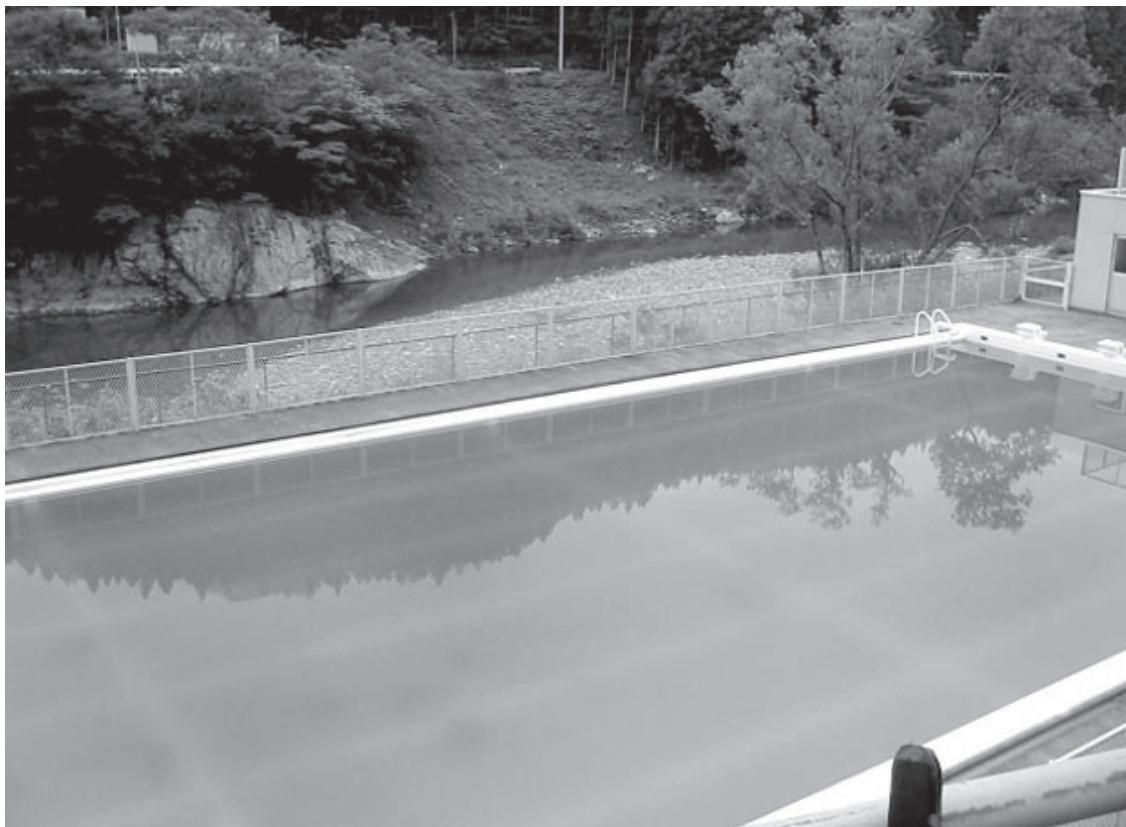


ピカピカ……と光るうちの「ピカ」の時をしつかりねらわなければいけません。工事中の点滅灯です。なかなか難しいモノです。僕のデジカメは鈍くさいので「エイツ」と思つた時にシャッターボタンを押しても「カシヤツ」というタイミングが合わないんですね。何回か挑戦して光のラインを撮影するのに成功しました。ま、デジカメだから成功か失敗か、すぐに判断できることが不幸中の幸いといったところです。

光が闇に浮かび上がる、きれいに浮かび上がる……それだけの時間になつていました。山道をひたすら歩き続ける計画です。でも、その道は「フンブー」の地図で確認したことによると、アスファルトで舗装されているはずだし、危険はそんなに多くないと思われます。つらいのは睡魔との戦いです。夜は眠る時間なのに歩き続けるんだから、もともと無理がある計画なんですね。もっと自然の摂理に従つて生きていきたいモノです。

街中で生きていると、昼なのか夜なのか、分からなくなつてしまふ時があります。常に明かりがある世界です。不自然な感じがします。本来だったら、もっと生き物として正常な時間の過ごし方をしたいんです。夜を夜として感じられる世の中を不便と感じないような生活に憧れます。

徹夜で歩く人間が夜を感じたいなんて、矛盾だらけですが……。



水遊び、大好きです。とにかく水の中にいたりられるだけで幸せを感じられます。学校の授業で体育は好きじゃなかつたけど、水泳だけはキレイじゃない時間として過ごすことができました。もちろん、その後の授業に関しては眠くなるし大キレイな状態になるんですが……。

小学校、中学校と義務教育を受けている期間、夏休みにはプール解放の時がありました。じつlich夏休みはやることもなくヒマはもてあましていたので、かなりの回数でお世話になつたような気がします。高校へ入つての夏休みは……、勝手に入り込みました。受験をひかえた三年生の夏、勉強をするという名目で学校へ行き、プールに入つていたことを思い出します。何にしてもタダで、お金を払わずに水遊びができるひとが幸せでした。

夜通し歩いた道のりも、だんだん明るくなつてじきます。周りの様子が見えるようになつてきました。渓流が水を美しく流しています。所々に淵があり、飛び込んだら魚たちが元気に泳いでいるのです。なのになぜ、そこにはプールがあるのか……。ナンセンス……、と思われるを得ませんでした。あれいな流れがあるのに、コンクリートで固めた箱の中にわざわざ水道料を払つて水をためるなんて、おかしな話です。

両方楽しめて「おっこしや」「音」と叫んでいました。



北海道へ行った時、なんて遠い所なんだ、と思いました。かなり近づいてきたと思つても、なぜか北海道はまだまだ遠い所にありました。地図の上では一瞬のうちにたどり着けるんですけどね。「まだまだこれから」な感じにわれると、よけいに疲れてしまいます。

歩き遍路の旅路……しかも続けて何日か歩いたら、疲れがたまつてしまます。普段なら平気なことでも異常なほどにくらべ感じることもあります。追い討ちをかけるように露店のおばちゃんが「あと二十分くらいがんばれ」とつてないじを聞くます。あと二十分ずつと坂道ですか……。悲しくなつます。

山を歩く坂道だつたら、まあいいです。もつとひつぺんがあつて、下り坂があつて平地もあるはずだから……。人生の坂道だつたら、ひとつらいものがあります。上り坂があつて、そのまた向いつに上り坂があつて、その向いつ側には崖があるのかもしません。先のことが分からぬのが人生なんでしょう。僕なんか、自分の人生なんかホントに分かりません。それでも「まだまだこれから」です。だからといつて「がんばれ」と言わると、プレッシャーにもなります。のんびりのんびりでいいかなあ、つて思つます。坂道を少しづつでも前に進んでいたりといふと想つんです。力を抜いて、ボチボチいきましょうよ……。



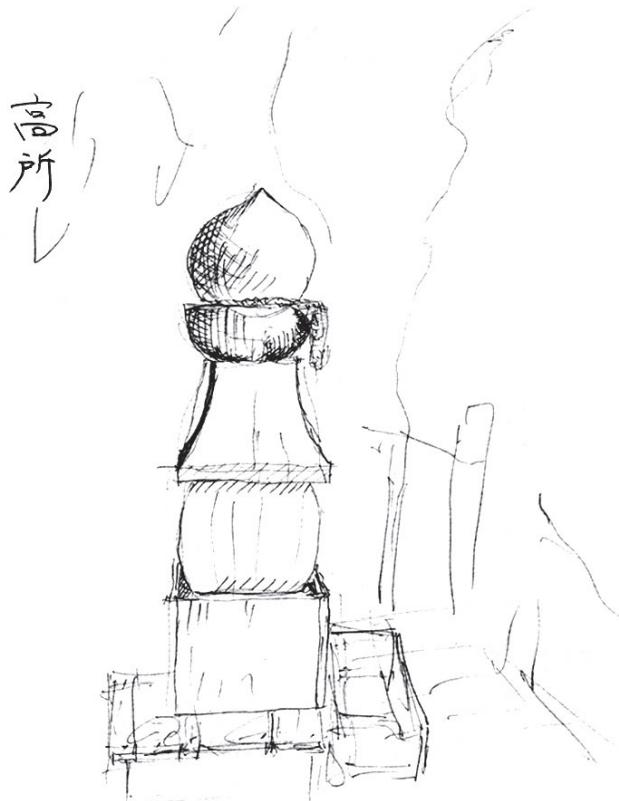
しんどい山道を登り続けて、やがてそこから石段が続くというのが山寺のセオリーみたいです。おばちゃんに、あと二十分ぐらいだと言わificateから、確かにそのぐらいの時間が経つた頃、だと思います。ようやく山門が姿を現しました。苔むした石垣、うつそうと茂る木々、静けさを含んだ山の空氣……、ようやくたどり着いたといふ気分を盛り上げてくれます。

ようやくたどり着いたんです。夜の山道を歩き続けて……時々は休憩をしながら……ナイトウォーキングをした結果です。一応は予定通りといった具合になりました。第四十五番札所から攻略、第四十四番札所へと向かうつもりです。夜に歩いたことでこの計画が達成できるというモノです。急ぎたくないのに急がなきゃいけない僕の歩き遍路……、とても寂しい感じがします。

いつも思うんです。期限のない旅をしてみたいんですね。じいまでも思う存分に自分がやりたいことをやりぬくか……あぐく贅沢なことなんだと思います。でも、僕は僕の気持ちを抑えつかながら、一つ一つの旅にピリオドを打ちながら、次の期待をふくらませながら……、田舎の世界へと戻る旅人です。果てなき旅ができる日がくるんでしょうか。そして、それは僕にとって幸せなことなんでしょうか。今は何も見えません。それが見えた時、僕が現状に納得できるようになつてこたい……と思ふのです。

高所レ
向こみと煙はすすむ所好き
なよそうど
偉い人か
高い所で
悟りを開くべくも
ありえうだ

2005. 10. 10



本堂の隣にはしじが架かっています。十メートルくらいなんでしょうか。結構な高さがあるように見えました。で、はしじがあるからには上つておかぬきやイカンわけです。上りやすいはしじとはいえません。無骨な感じで僕らを試すようにドカンとしているだけでした。

悟りの場というのは、ある程度神聖感に包まれた霧囲気が必要になるみたいです。人々がチャラチャラ遊びにきてヒヤヒヤヒヤというような場所じゃ、ありがたみがありません。地面からの高さがあるとマークが出ます。神聖感をもたらすには小道具があるとい、さらに霧囲気が盛り上がります。お杖の先つちよのよつこ形を細工した削り物が供えてありました。これで舞台としては完璧です。

はしじを上ると厳かな空氣の中で「ああ、このよつな神聖な場で悟りを開くんだなあ」なんてことをしみじみ考えます。むし、はしじを取り去つたら、下界との接点がなくなるし無心に高尚なことに思いを馳せることができます。環境が人に与える影響は馬鹿にできません。自分オリジナルの考え方をしているつもりでも、間違いなくどこかに外部から得た何かが影響しているはずです。人間とは体外情報型の生き物であり、それは変えようのない事実です。できる限り外部との接点を絶ち、自己を見つめます。そんな覚悟、僕にはありません。はしじは置いたところだわい。

心のそこから……あります。



ライトの光が弱くて……かつて、チヤリンゴ(?)と溝の中に落つ
こちたことがあります。ライトって大切なんだと実感しました。
ライトの光がついていなくて……、かつて、向こうから走つてく
る二人乗りチャリンドコが見えずに正面衝突したことがあります。
ライトって大切なんだと再認識しました。結果……ライトは自分
の道を照らすことと、自分の存在に気づいてもらつこと……その
二つの役割があることが証明されたことになります。

トンネルの中、歩き遍路にとつては生き地獄のような場所です。
ビュンビュンと走り去る車、こんなに怖いことはありません。せ
めて自分がいることをアピールしておきたいものです。「トンネル
内の交通安全のため、反射タスキ・タツクルを、ご使用ください。」
とあります。せひとも使わせていただきます。トンネル入り口に
こんなステキなトホダーをいたわる道具が置かれているなんて、
さすがは聖地お四国です。使い終わったら向こう側に返却箱完備
です。至れりつくせつです。

場所によつて、常識は変わるみたいですね。お四国ではトホダー
に対する扱いがやわしくて涙が出そうでした。だいたいの場所で
はトホダーやチャリダーは邪魔者として扱われるだけで、車が一
番強い状況です。いじめの構造です。でも、弱い物は守る必要が
あります。守つてください。ごめんなさいでした。ごめん！



使者の橋。

第四十五番札所から打ち戻つて第四十四番、そこそこ順調に進むことができました。迎えてくれたのは僕には恐れ多い感じのする橋です。何といつても「勅使橋」つて名前がついています。

国語の授業で「勅撰和歌集」などといふ言葉を習つた記憶があります。偉い人が「作れえー!」と言つて、「ははあー!」と作った和歌集だったように思います。そいら辺にあるただの和歌集とは格が違うモノのはずです。内容的にじつがどう違うのか、今は触れずにとっととしておきまお。じつ違うんでしょ? ねえ……。

僕は「勅」という文字を見るとホントカウソか分からないカビ、近寄つてはいけない空氣を感じます。近寄つてもろくなことがないような空氣がブンブン漂つているんですね。僕らとは違う世界に生きる人々と関わりのある文字の空氣配がします。「勅使橋」ということは、そんなに気安く利用してはいけないんじゃないかなという気にもなるけど……僕の目の前には車が……橋を渡つていきました。そんなモノなんですね。

結局、猫に小判つてことです。おまけに今いは昔つてのも関わります。かつては大切にされていた物事でも、現代に生きる庶民である僕には実質的な価値は限りなくゼロパーセントになるんですね。そこに書かれた文字に、何となく異質なモノを感じて、多少、僕の心に引っ掛かつたけど、ただそれだけ……以上、おしまいです。



小さい頃、家が揺れて怖い思いをした覚えがあります。実家の二階は、誰かが階段を上つてみると揺れていきました。もしかしたら、そう感じただけなのかも知れないけど、それなりに大きく揺れていました。家の構造に問題があるようにも考えられます。木造建築、大黒柱なし、ふすま多し、壁少なし、後付けの一階部分あり……、ろくなモンじゃありません。大きな地震がきたらあつといつ間に倒壊するはずです。

世界最古の木造建築なんて呼ばれる建物もあります。何世紀にもわたつて雨や風を受け、また、数々の戦乱をくぐり抜けていながら現存するんだからすごいモンです。作り上げた人たちの技術の高さが光っています。今に伝わる宮大工の腕というものは半端じやありません。

木は柔軟に立ち続けます。本来の姿だと思います。そして、本来の資質を保ちながら建物という物に形だけを変えたなら、その建物は柔軟性も保っているんだと思います。人間でも同じ、元来もつてある資質を伸ばすことで成長したなら、搖るぎない人生を送ることができそうです。でも、もつて生まれた資質を途中でねじ曲げられたとしたら、その歪みは必ずどこかで露呈されます。僕の中では、自分探しが依然として行われています。本当の自分とは何者なのか、さらに歩き続け、見つけ出したいです。



いよいよ歩き遍路第三期も終わりに近づいてきました。三連休という活用できる時間に大きな制限のある第三期です。とにかく最短ルートを探し、夜通し歩き、がむしゃらに前へ進むしかありませんでした。急がざるを得ない追い詰められた状況です。

そして、振り返る現在地点……山中です。公共交通機関など当てにできない山中です。自分の足で急ぎます。日が傾きかけている山道、ひよいと視線を移して得体の知れない思いにとりつかれました。木の根っこがゴロゴロと重なっています。色も抜け落ち、カスカスな表面……、ある光景が僕の頭の中に浮かび上がりました。それはカンボジア、キリングフィールドと呼ばれる所です。人間の骸骨が山となり積み重なっていました。僕をバイクの後ろに乗せて案内した運ちゃんは、当たり前のような顔をしています。僕も当たり前のようじに骸骨を手に取つていました。誰のものとも分からぬ頭蓋骨を手の平に乗せていました。

山の中で僕だけに訪れた重なり合つ光景……、周りには誰もいません。いないはずです。いないはずです。いないはずです。僕が抱いた思いは死者との対話にも通じます。言葉ではない、何モノかによる意思の伝達が、行われていたのかもしれません。靈感というモノが宿らない僕、そんな僕を飛び越えて、いろんなモノたちが交流していたんでしょうか。不思議な山道でした。



大相撲が好きです。自分は口先だけの批評をしながら、テレビ画面を見つめています。

大相撲が好きでした。ばーちゃんのことです。僕や弟が他の番組を見たくても「男の子は相撲を見にやイカン」と言つてなかなか譲ってくれませんでした。一番理解できなかつたのが、取り組みと取り組みの間に何度もくり返される行動です。塩をまき、にらみ合い、また戻つて塩をまき……、その時間だけでも、とチャンネルを変えたりします。せつかちなばーちゃんは「もう始まる、もう始まる」と、あぐにチャンネルを戻します。変な時間でした。真剣に取り組まれる肉体のぶつかり合い、それを小さい頃からやっていたらどんな風になるんでしょう。学校の中に土俵があるて毎日のように相撲をやつていたとしたら、その楽しさが体にしみついていくんでしょうか。僕が通っていた学校で土俵がある所は知らないけど、ここにはありました。ばーちゃんとチャンネル争いをしながら見ていただけの相撲でも好きになつてしまふ相撲を、実際に土俵上でやつていたとしたら、その子どものこのように相撲好きになつてこられたのです。

子どもの頃のことは、何を取つてもいい思い出になります。楽しいことも苦しいことも、いろんなことを自分の体で経験する子どもたちに幸あれ……。

数の暴力、多勢に無勢、みんなで渡れば怖くない……、人間つて仲間を求めるんでしようね。集団になつた時の強さはグングン育つしていくように思ひます。

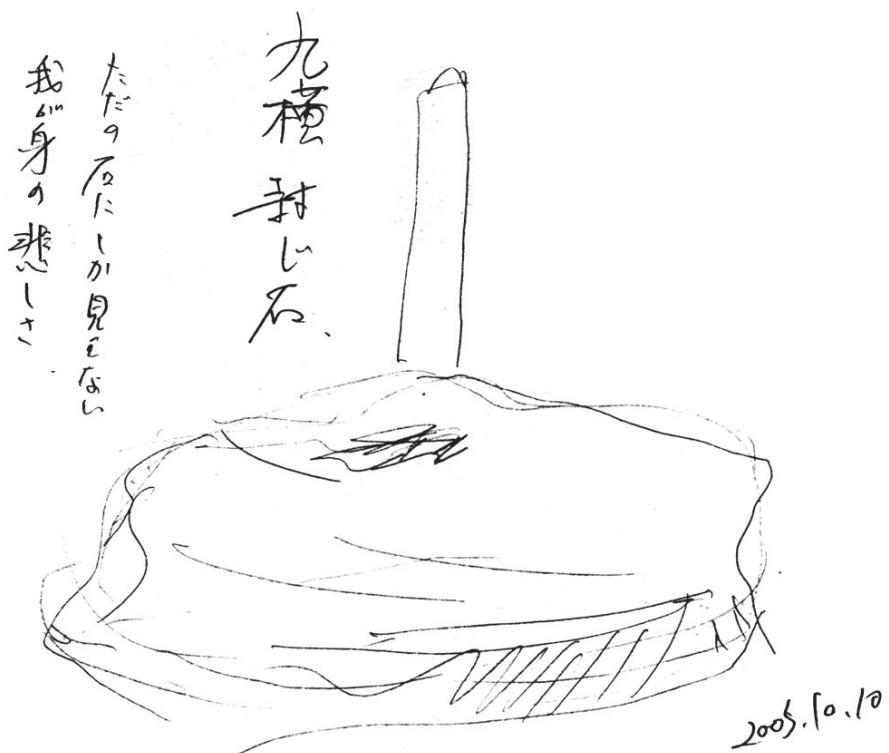
僕は急いでいるんです。翌日の朝には職場にいないと、それ以後の居場所がなくなつてしまふんです。だから、納経所にたくさんの人が押し寄せて山のような納経帳が形成されてしまうことが致命的なんです。そんな時に限つて僕の目の前にはたくさんの人が現れるから不思議です。しかも、あそこの白衣に身を包み、声をたのえて読経しています。ああ無情……。

自分が必要以上に強氣になつてしまふと、じつべつ考えたら誰にでもあるんじゃないかと思います。もやもや、一人だけでも妙に強い人もいるけど、それは例外です。集団心理の恐ろしさです。自分の頭がほとんど働いていなくとも、裏づけのない安心感のうちに、いつの間にやら一つの方向に向かつていくことだってあります。いつの間にか世の常識になつてしまふことに対して、僕は美しい眼を向ける必要がある…………」ともあるように考へています。美しい言葉に踊らされていたら、あらぬ方向へと連れ去られる自分の姿があはらげながら想像できるからです。

個が手を結び集団になつた時、その輪の中にいない者はつらい空氣を味わいます。とにかく早く出でてしまふ、心の叫びです。



やるなあ。



焦る心を抑えながらお参りをし、御朱印をいただき、はたと視線を移すと「九黄封じ石」なるモノが鎮座していました。ちよつとラツキーな出会いです。自分で勝手に決めてしまったルールにしばられている僕は、急いでいるにも関わらず、何かの絵をスケッチブックに収めていかなければいけないと考えていました。そして、ドカーンと堂々としたモノは、ある程度描きやすいモノに見えました。

何かを封じたモノというと、悪霊やら化け物やら、魑魅魍魎としたモノたちを押さえつけている画像が頭の中に浮かび上がります。「九黄」を封じる石……どんな恐いしきモノたちを封じているのか……答えは裏側に書いてありました。「九つの災難」のことのようです。やはり偉大なる知恵が集められていくことを感じました。封するモノほどこの力を漂う他者ではなく、自分自身に関係のあるモノだということなんですね。「不治の病」であつたり「暴力非行」であつたり「淫酒」であつたり……、自分の身から出る悪しきモノたちです。言い換えれば自分の弱さに発するモノたちとなります。何がつらつらして、自分と戦うことほどつらることはあります。全ての手の内がばれてこまか。逃げることも不可能です。

結局、自分のルールからも逃げられず、スケッチブックには手抜きの作品が残る」とになってしまった。

これにて打ち止め。



にこにこ顔の遍路グループとすれ違いました。「がんばれー」なんて声をかけてくれた人もいました。何の義務があるわけでもないのに、僕は夕日と競争するかのように走っていました。

第四十六番札所から第四十七番札所までは約一キロ、かなりの近距離です。それまで歩いてきた道のりを考えたら余裕の近距離です。だからこそ何とかしたかったんです。本当だったら第四十八番まで到達できるとベターだつたんだけど、さすがにそれは無理、奥歯に加速装置のスイッチぐらいついていないと間に合いません。射程距離としては一キロほどが限界でした。たかが三日間の短期決戦であっても、ほとんど休みなしで歩き続けている足には大きな負担がかかるっています。コタコタしていました。それでも、ラストスペードだと思つて自分に鞭打ち走ります。

余分なことは全部頭の外に吐き出されていました。夏の盛りにぱーちゃんが、秋の手前にユースケが……と、僕の頭の中は命のあり方とでもいうべきモノでいっぱいでした。それが、いつの間にか、それらのモノと共に存することができるようになつていったんですね。決して忘れ去ることはできません。いくら忘れっぽい僕でも命に関わる衝撃的な思いは、ずつしりと染みついています。余分なことだけが吐き出され、より清らかなモノとして残りました。そして、夕暮れの中に第四十七番札所が現れました。

曲線の美。

なんて美しいんだね、と思いました。じつにでもあるような屋根のかもしません。でも、滑らかな曲線がズドーンと僕の中に飛び込んできました。

猪突猛進なんて言葉もあるけど、まつおぐであることは難しくないし、分かりやすいことです。妥協を許さず前を見て、とにかく突き進む感じです。それが曲線になると、同じような分かりやすさなんて消え去ってしまいます。曲がり方の具合だと、前後左右どのくらい曲がるのか、言葉で説明できず、「ああ、そこをこうして、あんな風に……あ、違う!……あ、もう少し」なんて、指示語の嵐になってしまふのです。運動場のラインを近く時に、トライックを歪めて書いていたり僕に任せただやつ。

直線と比べると遙かにやわらかく存在である曲線だけど、自然の中に入ると、曲線的なモノの方が多いて、直線的なモノはものすごい違和感に包まれてしまふ。……ところどころ、曲線美を求める心はぐぐぐぐ当たつ前だし自然な感情にならねばです。世の中、直線的なモノが多すぎるのかもしません。人間が生み出した価値観は「まつおぐいと正義」に偏つおもっています。まつすぐに生きていいくことはとても大切なことだとは思うけど、確かに曲がりながら、「なんとなく」まつおぐに生きていいくとも大切なんじゃないかと思つてみました。



曲線

2005.10.10



時は夕暮れ、一日が終わるうとしていました。境内も掃き清められて夜を、明日を待ちます。お寺の掃除といってイメージするのは、長い廊下をテケテケテケーと雑巾がけしていく小坊主の姿です。日々、廊下が磨き上げられていく感じがします。

日本の中では庭園がもつ意味合いも忘れられない存在で、建物とセットになっていることもあります。さらに、遠くの景色まで取り込んでしまう借景ともなると、凡人の僕にはとても手の及ばない世界です。計算し尽くされているんだからすごいと思します。遙かな山に雨が降り、静かな流れとなつて平地に下り、全てを抱く海へと注ぐ、そんなストーリーが日本庭園には流れます。本物の水を使わずに流れを作り出す工夫なんかも奥ゆかしくてかつこいい感じがします。第四十七番札所の庭も、僕にはさざ波が搖れる海に見えました。寄せては返す、永遠の営みです。

モノが何に見えるのか、人によつて違うはずです。同じモノを見ても印象が全然違つたりすることはよくあります。この日の僕にとって、夕暮れ時は歩き遍路の区切りの時になります。三日間という短い区切りをつけて、お四国を去るタイムリミットです。そこへ静かに揺れるさざ波が訪れました。心の平静さに少しだけ波が立つんです。そこで区切る充実感かもしません。

時は夕暮れ、区切りの三日間が終わるうとしていました。

信じられなかつた。僕は友人と一緒に晩御飯を食べに出歩いていた。そして、携帯電話。前任校でお世話になつた主任からだつた。主任の声は確かに聞こえていた。言葉の上では何を言つてゐるのか、当然理解できる。日本語だ。でも、内容が自分の中に吸収されない感じがする。あの時と同じだ。第八番札所で鳴り響いた携帯電話、そこから聞こえる父の声……あの時と同じだ……人の命が尽きたことを伝える言葉が耳の奥へポロポロこぼれていつた。

夏、ばーちゃんの命の灯が消えた。それから僕の心は不安定になつた。それでも、お四国遍路を歩くことで少し心が癒されたような気がしてた。癒されつつあつた心が再び崩壊した。今度は教え子の死だつた。ほんの何ヶ月前まで中学生だつたユースケが亡くなつたという。交通事故。コンクリートミキサー車に巻き込まれたらしい。事故現場は僕もよく通る交差点だつた。

通夜に行くと、大勢の学生がそこを埋め尽くしていた。当然ながら僕の教え子たちの顔も多い。みんな来ているんだと目で追いつつ、僕は彼らにどんな表情を向けたらいいのか分からなかつた。とにかく焼香を、と思ひ前へ進んだ。だんだん僕の番が近づいてくる。棺に入つたユースケの顔が見えた。白い。きれいな顔だつた。僕の目はかすんでくる。焼香。遺影がぼやける。「ありがとうございました」というお母さんの声が聞こえた。もう、耐えられなかつた。もう、外聞も関係なく泣いた。後から後から涙が出てきて止まらない。その場を離れて、物陰に隠れてしばらく泣き続けた。

あの学年の子らには、本当によく泣かされた。心が震える機会がたくさんあつた。体育大会で泣かされ、合唱コンクールで泣かされ、日頃の生活指導で泣かされ、卒業式でも泣かされた。ほとんどは感動のあまり、思わずこぼれてしまふ涙だつた。忙しい日々だつたし、大変なことの方が圧倒的に多い生活だつた。彼らのエネルギーは尽きることがない。パワー全開である。パワーが悪い方へと向かうところがない。年頃の子どもたち、やりたいことはたくさんある。仕方がない。逆に、いい方へ向かえばそのパワーは何よりもステキなものだ。

ものになる。「中学生つてステキ!」と思わされる場面は……そう頻繁ではないけど……間違いなく僕の心を揺さぶつた。僕が一番好きな学校行事は合唱コンクール。強引な力技では引き出せない、響く歌声がホールを包む。三年生、最後の合唱コンクールでは「どれだけ心が震えてもステージ上では泣くな!最後まで歌いきれ!」と子どもには言いながら、僕自身は観客席で大泣きしていた。その涙は歌声とともに卒業式へとつながっていく。校歌を歌い、別れの卒業合唱をする彼らに、涙が止まらなかつた。昔からの泣き虫がとことん涙を流していた。

高校生になつたユースケはとても充実した毎日を送つていたらしい。そもそも志望校へ入るために彼はものすごい努力を重ねていた。黙々と地道な努力をする時期を経て、高校では様々に花開いていた感じがする。部活動の活躍が中学での顧問の先生にも届いており、僕はその先生の車に乗つてユースケの様子を教えてもらつた。彼はバレー部。背は高くない。ボールを扱う体使いも不器用この上ない。そんな彼がリベロのポジションをレギュラーとしてつかみ取つたという。どんなボールへも向かっていくリベロという役割は、努力の成果以外の何ものでもなく、とこどん自分を追いつめて、自分と闘い、たどり着いた場所だつたと思う。事故に遭つたその日も、部活動へ向かう途中だつたという……。そんな様子を聞きながら、僕はもう思いを言葉にすることさえ難しくなり、乗せてもらつていた車の助手席で、また大泣きをしてしまつた。

お杖には、ばーちゃんの隣にユースケの名前を書き込んだ。同行二人どころじゃない、僕、弘法さん、ばーちゃん、ユースケと、同行四人になつてしまつた。秋、お四国へ呼ばれるかのように、歩きに行つた。少しづつ札所をつなぎながら、日常生活と遍路生活が絡み合つていく。仕事に遍路に没頭することで心の平静さを保とうとしていたのかもしれない。

身近な二つの命、ばーちゃんとユースケのことを思いながら秋が終わり、冬を迎える、自分の心とも折り合いをつけながら、僕の足は結願に向けて、また、お四国へと向かっていく……。

お四國遍路編

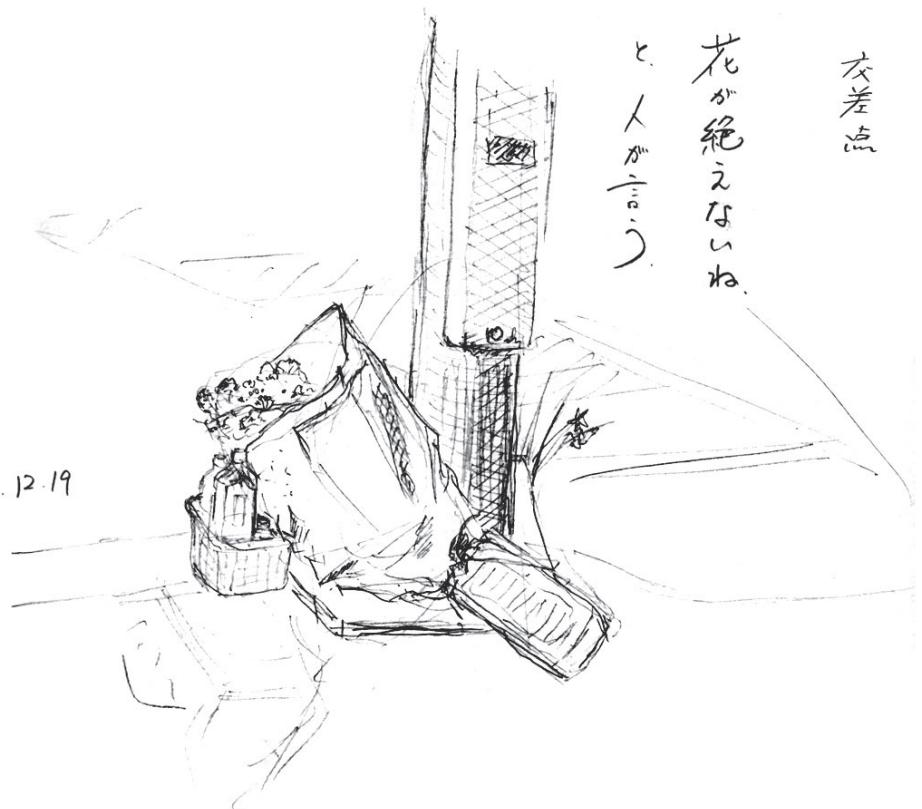
第四期

交差点。

交差点

花が絶えないね。

と、人がさう。



人が、車が、自転車が……、
信号機があるから、自分の前に見える物を信じて進んでいました。
それが当たり前のことが当たり前じゃなくな
るんです。夏の終わり、そんな一瞬があつたんですね。

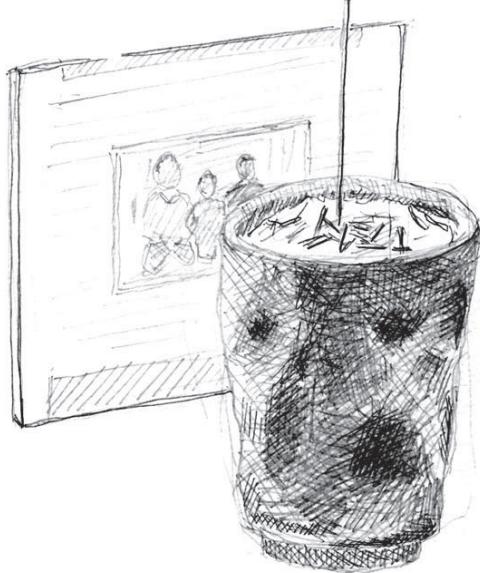
いつでも花が生けてある場所のことが話題にのぼりました。そ
こには夏の終わりから絶えることなく、花が咲いています。ユ
ースケがその場でその一瞬という時に出会つてしまつてから、花が
咲き続けています。それをユースケとは全く関わりのない人が見
ていました。そして、僕に教えてくれたんですね。

季節は冬に移り変わっていました。また、旅に出る季節がやっ
てきます。それにしても、ペンを動かす僕の手は寒くて冷たくて
力チカチです。あまり、その場所には行きたくありませんでした。
ユースケが毎日のように自転車で走り抜けていた交差点です。も
う、一度とその姿を見たいとはあつません。

季節が移り変わり、春が来て、また次の夏が来ても、そこには
花が咲き続いているような気がします。誰がとうのではない誰
かが、気持ちの花を咲かせていくように思うんです。僕も、そこ
に気持ちの花を咲かせました。なんか、そこに花が咲くといい、
とても大きな意味があるように感じながら……。

「ネコと粘土をさわっていたら、いつの間にか形に現れてきました。いつだったか「職員旅行」というモノに参加し、行つた先で器を作ることがあつたんですね。

煙



2005.12.20

まさか、器の中に灰を入れるなどとは思つてもみませんでした。お茶を飲むために作った器なんです。でも、お茶を淹れてみても内側まで黒く焼き上げられていて、お茶の色がまったく分からなくなる茶碗でした。灰が入つて線香が立てられるど、意外なほどにその姿が板につきます。向こう側には長い顔の三人が二コ二コ笑つて写真に収まっています。……僕なりの仏壇です。

ばーちゃんの遺影のために写真を選ぶのは、そんなに難しくなかつたみたいですね。もともと、ばーちゃんがとても気に入ついた写真だつたといいます。僕と弟が両側からばーちゃんと腕を組んでアホ面の笑顔になつてているモノです。三人とも長い顔で、間違いなく同じDNAが組み込まれていることが証明できます。僕はCDケースに写真を挟み込んでみました。

変な形の茶碗でも、安物ケースに入つた変な写真でも、何だつて構いません。僕は僕の心を込めて線香を立て、手を合わせるんです。……それじゃダメなんですか。競争でも比較でもないはずです。僕は僕なりの方法でばーちゃんの死をとらえ、その気持ちをもつて、また、お四国へ巡礼の旅に出るんです。

線香の居場所。
食うごんぐ
煙にかすんで
笑っている



出発の日は嵐です。定番です。これは僕の旅にはついて回る常識になりつつあります。ふと外を見れば……、そこには雪国が広がっていました。僕自身は雪が降り積もるような場所で暮らした経験がないから、そんな光景を目にすると写真を撮らなければいけないという義務感が生まれてします。だいたい東海道線が走る範囲の人間は、多かれ少なかれそんな感覚をもつんじゃないかなと思います。

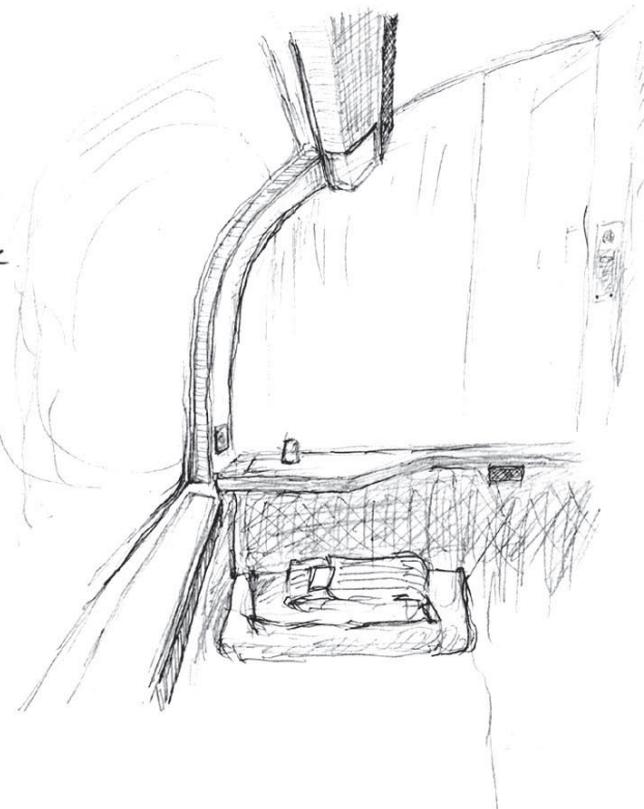
朝にはお四国へ到着している予定でした。それも、ただ眠つてさえすれば、いつの間にか僕の体は運搬されているはず、という契約です。寝台車ってのはステキな乗り物です。なのに、目の前には雪国が広がっているわけで、頭の中が一生懸命に情報処理を始めていきます。確かに、夜に「せきがはら」という看板を見たように思います。そして、朝も「せきがはら」という看板を見ているように思います。何かだまされているんでしょうか。寝過ごしている間に往復してしまったんでしょうか。そんなわけありません。ずっと「せきがはら」という看板が見える位置に停まっています。恐ろべし……。

仕方があります。「果報は寝て待て」といいます。それに居場所も「寝台車」です。寝てればいいんです。寝るしかないんです。自然の力には逆らえません。待つしかないんです……。

寝台特急の個室
やわらかい木調
穏やかに
眠りつけそうだ
そんな気がする

2005.12.23

曲線



列車に乗り込んだのは夜中、職場の人たちと別れたその足で駅に向かいました。冬になるとやつてくる忘年会というモノに参加した後です。その会はきれいなホテルのような所で行われました。周囲は冷たい目で僕を見ます。完全装備の冬用歩き遍路スタイル、テントや寝袋を詰め込んだザックに汚れきったダウソジャケット、手にはあ杖を携えています。ちょっと場違いかなあ、とは思いますが仕方あります。

ヤンキーの兄ちゃんたちと田が合います。駅のトイレです。どこかで会つたことのあるような気がします。何年か時をさかのぼると彼らとの接点が見えてきました。何かとやつてくれた人たちです。その頃は、どんな言葉も彼らの心には響きにくい状態でした。いつの間にか僕と日本語で話せぬようになつてしましました。

少しだけ揺れる心のまま、寝台列車に確保された僕のスペースへと向かいます。心がやわらかく解けていくような気がしました。温かみのある間接照明、せまいながらも清潔感あふれるベッド、それを包み込むような木調の壁……、ありがたい空間でした。ゆとりが生まれた心で、いろいろなことに思いを巡らせます。あわただしかつた出発を振り返ります。ゆづくとゆづくと……。

外は雪、自分には何もできません。温かな空間で、自分の心も温めつつ、お四国へと向かってこぎます。結願への旅です。

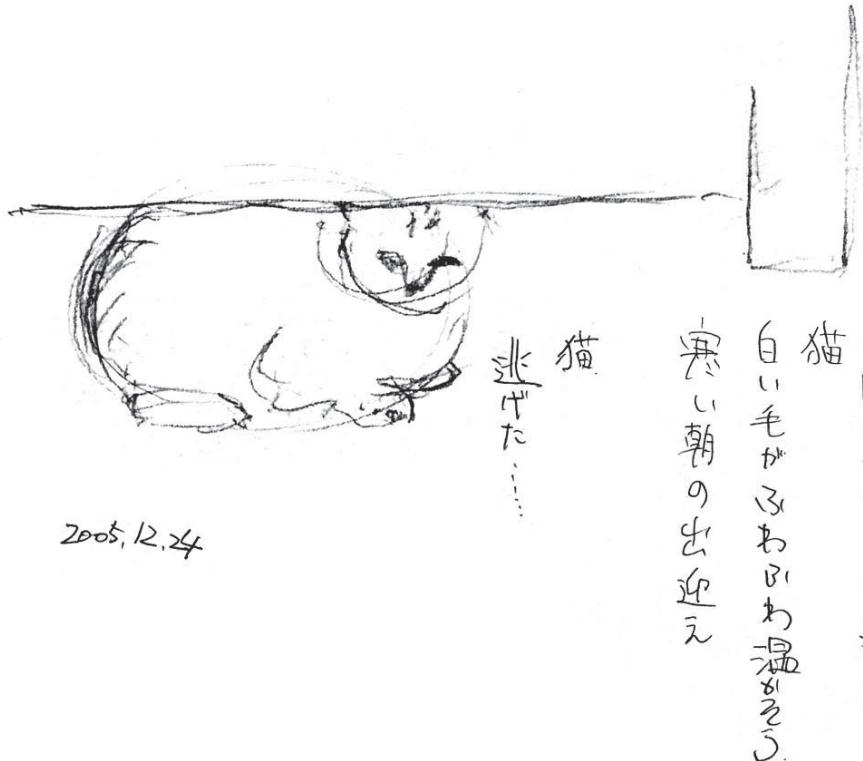


じこが接点になる場所だつたのか、明確に分からぬ状態でした。というのも、前回お四国を後にする時に、道に迷つてしまいタクシーを使ってかろうじて松山駅までたどり着いたということがあつたからです。ひたすら歩き続けた疲れと、どんどん日が暮れていく焦りで、かなりのパニック状態になつていたように思います。ガソリンスタンドへ駆け込み、どうやつたら松山駅まで行けるのか教えてもらい、ついでにタクシーも呼んでもらつて一心地ついたという具合です。

あ世話になつたという思いはとても強く残つていたから、ガソリンスタンドを目指すことは自信をもつていました。でも、よく考えたらガソリンスタンドなんてたくさんあるし、どこでも同じような店構えをしています。それを探し出すことは意外に大変なことでした。そもそも、大雪のせいで列車が遅れて、松山駅に着いたのが予定時刻を約八時間もオーバーしています。すでに周りは暗くなっているし、雨まで降り始めました。第四期はほとんどないスタートを迎えていたんですね。どうやら「」だと思えるガソリンスタンドを写真に収め、僕の遍路道がつながりました。

本当ならちゃんとこだわる必要はないのかもしれないけど、なんか僕にとっては大切なことに思えたんです。お四国を一つの輪にする……、つなぎつなぎの僕の遍路道です。

にやうお。



2005.12.24

迎え

門の下での出迎え

白い毛がふわふわ温かさ

寒い朝の出迎え

猫

逃げた…

朝早く、できれば誰もが動き出す前に活動を始めようと思つていました。テントを張った場所は工場の軒下……、あんまりいいことじゅありません。でも、寒いし眠いし、まだぬくぬくと寝袋の中に入つてみたい感じでした。

雪が降ると犬は喜んで庭を駆け回るのは本当のことなんでしょうか。猫はこたつで丸くなるつてのも本当のことなんでしょうか。イメージはひとつたりです。どうしかかといえば犬の方がバカっぽい印象があるけど、そんな犬たちが好きです。猫は、勝手気ままに生きていて、どうもこちらの様子をバツチリ観察しているかのよう見えます。知らないヤツのことなんか相手にしてくれないような、ソンとした印象です。

猫が山門の片隅からこちらをのぞいていました。第四十八番札所でのことです。寒い冬の空氣の中で、温かそうに丸くなつて自分の毛皮に包まれています。またしても、無理だと思いながらスケッチブックを開きます。しばらく見ています。もしかしたら成功するかもしれない……なんて思ついたら、やっぱり……逃げられました。僕の思いなんて関係なく自分で勝手に動くからヤツらはやっかいです。ま、僕もヤツの思いなんて関係なく勝手にモデルにしてたんだから文句はいえないんですけど……。

寒い朝に、早起きして出迎えてくれた猫でした。



ソウルフードといつて言葉は一般的な言葉なんでしょうか。僕の中ではあんまり日常的に使われる言葉じゃありません。その言葉の意味としては、故郷の食べ物であるとか思い出の食べ物などというもののようですね。

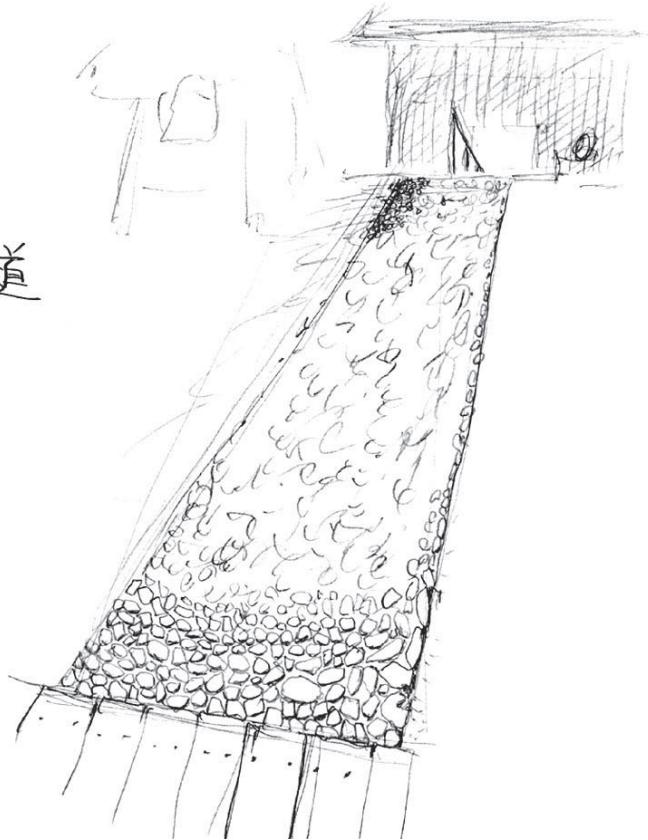
甘さが口の中に広がります。時々、口がしわしわになってしまふこともあります。自家製のものならではの味です。渋柿が、いつの間にかやわらかくなり、甘く甘くなっています。たぶん、それぞれの家によって微妙な違いがあるんだと思います。お店で売っている干し柿を食べても、おいしさを感じられないことだってあるかもしません。軒先には自家製の干し柿がかかっていました。

僕にとって自分の家ならではの味って何か……、鰯の唐揚げのような気がします。ばーちゃんの得意技でした。休日以外は、だいたい夕飯の準備をばーちゃんがしてくれていました。でも、はつきりいつてばーちゃんには料理のセンスがないて、しかも「アイディアも乏しくて……、それで困った時に現れるのが鰯の唐揚げだったんですね。小さい鰯が焦げたような衣をつけて食卓にのぼります。ばーちゃんが死んだ日、夕飯の食卓に鰯の唐揚げが現れたことを忘れられません。食卓を囲む僕らの、隣の部屋で寝ているばーちゃんの姿を僕はしつかり見ていたがでおせんでした……。

みちです。

道
たかかな石が集まつて
きれいな石畳になつて
そこをたくさんの人があそび
道が輝いた

2005.12.24



キラキラと輝き、まつあぐに伸びる石畠がありました。人によつては淨土への道といつて重ね合わせるんじゃないかと思つような道です。第四十九番札所の本堂と山門をつなげる参道です。

道は人を導きます。じこへ導かれるのか分かつてゐる時にはそれほどありがたいことはありません。それが歩きやすい道ならなすことです。足取りも軽く前へ前へと進むことができます。

石畠の道はあわいわにあります。「ゴツゴツと僕らを試すような道だつてあります。熊野古道を歩いた時は、苔むした美しさを感じる反面で、自分の強さがなければ歩けないような厳しさを感じました。たくさんの人々が歩くことで苔のベールが薄くなつてゐる所もありました。

そもそも、じこへ導かれるのか分からないような道だつてあります。それはそれは不安な道です。僕らが生きていく道は、未知なる世界へ向かっています。しかも、要所要所で分岐点が現れて僕らを惑わせるんです。行きたい場所があほろげに見えていて正しい道を選んだつもりでも、いつの間にかカーブしてあらぬ方向へ向かつてしまつことだつてあります。

僕らの先へと続く道、それを見極める眼を育てていかなきやならないんですね。自分を正しく導くものを見抜ける千里眼なんて簡単に手に入りません。自分が努力するしかありませんね……。



はつとしました。ついでにこの壁がボロボロといぼれ落ちているんです。無常観が漂う土壁でした。

真新しい時代もあつたはずです。きらびやかに輝き、人々があ
参りをし、活気にあふれていた時代です。白い壁ってとてもきれ
いに太陽の光を浮き立たせてくれるよう思います。温かみのあ
る光を浴びると心が軽くなるんですね。極彩色の密教的な装飾を見
て、すごいなあ、とは思うんだけど、僕はあんまり好きじゃあり
ません。素朴さを見せる建築様式の方が抵抗なく田になじみます。
飾り気はないんだけど、そのもの本来の美しさや力がみなぎる木
の雰囲気なんかは憧れの存在ともいえます。

うわべだけの飾りはそのうちにボロがります。僕が太陽の光を
感じた白い壁も、実はうわべだけだったのかもしません。白さ
の内側にはそのものの本質ともいうような茶色の土があつたわ
けです。

白も茶色も、両方とも壁を作っている大切な要素です。どちら
も虚ではなく真なんです。ただ、太陽の光を集め、内側を守るた
めには白さが覆う必要がありました。存在し続けるためには常に
白さが保たれなければなりません。素朴だと思えた白さは、やつ
ぱり地道な努力があつてこそ輝きを発したんですね。

常なるものはないんですね。諸行無常……。

なんかね、仕方がないんです。人間ですから……。

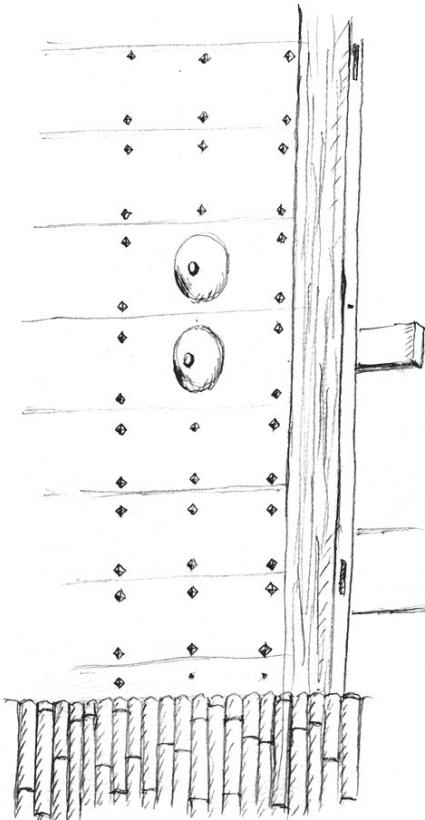
別にいつでもどこでも頭の中がピンク色というわけじゃありません。そこまで変態的な生活じゃないです。時々、そういうモードに入つていふことがあります。ただ門の絵を描いていたらどうも形がいやらしく思えてしまいました。

そういえば、確かあれはタイのお寺でのこと……、仏様がたくさん並んでいた所でした。そこを一緒に訪れていた人が指差すんです。おう、否定のしようがありません。やさしそうな仏様たちの胸が輝いていました。体の他の部分は少しすすぐたようになつているのにも関わらず、キラキラしていました。何かの御利益があるかもしないので、僕も触つてみました……。

憧れの先輩が結婚するなんてことがあります。別に僕との間に何があつたわけでもないんだけど、いろいろ面倒を見ててくれた話も合う人だったんで、少なからずショックを受けました。そのショックがだんだんに体の隅々にまで染み通つていふような感じで、しばらく抜け殻のような時間が流れていきます。自分の気持ちにも鈍感なんですね。僕はその先輩に憧れ以上のものを抱いていたみたいでした。最後のお別れの時まで、何もないような顔をして済ませました。よかつたのか悪かったのか……。

人間ですから……、いろんなことが頭を巡つていきました……。

釘 かくし



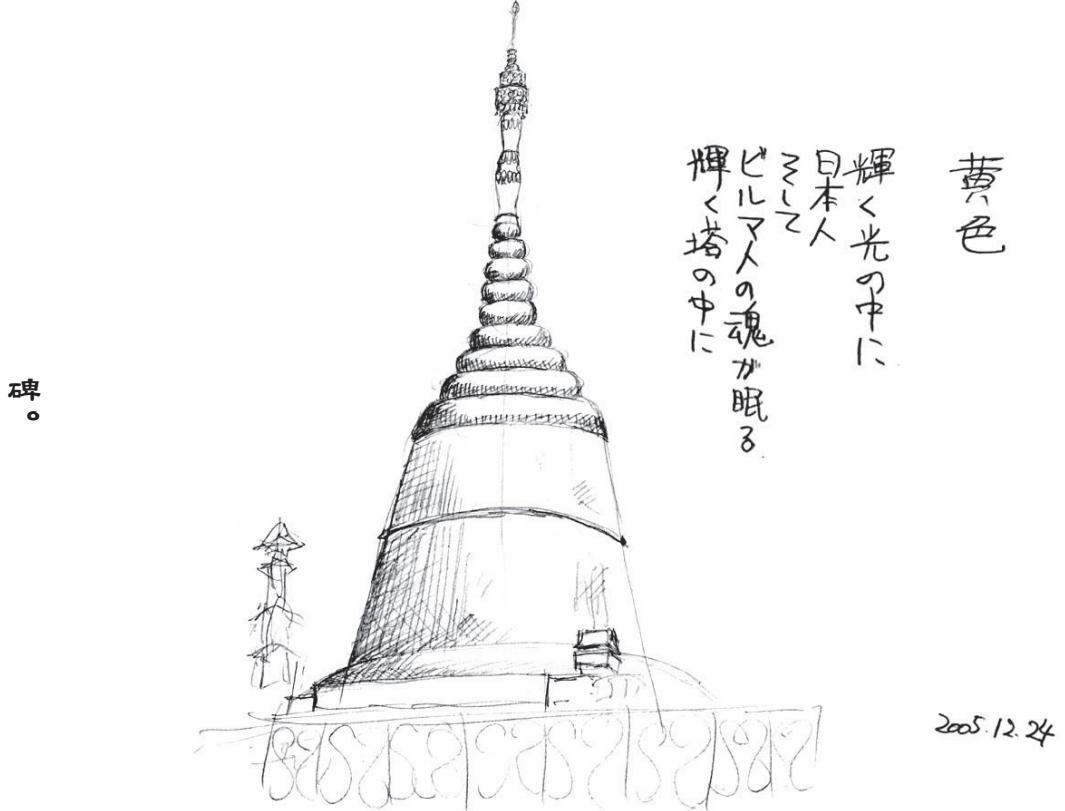
2005.12.24



出たな……というやつらと時々出会うことができる。それは望むか望まないか関係なくやつらの瞬間である。

旅人に「おかげさん」という言葉をなげかけるやつ、こいつは何者なのか、慎重に論議されなければならない感のあるやつでした。口元を見ると、どうやら気分が悪いわけじゃなさそうですが。目元を見ると、無表情に近いので心理状態を推測するのは困難です。耳……でしようか、人間でいえば頭から突き出た部分……、ここまでくるとその部位の存在すら怪しげになってしまいます。そんな怪しげなヤツが「おかげさん」を強調するとは、あ四国ってホント心が広い所です。どこかのアニメで見たような氣もするけど、そんなはずはありません。無理です。

謙虚だ……と僕を評する人がいました。うぬぼれるいとなく生きている……と評ある人もいました。前向きな解釈に最大のお札を申し上げます。ま、眞実としては、自己肯定感に欠けて自信がない弱虫……こんな風に評されるべきなんだと感じます。だから、周りがみんな偉大に見えて、僕の口から出る言葉は「おかげさんで……」となるんです。多少なりとも自己弁護するなら、身の程知らずにいるよりは社会的被害が少ない人間だ……としておきたいものです。社会的な「貢献」ができるならなあ……、憧れです。とうあえず、他力本願的に……おかげさん……。



確かに僕は第五十一番札所に到着したはずです。そこは日本の
お寺のはずです。境内に輝く黄金色の塔は何なんでしょう。

ビルマの塔が語るモノがありました。そんなに遠くない昔、そ
こは地獄が広がっていたはずです。老若男女あらゆる人たちが命
と向き合って生き、死に、また、どちらにしても苦しんでいた場
所だと思います。人と人が殺し合い、自分の命を安売りし、ひと
の命も簡単に消していった場所だと感じます。

特に若い命が消えていくこと、僕は苦しくなります。ある日あ
る時、当たり前のよう命が失われるんです。全く当たり前じゃ
ないはずなのに、それが当たり前のように世界は流れていいくん
です。耐えられません。今、僕は若くして消える命の灯に心が揺れ
ます。でも、もし地獄の世界で生まれ育つていたら、さざ波ほど
も心が揺れなかつたかも知れないと、僕は思うんです。

人は体外学習型の生き物です。常識や倫理観なんてモノもどう
かで学習して自分の中に入つてくるようなモノです。僕は自分の
命を自分以外のナーモノかのために燃やすことを学習したくあり
ません。誰かに学習させることもイヤです。心が震える命とのつ
き合い方をしていきたいし、それを忘れないような努力をしてい
きたいと思います。心中に小さかったとしても搖るぐいとのな
い塔を立てておきたいと思います。

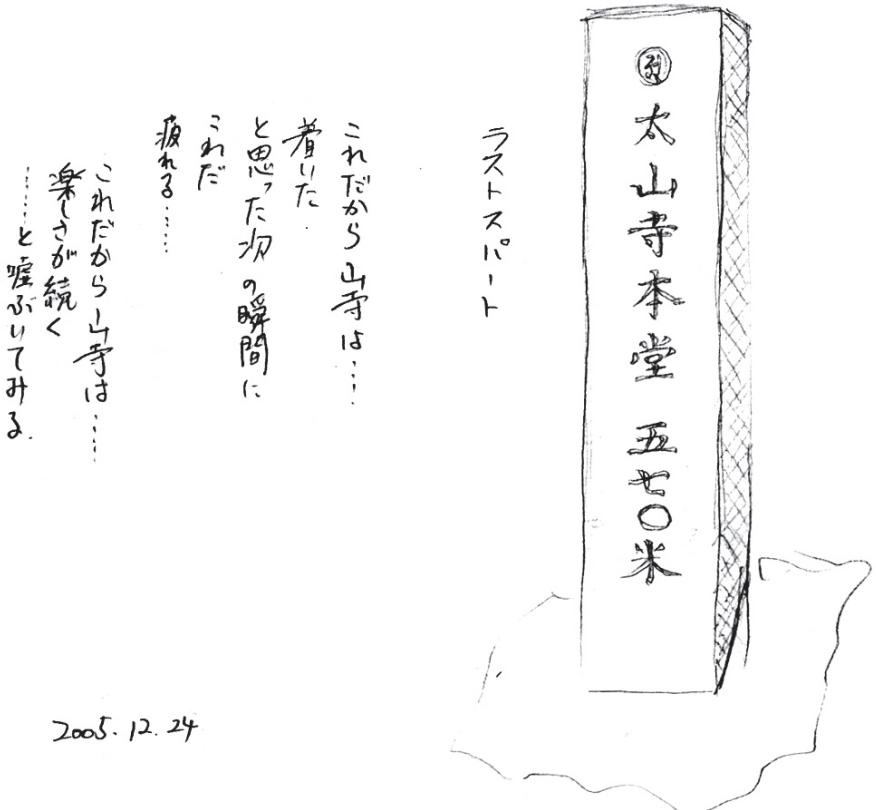


由緒ある建物です。重々しいオーラが漂つているような感じがします。こんなにすごい所があ風呂屋さんだなんて信じられません。べつりいでお湯に浸かるというよりは、その場から出てくるオーラを吸い取るための所にも感じられます。寒い冬、オーラを体一杯に取り入れていこうと、……最初は思っていました。でもそれよりも、前に進みたいという気持ちが強くて素通りしました。道後温泉……、前にも訪れたことがあります。その時は、少しだけ高いお金を払って、個室のような所に足を踏み入れました。せっかくだから……なんて言いながら、坊ちゃん団子を食べていたように思います。職員旅行中のことでした。半ば見捨てられ、半ば拉致されるかのような形で温泉に入り、団子を食べていました。

不思議な思い出をリアルに脳裏に映し出すことなく、僕は歩き出しました。写真さえ撮れたら納得です。

日本文学への憧れはあります。この場に夏目漱石がいたのかと思うとゾクゾクです。特別、何があるわけでもないんだけど、空気を感じるだけでゾクゾクします。僕のアンテナは偉大な作家の存在を察知していました。人々に深く染み入るような文章を作った人……、そんな人のオーラは恐れ多くもあります。いつかまた、じっくりオーラを感じ取りに訪れたい場所です。

これから！



予想はしています。だいたいそんなモンだとも思つてます。でも、かすかに期待もしてしまつんです。軟弱者ですから……。地図を見て第五十二番札所が山の上にありそつだと何となくの見通しはもてます。そうであつても、そうでなくつても、結局は同じ、僕の足は札所を目標します。それならあまり深く物事を考えずにじんじん進んでいつた方が精神衛生上いいのかもしれません。

結構ダメージ受けるいともあつま。僕は山門を見つけてちよつと油断していました。「着いた！」という安心感です。確かに「四国第五十二番靈場太山寺」と書かれた石碑があります。……でも、その脇にもう一つ、小さめの石碑があつたんですね。遠くからじや見えません。やられました。

気持ちがやられてしまつた場合、それを復活させるのには大きなパワーが必要になります。身体的なことのように物理的に回復する類のダメージと違つて、他の何かが心の中で上手に作用しないと癒えないんですね。癒す力をもつてるのは何か、それぞれ個人で違うはずです。僕の場合、心がすがるモノを明確にもつていません。だから、ダメージを忘れさせてくれる時間だけが頼りになることがほとんどです。すぐに忘れることが多いですが……。

心のダメージをじまかしつつ、ラストスパートの上り坂です。



スケッチブックを持ってウロウロしていました。よく考えたらとても分かりやすいスタイルだったと思います。おっちゃんに声をかけられ、「お接待です」と絵はがきをいただきました。その方は絵を描く人でした。普通の官製はがきにカットを入れるかのように水彩で自作の絵はがきを生み出していました。淡い色彩がさわやかで心地よい作品です。僕の絵なんかとても見せられながい……と焦り、こんなんです……とペラペラしていました。

絵は主観です。描く者の眼に写った姿を紙の上へと表現するだけのことです。上手とか下手とか、正しいとか間違いとか、そんなモノとは全く別次元の話です。僕がどうえたテーマを僕の方法で表現するんだから、他の人にとやかく言われる筋合はありません。逆にいうと自分が納得できないモノは、どれだけほめられたって何の意味ももたないモノになってしまいます。なんと自分勝手なのかと思うけど、そうなんだから仕方がありません。ついでに、たくさんのウソを積み重ねて作り上げるのが芸術なんだと教えてもらつたこともあり、最近はますます自分勝手になつていきます。

絵はがきに宛名を書き、投函しました。電話でもない、メールでもない、自分の字で心を込めて文を綴り、おひじはおっちゃんの描いた絵がついている……、手紙って温かいモノですよね。

第五十三番札所到着です。次の札所までは三十キロほど離れているので、基本的には「本日の業務終了」という感じになります。陽が傾いて、夕暮れ時のお参りでした。

納経所が開いているのが午後五時まで、いいまでその日のうちにたどり着けるかどうかタイミング的には微妙なペースでした。だから、迫りくる夜を前にして一安心です。次の札所までは遠いけど、そこまで行く途中にユースホステルがあって、何やら個性的で楽しそうな宿だという情報をゲットしていたので、是非そこまで歩きたいと考えていたんです。

夕方ギリギリに到着すると、落ち着いた心でお参りができる。その後は時間に追われることなく夜を迎えるだけだからです。暮れゆく空気を感じながらお経を唱えていると、一日歩いた充実感もジワジワと体中に染み渡つていくようです。夏の盛りに汗をダラダラかきながら一日を終えるのとは全然違うもの悲しさがあります。『枕草子』では冬の朝に「もののあはれ」を感じ取っているけど、秋の頃に負けず劣らず夕暮れだってしみじみと趣深いモノです。それに、一応の宿泊予定地も自分で決めているから、不思議な安心感があります。予約も入れてないから本当に泊まれるかどうか、全く保障はないんですけどね……。いいんですね。しみじみと心豊かに終わらぬ一日に感謝します。

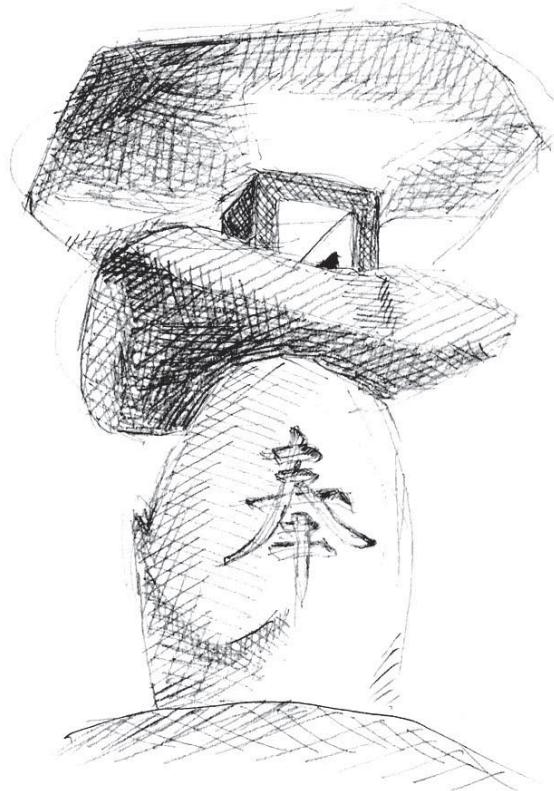


浮かびくる夜。

燈
籠

205.12.24

暗くなつゆく空氣をまぐ
辺りに温かく優しい
光を放つ
石。ごかい



夜が浮かびくるという印象でした。本来は光の方が浮かんでくるという方が正しいようにも思つんだけど、どうも、暗の方があぐグッと浮かび上がつて僕の心をとらえただんですよ。

着いた時には少し明るさの残る夕方の色でした。そこに大きな石が積み重ねられています。ズシンと落ち着いたたずまいが風格を感じさせます。軽薄な僕にはないモノです。自分にないモノには憧れるモノで、一日惚れてしましました。じっくりと眼に焼きつけながらペンを動かします。どんどん色彩が変わっていく夕暮れの一時です。

燈楼には明かりが灯っていました。四角い窓口からやわらかな光を放っています。その光を受けて石の素肌が浮き上がり、暗さが自己を主張していました。光があるから影があるし、影があるから光が引き立つんです。お互いに支え合つている感じがします。どちらか片方だけになつてしまつたら、とんでもないことですね。光だけだつたら、まぶしすぎて目を開けていられないとかできなくなる。影だけだつたら何も見えません。

光と影、どうも光の方に注目が集まらがたかだけど、それだけじゃないんですね。僕の偏った見方を、大きな石の燈楼が教えてくれました。奥の深い暗さが、今までよりも少し温かく感じられるようになつたと思います。日々成長です。



軽車両になるんだったでしようか。世の中に数ある交通手段の中でも取り扱いにくい部類に入るモノだと思います。「馬」です。モンゴルの草原を思ひ存分走り回るには最高の乗り物でした。ある程度の指示を出してあげないと道を間違えることもあるけど、基本的にはフルオートマティックで勝手に動き回ってくれます。

信号が赤になつたら自動的に止まるんでしょうか。あんまり自信がありません。うんちはやつぱり拾つて歩かなきゃいけないんでしょうか。面倒です。燃料をガソリンスタンドで売つてくれるでしようか。まあ無理です。アスファルトに固められた日本という国の中で「馬」という交通手段は、すでに念頭から外されているモノのような気がします。

さすがはお四国。伝統が生き続けているようですね。昔から遍路というものを通して物事の長所を見つけて生かしているんですね。古いものでも新しいものでも関係ありません。いいものはいいし、ダメなものはダメなんですね。常に本質をとらえる眼をもつて、見た目じゃない部分で判断できるようになる必要があるんですね。表面上の美しさや便利さに踊らされてこぬだがじやなくて、本当の自分の眼で見極められることが大切だということわざです。さて、交通手段としての「馬」、お四国の中でも一度も見なかつたよつて思つのは僕のせいでしょうか?……。

宿

飛び込みで

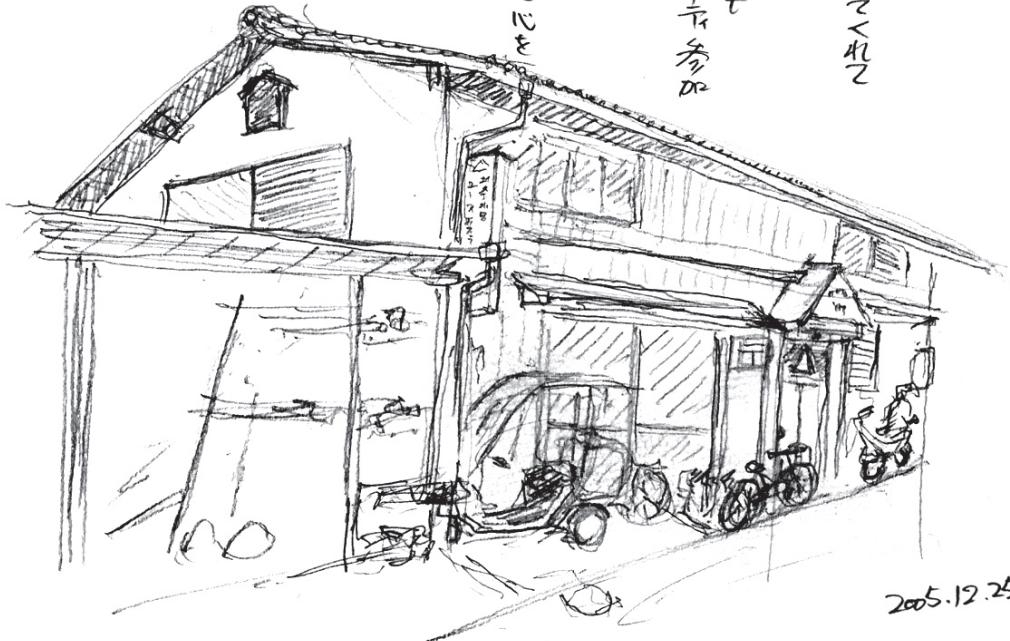
それがも泊められ

あります

とまだまざと
クリスマスパーティ参加
あります

寒い日

温かい部屋といふと
あつがとう



行つてみなけりや分からぬ、歩いてみなけりや分からぬ、だからとにかく行つてみよう、歩いてみよう……と思ひながら旅をします。行き当たりばつたりといつて言葉がぴつたりです……。歩きの速度と到達時刻は正確に予想することができません。予想というより予感というくらいのイメージで、僕は自分勝手に進んでいきます。その先に北条水軍コースホステルという宿があることは知っていました。以前出会ったチャリダーが泊まつたことがあると話していたからです。何となくおもしろいそうな宿だつたので覚えていました。

突然に訪れた宿ではクリスマスパーティをしていました。一口ストチキンをいただき、寒くてうまく動かない手を駆使して肉を食べます。首の部分をゲット、チマチマ食べていました。この宿のオーナーは料理に強い思いを込めているから、全ての食べ物があいしくておいしくて……。楽しくて、お酒を飲んでいた他の宿泊者と、かなり遅くまでワイワイ話をじてしまいました。

いきなり現れた歩き遍路の泊まり客、一般常識的に考えたら夜の九時に宿を訪れるなんて、実は迷惑な客だつたんじゃないかと思ひます。泊まれなかつたら歩き続けるなりテントに寝るなりすればいい……と工工加減な僕を迎えてくれて感謝感激でした。居心地がよくて、翌朝の出発ものんびりになつてしましました。



いへり何でもやりますが。何がどうなればそんなモノが道端に落つていいことになるんでしょうか。もう、僕の心はわしづかみ状態で持つていかれてしましました。……入れ歯……。

歩きの速度だといろいろなモノたちを発見する機会に恵まれます。車でもバイクでもチヤリソコでさえも見落とすような小さなモノたちが僕の目に飛び込んでくるんです。宝の山に見えることがあります。前夜、寒くて指先が動かない中で鶏の首にかじりついていた経験から、手袋を手に入れるなどを考えてくる時でした。予想通り、車にひかれてぺったんこ状態で軍手の類がたくさん落ちていました。滑り止めのゴムつきの物から大小様々、選びたい放題です。下向きな歩きが続く中、現れました。……入れ歯……。

そういうえば、ぱーちゃんも歯が悪くて、ガボッと取り外してはガシヤガシヤ磨いたり、洗浄液に浸けたり何かと手入れしていました。亡くなる三日ぐらい前の日、バナナを食べたいとリクエストしたので、スライスしたバナナを口元に運びました。ねつとりとした口の感触が忘れられません。その時はしてなかつたと思います。……入れ歯……。

何かを食べている時って、ものすげえ幸せです。この幸せが味わえなくなったら、つらいだろうと思します。幸せが続くためにも大切にしなけりゃいけないような気がします。……入れ歯……。



明日は我が身か……下向きに歩く僕の田に入ってきたのは乾ききったヒトデでした。そんなモノ見るのは初めてのことです。思わず手に取つてしまひじみと観察してしまいました。

白骨死体とでもいうかのような姿です。五方向に伸びた体には、びつしりトゲみたいな物が生えています。ボディの部分とでもいいうのか、中の部分は空洞になつていました。おそらく血が流れ肉がついていたんだと思います。当然ともいあうか、手にしても重さをほとんど感じません。

遍路というものが生まれてから、お四国という場所は特別な場所になつていつたといいます。途中で息絶える人もいたようだし、口減らしのために旅に送り出すこともあつたようにも考えられます。二度と戻ることない旅路になることも多かったわけです。人の死というものが染みついた道を僕らは歩きます。小さな生き物たちの命も同じように見つめる世界観です。

僕の場合は、そんなに物事を達觀しているわけでもなく、申し訳ないぐらいにへラへラと歩いています。落ちていた軍手をありがたく使わせていただき、現代日本という国の豊かさをまとつて歩いているだけです。ただ、旅先で命を失うなら本望だと思えるくらいに一瞬一瞬を悔いの残らないように生きていきたいと思っています。貴重な命の全力投球です。



マヤとかアステカとか、あの辺りの文明が大好きです。何とも謎に満ちていて、ワクワクしてしまいます。ピラミッドを作つたり、それに付随するでかい石の遺跡があつたり、かつていいんです。ステキです。芸術です。太陽を崇める習慣があるから、それも神秘的に表現されます。人の心臓を生きたまま取り出して太陽に捧げたりもしたみたいですね。日本の文化とは全く異なるモノが流れています。

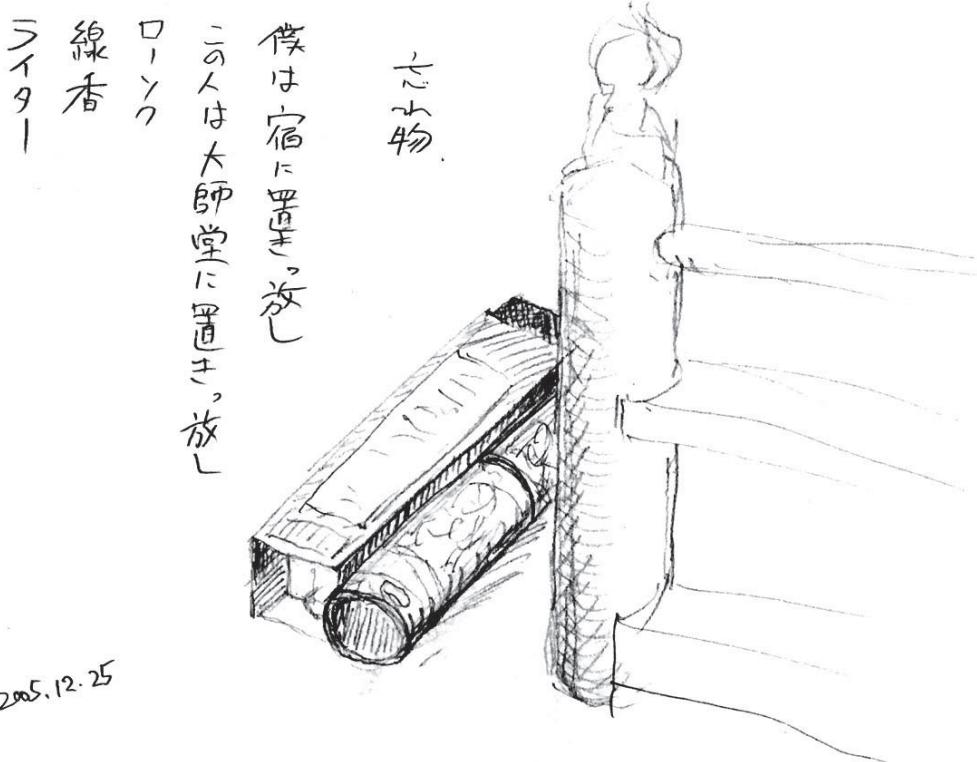
お四国は全ての文化を包括するのか……、派手な装飾をされた壁がありました。太陽に魚、人、トカゲ?などなど、どうも中米的な雰囲気が漂っています。その壁の前に軽トラックが停まっているのがまた異国情緒を醸し出すとでもいうか、ミスマッチな構成美を感じさせます。

美しいモノを見ると、僕の力がないことをしみじみ感じます。どう考えても僕があの独創的な芸術作品を生み出すことはあり得ません。芸術作品に限ったことじゃないけど、僕は自分の中からあふれ出る表現欲に欠乏しているように思います。外からの刺激を受けて、それに反映させる形で自分の色を出していくことがほとんどです。よくも悪くも僕の心は常にニユートラル状態を保つていています。真っ白です。もうちょっと自信をもって外界へアピールできるような「何か」を心に育てていきたいモノです。

ものを見ていねといつ能力が著しく低下してしまいます。わりと昔からそういうのはあるけど、本当にいろんなことをすぐに忘れてしまいます。やかんを取るうとして立ち上がりつて台所まで行つた所で、自分が何をしようとしていたのか思い出せずに戻つてくるような類です。

いこいとも悪いことわざじん忘れてしまいます。過去のことは過去のこと、こだわりなく生きていけると考えたら前向きな感じがします。でも、僕の場合は先への見通しをもつことも苦手であるといつ弱点があります。過去形もダメ、未来形もダメ、とすると残されたのが現在形であり現在進行形です。とにかく今という瞬間をがむしゃらに生きている感じがします。この状態、客観的に見たらただのエエ加減人間といつになります……。

物事という中の物を忘れるか事を忘れるか、比較します。物は忘れててもどうにかなります。僕が宿に忘れてきた線香やろうそくといったお参りグッズも他の人に役立ててもらえたらい、それでめでたしめでたしです。第五十四番札所に忘れられていた線香やろうそくも誰かが有意義に使っていけばめてたしめでたしとなります。事を忘れてしまつたら、フォローするのが大変です。記憶の整理棚をあわいに探し回らなければなりません。……できれば、忘れないと願つひとと自分の意志で記憶の奥へ追いやつたいです。



2005.12.25

僕は宿に置き、放し
この人は大師堂に置き、放し
ローンク
線香
ライター



天の川が地上に降りてきたような光景……、もちろん、そんなモン見たことはないけど、とにかくきれいだと思いながら川沿いを歩きました。もう夕暮れ時、その日最後の札所を目指します。美しいもの、僕は憧れます。自分自身が美しさを持ち合わせていないので、反動なのが、ものすごく美しいものへの憧れが大きいみたいで。水面の美を写真に切り取りながら、自分の目で川をのぞき込みます。やはり……とでもいあうか、街の中を流れる川であり、土手はコンクリートで固められており、生活排水が流れ込んでおり、水は濁りよじんだ水がテローンと力だるい様子を醸し出していました。

パッと見た時の美しさ、その影に隠れる汚さ……。どちらも事実です。逆だったらどうでしよう。パッと見た時の汚さ、その奥に輝く美しさ……。どうも後者の方が倫理的な価値観からすると尊いように感じられます。でも、美しさのない者のひがみも含めて判断するなら、そんな倫理観なんてウソつぱちだと主張したくなるります。外面の美しさをもつ者は自己肯定感を高め、内側が美しくなつていいくパターンも多いんです。自他共に認める美しさが外側からも内側からも磨かれるんですね。いろいろ限った限りです。川は美しかった……、それでいいのかもしません。たまには眞実から眼を背けることがあった方が気が楽ですか……。

夕暮れの風を受けて。



2005.12.25

もの悲しい時間を迎えました。お参りを済ませてホッと一息です。冬の夕暮れ、日が傾く頃にはじんじん寒くなっています。その風を受けて風車が回っていました。一つと伸びた竿の先端に一つ、中ほどに一つ、カラカラと回る風車です。ペットボトルから生まれたモノたちでした。第五十五番札所でのことです。

その日も午後五時を回り、納経所は閉められています。のんびりとスケッチブックに向かえるいい時間です。でも、夏とは違つてあんまりのんびりしそうるとあつという間に暗くなるし、寒くなります。スケッチブックとの対話はあつきりしたものにならざるを得ません。いかに自分の心に響いたモノを象徴的にとらえるか、それをいかに自分の技で紙の上に写し取るか……、努力だけはしてみます。結果的にはあきらめという言葉が頭に浮かぶことがほとんどです。仕方がありません。絵を描くことは仕事じゃなくてただの趣味だから、まあ、そんな感じです。

だんだんに暗くなり寒くなる境内で、風車を描き始めました。隣には背を向けたお地蔵さんがいます。じいカテンツを張るのにいい場所を教えてください、とお願いをしたい気分です。暗くなつてから寝場所を探すのは少しばかり大変なこと……、絵なんか描いているのがアホくさくも感じられ、もの悲しい時間でした。

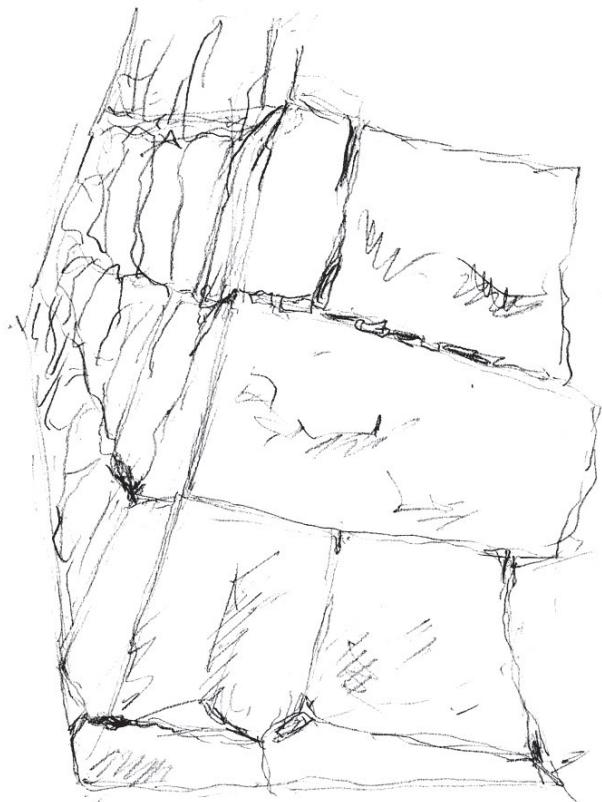


心細い気持ちで寝場所を探してしまった。「オベンロサンデスカ?」と僕を呼ぶ声があつまむ。アクセントが微妙に四国弁じゃありません。どうやら日本人の人でもなつぽいです。おお、これは欧米か……と思われる人でした。

小銭をいただめました。「オセッタイ」と聞こながら手渡して貰えるんです。僕は「Thank you!」とお礼を聞こめます。「オシコウダイスキテス」なんていひたままつてこねます。僕は「Oh, really?」と対応です。何かと話をしつづけます。「ナコシテマシトワダサイ」とゴボゴボ袋を取り出しこねます。「ハニカムカバ」などと差し出してくれたのが柿とキウイ……。「Oh, thank you very much!」と再びお礼です。

日本が好き、お日本が好き、だから、ここに住んでるんだらうし、いろんな習慣も身につけてこくんだと思ってます。それにしても外国籍の人からお接待を受けるとは思ってませんでした。外国から日本に来る人の中には本当に本当に日本が大好きで大好きでどうしようもない、日本の習慣になじむつと努力に努力を重ねている人もいるんですね。尊敬します。その土地の文化を学び敬うことは、その土地に住む人の心を敬つといつて通じるねばあります。別れ際、「Merry Xmas! And good night!」とまた英語で聞こえて立ち去りました。……僕は彼らのいた敬つてこねつぱりですか……。

ズシンズン。



壁
巨大な石の重なり
ズシンズンと重なる
石垣になる
重厚……

105.12.26

田の前に現れた大きな石、大きな石が積み重なつて大きな壁になつていました。この迫力が僕を圧倒します。第五十六番札所の石垣です。

朝は寝過ごし、田を覚ましたのが七時前くらいでした。夏だつたら、完全活動時刻です。七時には納経所が開くわけで、その時にはお参りも済ませているのが僕の方程式だつたんです。冬は起きることが一番つらいことになります。昔から朝が苦手で、なかなか起き上がれない日々を過ごしていました。冬の朝、テントで寝ていても同じこと……起きられません。周囲でラジオ体操をするあつちゃんやらおばちゃんやらが集まつてきてしまい、コソコソと逃げ出しました。

寒い朝だから田陰には入りたくないかもしれません。太陽の光を浴びて絵を描きました。ちようどいい気合に湯を浴びた石垣が堂々と迎えてくれます。石の文明は大好きです。モアイには抱きついてきました。アノホールワットにはへばりついてきました。マチュピチコにはよじ登つてきました。メキシコではペニラ・シド・パワーを感じてきました。未知なる過去の世界との接点を感じます。まことにまでの凄味は感じなかつたけど、大きいといつだけでも僕にとっては大きな価値があります。軽薄な僕にとつては重量感とは、永遠の憧れなのかもしません……。



たとえば床の間にあ皿でも飾つてあつたとしたら、僕は無性に腹が立ちます。お皿です。使つてあげてこそ価値を見出せるというモンじゃないでしょうか。自分の役割が何なのか、その能力を充分に發揮するからこそ美しく輝かねばです。

ガラス張りの向こう側に仁王さんがいました。なんか、幽閉されているかのようです。本来なら仁王門に阿像と吽像が両側から守り神のように立っているんだと思います。小さい頃、お寺へ入ろうとした時、迫力がありすぎて恐怖を感じたモンです。それでこそ、本来の役割を果たしている状態になります。

野ざらしに近い仁王さんも見たことがあります。じつに田があり鼻があるのかも分からぬくらいに風化していました。本来なら鼻息も荒く、ギロリと睨みをきかせて立っているんだと思います。小さい頃、門の仁王さんと目が合つた時、生氣を感じて恐れたモンです。それでこそ、本来の役割を果たしている状態になります。

仁王さんはいつも見ていました。いくらか眼力がガラスに吸収されているようにも感じたけど、さすがは仁王さんです。存在感は大きくて、気高さもありました。その場その場に適応して、役割を果たすことが大切です。目的のために手段を選ばないんです。ガラスの中から自分の能力を充分に發揮していました。

忘却の時間。

2005.12.26

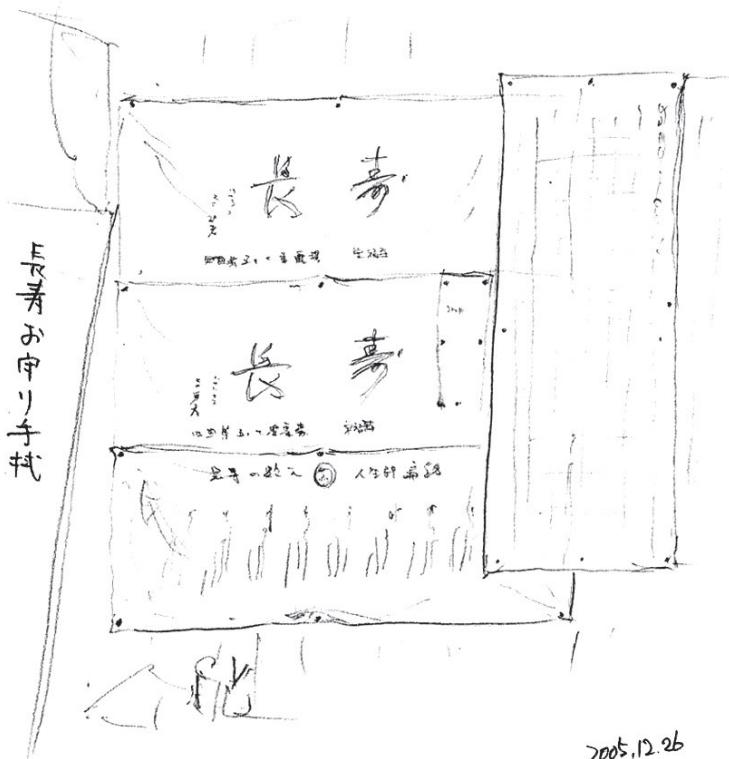
ばーちゃんはせつかちな人でした。せつかちな上に自分勝手で、頑固で、ややこしい人でした。一緒にいるトイライラさせられることがとても多かったように思います。約束の時間なんかがあると、ずっとじずっと前から気になつて気になつて仕方がありません。まだかまだかと言つて、周りの人間を混乱に陥れます。

第五十七番札所では印象的な手ぬぐいが目に入りました。歳ごとに言葉が連ねられています。この世に引き留めようとする気持ちが文字になっていました。誰でも同じなんだと思ひます。あの世へ旅立つ人と別れるのはつらいことなんです。それが何歳であるかは関係ありません。ばーちゃんがあの世へ逝つてしまつたのは九十二歳の夏でした。一般的には大往生というべき形だったみたいですね。コースケは十五歳、急ぎ過ぎです。僕にも大きな衝撃を与えました。

しみじみと言葉の意味を感じていました。夏から秋を経て冬になつている時間の流れを感じます。物事をどんどん忘れてしまう特技は健在です。少しずつ、あの時の感情が忘れられていく感じがします。夏の始めと夏の終わり、二回に分けて僕に命というモノを考えさせた季節は過ぎ去つた過去のことになりつつあつたんですね。

時々でもいい、ふとした瞬間に思い出したいと思つます。

卒寿
九十歳お盆えの来た時は
さうゆがすとち
ノニトナフ
ハモヒタ
セイシキ
セイシキ





朝日を浴びてキラキラ輝くトイレがありました。いや、正確にいうとキラキラ輝く水を放出するトイレがありました。公衆トイレだと思われます。水道料がかさむみたいですね。

トイレっておもしろいなあ……と、旅先でトイレを撮影する人がよくあります。別にトイレで用を足している人間に興味があるわけでも、それを盗撮しているわけでもありません。純粋にトイレにおもしろみを感じるんですね。インド、ヒンドゥーの教えに従って名実共に左手が不浄の手となつた銀行のトイレなんかは印象深く思い出されます。中国、列車付属で足をじりに置いていたらいいのか悩んだトイレも衝撃的でした。それぞれ写真を見せねば、みんなが「うわ！」という反応を示します。……ところひとつ、多少は僕の気持ちが伝わってこぬよですね。

外国のトイレと比較してしまつと日本のトイレなんてかわいいモノです。かわいく噴水を演じているくらいのモノですから、美しくさえあります。日本という国はとにかく異常にくらいにきれいな国だと思います。汚い所だってあるにはあるけど、それも一時的なものだったり、限度をわきまえているような汚さです。逆に考えたら、日本人は汚さへの耐性がなくなつてしまふといえます。無菌室で育つ弱々しい民族になりますんや。

わあ、みんなでトイレを汚そう…………いや、冗談ですよ……。

プラン、境内にぶら下がっているだけです。そして、そこから連想……といつよりは、妄想に近いモノが始まっています。

そこは縁の深いジャングル、あちこちから鳥や獸の声が聞こえてきます。ツルを使って木から木へと移動する姿、雄叫びをあげて過ぎ去る姿はどうやら人間のようです。身につけているのはわずかに腰巻きだけ、引き締まつた体が宙を舞つていきました。

木の枝にかけられたロープ
雄叫びが聞こえてきました
アーハー（
そそ
笑い声）

小さな頃、ロープがあるとそこに飛びつき、ブラブラと揺れていました。でも、僕は腕力がなかつたから自分の体重を支えきれず、ズルズルと落ちてしまします。なんとか結び目に足を乗っけて、ブラブラ揺れているだけで幸せな感じになつたモノです。決してジヤングルでは生きていけない姿でした。

目の前にあるロープは静かにそこに結ばれているだけです。誰もいません。第五十八番札所のことです。誰もいないけど、誰かがきっとロープで遊ぶんだろうと思います。僕の場合は焼津神社でした。境内に木が生えていて、大きな石碑があつて、何かと遊び道具になつていました。プランコやジャングルジムはあつたけど、特別な遊具があつたわけじゃありません。それでも充分に楽しめました。妄想の力は偉大です……。

などといながら……、一本のロープはたぐいのことを考へさせてくれた上に描くのに簡単で、ラッキーな題材でした……。

2005.12.26



最高の遊び場



喫茶店という場所、大学生の頃まで、自分とは関係のない場所でした。喫茶店に限らず、お金を払わなければいけない所に縁がなかつたというのが正しいんだけじ、とにかくコーヒーなんてすすつていいような所は僕の生活の中には存在し得ないモノでした。それが、しばらく前からとても馴染み深い所になりました。知り合いがあ店を開いてからのことです。おいしく淹れるとコーヒーという飲み物は非常においしいことを知ったんです。んで、軽食として扱われるけど、メシを食べ、コーヒーをする習慣が僕の中に根付いていきました。

毎メシ時、どんなお店に入るのか、少し考えます。「ドキドキしながらお店に入つていもあす。おしゃれなお店だと余計にドキドキしてしまいます。といひが、この時は、お店を出る時にドキドキしてしまいました。「お接待です」とことじで、五円玉をいただいたんですね。カツコイイなあ、と思つました。「ご縁がありますように……」つてことですよね。

直接的に考えたら、五円という金額で何かができるか……、多くのことは望めません。でも、金額以上の気持ちが込められていることが分かるお金です。五円硬貨の偉大さです。人間でも同じ、直接的に何があるんじゃないても、ジワジワっと伝えられる何かをもつていたらいいなあ、と思つます。ダシを効かせましょ。

手のぬくもり。

握手

手を握ること
それが伝わることも多
いのがもしねない



2005.12.26

人のぬくもりがほしい時……あつまか。フラれてしおったものにな時、むかへ、じぶんかく心にポチカツと穴が開いた状態だつたらしく、相手は聞ねない、「誰でもやめこくしてくれえ」と泣き声で泣くなつまか。向をやつてこむ心いいじみのりか、おぬまかゆく出でいなさい歯である。

握手をすると、相手のぬくもりを直接感じられます。物理的な温度はだいたい三十六度くらいで、インフルエンザで高熱の人以外はそんなに大きく差の出る人はいないはずです。「熱い」と感じることも「冷たい」とも感じない、まさに人肌の温度です。心地よい温度なんだと思います。そして、じんわりと伝わるその人肌の温度に加えて、握りしめた適度な圧迫感が心理的にも温かさを助けます。田があつたりしたら完璧です。

右手を差し出していたのは弘法さんです。物理的な温度はだいたい十度くらいのモノでしょ。石ですか……。寒い冬の季節に冷え切った弘法さん、それでも僕は握手をします。握手あるいとで何かが変わつたらラッキーです。過大なる期待はしていません。何がが変わるきつかがでれるかもしけなこと思つてます。何でもいいけど、とにかく具体的に動いて心のよじみが晴れることがあります。弘法さんと握手するなりなのいひと……。少なくとも気分転換にはなりました……。



何のお願いをしたか……そんなことは秘密です。恥ずかしくてとても人には言えません。とりあえず「握手をして、お願ひして下さい」と書かれているからには、まず握手をし、お願ひをするんです。立て看板には「願い事は一つにして下さい。あれもこれもはいけません。お大師様も忙しいですから!」なんて続いています。そりや、全国各地からお四国遍路の旅に出る人は多いだろうから、多すぎたら困りますよね、きっと……。一つだけです。

もちろん、チャンスは一回です。セルフタイマーを設定して、慎重にファインダーのぞき込み、自分の体の角度まで計算に入れてから実行に移ります。弘法さんの姿が半分くらい隠れていても構いません。計算ズくです。一応、僕なりにスケッチブックには表情まで写し取つてあるから大丈夫なんですね。

もちろん、チャンスは一回です。セルフタイマーの設定をして、何度も繰り返して撮影していたら、それこそ恥ずかしくて人前に出ることさえできなくなります。怪しげな人にはなりたくありません。僕は健全な歩き遍路の旅人です。この第五十九番札所に着くまでには、野グソもしたし、立ちショボもしたし、少しは怪しい行動もしたけど、非常事態だつたんだから仕方がありません。基本的には僕は健全な歩き遍路の旅人なんです。写真を見て、怪しげな行動の証拠だと思つてはいけないのです。



応援してくれる人がいるということもあります。力が湧きます。どれだけ落ち込んでいても、どれだけ心が弱っていても、どれだけゴールが遠く見えても……。

第五十九番札所を出ると、次の札所までは三十キロ以上も離れています。しかも、山の上です。西日本最高峰だという石鎚山へ向かう途中にあるといいます。遙かに見える山の頂は白く彩られています。どれが石鎚山かは分からぬけれど、とにかく気が滅入る一方です。

ピロリロリーンとケータイ電話にメールが届きました。夏の通路と一緒に歩いたタカハシさんからの応援メッセージです。しみじみとうれしさがこみ上げてきます。だんだんに辺りが暗くなつてくる頃、一割増くらいで心にすきま風が入りやすい頃です。そのタイミングで応援の言葉が届いたら、心中へ直球ストレートど真ん中にズドーンです。タカハシさんが女人じゃないのが少し残念だけど、この際だから我慢します。

僕としては、翌朝一番に第五十九番札所を攻略し、その日の内に第六十四番札所までクリアして距離を伸ばさうという心づもりです。暗くなつてからも歩かなければなりません。遠くに見えるあの高みを田指して、ゆづくらゆづくら、それでも確実に応援の言葉を胸に歩き続けます。



夜中になつていました。お四国冬の陣とでもいいくべき第四期歩き遍路を始めてから何日も経つていいというのに僕の足にはマメができる、マメができるて痛いというのに夜中まで歩いているんです。僕は何をやつているんでしょう……。何つて、ただひたすら歩いているだけで、それ以上でもそれ以下でもないはずです。歩き遍路です。

そこから先は山道でした。先の山道へ進むほど危険が好きな人間じゃありません。寝ます。東屋があつて、野宿には最適です。しかも、そこにはふとんが置いてあります。我々のような人間のためにあるんだと信じて使わせていただきます。テントの中に引っ越し込み、ぬくぬくと寝場所をセッティングしました。完璧です。

僕の寝袋はスリーシーズン用という設定で、春・夏・秋がその守備範囲になります。冬は想定外です。寒いんです。ところが、なんと温かいのかと感動しながら寝袋とふとんを併用させていたきました。寝袋とふとんでは何がどう違うのか分からぬけれど、寝袋で寝ていると足先がメチャクチャ冷たくなります。ふとんでは冷たくならないのになぜなのかと不思議に思います。ふとんには僕らを温める特殊能力が備わっているみたいですね。そんなふとんが東屋においてあるんだから、お四国の温かみはすうじんです。何よりも心が温まつました。



いつでもどいつも納経所の始まりは朝七時、常なることです。できれば、その時刻に近いうちにお参りをして次の札所を日指すのが歩き遍路のペースとしてはいい感じになります。なので、まだ薄暗い頃から起き出して、何となく明るくなりつつある山道を進みました。意外にも歩きやすく見えたのは、雪が積もって周りが白く、明るく見えたからかもしれません。融雪の功という言葉のすぐさが分かったような気がします。

歩きやすく、見えたんです。そう、見えた……、見える明るさがあつたんですね。決して歩きやすいのと同義ではありません。歩きにくいくらいです。怖いんですね。ついでに寒いし冷たいうんですね。雪道なんて大キライですね。

雪山を日指すほど山が好きな人がいます。僕は違います。いつの間にかそういう場面に行き会うことはあります。屋久島でもそうでした。九州の南の島に雪が積もっているなんて反則です。あの時も、苦労して歩いていました。……そして、第六十番札所が見えるその時も、同じでした。自分が雪の中を歩いていることの現実を仕方無しに受け止めつつ、それでも自分の中には疑問が湧いてくることもあります。山門が見えた時には中途半端な平静さを感じます。歩くこと……全てを浄化する作用があるのか……恐るべきパワーを秘めています。雪の山門でした。

凍結。

清めることがたやすい

完全に凍ります。



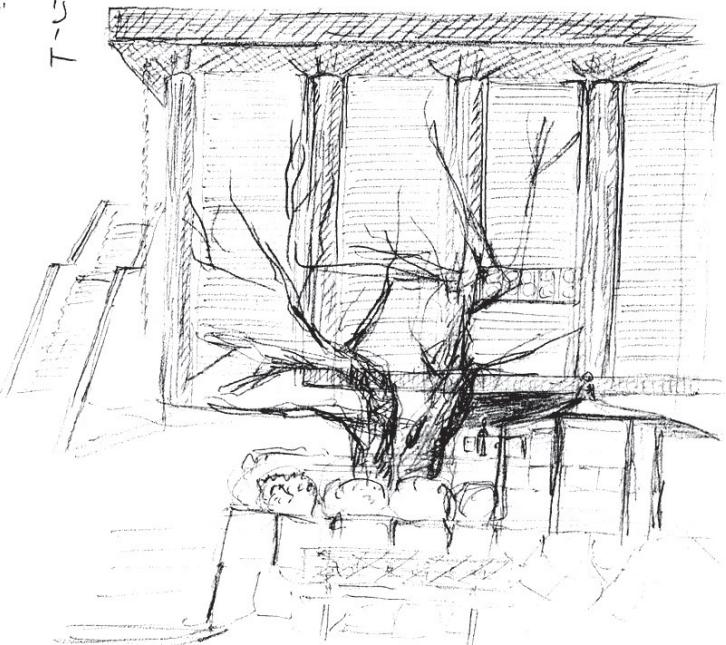
僕は汚れの多い人間です。内側も外側も汚れっぱなしです。内側の汚れは落ちにくいけど、せめて外側の汚れを落とすフリぐらいでしてあかなきや仏様に失礼というモノです。……というわけで、手を清めようとしたところ……、僕に選択肢はなくなりました。洗えません。選びようがないんです。ガチガチでした。

小さいころ、時々、水道が凍りついた朝がありました。蛇口に手を出し、グルグルひねっても水が出てこないんです。あれあれ、と思って何度も繰り返しているうちに、水を出そうとしていたのが止めようとしていたのが分からなくなつてくる始末です。最近、水道が凍つてしまつことが少なくなつたような気がします。地球温暖化のせいが分かりませんが、不便を感じない生活が続いていました。

それが、山の上、横峰寺で人々の……、というか、これは過激な凍りつき方でした。パッと見たところ、水が流れているように見えました。でも、それは、流れたフリをしているだけだったんです。流れたフリをしたまま凍つていきました。柄杓たちも水に頭をつけたまま動けなくなつていきました。

少しは不便な経験もしていた方がいいんだと思います。人間の幅が広がりそうに思えるからです。仏様ゴメンナサイ。僕が汚いのは、凍りついて不便な水場のせいです……。

強い歩り。



2005.12.27

いきなり雪のあizzard、怒濤のように変化が感じられました。凍りつゝ山の上から下界へと我が身を移し、さらに自分を磨く旅路だけど、意外なほどにすんなりと下山してしまいました。山の中にはなかつたようなモノたちがたくさん出迎えます。アスファルトの道に自動販売機、二十四時間営業の便利な店などなど、日頃は当たり前に思えるモノたちが、固い面持ちで街にたたずんでいました。山にはない、街の表情です。

着いた第六十一番札所の本尊さまは堅固なコンクリートの屋敷に住んでいました。外側から見ると、博物館とか美術館みたいな雰囲気を醸し出しています。お寺というイメージとは少し違うよううに思いました。僕が思うお寺のイメージは、まあ木造建築です。古めかしい柱が立っていたりして、その上に重厚な瓦屋根が乗つかつていたりして、ふすまには隙間が開いていたりなんかして、どうやらだかく聖堂なるものが建つ

この中に
大仏如来せよと
お大師さんか
いるんだって
木々見えやなよ……

木々見えやなよ……

木々見えやなよ……

木々見えやなよ……



信号機の上に「歩車分離式」という文字が書かれています。見て、どういう意味だろ？と、暫し考えました。そして、信号機を見比べると、自動車用の物が赤であるのにも関わらず歩行者用の物が青になっています。之は異な事……という状態です。それから、この状態に長所があるのか、と考えるに至ります。自動車用信号機が赤を示すとなれば、即ち、交差点に進入する原動機付きの車両は皆無となるはずです。その瞬間を逃さず歩行者用信号機が青となるなら、老若男女問わず安全に交差点を横断できることになり、非常に安全であるといつ結論に達します。わざと加筆するなら、歩行者が縦横無尽に横断することが可能となるため、斜め方向へ進むことにより複数の信号機に煩わされることからも解放されます。見事なり「歩車分離式」であります。

交通事故とは悲惨なものです。そこに関わった人たち全てが不幸になります。直接の被害者、被害者の家族を始めとして、その知り合い、それを見た人、助けようとした人、助けられなかつた人、加害者までみんなが不幸の底に突き落とされます。それを少しでも減らそうという工夫の姿が「歩車分離式」なのかもしません。もちろん、待ち時間が長くなつたりする弱点もあるし、完璧に事故を抑制することはできなかつたりもするけど、安全のためにできることは何でもやりたいんです。大いに応援します。

次……。

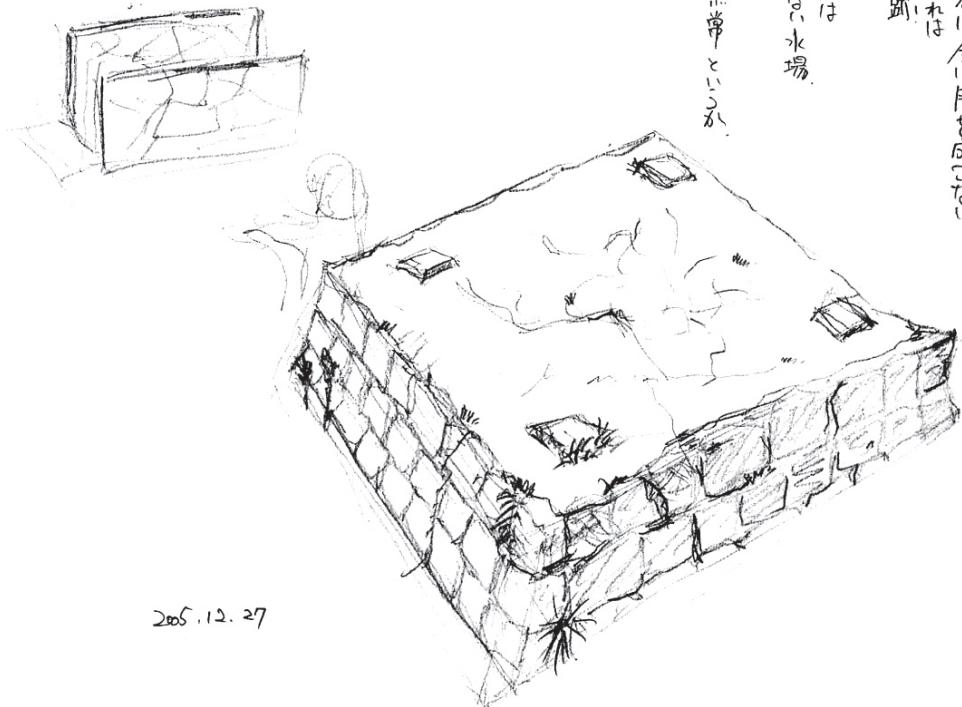
廃虚

あせらるにへんか用をなすだ。
きよんこれは

鐘樓跡

向いには
水のまどり水場

諸業無常 といふ



諸行無常とはいいながら、見事なまでに「跡」となつてしまつている姿を見るじ、やつぱり心に寂しい隙間風が吹きます。ものがなくなることを本能的に負の出来事としてとらえることが人間なんじやないかと思いました。

分かつていてるんですね。物はなくなるからこそ貴重だし大切にしないきやいけないんでしよう。大きな考え方をすれば、輪廻転生、全てが次の段階へと向かつていまお。

明るく考えてみました。例えば、第六十一番札所にあった三段ほどの石垣、これは土台としてはじつまでも強く存在しうる物です。次の段階が見えます。礎の上にはもう一度すばらしい鐘楼が建つことができるんです。なくなつてしまつたかのように見えるけど、やつぱり次の布石を打つていたのかもしれません。

人間には、本当に、次の段階があるんでしょうか。僕にはまだ分かりません。でも、それを信じられたらどれだけ幸せになるのかと感じます。昔から人間は死というものを恐れ続けてきました。当然のことです。肉体は滅び、動かなくなつてしまします。じゃあ、それまで動いていた感情はどうなつてしまつのかということです。天へ昇り、また、他の命として心が受け継がれると考えたら死の恐怖から少しだけでも遠ざかることがあります。全ては無から生まれる……、やつぱり僕はまだ分かりません。

コマイタと「うそのたちが
神社ご僕らを迎える。
ニニガハ
象が僕を迎えてくれた。
ややしきうな象。
ちょうどうれしくなってました。



インドという国そのはかとない魅力というのか魔力というのか、とにかくスゲエ~と思ってしまったことがあります。宗教観についてです。まず、神様がメチャクチャたくさんいます。僕には全く理解できないレベルで個性豊かな神様に満ちあふれているみたいです。来る者は拒まず……といった具合に、どんどん増えていつたという噂も聞きました。全てを飲み込む包容力、怖い感じがします……。僕はびっくりしました。象の顔をした神様がいるんです。まあ、ホントにいろんな神様がいるモノです。しかも、どこの神様がいすいかの神様の首をチョン切つてしまい「「」りゃイカン」と、首をつけてみたところが象の首だつたなんていいます。もう、宇宙的規模の発想力です。

そして、第六十三番札所では象が僕を迎えてくれました。日本にまで勢力を拡大しているのが象の神様……、すごい力です。でも、その姿形は少々かわいすぎます。「コマイヌ」なんて言葉の響きはかわいいけど、実際の姿は高く評価できるほどのモノじゃありません。もし「コマゾウ」なんて言葉があつても言葉の響きはかわいい感じはしないけど、実際の姿はとてもかわいいものでした。僕の趣味にバツチリ当てはまるセソスです。

本物の象は大きくて強くて畏れの対象にもなりそうだけど、その畏れは親しみにも通じるものかな……と、チラッと考えました。

くぐることに意義がある。



象に迎えられた後は「お迎え大師」が迎えてくださいました。そして、その隣には「くぐり吉祥天女」がくらうしゃいます。いろんなヒトたちがくらうしゃる所でした。

くぐるように立つてくらうしゃるわけだから、そりや、くぐらなきや失礼つてモンです。何があるのか分からぬけど、とりあえずカメラをセットしてからくぐりに行きます。自分の顔が見えるように後ろ側からくぐりました。……つて、メチャクチヤ失礼な振る舞いをしてくるような氣もします。いや、氣のせいです。くぐつてみると、凡人の僕には何も見えず何も感じられず、ただ、石の下を通ったという事実だけが残つてしましました。やっぱり、失礼……、無礼者です。

東大寺の大仏さん、鼻の穴と同じ大きさの穴が柱に開いているといつて、くぐつたりします。それをくぐれたら幸せになれるとかいつて、大人になつてから挑戦しました。幸せには過酷な挑戦が必要なんですね。途中で引っ掛かるかとドキドキしながらも、何とか通り抜けることができました。なぜかその時はスーツ姿で、ネクタイもしていたんだかど、そんなヤツがモソモソと穴から出てきたり、気持ち悪くて固つて迷惑をかけていたかもしません。何か、くぐつ抜けた時、その向七十かの力を浴びぬくじょい。偉大なる力を浴びて、僕はやうに歩を続けます。長い一日です。

僕の中ではストライク！

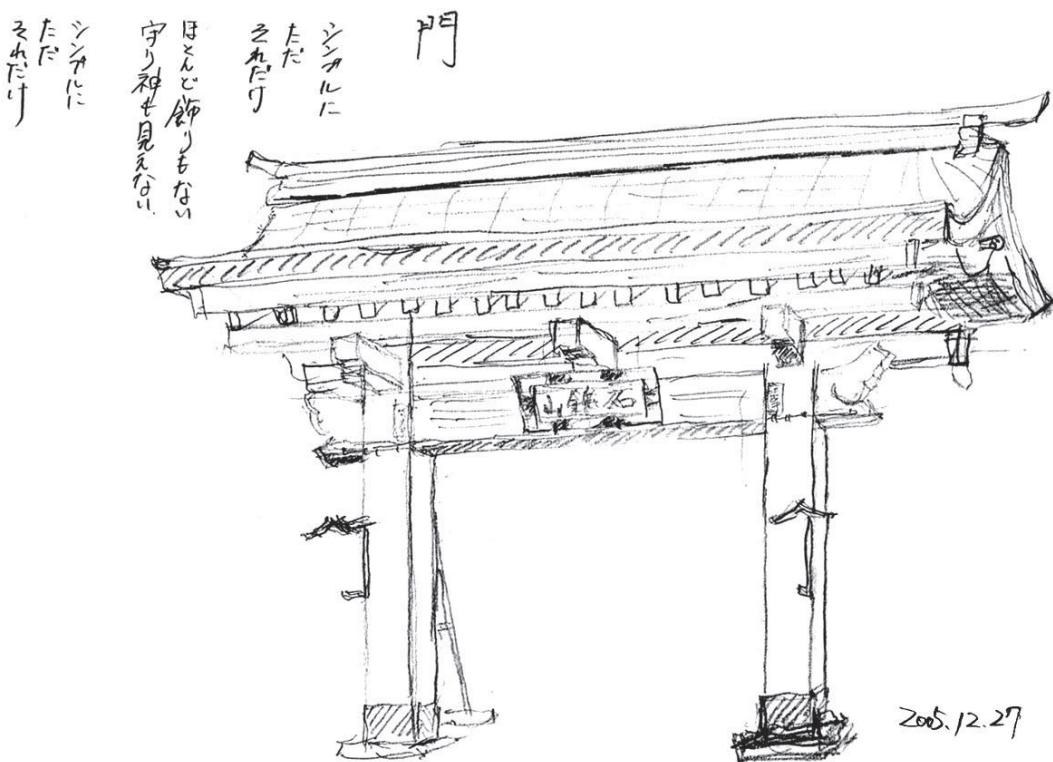


間抜けなんです。そう、間違いありません。僕はよくタイミングを外してしまいます。こじぞという時に、見事なぐらいにポイントを外した行動を取つてしまるのが悲しい性です。

そんな僕に負けず劣らず外してしまったヤツがいました。「甘酒アイス」です。本来の僕の中では、完全に直球ど真ん中ストライク見逃しアウト、ゲームセット……というくらいにやられていました。でも、その時としては、大暴投フォアボール押し出し逆転サヨナラゲーム……というくらいの外れ方でした。寒いなあ、どうしようかなあ、と思いながらも近づくと、商品がありません。ああ、無情……。

確かに真冬の寒い時にアイスを食べようとする方が、タイミング的には外れています。仕方がありません。でも、人によつては、ただ名前だけに惹かれて、誘惑に勝てない場合もあるんです。サヨナラ勝利を収めたはずのフォアボール……、何とも不完全燃焼の感覚です。合唱コンクールで、ちょっとだけ失敗をして「完成度としては他のグループの方がよかつた」と思つていたのに一番に輝いてしまった時にも同じような感覚になりました。逆に、精一杯やりきった時には、一番にはなれなかつたけど大満足だったこともあります。

結局は自分次第……、自分の心が世界を変えるんですね……。



イメージとしては鳥居です。柱があつて、その上の両側部分からお互いに屋根が伸びて合体、ちょっとだけ外側へウイーンと張り出したら山門がほぼできあがります。山号の額を取り付けたら立派な門です。文句は言わせません。四国霊場第六十四番と示す石柱もたつっていました。完璧です。

それなりに太い柱でした。それがコンクリートの地面から生えているから違和感があったのかもしれません。一本だけです。しかも、柱の周りには仁王さんなどもいません。それで、違和感があるのかかもしれません。門の向こう側には軽トラックなんぞが停まつていました。だから、違和感があつたのかもしれません。とりあえず、何かしらの違和感が僕に入り込んでいました。

どっしどしだした山門が多かったように思います。柱の数としてはズドンズドンと八本くらい立つていて標準装備のような気がしていました。ちょっととした家のような感覚です。別に、柱なんて二本あれば充分なんですね。山門は成立していました。それなりの建築様式があり、長年の間に培われたスタイルなんでしょう。柱は八本ズドンズドンなんて、僕の勝手な思い込みです。

人間にもいろんなタイプがあります。豪華絢爛に自分を表現する人もいるし、僕のように慎ましやかに控えめな者もあるのです。暗いヤツ……ではなく、慎ましくそのスタイルで自己主張です。



笑顔はいいなあ、と常に思います。常に笑顔でいられたらいなあ、とも思います。笑顔は笑顔を招く、笑顔は幸せを運ぶ、そう信じて生きてきました。実際に笑顔を絶やさないことはとても大変なことで、僕の笑顔は引きつり、ニヤニヤとなり、最後にはドカーンといきなり怒りの面になってしまいこともあります。ニヤニヤした仏様を見たことがあります。じつちかといえば、冷静さを保った表情をしていることが多いような気がします。でも、昔から人々は笑顔を大切にしてきているのかな、とも思い直します。パッと見た時には冷ややかに見える表情も、実は慈愛に満ちていることがほとんじです。

弘法さんはどんな顔をしていたんでしょう。僕は会ったことも話したこともないから具体的には知らないけど、厳しい修行をした人だから、強面なんじゃないかと想像していました。肖像画を見ても、真面目えくな顔をしてすわっています。それが、笑顔のやさしさを前面にアピールしている弘法さんがいて、僕はとても親しみをもつてしましました。むしろ、とほけたような顔という方が正しいくらいに肩の力を抜いた表情です。こんな顔に少しだけ憧れを抱きます。何も考えてなくて、ほよくんと平和な顔だけ、本当はメチャクチヤ厳しい修行に耐えてきた芯の強さのある顔……かっこいい顔だと思つんですね……。

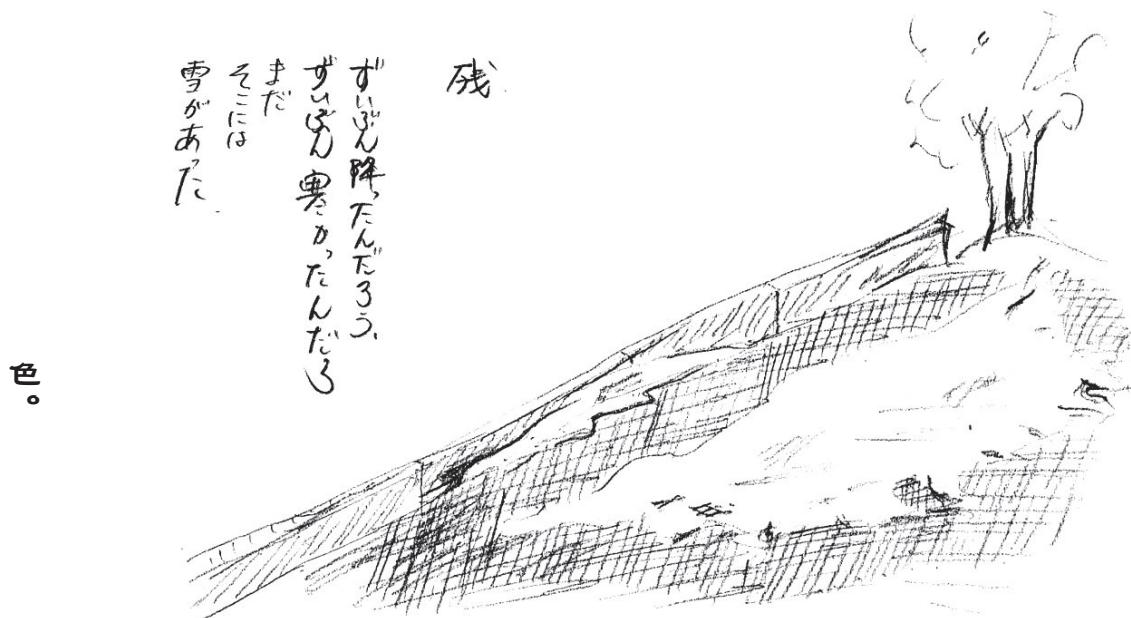


温泉に浸かって体を温め、メシを食い、万全の態勢で歩き出しました。なのになぜ、すぐに僕は弱音を吐くんでしょう。しんどいんです……。寒いんです……。腹まで減つておまか……。

日本という国はすごい国です。大きな道沿いには夜中でも電気をバシバシに光らせて営業しているお店もあるんです。結局、僕の弱い心はファミレスへと吸い込まれていきました。そしたら、入り口に遍路グッズが置いてありました。ああ、同じ屋根の下に歩き遍路の人がいるのかと思うと、それだけでうれしくなってします。タカハシさんからの応援メールもそうだったけど、事情が分かっている人間だけに通じる心のふれあいです。しかも、寒い夜中に、同じ道を歩いているのかと思うと、親近感たっぷりです。心と心は三センチくらいにまで近づいていますよ……。周りを見回したけど、体の方がどこにあるのか、正体を見極めることはできませんでした。

絆といつも葉を大切にしている人たちがいました。人と人との結びつき、どうどうのよに絡まっているのか分かりません。でも、一度つながりを感じたら、それも何かの縁、相手を敬い、お互いに慈しみ会う心をもつてこうりつよ、ってことですよね。絆といふ葉の深みを感じます。

ファミレスを出たとき、わざわざ遍路グッズの主は発つていました。



2005.12.28

絵の具は持ち歩いていません。色をつけないとできない状態
 です。んで、田に入ってきた景色はモノクロ……、全然問題ない
 はずです。第六十五番札所の庭には雪が溶けずに残っていました。
 日陰にひつそりと白く残っていました。描き始めて、やっぱり自
 分の力の無さと読みの浅さに気づかされます。モノクロの世界と
 いいながら、白といつ色を表現することの難しいのなんの……、
 どうしたらいいのか分かりません。影をつけてあげようとしたら、
 雪が黒くなってしまって、日陰の暗さの表現も同じ黒になってしま
 います。何をやっても無駄でした。

あるようでない、ないようである……、色をつけたら白ではな
 くなってしまう……、汚れのない白……、偉大な色です。真っ白
 な心などと人に当たはめたりもします。本当にそんな汚れない心
 などあるんでしょうか。僕の心の色は混沌としています……。

まだ
 そこには
 雪があたた
 ザの雪が寒かったら
 すいごに降ったんだろう。



秋の頃「あほのグラシード」とも読める場所を発見しました。否、それは「あけぼのグラシード」でした。じゃ……、「ヶ」って何なんでしょう。周囲には他に文字らしき物は見当たりません。何の脈絡もなく「ヶ」です。これはあまりに難しく、そのレベルはナスカの地上絵にも匹敵するほどです。誰が何のために……。明らかに睡眠不足の僕は、冷静に物事を考えられない状態です。理路整然と秩序立て……なんて絶対に無理です。

普段、僕はいかに筋の通った考え方ができるかを課題にしていて、それができるように努力をしています。数学で証明問題を解いていくような感覚です。分かりやすければ三段論法ぐらいで済むので、あんまり困りません。困るのは、極端に根拠となるものが多いが、逆に少ないが、どちらかだと思います。根拠になりそうな情報を活用できなかつた時、僕の頭は見事に勘に頼ります。カンピュータとも評されます、筋道なんて遙か彼方へ吹き飛んでしまう感性だけの世界です。課題は放棄されました……。

感性だつて大切だ……と、僕の中でもう一人の自分が叫んでいます。じんだけ正しい理論だと思われても、本能的に「違う!」と叫ぶ場合があります。じんだけ間違つた理論だと思われても、なんとななく「うそ」と叫んでしまつ場合があります。その感性が合つていねいじだつてあるはずです。まあ、理論は後付けにします。



今夜のお宿はどうでしょう。毎度おなじみテントではあります
が、実は少しだけ違う部分があります。屋根の下です。壁の横です。
寒さをしのぐには、この少しだけの違いが大きく寝心地を左右
します。すばらしい設備です。……バス停なんだけど……。

ちょっと手前のトンネルで歩き遍路の人と出会いました。その
人もなかなかワイルドな感じの人で、番外札所まで回っていると
のことでした。もともとはチャリダーだったといいます。同類です。
親しみが湧きます。アメリカに三年間ほど留学していたといいま
す。欄外です。羨望が湧きます。話をしながらバス停に到着、宿
とすることに決定です。その人は、その場に寝袋を広げます。僕は、
その場にテントを広げます。「ヤーヤ」と笑われながら、それでも、
自分も笑いながら写真撮影です。

そんなことをしている間に、もう一人歩き遍路の人が登場です。
中の状態を見てびっくりです。「ああ、大丈夫です。外にテント張
りますから……」と、無駄話をしてから立ち去る時「つりやあ！」と、
ものすごいかけ声と共に荷物を背負っていました。聞けば約十五
キロもあるといいます。僕の荷物の倍くらいです。信じられませ
ん……。

バス停に一人と一人、外と、中と、中の中と……、それぞれの
夜が更けていきました。

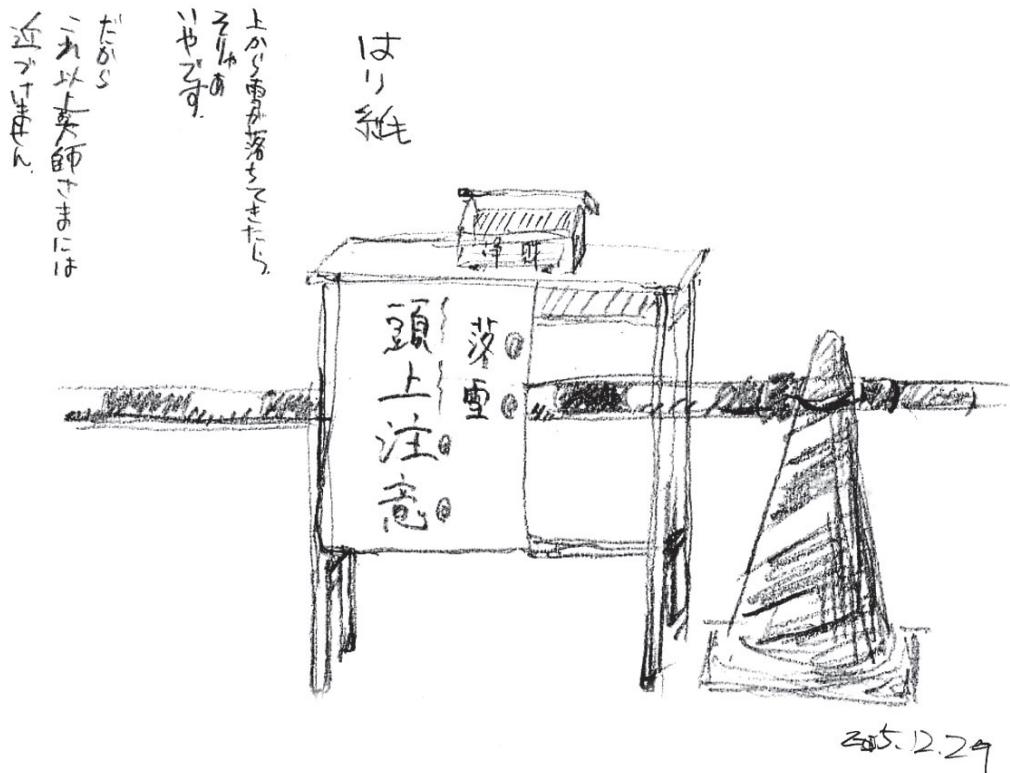


理科の時間、百メートル高度が上がると何度気温が下がる、なんてことを聞いたような気がします。正確に数字を覚えているわけじゃないけど、実感としても分かる部分だつたから納得できる話でした。

遍路道を歩いていて一番標高が高い寺、それが第六十六番札所、雲辺寺になります。九百メートルくらいの高さの所に建っているようです。だから、予想はしていました。辺りには雲が漂い、下界とは違った光景が広がっていましたというイメージです。

ま、その様子を証拠に納めておかなければいけない、という義務感もあって写真撮影です。周りには誰もいなかつたので、必殺セルフタイマー攻撃を繰り出しました。この手を出すとき、意外と難しい条件をクリアしなければならないことがあります。地面に寝つ転がつてファインダーをのぞく必要があつたり、斜めに傾いた地面に垂直にカメラをセットする工夫をしたりすることがあるんですね。それが、この時はものすごくやりやすい条件に恵まれていました。ちよつとした石の上に雪が積もつていて、それをチヨイチヨイと加工しておけば『いい写真』が撮れたんだからです。

周りの条件が整っているだけではないけど、自分の頭の回転で乗り越えることって、うれしいことだと感じます。あとは、写真に入れるようだし、滑つて体が回転しなくなるだけでした。



2015.12.29

工事現場でもないのに立入禁止区画がありました。赤のコーンがあつて、本来ならそこでお参りをするのが正しい姿のような気がします。でも、立入禁止です。……禁止されるとよけいにやるたくなるのが人間の性つてヤツじやありませんか。心はウズウズです。

中学生くらいの年代が一番ひねくれていた頃だったのかもしません。右と言われば左、上と言われば下を見たくなる感じです。仕方ない、聞くだけ聞いておいつと思えるのが友達の言葉、絶対服従で反論できないのが先輩の言葉、聞くのもイヤなのが先生の言葉、聞くことに反抗するのが親の言葉……なんて分類ができます。特に「君らのためを思うからじゃ……」などと言わ れようものなら、絶対に聞くものかと決意を固めたりします。

大人になつて分かることなんですね。いや、本当にその人のことを思つてかける言葉つてヤツです。軽い気持ちじゃないんです。相手は深く受け止めてくれないかもしれない、でも、伝えたくない言葉があります。少しづつゆっくりでも伝えようと思い続けることが大切になるんでしょうか。ただの理想かもしれないけど、思いがあつたら伝わると信じていきたいんです。本当に伝えたいことが伝えられる人間性を高めていきたいんですね……。

だら
「あれ以 来師さまには
近づけません」
上から雨が落ちてきました
そりゃあ
いやです

はり紙



数の迫力つてすごいと思います。言葉で理論的に説明できないほどに、得体の知れない何モノかが僕らに迫つてくる感じです。痛感するのは運動会、応援合戦の時、普段だつたら何となく力を抜いて生きているように見える人たちが、死にものぐるいで大声を張り上げているのは圧巻で、大好きです。声の圧力で吹っ飛ばされそうな感じにさえなります。重なり合う迫力です。一人じゃできません。

雪の中から「ヨキヨキ」と姿を出す石像に、異様なオーラを感じました。もともと一人一人が何かしらの偉大な力をもつた存在なんだと思います。そんな存在がたくさん集まつたら、とんでもないことになります。喜びに弾んだり、悲しみに震えたり、楽しげに踊り出したり、怒りを爆発させたり……「感情」というモノが雪の中から湧き出てきたかのようでした。たくさんのが喜怒哀楽が一斉に湧き上がったんですね。

結局、人間なんて感性で生きている動物なのさ……と投げやりに考えてしまいます。どれだけ偉いことを言つたって、本能の前に屈すること多多あります。か弱くもかわいい自分なんです。感情たっぷりの石像、圧倒的な数の人間の声、僕は勝てません。圧倒的に真剣にまとまって取り組む姿、見えないモノが見えてします。絶対に勝てないと感じます……。



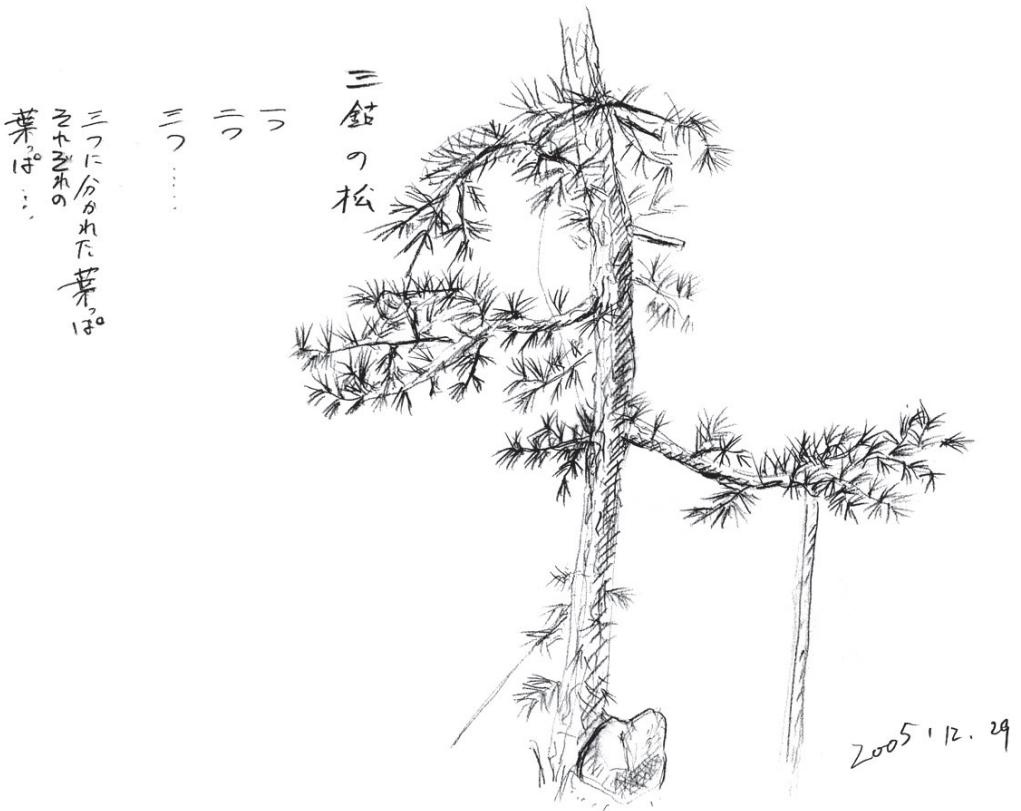
修行も大詰め。

ガウタマ・シッダールタという名前を知ったのは高校生の時でした。たまたま知つたあのだ……という程度ではあるけど、なぜかその名前の響きは僕の頭の中に強くインプレットされました。その人は三十五歳で解脱し、悟りを開いた者「仏陀」になつたといいます。そして、沙羅双樹の下で涅槃を迎えたそうです。仏教の創始者というだけあって、人間としてはややこしい生き方です。

お四国の遍路も涅槃の道場へと進んできました。最後、安らかに横になる日も近いはずです。……が、とりあえず、その最初の一歩は雪の中だし、全く安らぎは感じられません。讃岐へ入つたという事実だけが頭へ伝わり、靴には雪が入り込んで体は寒さに震える状況が続きます。寒くて手が動かないのも当たり前です。そんな時に限つてなぜかケータイ電話が鳴つたりします。浜松に生息しているはずの者が四国の高速道路を車で走つているといいます。こつちは雪の山ん中……、そのうち電波も届かなくなくなりました。

俗世に潜むいろんな物事から抜け出すことはとても難しいことだと思います。そこから抜け出せたら気が楽になるはずですが。でも、……僕には無理だというひがみも含めて……、この世も悪くないんじゃないかと考えてみます。楽しいことも悲しいことも、いろいろ一緒に、まだまだ生き抜きたいです。

可能性の増加。



二股に分かれた所をお互いに絡め合って引つ張る松葉相撲、だいたいヒマな時にしかやらないけど、ヒマさえあれば誰でもやつたことがある遊びなんじゃないかと思います。じゃ、このお寺でそれをやろうとしたらどうなるのかと、どうでもいい心配が頭をよぎりました。葉っぱが三つに分かれているから、勝ち星が同じで千秋楽を迎えて巴戦をやるような感じでしょうか。二者が輪になつて右と左の相手と一度に対戦したらどうな氣もします。実際にそんなことを第六十七番札所でやつていろ姿を見たわけでもないし、自分もやつたことがないし、まあ、どうでもいいことなんですね……。

選択肢は多い方が自分の幅が広がっていきます。僕には中学生の時、初めて自分で進路を決定していく時期が訪れました。「勉強なんてやりたくない!」って親とケンカをした日もあつたような、なかつたような……。「私立高校なんて行かせられない!」って親に怒られた日もあつたような、なかつたような……。「公立高校合格あめでとう!」って親に認められた日もあつたような、なかつたような……。よく聞えると、選択肢が僕の中には三つあつたんですね。

三本に分かれた道……、「一者択」よりもお得な条件です。三本に分かれた松葉……、きっと、こうじが一つ増えますね。



浜松人から連絡が入りました。場所から考えると三キロほどしか離れていない所を移動中のようです。遠州から遠く離れた讃岐の国で「アミス……、会えたらおもしろいけど、こんなに離れた所でまで会いたい相手でもないか……、それに僕はメチャクチャ急いでいるんです。その日のうちに第七十番札所まで到達してあれば、そのまた次の札所までの約十一キロを夜の間に稼ぐことができます。悪いけど、長電話をしている場合じゃありません。ならば、浜松人……。

着きました。札所です。とりあえず第六十八番となります。で、僕のガイドブックの表記を見ると次の第六十九番までの距離がゼロになっています。何じゃこりや、という状態です。仰ぎ見る山門……よく見ると、「四国第六十八・六十九番靈場」と書かれているようです。不思議なこともあるモノで、同じ敷地の中に二つの札所がある所でした。なんでそうなったのか、きっと、歴史をひも解けばいろいろな背景があるんでしょう。

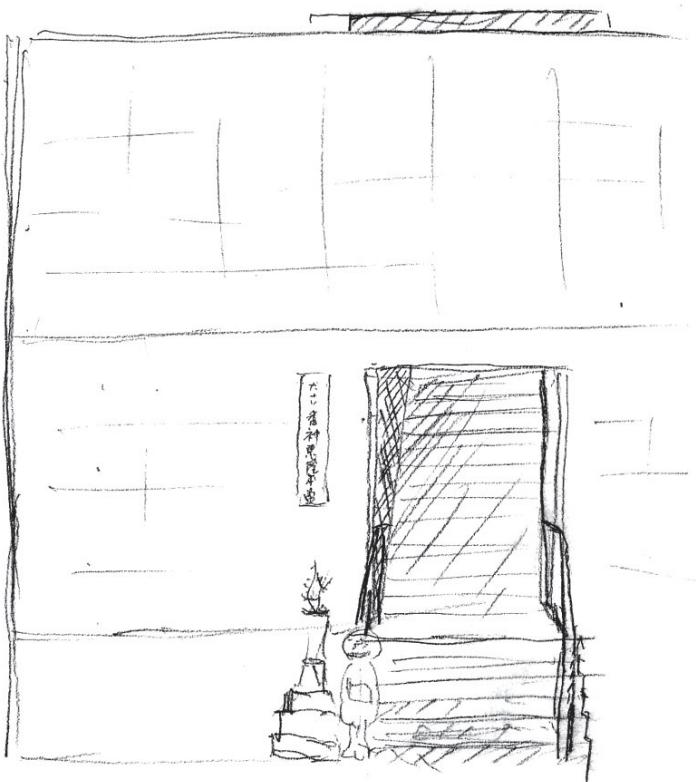
二つのモノが出会った時、仲良くするかケンカをするか、その差は大きなものになります。できれば平和にいきたいです。憲法九条の精神です。弘法さんという敬うべき存在があるから、二つの寺が一緒にいられるのかもしれません。目指すモノ、大切です。ま、僕としては第七十番への道が近くなって、ラッキーでした。

カチカチ。

超ハード

2005.12.29

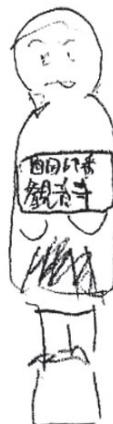
コンクリートの下を
通り抜けた所に
仏さまがいました。
固いですね……



仏様は敬うべき存在だと思います。大切にすべき存在です。だから、できる限りのものなしをします。遍路として名刺代わりともいうお札を納めます。灯明をあげます。線香をあげます。お賽銭をあげます。お経を読みます。僕にできるのはこのくらいです。昔から由緒正しい札所だから、多くの人たちがその仏様を拝みます。拝む相手はきっと心の中にいらっしゃる仏様だと思います。でも、実際に姿形を世に現している仏様の像は木から生まれていたりします。ということは、大切にしないと物理的な衝撃を受け、物理的に破壊されてしまうことだってあるわけです。いかにしてその衝撃を避けるか考えなければいけません。……周りが頑丈だったら破壊的なダメージから守ることができそうです。コンクリートで固めてあれば、かなり頑丈なガードを固めることができるます。ちょっとやそっとのことは「ぐつぐつ」もしません。

階段が終わる四段くらい手前からピヨンと飛び降りるのが好きでした。いろんな場所でやります。自分の家は狭かったので無理だつたけど、学校や駅、歩道橋や公民館など、至る所でピヨンピヨンと飛び降りていました。一番体全体に響くのがコンクリートの場所です。骨に直接「バキン」というほどの衝撃がくることだつてあります。そう、コンクリートは固いのです。大切に大切に、固めて固めて……。

「俺ルール」。



道案内

ポイントは絵よりも文字です。そう考えたら、絵なんて描く必要はなかつた……のです。そのまんまだけど、その通りなんだから仕方ありません。じゃ、なんで絵なんて描こうとしたのか、その理由は簡単です。自分で自分にルールを課してしまつたからです。

君
が
い
な
り
た
う
六
十
九
番
か
わ
か
ら
な
が
た
よ
オ
リ
か
と
う

2005.12.29

世の中には自閉的傾向の強い人たちがたくさんいます。自閉症だと診断された人から、何となく世の中の人々と違和感をもちながらも一応の社会生活を送っている人まで、それぞれの幅はあるけど多くの自閉人がいるようです。自閉の特徴を表すキーワードとしては主に三つが挙げられます。「社会性」「想像力」「人間関係」です。それらが具体的にどんな風に影響するか……「俺ルール」「ハイパー律儀」と表現する人もいます。自分で勝手にルールを決めてつけて、それを無意味なほどに守るという状態です。で、僕にもそれが当てはまるんじゃないかな、ってことなんですね。

時間がないのにも関わらず、僕は絵を描かなければいけないという勝手な自分のルールに苦しみます。で、いかに簡単に描くかを考えます。とても象徴的な対象を発見して大喜びです。そこにある文字情報が非常に大きな意味をもつっています。文字の力というのはすごいんです。「四国六十九番」という文字が、同じ境内に「四国第六十八番」をもつてこなすことアピールしているようでした。



一緒にいるヒリラックスできたり、楽しさが倍増したりする人間関係ってステキです。一緒にいる時間が長ければ長いほど幸せになれる事……もう、うれしくなる一方です。僕の場合、自分で勝手にそう思うことはいっぱいあるけど、相手が同じように感じてくれないことが多いです……。フタれるばかりの我が人生です。

こここの札所はホントに仲のいい札所でした。山門にも二つの札所の番号が一緒に書かれています。そして、ここまで……、納経所も一緒なんです。入る時にはドギマギしてしまいました。というのは、納経帳に御朱印をいただくのに僕はお金をいくら払うのか……という極めて世俗的な疑問を胸一杯に抱いていたからです。

仲がいいか悪いか、何で決まるんでしょう。「金の切れ目が縁の切れ目」なんて悲しそぎます。お金のことなんて関係なく相手のことを信頼して認め合うことができたら、仲良し続きでいられそうです。お互いの長所も短所も分かつた上で丸ごと「よし!」と思える間柄だったり最高です。ものすごくレベルの高い要求かもしれない。まず、話をすねいじから始めなきや……。

あ、納経所は独立採算制、それぞれのお金を納めてきました。



所詮、物は物、いつかは消え行く運命なのかと感じる看板でした。そりや、パリミツドや前方後円墳みたいにじつもなく大きな物だつたら長い間その存在をアピールでもあります。それにしたって、少しずつ壊れていきます。そしたら、ちっぽけな庶民のお墓なんてあつという間になくなってしまうような代物です。物質学的には単に石の塊というだけであつて、付加価値なんぞは全くありません。もしも、その存在に託された思いが忘れ去られた時、墓石はまさに石いりへと戻つてしまします。……ま、産業廃棄物です。

お墓があ墓だと思われているような時、まだ、その存在は石ころへ戻つてゐるわけじゃありません。名前が刻まれ、在りし日の思い出が刻まれた墓石であり続けています。産業廃棄物として認めたくありません。忘れないでください。その人たちの在りし日をこの世から消さないでください。思い続けてください。

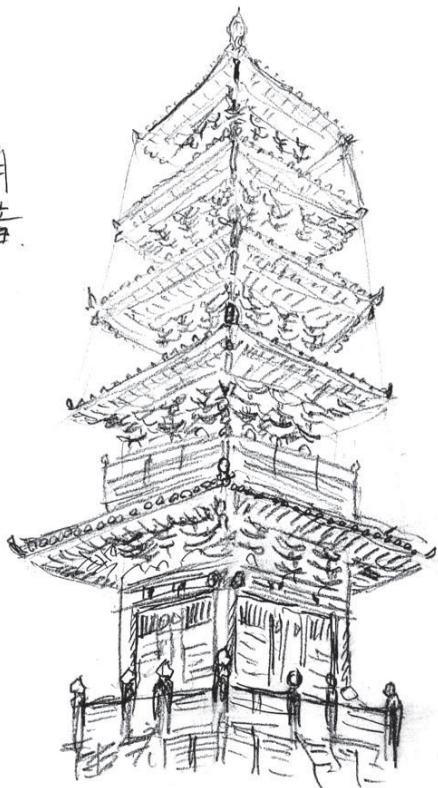
幸か不幸か僕らは物事を忘れます。忘れてします。覚えておきたい大切な人のためにお墓はあるんじゃないでしょうか。

幸か不幸か僕らは物事を忘れます。忘れることができます。つらいことは忘れることができるんです。だから、いいことだけを覚えておくためにお墓はあるんじゃないでしょうか。

ふと、何かを想つ時、お墓に立ち寄つてみようと思つます。

遅々として進まず……。

2005.12.29



自分が書いたメモを見ねじ、「間に合つた。五分前。余裕じゃん。」となっていました。納経所が閉まるのが午後五時、僕がたどり着いたのが午後四時五十五分、ということになります。五分前といふ時間を余裕があると感じているところに意識のズレがあるとかいいようがありません。時間の感覚ガルーツなのは注意欠陥多動性障害にも思えるといふのです。AD／HDと呼ばれるタイプです。昔から時間はギリギリセーフかギリギリアウトが多かつたことを思い出します。

お参りを済ませて、のんびりお絵描きです。立派な五重塔に挑戦します。だんだん周りが暗くなつてきて、のんびり描いているようなゆとりがなくなつてきました。テキトーに形を紙に落としていきます。時間との勝負がまた始まりました。マメがつぶれても、ひざの痛みの中で走つても、午後五時という時刻との勝負は僕のものになつています。今度は、さつさと逃げていく太陽との勝負です。負けが迫つていました。もう見えないほどに暗くなっています。まづい、やつぱり絵を描く能力は低いし、素早く描くなんて無理だった……と呟つていると……あれ?……五重塔が青白く闇に浮かび始めます。ライトアップでした。さすがに遠くから印に走ることじがじもぬよつた立派な五重塔です。あれいです。手元は暗かつたけど、やつぱりと絵を描き続けました。

明
暗
あ、暗くなってしまった。
と思つてじる。
あ、暗くなつた。
と「ライトアップされた。
ナナフが五重の塔



高校生の頃まで、僕のあだ名は「ウマちゃん」でした。何てことはない、ただ、顔が長いだけの話です。ビルミヨンに仕草や臭いなんかもオリジナルに近かつたということもあるかもしません。それが、だんだんに馬という動物から僕という存在が独立し始めて、「アクセントはウ」になつていきました。動物の「馬」と僕を称して言う「ウマ」とは以て異なるものとなつていったんですね。

顔の長さは僕の家系の宿命です。ばーちゃんの葬式に来てくれた職場の人たちが初めて僕の家族の顔を見て「みんな同じ顔だ！」と驚き、遺影を見て「やっぱり同じ顔だ！」とまた驚き、笑いをこらえるのに大変だったといいます。

第七十番札所には動かない馬がありました。どうも親しみを感じてしまふんです。馬は高貴な生き物なんでしょうか。インドでは象顔の神様がいたけど、ここには馬顔の仏様がいました。馬頭観音と呼ばれる仏様です。とすると、顔の長い僕は、もしかしたら馬頭観音の子孫かもしれないじゃないですか。僕にも高貴な血が流れているのかもしません。うふふ……。

祖先を敬う心は大切にすべきです。自分の存在にまで命をつなぎ合わせてきてくれたご先祖様には無条件に感謝と尊敬の念を向けていいと思います。命のリレーをするのが僕らの使命です。未だに僕は使命を果たせていませんが……。

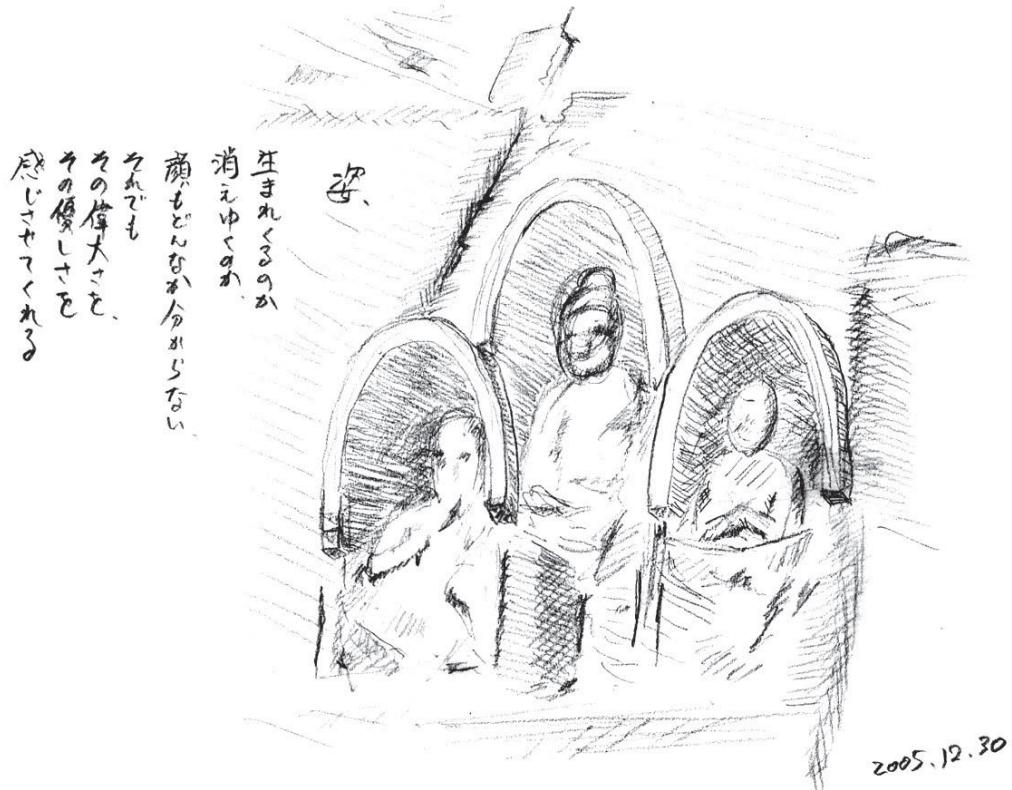


昔、清少納言は冬であれば早朝がいいと思つていたようですが、僕には信じられません。冬の朝なんて寒いばかりで、おもしろくもなんともありません。最近は地球温暖化で平均気温が上昇しているのにも関わらず、僕にとっては冬の朝は大敵です。地球温暖化も進行してあらず、暖房器具も整っていない頃の冬がいいなんて、清少納言は氷河時代の生き残りに違いありません。

第七十一番札所で冬の早朝を迎えます。寒い朝です。この場所で寒い早朝を迎えるために、僕は少しばかり無理をしました。前の第七十番札所では五重塔がライトアップされるくらいの時間までそこにいたけど、その後、夜の道を約十二キロ歩いておいたんです。おかげさんで銭湯に入ることもできだし、朝一番でお参りもできぬし、いい感じでした。冬の夜だって捨てたモノじゃありません。夜があるから朝があり、その良さを感じられるんですね。

全てが裏と表の一面性。……もしかしたら、裏と表と側面と、斜め後ろと右前の多面性かもしれないけど……。とにかく、一面だけで何かを断定することはものすごく忍のしことだと考えた方がよさそうです。だから、僕がその札所で早朝を迎えることに良さがあり悪さがあるはずです。良くも悪くも一面だけをじろえて主張するのは不公平つてモノです。人間の感情と同じことだと思いました……。

おくゆかしい笑顔。



しばらく前に、僕には到底許し難い出来事がありました。それはアフガニスタンで起こった事件です。唖然としました。磨崖仏が一瞬のうちにバラバラになつた映像を見て、魂が抜けたような感覚にもなつてしましました。どんな理由があつたって、人間がつくり上げてきた文化を破壊するような行為が許されてはいけないはずです。人間の文明も発展し、文字や言葉や哲学が大いなる力をもつ時代に、全てを否定するような暴力的な行為が許されることがあつてはなりません。日本国憲法は第九条で戦争の放棄を掲げています。コスタリカの憲法も武力を認めていません。それで国が成り立つからです。人間の叡智が詰まつた決まり事です。そんな人間の叡智を根底から揺るがす行為は全面的に否定すべきだと思います。

自然の行為によるものは仕方ありません。むしろ、それは当然のことであり、諸行無常の理です。第七十一番札所の磨崖仏、その顔は風雨の中で消え入りつつあります。だんだんに穏やかに丸くなる心を表しているかのようです。はつきりした顔立ちは分からなくなっているけど、やわらかに微笑む顔が見えるようにも感じられます。平和の象徴、笑顔です。

強く主張しなくてもいい、穏やかに、でも確かに揺るがないやさしさを秘めた表情が湧き出る人生を送りたいと願います。



ひつねりとした岩屋の中、仏様が座っています。ひつねぐの光に揺れて何かを語りつているかのようですね。

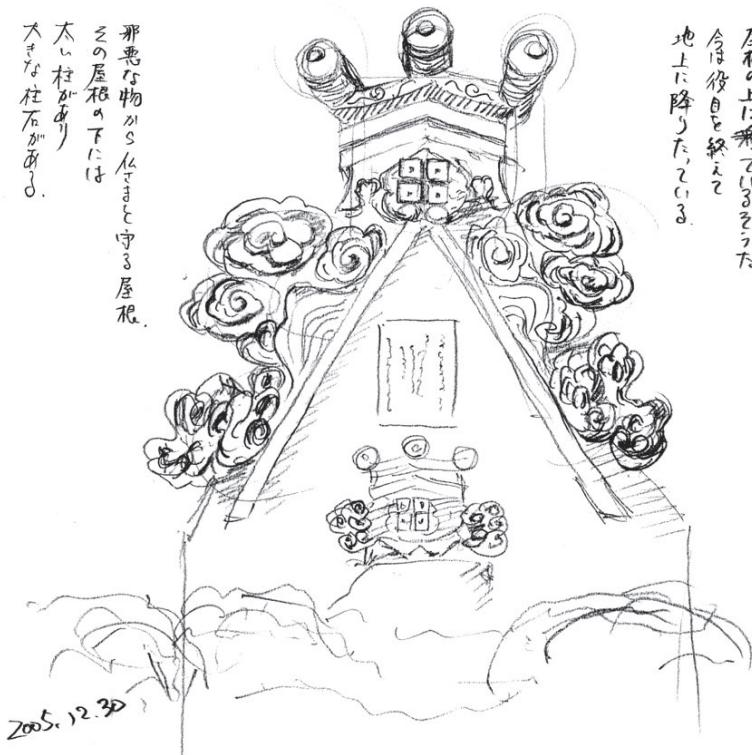
岩の寺……第七十一番札所はそんな感じがします。外で見た磨崖仮も岩から生まれていたけど、建物の中にも岩の風味が漂っていました。野性的で少し荒々しい趣です。質実剛健、決して派手には主張しない岩たちが、重厚な存在感をじんわりと僕に与えてくれるんです。かつていいです。

男らしいとか女らしいとか、ジエンダーフリーの考え方からしたら、あり得ない考え方かなあ、とも思います。この「らしい」という言葉が曲者なんですね。男と女の性差は確實にあるわけで、その差のところ次第でプラスにもマイナスにも感じられることがあります。ま、いいや……と深く考えずに……僕はお寺の雰囲気を男らしいと感じ取りました。筋肉質な体格をもつたお寺だと肉体的な性差を見たような気がしたんですね。

僕は軟弱者ながら、一応生物学上はオスの部類に入ります。んで、皮下脂肪があまりないことをチラリと見て、「割と筋肉質だね」と女人の人から言われたことがあります。必要最低限のパーセントを肉体に取り入れていいだけなんですけどね……。わびさびの世界にも共通するんでしょうか。仮の道も然り……。不要なモノを極力そぎ落としたら、本物の存在感が現れるのかもしれません……。

凡

こんな重たさうなものが
屋根の上に乗つてゐるそつた。
今は役目を終えて
地上に降りたつてゐる。



植え込みの向こう側に、重たそうなモノが大きな体をニヨキッ
とせり出していましました。そんな重たそうなモノが屋根の上にあつ
たというんだからびっくりです。そんなに無理することはないの
に……と思つてしまひます。

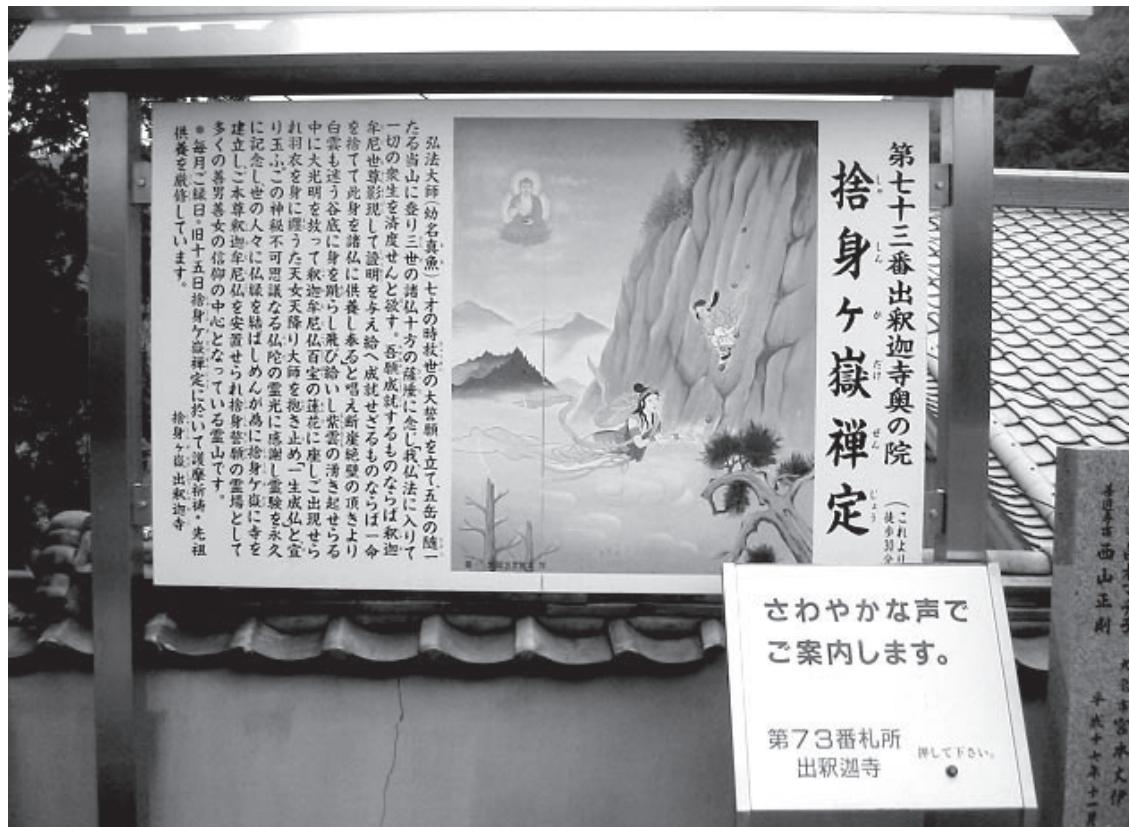
屋根の上から見た景色つてのは格別なモノです。そんなに高
があるわけじゃないけど、小さい頃は時々実家の屋根に上りまし
た。自分が一番上にいて、世の中の全てを見下すしていられる気分です。
隣にはもっと立派な家が建つてゐるし、実際問題としては見下
される受身的な立場のはずなのに、偉そうな気分になつてしまつ
んです。瓦屋根の上でガサゴソしていたら、家の下ではパラパラ
と何かが落ちていたかもしませんが……。

屋根全体に瓦が乗つていたら、それは重たいはずです。
支える骨組みや土台の負担が大きくなるのも当たり前です。ヤフ
な建築構造じゃ倒れてしまします。だから、太い柱が支えます。
大きな礎が支えます。しなやかに、堅固に守る日本家屋です。

土台が瓦を支え、瓦は雨や日差しを防いで人を守ります。瓦が
なかつたらえらいことです。でも、それだけじゃなさそうです。
角の飾り瓦は僕らの心を見守つてくれているように感じます。重
たそうなモノが、大きな体を見せて、安心感をくれるんです。
役目を終えた大きなモノが、地上で僕を迎えてくれました。

重厚な安心感。

支持率。



臭くなります。汚くなります。旅の者の宿命です。冬の時期でありますと、一日中歩いていれば汗もかきます。アスファルトの道路には車が走り、排気ガスをたらふく味わいます。臭くなり、汚になります。

一服の清涼剤として、さわやかさが必要です。だからか……、僕の目にズドーンと飛び込んできたのは案内看板の文章ではなく、その前に立ててある説明書きの表示でした。ボタンがついています。児童科学館みたいな所にもあって、そのボタンを押すと模型が光ったり動いたり……というような、昔ながらのボタンです。それを押せばさわやかさが提供されるんです。

声のさわやかさって誰が決めるんでしょう。もしも、僕が決めるんだつたら、声の主は間違いなく女人になります。それも、二十代の人になります。さらに条件は厳しく、音域がだいたいメゾソプラノくらいの人であり、胸声であるにも関わらずよく響き、テンポはアンダンテ……それらをクリアしたら、さわやかな声として認定してあげます。もちろんこれは僕の設定であり、独断と偏見以外のナーモノでもありません。他の人が決めたら全然違った条件になるはずです。人の基準は様々……、多種多様です。

さて、表示された「さわやかな声」の支持率は何パーセントくらいになるのでしょうか。僕には分かりません。



痛い……、ものすごく痛い……、朝から右ひざに激痛が走りました。何となくごまかしながら歩いていたけど、あそこまでは行けないと想える所でした。

真魚といつたそうです。弘法さんの幼いころの名前です。七歳の時、世のために身を捧げる行動を取り、それが第七十三番札所が興る縁起になつたといいます。真魚少年、がんばりました。山の上から飛び降りたというんだから、まさに命懸けです。どうやら仏様は彼を認めてくれたようで、めでたしめでたしとなつてあります。

世の中のためだなんてとんでもない、自分自身だけのために歩いているような僕です。もちろん心の中には何モノかの命が渦巻いてはいるけど、それだって結局は自分勝手な思い込みなのかもしません。んで、右ひざはメチャクチヤ痛いし、基本的に軟弱者だし……、とても山に登つていこうなんて気持ちが生まれる余地がありません。遠くまで燈籠のようなモノが続いています。小さく見えるモノがいくつも続いています。見れば見るほど体が拒否反応を示します。

看板には「捨身ヶ嶽遙拝所」と書かれています。……そうか、ここから拝めばいいんです。看板があるんだから間違いありません。体は引いていたけど、心はめいっぱい参拝してきました。

体は遠く、心は近く。



甲山が甲山じゃなくなってしまった……、いや、山そのものがなくなってしまう……、と変な不安が頭をかすめました。大切な場所がなくなってしまふ悲しさを思つたんです。直接的に人間が何かを大きく変えてしまふ力を手に入れたい」といふのです。

環境にやさしくなるうとしてレジのポリ袋を減らしながら、二十四時間ずっと毎日のような明るさを保ち続けるお店があります。二酸化炭素の排出を減らそうとしながら、放射線物質を地下に捨てていく動きがあります。……僕は……、偉そうなことを考えながら、旅をして写真を撮つて電気をたりふく使って文章を作つています。

ホント、身勝手な生き物だと思ひます。恐いべし……「人間」です。山をガンガン切り崩して土砂を採取し、自らの生活の中に消費していくます。僕が日常的に土いじりをしているわけじゃないけど、絶対にじいかで採取された土砂と結びついているんだろうという確信はあります。自分自身の手を汚さずに何か悪いことを推し進めていくような感覚です。しかも、おぐに自分を変えることもできません。

結局、自分のことは棚に上げて偉そうなどとを発信していくことが精一杯の現状です。それでも何でも、でもないとはやらないと気が済みません。ホント、身勝手な生き物ですか……。

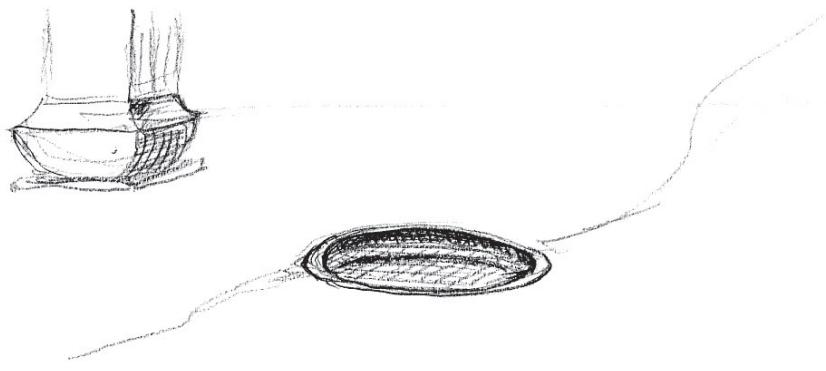


強くて怖くて気性が激しくて……、僕にとつてそんなイメージがあるのが毘沙門天です。戦国時代、どこかの武将が崇拜していたようにも聞きます。

山の中から「ヨロヘン……」いぐり何でも画期的すぎるように見えました。トンネルの中の入り口からお堂が顔をのぞかせています。強引な印象もあります。そこに祀られているのは毘沙門天です。あ、強くて怖くて気性が激しくて……、文句を言つたら祟られます。

自分のことを考えます。強くはありません。間違いなく弱い人間です。怖くもないと思います。何かと迫力がなくてナヨナヨしたヤツです。気性の激しさは少しだけあります。ただし、自分の中だけです。自分自身に対する喜怒哀楽は激しいような気がします。自分勝手に一人で怒って、自分勝手に一人で悲しんで……、それで解決させてしまうんです。本来ならもつと周囲にアピールをしてもいいのかもしません。もつと人間的な感情を爆発させる必要もあるのかもしれません。でも、自分に自信がないから外へ感情を出すことができません。謙虚だなんて言われたこともありますけどそんなんじゃありません。ただの軟弱者です。

強くて怖くて気性が激しくて……、僕も揉んでみます。必要な時には僕にもそんな猛々しさが現れますよ！」……。



2005.12.30

能舞台の下には瓶が埋めてあると聞いたことがあります。ラジオで聞いたんだと思うけど、その時は何とも言えない奥深さを感じました。足踏みをするドンツという音の周波数を最大限に生かす物だと言っていたはず……、昔の人つてすごいです。

穴がありました。第七十四番札所の釣り鐘の真下です。僕の発想は瞬時のうちに能舞台へと飛んでいきました。すごく重要な意味をもったモノなんだろうと勝手に想像して、勝手に解決してしまうのが僕の愚か者であるとの所以です。恥ずかしい限りです。恥ずかしい時に、穴がある……、ぴったりなことわざが頭に浮かびます。「穴があつたら入れたい」……ん、違う違う……、巡礼の最中に何と不謹慎な……、これこそ「穴があつたら入りたい」です。恥ずかしい思い、情けない思いは得意技です。人に負けない自信があります。

恥ずかしさを失うことは自分の向上の停止だと考えます。何かをして恥ずかしいと思うなら、その恥ずかしさを乗り越えようといふ自分もいるはずです。その時は恥ずかしくて逃げ出しあたくても、実際には何とかして解決していくのが人間です。方法はいろいろあります。弘法さんに祈るのも一つの手かもしれません。できる限り、僕は自分の力で恥ずかしさも乗り越えていきたいと思います。傲慢かもしれないけど、僕は自分で負けたくないんです。



どこかの札所で「靈場協会の方針としては……」なんて言葉を聞いたことがあります。お礼参りをするだの、しないだの……といつた内容について教えてもらつた時のことです。その時、遍路を取り仕切る団体があることに気づきました。なるほど、八十八もの札所があるんだから、まとめる役割がなかつたら大変なのは大変です。そして、その本部が第七十五番札所にあるのは、そこが弘法さんの生まれ故郷だからってのも納得です。物事にはそれぞれ理由があるんですね。

理由がはつきりしていて分かりやすかつたら納得できます。誰かに叱られた時でも、素直に「(ゞ)めんなさい」と言えます。いいことはいい、悪いことは悪い……シンプルに、ただそれだけのことなんです。だけど……だけど、ですよ……、僕らは人間です。頭の表面では納得しても、心の奥底では納得できないこともあります。くやしいけど、相手の言い分に対し屈して従わなければならぬこともあります。ホント、くやしい話だと思います。きっと、何か正当な理由が隠れているんでしょう。見えないけど、そんな何かがあるんでしょうね……。

理由が見えなくとも「ああ、そうかな……」と相手に思わせてしまふような、そんな人徳が欲しいです。自分なりに伝えたい思ひが、自然に醸し出せるような、そんな人徳が欲しいです。

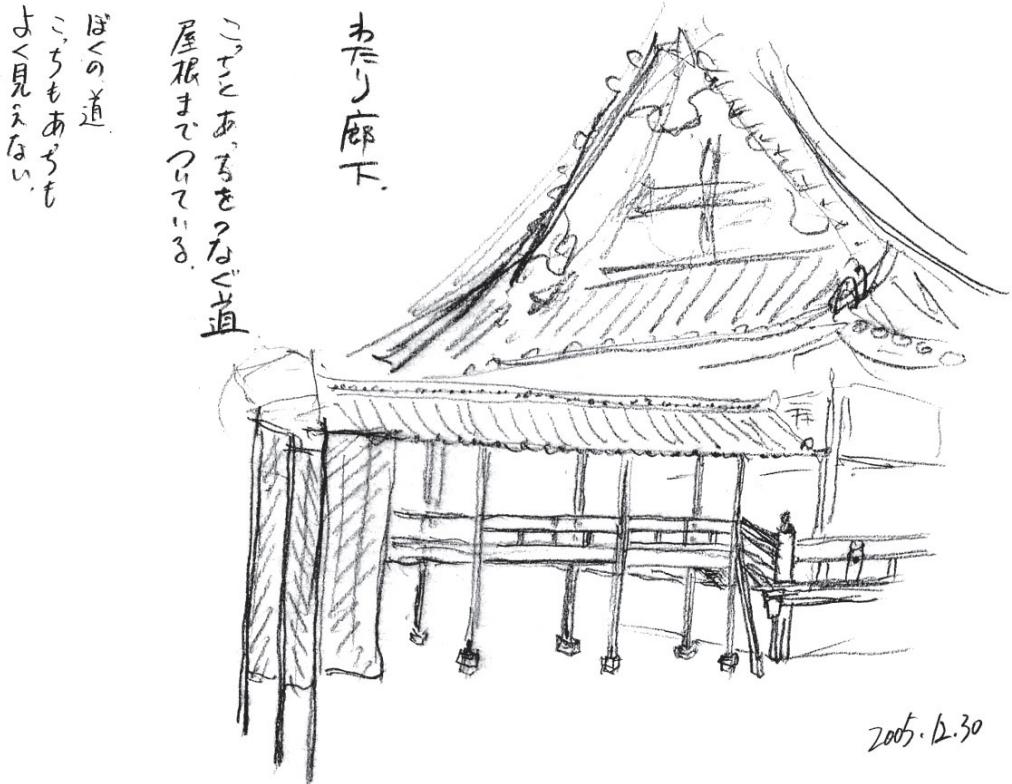
名は体を表す……。

2005.12.30

僕は自分の名前を大切にしたこと思つてこまか。生まれた時につけてもらひた名前も、友達からつけられた名前も、どちらも大切な、僕を表す名前です。友達が初めて「うーん……、じろちようやなあ！」と口走り、「このひより」と呼ばれ出した頃は違和感たっぷりで妙な気分でした。でも、「じろちゃん」なんてかわいく呼ばれたりしていたら、どんどん自分の名前としてなじんできてしました。

名は体を表すともいこまか。名前負かしてこる僕のことは忘れるにして……、登場あるのは善通寺といつの人じゆ。「よしみちさん」とお呼びあるんでしよう。そして、次に登場るのは第七十五番札所です。その名も善通寺……普通「よしみちだいら」とは読みません。「せんじゆうじ」でしよう。島内にある弘法大師空海が、感謝やら尊敬やらを含めてお父さんの名前をお寺に名付けたんだと思われます。善が通り……なんすうじこの名前をむづぐ人、そして、お寺なんです。お寺の伽藍は立派な物で、名前負かすないとなんか考えられないほどの立派でした。

建物をつなぐ廊下があつめました。きっと、その通路にも何か善いことが通つているんだと思つてます。ひとつ同じ……善いことがあるんだつたら一ヶ所に隸つてこねた方がいいはず、循環することで広く善が行き届かねか。善が通りこまか。



ぼくの道
こちもあるかも
よく見えない

分かっちゃいるけど……どうしようもなかつたんです。許してください。これも写真を撮るためです。何よりもそこが優先されるのはズレているようにも思うけど、ま、そんなモノです。本来は大切に扱う意識を手で表すべきで、片手で大数珠を扱うのはおかしな話なんだと思いまよ。

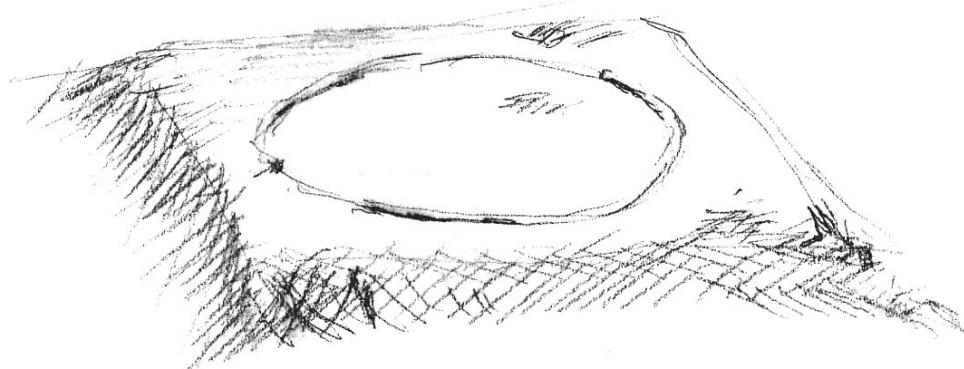
大学生のコンペで、とにかく厳しく注意された事柄があります。それは、ビールの注ぎ方です。注意する大きなポイントは二つでした。ラベルの部分を上に向けて注ぐこと、そして、片手は底の部分に添えながら両手で注ぐこと、こう二つです。ラベルに関するポイントの起源は、薬品を瓶から注ぐ時に垂れたりしてはいけないということだったようです。両手で注ぐことは、丁寧に注ぐことの表現じゃないかと思いまよ。ビールは苦いし、酔っぱらって頭が痛くなるし、好きなモノじゃありません。でも、せつかくだから、せめて気持ちだけはすがすがしうまい注がれ、いい時間を過ごしたいわけです。

日常生活には、ビールがあふれている状況はあります。でも、物をやりとりする場面はたくさんあります。慇懃無礼というほどにするのは困るけど、僕はできるだけ物と相手に敬意を表して両手を使おうと思います。

なのに大数珠を片手で……、分かっちゃうんですけどね……。



土俵際いっぱい。



2005.12.30

荒土俵

「
俵
さか
りつ
でも俺
は
かけ
ぱち
荒れてる
なあ」

フジケンからの指令が思い出されます。一つ目は夏の間に果たしました。二つ目は「第七十五番札所の辺り、角の旅館に泊まる」というものですね。フジケンがそういうんだから、ナーカステキなことがあるんだろ?と思つて、その日は旅館に泊まることにしました。とりあえず宿泊手続きを済ませて時計を見ると……、まだまだ休みには早すぎる時間です。地図を見ると……、まだまだ歩ける距離に札所が待っています。行くべし……、まだまだ重い荷物は部屋に置いて歩き始めました。

体が軽い! そんなに重たい荷物を担いでいるわけじゃないんだけど、それでも自分の体に負担をかけていたんだということがよく分かりました。ひよいひよいジャンプしても進めそうです。痛いひざもじまかしていまます。ついでに薬局発見。ひや用のサポーターを購入して、じまかし具合をアップさせました。よう身軽な感じになつて進みます。

そして、第七十六番札所へ到着したのはだいたい四時くらい。次の札所までギリギリ間に合つくりこの距離と時間です。なぜかそこにあつた土俵を絵に描きながら、徳俵に救われてこの自分を感じてしまいました。荒れていようと、腫つぱちであつて、僕は土俵の上に残つてます。何とか歩けます。

行くべしー・進むべしー



親指さん、こんにちは。

ついに現れました。いつかは必ずやつてやる日です。

ここ近年、あまり見られなかつた現象です。そんなことが起つるより前に、ビロンビロンになつてしまつて僕の元を去つていくことの方が多いつたんです。ハードな刺激を与えることなく、ソフトタッチだけで過ごしているとそんな風になるみたいです。日常生活は軟弱の極み……、充分に使われずにこの世を去つた靴下たちに謝罪です。

だいたい場所は決まつています。親指の先が付け根か、もしくは、かかとか……、穴の場所です。かかとや親指の付け根の部分だと、だんだんに生地が薄くなつていくから危機感が少しづつ近づいてきて覚悟の上での決壊となります。でも、親指の先の部分だと、かなり不意をつかれてしまします。気がつくと穴が開いているんですね。びっくりします。

何枚も持ち歩いていたワケじゃありません。洗濯をしながら大切に使つていた靴下です。お四国遍路も終盤に近づいており、いろんな所にガタガきているような気がしました。靴の底だつてすり減つていて、お杖だつて削れていますし、白衣の背中文字だつて消えかけているし……、何よりも僕の体が悲鳴を上げつつありました。長い距離歩いてきたモンです。しみじみと、穴の開いた靴下が僕の心に訴えていました。

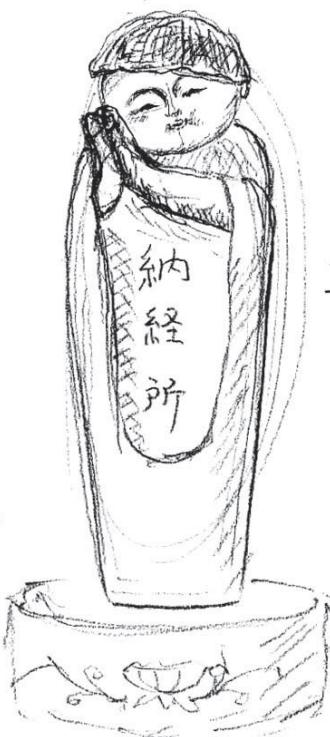
ものをいう顔。

笑顔

ほほえみが
とてもかわいいのです。

とくに
目が
とてもかわいいのです。

笑っている時は
すくまです



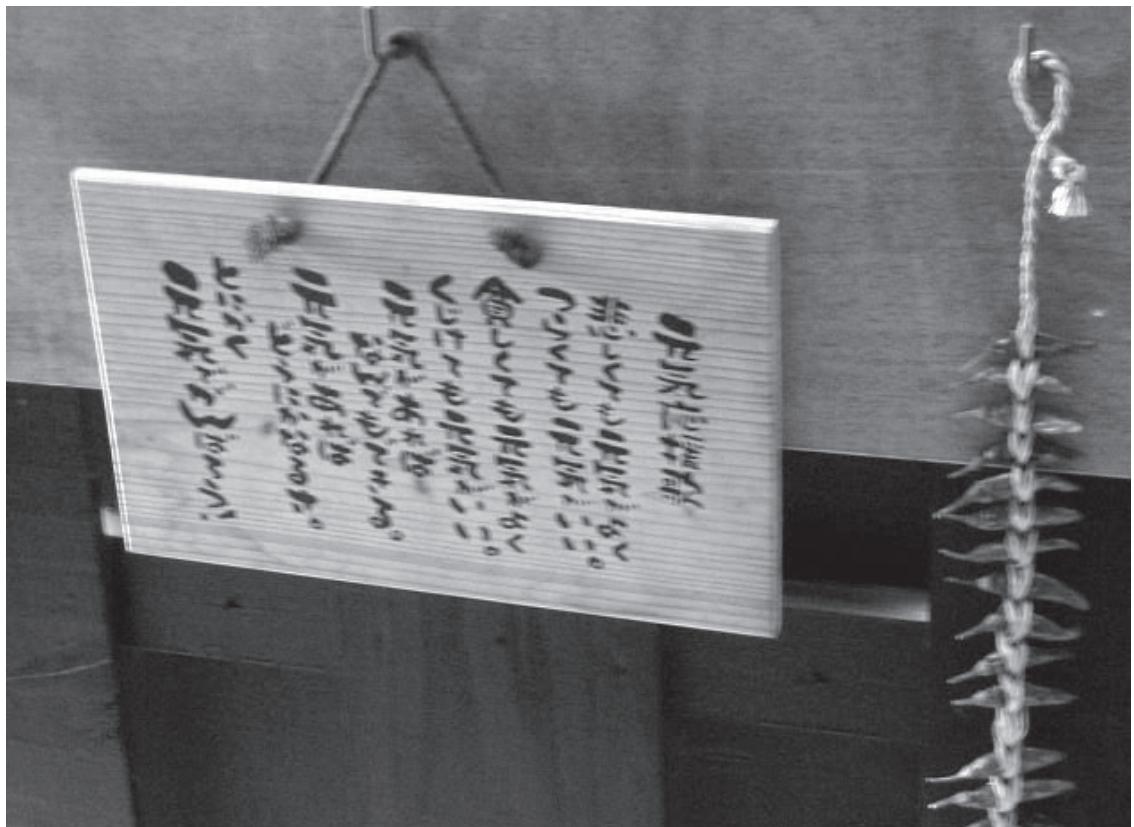
2005.12.30

自然な笑顔が、自然と心の内にあるふれ、自然に表面に出でてくることって、すばらしいことだと思います。バカ笑いじゃありません。それなら僕にもできます。なんか、バカな話ををしていればバカ笑いが爆発です。そつじゃなくて、自然な笑顔です。

笑い顔は、その質によつて人を心地よくしたり、不愉快にしたりします。少なくとも、僕はそうなります。あるお店で、決まって僕を不愉快にする、作り笑顔を向ける人がいました。たぶん、その人は僕に心地よくなつてほしかつたんだと思います。でも、残念ながらその人の思いとは裏腹に、笑顔は引きつり、いやらしい笑いにしか見えませんでした。

あるお店でさわやかな笑顔を見ることができました。コンビニでした。たぶん、アルバイト料はそんなに高くないと思います。でも、その人の笑顔は僕を幸せにしました。お店用の営業スマイルだとは思います。それなのに笑顔がステキに見えたんですね。すごいことです。

人間性が顔に出るのかもしません。怒つても安心感のある顔、だつてあります。怒鳴られたとしても納得できる深みのある顔をもつ人もいます。うらやましい……心の底から思います。僕の作り笑顔は、じつあでバしてじるのか……、恐ろしい限りです。シンプルに心を磨き、素直な心を顔に表したいと思います。



苦しいモノです。疲れている時、弱っている時、気持ちが後ろ向きの時、そんな時に「がんばろう！」と言われることは、ほとんど恐怖でもあります。がんばれなくなっているから、悲しくなるんだし、ぐじかてしまふんです。元気にがんばれるんだつたら周りの人に「元氣でがんばりうー！」なんて言われなくたって自分の力で何とかなります。そういう力強い言葉で元氣になれる人は、たぶん、まだまだ窮地に立たれているわけじゃないはずです。そういう力強い言葉で元氣にさせようと応援する人は、本当の窮地に立たされたいことがない人だと感じます。

なよなよしています。本当は強くなりたいし、元氣に生きたいと思っています。でも、なかなかそれが出来ません。あの、宮沢賢治たつて、「風にも負けケズ」生きるーとに憧れていたんだから、僕が何かと負けてしまつた時は前だ。 「風にも負け」 「風にも負け」負けっぱになってしまった。ただ、僕の場合、負けた後の立ち直りを早くするーとができるも。それじゃ、本当の窮地に立たされていないのかもしれないけど、楽観的でもあるし、忘れっぽいので助かつてます。

力強い言葉にあれこれ思いを馳せながら、また、余分なことを考えます。こんな力強く生きていける人はどれだけ力強い人になるんだらう……と。だつて、場所がトイレですから……。



もてなし

旅館
夏の最高のモードは
冷たい麦茶だ。た。

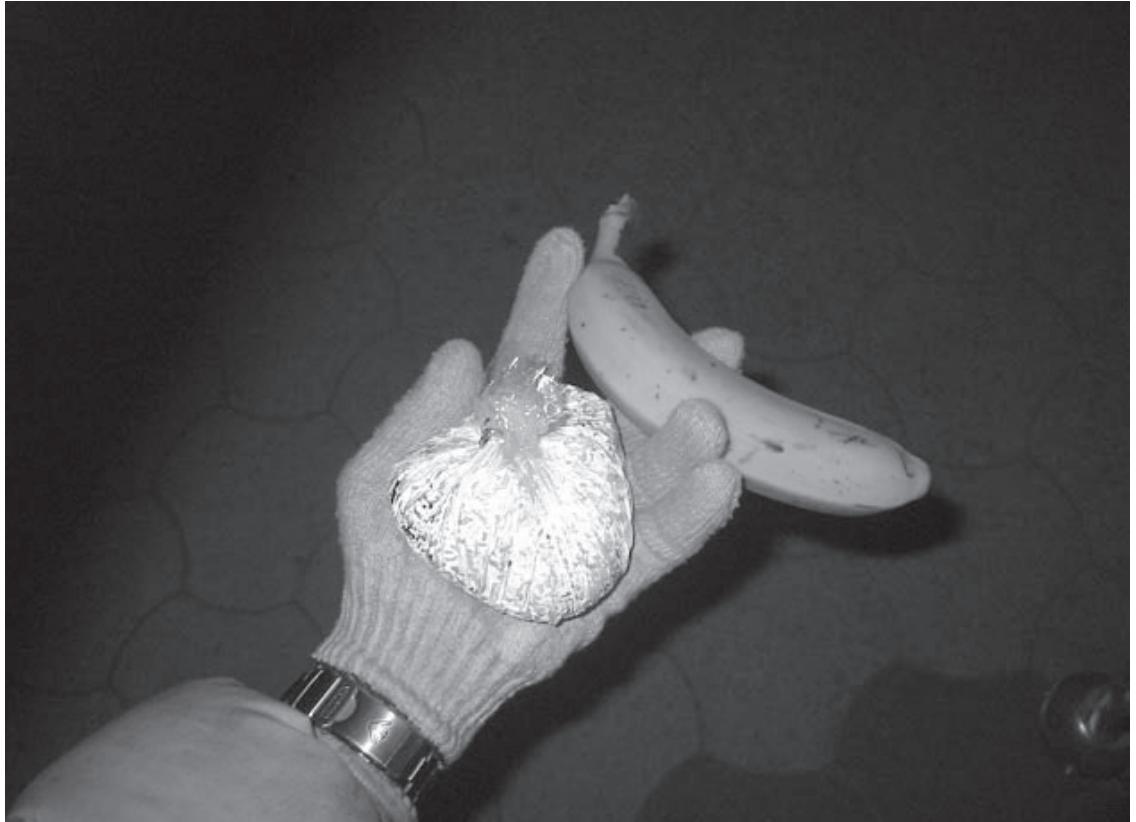
冬、最高のもてなしは
温かい緑茶だ。た。

人々のなかのやで……

第七十七番札所までお参りをして電車で引き返してみると、部屋には温かいお茶が待っていた。最高のもてなしです。
冬の寒い時、あつとつと……なんて言いながら熱燗の酒を飲んでいる人がいます。それを見て僕は、何て幸せなんだろう、とうらやましく思います。僕は、お酒が飲めません。飲んでも頭が痛くなるし気持ち悪くなるし、うれしいこともひとつもありません。じゃ、冬の寒い時、僕があつとつと……なんて言えるのが……、温かいお茶なんですね。暑い夏とは少し違いますね。

温かいもてなしで迎えてくれた旅館の女将さんは、フジケンのことをバツチリ覚えていました。「あ、少し頭の薄い感じの……」などと言いながら大笑いです。泊まつていった人たちの思いを大切にしている人のようでした。フジケンが勧めるわけです。

部屋にはテレビがあり、三年〇組とかいう有名な中学教師のドラマが流れていました。中学生のあふれるエネルギーを思い出しました。そして、また、コースケのことも思い出しつぶつと話しました。そして、また、コースケのことでも思ひ出してしまつました。中学校という場所は僕にとって特別な場所なんですね。みんなで走つたムカデ競走が忘れられません。みんなで歌つた合唱が忘れられません。みんなで泣いた卒業式も忘れられません。
疲れた体に温かいお茶を注ぎ込みながら、しみじみと湧き出る思いをかみしめました。



朝早く行動を開始しました。外は真っ暗です。宿の周りの人には迷惑をかけないようにコソコソと動きます。階段を下りて、靴箱へと向かおうという時、呼び止められました。女将さんです。お接待ということで、おにぎりとバナナをいただきました。おにぎりはまだ温かく、僕の出発時刻に合わせて準備してくれたことが分かります。朝ごはんとしてありがたくいただきました。寒い朝の、温かい朝ごはんでした。

おにぎりとは偉大な日本食だと思います。こんなにすごい食べ物はありません。米を主食とする日本人に生まれてよかったですと思えることの一つです。お茶碗一杯分のごはんがギュッとあいしを詰め込んで僕たちの前に現れるんです。最高のことです。最近はコンビニのおにぎりなんてのも多いけど、あれはまあ、あれとしていいか……と許可します。初めて「ツナマヨおにぎり」なんて見た時にはひっくり返りそうでした。ごはんにマヨネーズなんて信じられない世界です。それが、食べたら悪くない味なんだからたいしたモノです。

人として信念をもつて生きることは大切です。多少、何かで心が揺らぐような出来事があつても、信念があつたら道を大きく外れて戻れなくなることはありません。日本人が米を主食とするよう、揺らがない一つの主たる柱を……太い柱をもちたいです。

深く思うこと。

2005.12.31

確かに、ぱーちゃんむよへ回つてござました。「せつべつ逝かたい」ということです。自分自身が苦しみることもなく、周りが介護する大変さもなく、潔い最期だと思います。それが老齢であればあるほど説得力のある言葉になります。九十歳を越えていれば、仕方ないこともあります。でも、残される側としては、昨日まで会話を楽しんでいた人が逝つてしまふとの虚しさは大きなものです。

事故で逝つてしまつたコースケは何を思つたでしょう。それまでの人生で、真剣に自分の死について考えたことがあつたろうか、と疑問が浮かびます。明るく高校に通つている者がそれを身近なこととして考えることは不可能に思えます。本人にとつても周りにとつても、急ぎで受け入れるとの困難もは計りません。

僕自身のことを振り返ると……、職に就いて一年目……、「特別休暇」を取りました。半世紀昔だつたら死んでいたかもしない病気になつていたんですね。自覚症状はなし、現在の医療なら完治できる病気……、「長い夏休みをもらつた」とウソぶいていました。心の隅では真剣に想ふことを避けていたのかもしません。

人は必ず死ぬ……、当たり前のことなんだかと普段は全く考えずに生を楽しんでいます。暗い話題、しゃなく、真剣な思いとして、死について少しそうを巡らす必要があるのかもしません。





神社巡りをしているわけじゃありません。地図に従って歩いて、間違っているわけでもあります。なのに、なぜ、鳥居が現れてしまつたのか、少しだけ不安になります。神仏混淆なんていう思想もあるような日本という国だから、お寺と神社が仲良くなっていることもありますんでしよう。お隣さん同士、いい関係だったからでよしつゝ感じです。

参道が延びていて、目的地へと僕を導きます。そこには神社とお寺が仲良く隣り合つていました。崇めるものは違うのによくケンカもせずにいられるモンだと感心してしまいます。よく、仲のいい友達のパターンには二種類あるといいます。一つは、興味関心が本当に共通していて、まことに意気投合というパターンです。そりや、話をしても楽しことでしよう。もう一つは、重なる部分が少なくて、相互補助というパターンです。お互いに頼り合つていて、そりや、相手を尊重できることでしよう。かくあります。

どうしたつて、自分と全然違うヤツと関わらなければいけないこともあります。そんな時、自分の価値観だけで相手を見たら、ストレスがたまる一方で何もいいとはありません。学校だったクラスの中に何人が、そういうヤツがいるはずです。お寺と神社のいい関係……人間関係の教訓になつました。

大小。

大鳥居

ええ、分かってます。
勝手とが負けとが
そんなどじゅありますやん

やぱり

食ってるよな……

天皇寺

2005.12.31



でかいんです。表に出ている名前だつて立派にがんばつています。でも、でかいんです。そして、きれいな朱色が目に飛び込んでくるんです。

お四国という僕の勝手なイメージからすると、八十八ヶ所の札所が放つ威厳は他の何者よりも大きく強いものに思われます。遠路はるばる時間をかけて来るんだから当然といえば当然です。それは僕のイメージだけの話であつて、客観的に当然と判断される事実とは異なる場合もあります。だから、客観的な大きさというデータで比べたら、やつぱり、でかいんです。そして、大きいという事実は圧倒的な迫力で僕を襲います。恐るべし大鳥居です。

見た目で勝負はできない、だから中身で勝負しよう……と、常に考えてきました。見た目で僕のことをカッコイイと思う人は、まづいません。悲しい現実です。中身だつたら少ししかがんばつてる部分もあります。物事を深く考えようと努力しています。人とは違った見方をするセンスも磨いています。でも、それは自分の中だけのことと、なかなか伝わりません。ぜひ、僕の中身を見られるメガネを開発したいモノです……。

中を見たら、厳肅な存在感です。第七十九番札所です。他との比較ではない、自分の道を確実に歩む厳肅さを秘めています。あらためて厳かな気持ちを心の中に大きくし、お参りをしました。



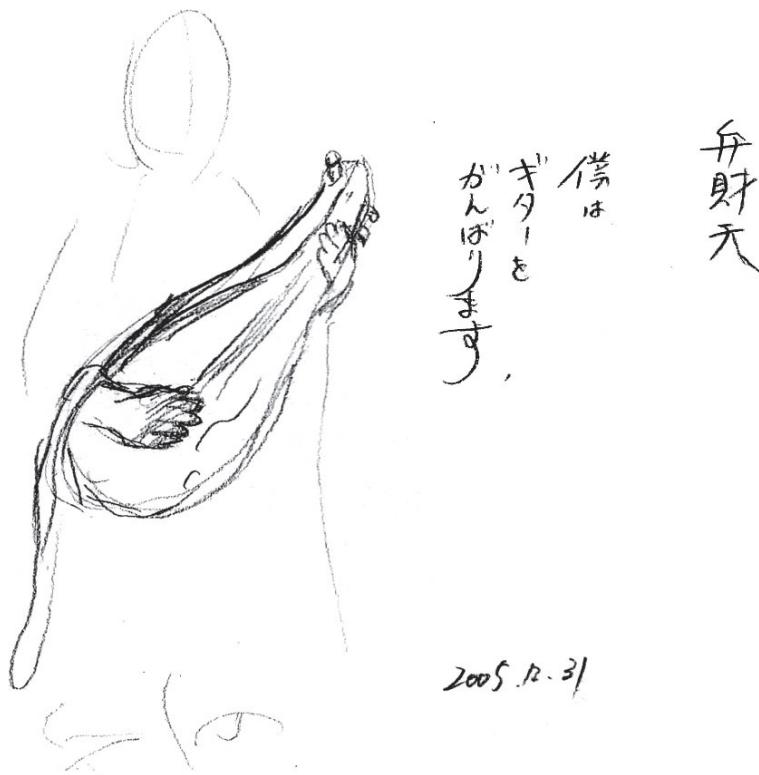
いよいよ大台、第八十番札所を迎えた。讃岐國分寺です。
讃岐の国の名前を負つた札所です。

ん？……讃岐の国に入つたからには絶対にしなければならない
ことがあるんじゃないでしょうか。讃岐ですよ、讃岐。いくら急
いでいたって、うどんを食べずに通り過ぎるのもあり得ません。
もしも、そんなことをしたら犯罪に近い愚行ともいえます。

一応、おいしいと評判のお店はチェックしていました。北条水
軍コースホステルでも予習したし、途中で出会つたお遍路さんか
らも情報はゲットしています。あつあつ地図でもメモしました。
完璧です。

が……、計算できなかつたことがあります。その日が大みそか
だつたということです。讃岐のうどん屋さんは、いわゆる製麺所
であり、食べさせるお店というよりも、生のうどんを売ることが
本業のようですね。そして、讃岐の人たちは年越しうどんを食べる
習慣があるところですね。何軒かのお店を訪ね、「今日は玉だけ」と、
ゆでたうどんに出合つたのがでもませんでした。大みそかを恨み
ました。

世の中は年の瀬を迎えていたんですね。全然気がついていませんでした。旅に出る者は、無常を感じます。旅に出る者は、様々なモノからの解脱を志し、遍路道を歩いています。



2005.12.31

楽器は練習しないとうまくならないし、練習しないとどんどん下手になってしまいます。かといって、練習しても田に見えて上達することは少なくて、基礎練習なんかはつまらないばかりです。僕が特に上手になりたいと思う樂器はギターです。小さい頃からやっているわけでもないからプロ級の技を身につけるようと思ってはいません。友達の前でポロポロ弾いて自慢できたらいいなあ、と企む程度です。

ここに白柳淳の登場です。ギタリストです。自作の曲を、自分が製作したギターで、自分が弾くという奇妙この上ないヤツといえます。ギターと関わる仕事がしたいと言ひながら大学の文学部に入った彼と出会い、僕は大きな影響を受けたような気がします。とにかく真面目に物事を考えます。音楽のことになると、特に自分の思いを前面に出して語り続けました。すごいヤツです。ヤツを裏付けているものは何か……、それは練習でした。地道にひたすら努力を積み重ねていたんですね。僕には絶対にできないだろう努力を今でも続けています。

努力するという才能に欠けた僕は、第八十番札所で弦樂器を弾く弁財天と出会い、「ヨロシク」といさつをします。他力本願です。自分の力でやめないことは、他にすがるしかありません。無理は禁物、でもないとからやつてしまおむ。



携帯電話でバス停の写真を撮っている人の姿を見たことがあります。なるほど、その時刻表を書き写すよりも速くて正確で便利です。必要になつたら保存してある画像を見れば、いつバスが来るのかすぐに知ることができます。電子機器の有効な使い方です。僕はデジカメを使います。今となつては他の人に自慢できるような高機能の物じやないけど、買った時には自分なりにお金を奮発して、満足できる物を入れました。それ以来、僕の旅には欠かせない武器になつています。使う時に気をつけているのが、バッテリーの消費です。電気がなくなつたら全く使い物にならなくなつてしまつのが電子機器の最大の弱点。普段は液晶の画面を使わずにファインダーを覗いて写真を撮るようにしているほどです。でも、この時は、撮つたデータがその場で必要だつたので、曲がり角に出るたびに画像を見直していました。時間的にそれだけ焦つていたということなんです。ひざも痛かつたけど、とにかく前へ前へ速く進んでいきたい気持ちがいっぱいでした。札所も第八十番を過ぎ、結願の時も近づいていたからです。

画像には、毛筆の美しい字が並んでいます。デジタルの中に息づくアナログの強さです。アナログの強さは絶対に忘れてはいけないと思います。人間の感覚に訴える、強い力をもつっています。温故知新……、いいところ取りが必要な世の中です。

火事場のくそ力。

2025.12.31

耐えに耐えたという道のりでした。時間との勝負を考へると、どうしたつてギリギリです。毎度毎度のことではあるけど、瀬戸際が身に染みついた人間だから懲りることなくぐる返してしまいます。果たして午後五時までひ、あと二つの札所を巡ることができるだろうか……といつ瀬戸際です。

坂道を走りました。でこぼこの少ない下り坂で、ひよいとジャンプすれば普段の倍くらいの距離は進める勢いです。ちょっとした段差だってビヨーンと飛び越えてしまします。迷うことなさそうな道だったから、とにかく突進しました。境内を回り込むような感じに寺をロツクオン、山門の脇から第八十一番札所に到着です。もしもサポートをしていなかつたら途中であきらめただろう痛みがひざを襲っていたけど、ああ、何とかたどり着きました。いや、目標はまだ先にあり、ひとまちエックポイント通過といった感じです。

夏休みの宿題にしてもらうで、計画的にやるのが一番いいに決まっています。誰に言われなくても分かります。それが、いつの間にやら最終日を迎える必死になつて鉛筆を走らせるのが現実なんですね。そのパワーはものすごい大きなもののように感じます。最終田さえ迎えればそのパワーが得られる……しゃ、それまでパワーは温存……と言い訳をしながらダメ人間の完成です……。





落ち葉に埋もれるとき気持ちがいい……そんな経験をしたことがあります。ふかふかとした感触が全身を包んでくれます。厚い落ち葉の層が懐の広さで僕を認めてくれるような感じです。

田の前には飛び込んだくなるような落ち葉が続いていました。本当に泳いでいけそうな落ち葉です。ドッパン、バシヤバシヤ、スイフイ……潜っていけば、きっと木の根が珊瑚のようにうつそうと茂っています。葉っぱの色も様々で、太陽の光を浴びて輝く虹の美しさにも負けないはずです。溺れることなんてあり得ません。体が自由自在に操れるんです。息がつらくなることもあります。疲れもせず、いつまでも泳いでこられるんです。

空想の世界で遊ぶことは楽しいことだし、意味のあることだと思っています。白虐的に「妄想力」なんて表現する人もいるけど、そんなマイナスイメージの言葉は当てはまりません。頭の中でキラキラ輝くイメージをつくり上げられたら、そこをスタート地点にして現実の世界だつて大きく大きく広がっていくはずです。何事であろうと、実現させることの発端は頭の中になります。シンプルに形作りができるたら、それはもう想像ではなくて創造になってしまいます。自由な発想は世界を広げます。

ふと、現実の落ち葉は、埋もれた時にチクチクと痛かったことを思い出しました……。

笑顔の底力。



役の行者

たたかじりまどなりりこ。
何たれすひくらしり
でも
笑顔は
たたかじります。

2005.12.3

必殺、能ある鷹は爪を隠す……です。そして、僕の爪は退化してしまっているかのように隠れっぱなしです。自分には才能がある、とまだ今でも勘違いすることもいっぱいあるけど、どうにも僕の爪が姿を現すことがあります。

必殺、営業スマイル……です。ありがちな話です。どうしたって、笑顔を提供しなければならない時があります。じいかのハンバー ガー屋さんのようにわざわざ「〇円」なんて値段はつけないけど、商品の一つのようなモノです。すぐに見破られてしまい、破滅へ向かうことも多いので、営業スマイルは、使用量・用法をよく読み、正しく使っていきましょう。

隠された実力、それに気づくのも実力なんだと思います。要するに僕には実力がありません。からうじてたどり着いた第八十二番札所には、役の行者という人が石になつて座っていました。その人は穏やかな笑みを浮かべて座っています。やさしいやさしい笑顔でした。ひざの痛みまで癒されてしまいそうなやさしさを感じます。でも、僕にはその人がどれだけすごいのか分かりません。能ある鷹のすごさを感じ取る能力が隠れているんだからどうしようもないわけです。

いいです。役の行者は僕に笑顔パワーのすばらしさを教えてくれました。それで、いいんです。



世の中は新年を迎えていました。きっとカウントダウンをして喜んでいた人もいることでしょう。その頃、僕はインターネットで悲しい時間を過ごしていました。ネット忘年会なんてことをしていたのも、この時だったかもしれません。時々出てくるギタリスト、白柳淳を応援するファンのホームページがあるんだけど、その掲示板で怪しげな呼びかけがあり、ちょこちょこ書き込みがされていました。僕は讃岐の国にいるという身の上なので、うどんをネット上に持参したつもりになつて遊んでいました。つながつていろよつたけど、僕は一人で画面を見つめています。まますます、悲しさがつのりました……。

夜も明ける頃、寒さの中を第八十三番札所へ向けて動き出します。空気は暖かいけど、心の寒いインターネットカフェからの出来です。山門には門松が立っていました。まさに正月の光景です。昔ながらの日本の風情を味わう気分でした。厚着をして初詣に訪れる人々の姿も見られます。初詣のためにお寺に向かうのか、神社に向かうのか……、ま、どっちでもいいです。神様や仏様に新年のあいさつをして、一年をがんばろうと思えることが大切なんです。

僕の人生に様々な大きな影響を与えた年が去り、新しい年が始まりました。様々に楽しい出来事が待つていてることを願いました。

言葉の響き。



誰が般若心経を書き
誰が石を磨く
誰かがここに寄進した

誰がモリリです
ただそこにある
心の叫びが刻み込まれてゐる
ただそれだけです

2006.1.1

初詣の人人が行き来する境内の片隅に、それはありました。蓮方なあ、と思わせるような形をしています。そして、中には漢字がずらづらと並んでいます。僕は読み仮名をふつたその漢字を唱えつつ、お四国を歩き続けてきたんですね。「般若心経」です。旅する者にとっては感慨深い内容の経文であり、人間の存在の小ささを感じてしまうような漢字たちですね。

お四国を歩く時、僕はいつも一つの言葉を覚えました。「おんあぼきやべいろしやのうまかほだらまにはんじまじんばらはらばりたやうん」という平仮名書きのものです。意味も分からず並ぶ平仮名だけの言葉は、読み上げるだけでも苦痛でした。それでも、さすがに八十ヶ所以上の札所を回った頃には、やうやくひと口から勝手に言葉が流れてしまおむ。ありがたいモノです。

言葉には魂が宿るといいます。僕らには直接に意味の分からない言葉でも、インド通りで発せられた時には、ストレートに思いが言葉にあふれていたはずですね。その言葉を呴きえぬといつては、僕らもその魂を直接に甦らせることにつながると感じます。音の響きの力です。

初詣の人人が行き来する境内の片隅で、邪魔にならないように口ソコソしながら言葉の重さを想像して絵を描きました。擦つぺぐな絵や言葉でしか表現できなかことじが僕の限界です……。

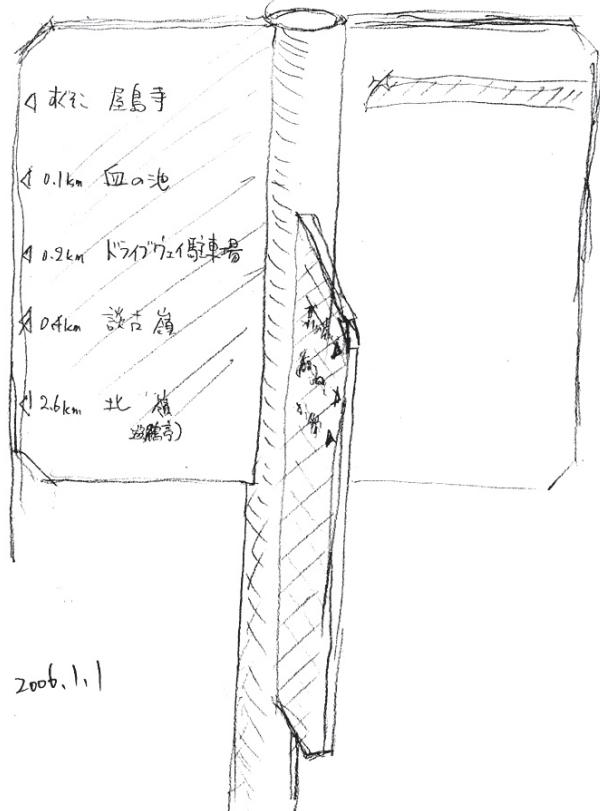


焼津の人間のほとんじが「日本武尊」という名前を知っています。そして、浜松の人間のほとんじが「金原明善」という名前を知っています。それぞれの地域では学校で教えられる名前です。焼津では、日本武尊が敵に追いつめられて火を放たれた場所が焼津だと習います。火山でも何でもないのに「焼」という文字が使われる所以です。

浜松では、金原明善が「暴れ天竜」と呼ばれる天竜川の治水工事をしたんだと習います。というわけで、天竜川の下流域には、今では島がなくなつたのに「○島」と呼ばれる町がいくつも残つているんです。

じゃ、屋島は島なんでしょうか。昔は完全に島だったみたいですね。じゃ、山じゃないんでしようか。うーん、今では確かに山ですね。車の標識に困惑が感じられました。「shima」なのに「Mt.」なんですね。昔の様子を地名が語つてゐるわけですが。こんな矛盾が大好きです。言葉のおもしろさを感じます。

言葉の背景まで考える機会は、そんなにたやすくありません。でも、考え始めるとどれも氣になつてきます。人間、だつてきっと同じです。いいなあと思える人には、いいなあと思える背景があるはずです。いいなあと思える体験をたくさん積んで、いいなあと思われる人になれたらなあ、と思ってます。



2006.1.1

強者

〇、二キロ先にあさやか
おまえの所へみんな来るから

歩く間は大変なんじや
だからキレイなんじや

図になつてこんとしかいこよつがありません。
強者と弱者です。歩行者は交通弱者として大切にされなければいけないと思ひます。なのに、なぜ……、わりといじめられている感じを受けます。ま、チヤリダーのいじめられ方に比べたらマシだけど、それでもやつぱり日本の交通事情は弱い者いじめの構

山の上に水族館があるつてのも何か不思議な印象だけど、山上まで車で行くこと当たり前だと思つてしまふのは困りものです。看板の中に「0.2km ドライブウェイ駐車場」などという表示があつたんですね。駐車場が完備しているなら車で行くのも簡単だと思ひます。山の道を、歩行者を押しのけて車がグイグイ登つていくなんて最悪です。車にはエンジンがついていて、強いんですね。そんな強者たちが我の顔で進んでいくなんて悲しくなります。世の中ではいじめが問題になつています。学校じゃ何をやつてるのかど、みんなが心配になります。でも、いじめは学校の中だけのことじゃありません。世の中どこでも横行してると感じます。象徴的なのが交通事情だと思つんですね。なんで、強い立場の車が一番に優遇されるんでしょ。弱い立場の歩行者が優遇されなきやおかしいじやないですか。もつとやさしい社会になつてほしいと感じます。いや、本当は、僕らが自分でそんな社会をつくり上げていかなあやこかないんでしょうね。ガンバロー。



明鏡止水の如し。

日本には昔から自分の気持ちを表に出さないことを美德とする文化がありました。僕は剣道をやっていた頃、相手に勝つて大喜びしていただら叱られたこともあります。常に冷静な振る舞いをせよ、といつ教えです。剣道をやっていた頃も同じで、矢が的に当たつても外れても、とにかく騒ぐと叱られました。日本的なかっこよさとして静かな様子がいいってことです。うれしい時には飛び上がり喜び、悲しい時には泣き崩れる、怒る時には拳を振り上げて叫ぶ……そんな姿も人間として正しい姿に思えるんだけじ、どうなんでしょう。

怒るといつ感情は激しいものだし、エネルギー消費も激しいものです。「怒」といつ文字を見ただけでも身構えてしあう部分があります。それが「文庫」といつ冷静さをイメージさせる言葉と一緒にになつているから、何じゃ? と思つてしまふしました。「庵」という文字も激しさを伝えるものじゃあらません。四文字あるうちの三つは静、一つだけが動……多数決をしたら静の勝ちです。なのに四文字トータルで激しさを感じました。

数の暴力が横行しています。少数だけど貴重な意見があり、それが見捨てられていくまます。こんな時、もつと冷静に考えましょう……。強い者が勝つのは当たり前かもしれないけど、強い者ほど穏やかにやさしく心をもつのがかつてこと思つます。



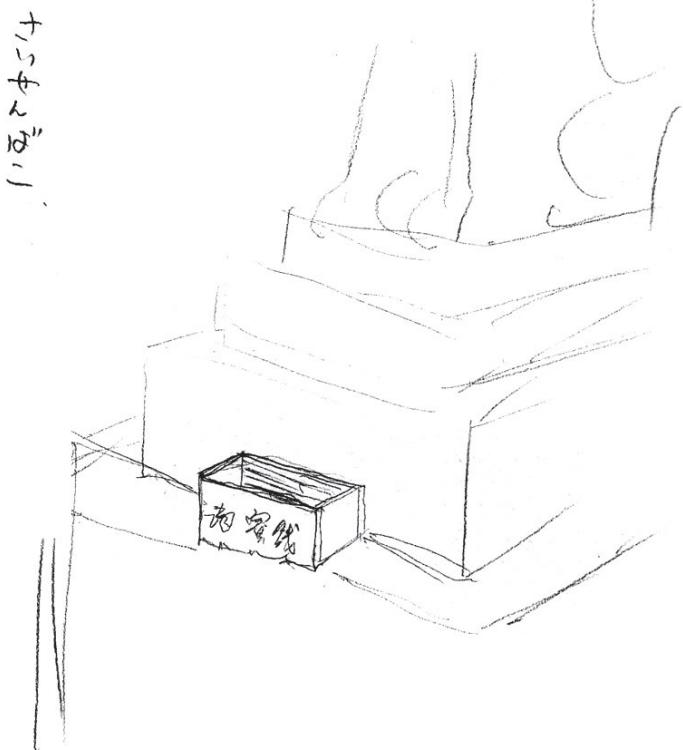
僕の心は対決です。やるべきかやらざるべきか……いたずら心がおくおくと湧き上がり、うれしくてうれしくて仕方がありません。僕の行動を分ける大きなポイントの一つが、おもしろいかおもしろくないかという判断です。おもしろいことは、ぜひ行動に移していきたいと思います。

一方通行の標識が立っていました。……が、期間限定です。正月のある時期だけしかそこに存在しないようです。地面上に埋め込まれているわけではなく、ポンと置かれています。学生時代の僕だったら、間違いなくやっていると思いました。場所の移動です。ひよいと持ち上げれば一方通行の向きは変わります。逆向きにするのはおもしろさに欠けます。向こう側の崖下に向かうように一方通行にしたらどうでしょう。続々と車が落ちていくんです。法を守れば守るほど事故が多発する仕組みです。かなりのおもしろさを提供できねえ。

残念ながら、僕は実行に移すことができませんでした。世の常識というものが身についてしまったのか……いや、違います。ただ単純におまわりさんに叱られるのがイヤだつただけの話です。崖下に向かっていく車が現実にあるか……否、停車するでしょう。迷惑をかける相手はおまわりさんだけであって、やつぱり僕は叱られたくないというだけの理由で車の横に立っていました。

「まじめに準備してあります。
が、メモ新しくなります。
ます。五月です。

2006.1.1.



同じの地方にも、同じの寺にも、機会均等に、全国的に正月がきていました。それは見事なまでに機会均等でした。相変わらずバタバタと急ぎ足な僕は、人の多さにイライラしながら第八十五番札所へ到着しました。

行く人来る人騒ぐ人、老若男女がひしめき合っています。参道のすぐ隣にはケーブルカーが走っていて、それにもたくさんの人が乗り込んでいるようでした。またたく毎日お寺参りをする者にしてみれば、そんな時だけ現れる初詣の人たちが当たり前のよくな顔をしてお参りをしている姿が滑稽でもあります。

たくさんの人があ参りをするとなると、賽銭もそれなりの金額になるはずです。ふと見ると、ここにも機会均等の波が押し寄せていきました。狛犬の前に賽銭箱が置いてあるんです。さすがに心の広いことです。気配りにも感心します。普段だつたら気にもとめないような所にも、正月という神聖な日にはきっと参拝客は敬意を表すでしょ。準備は整えておかなければならぬんですね。

僕は間の悪い人間です。「ここだー」という時にこそ失敗をするタイプの人間なんです。器用に力の入れ具合をコントロールして、上手に生きていくたいとは思っています。そんな風にやっているつもりのことも多いんだけど、なぜかつぶけるんです。上手に世を渡れる方法を教えてください……。狛犬にすがります……。



じいかに『とも』と『つづ』と『コース』を発行していらぬ人がいました。月刊の二コースだと思っていたんだけど、実はエエ加減なモノで、適當な時……いや、適切な時に発行するようなスタイルでした。発行者は「最近、『とも』というより『セツ』になつてゐる……」と自虐的にボヤいていました。発行時期も内容も、どんどんその場しのぎになつていへ霧雨氣で、確かにセツい感じがあつたと思います。

森と呼ぶにはあまりに小さなモノで、セツいと表現するのが正しくも感じられる植物群がありました。そういうじんな背景があり、どんな歴史的価値があるのかも知りません。ただ、そこを通りかかる歩き遍路の者が見るだけでは「セツー」とつぶやいてしまうくらいのモノです。「小さな愛のもり」と名づけられていくかど、この愛は小さめのんじゃないか……と愛する人にツツコミを入れられそうですね。僕はもっと大きくてたくさん詰まつた愛を届けたいなあ、と思います。今のといろの届ける相手がないのが問題ですが……。

愛は小さな所から生まれるんでしょう。それがだんだんに大きくなつて、深まって、大きな森のように実り豊かなものになるんでしょう。小さな愛、ささやかな愛をセツコト積み上げていきたいと思います。誰かに届けるために……。



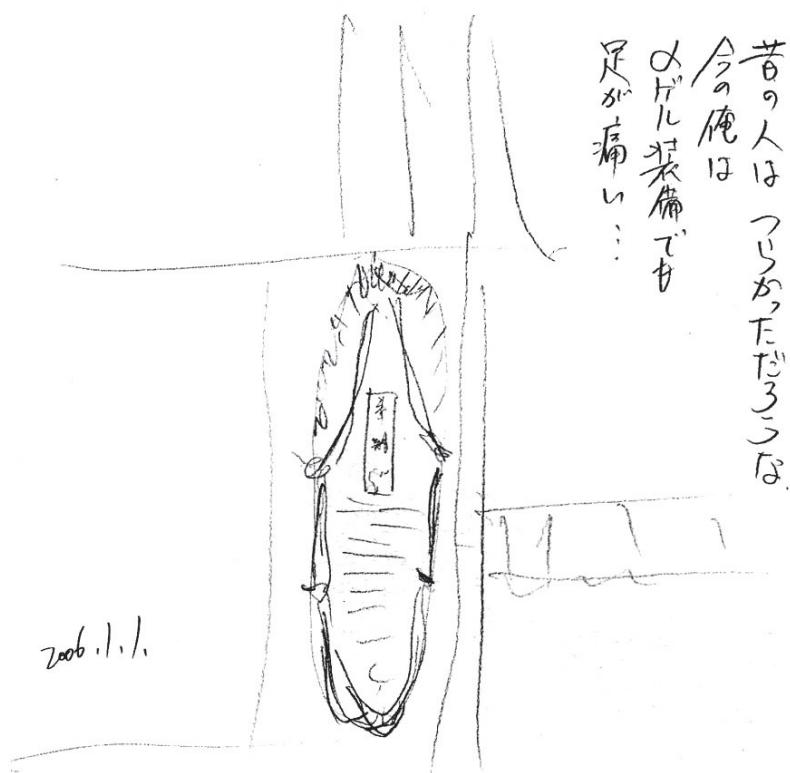
天才。

早すぎた天才というべきだと思います。江戸時代に電気の価値を見出すなんて信じられません。僕なんか、今だって、目に見えない電気という物を実感としてすごいと思えないくらいです。周囲にこれだけ電気製品があふれています……です。そりや、頭の上にちよんまげを乗せた人たちが「エレキテル」という言葉を聞いたって、怪しがる他にはないはずです。平賀源内は捕まつて、悲劇の最期を遂げたといいます。それに、無念だつたことでしょう。世が世であれば、彼は天才として社会に貢献する仕事を成していたに違いありません。他の国に生まれていたとしても何かが変わったかもしれません。歴史に「もし」は禁句です。でも、やっぱり彼の気持ちを思うと「もし」と書いたくなります。

バカと天才は紙一重といいます。バカの発想も天才の発想も、凡人には理解できません。バカの発想を理解したいとは思わないけど、天才の発想は理解したいものです。理解できないとしても、せめてそのすごさを自分の中に生かしたいと思います。たぶん、考える道筋は同じです。ただ、そこに行き着くまでにかかる時間や労力が断然少ないとこのことなんですね。

僕の発想も、時として人から理解してもらえません。早すぎた天才と後世に伝えられるかもしれません。それを誰が伝えるかが問題ですが……。

歩きの風景。



第一印象……でかい、第二印象……でかい、第三印象……でかい、それ以外の印象は基本的にありませんでした。第八十六番札所の山門にぶら下がっている巨大なわらじです。印象としてはそれだけでも、頭で考えないとあります。

わらじは藁です。底から鼻緒まで全て藁です。慣れない僕が履いたら、すぐに足が悲鳴をあげます。第一印象……痛い、第二印象……固い、第三印象……歩きにくい、つてな感じだと思います。昔の遍路はわらじしかなくて、どれだけ大変な道のりだったのかと恐ろしくなります。僕の靴は、科学技術の進歩のあかげで足に負担が少ないという噂の材質が使われています。それでも、僕の足にはマメができるし、ひもも痛くなります。現代に生まれていて、まだマジだったと思っちゃう。

僕の足は不器用だけじ、とりあえず自由に動かすことができます。周りには足を上手に動かせない人もいます。ごはんを食べる手の動きをトレーニングしている人もいます。それを懸命に応援する家族もいます。頭が上がりません。ものすごい壁を乗り越えつつ生きてるんだと感じます。本人を含んで家族みんなの力のすごさを感じます。わらじだの靴だの細かいことをグチヤグチヤ考えている場合じゃありません。歩いて遍路道をたどることの幸せを精一杯感じたいと……今、文章を書かながら思いました。



高級住宅地というイメージがあります。山の中腹に横文字が並び、映画俳優がザクザク住んでいる所という感じです。なんて勝手な思い込みだ、と思われるんでしょう。仕方ありません。貧弱な発想しかありませんから……。ハリウッドという所は遙か彼方の遠い世界なんですよ。

お四国にハリウッドかと見間違つのような光景がありました。書いてある文では「ORANGE TOWN」であつて、似ても似つかぬ別物ではあるかど、いつも雰囲気はねらつてこの感じがします。ねらつてはいるかど、日本の山に白い文字の看板があつてもシャレにならぬかならないし、逆に貧相な雰囲気を感じさせてしまつから、どうでもいいや……ところどころになつまむ。ただ、ひつやう本当に高級住宅が建ち、おしゃれな街のよつね感もあつまつした。

僕の思いとして、「部屋は借りて住め、本は買って読め」というものがあります。住む所なんぞひとつにでもなるかど、身についていく知恵はお金を払つても手に入れたいという思いです。どうも図書館の本などは苦手で、自分の物になつていないと落ち着きません。自分の物ならどれだけ線を引いてもメモをしても人に迷惑をかけることもなく、自分のためだけに使いいじができます。自分勝手にでもないとの開放感が僕には必要なんですよ。

さて、僕はじつはアパート暮らしになつたのです。



あれ
絶対無理だと
百も承知で、たゞ
それでも
自分の手の中へ
入れたくなっていま
大好きな木は…
いい…

何回も何回も打ちのめされていくけど、それでもやつぱり、僕は大きな木を自分の中に生かしていきたいと思つてしまします。んで、スケッチブックを開いてペンを走らせます。いや、ペンは走りません……モソモソと動き回り、怪しげな物体が紙の上に現れることになります。しかも、これは夕暮れ時、辺りはどんどん暗くなつていく第八十七番札所です。僕の技術でどうにかなるわけがありません。スケッチブックに怪しげな物体登場です。

小さい頃……というか、今でも……木の上に小屋を作つて自分のスペースにしたいと憧れます。その木が大きければ大きいほど、そんな憧れも大きくなります。自分が頼つても絶対的な安心感を求めているのかもしません。無い物ねだりつてヤツです。絵を描く技術だつて同じです。他者に「ああっ！」と言わせるような絵を描きたいだなんて、心の底では思つてしまします。無い物ねだりなんです。許してください。暗くなつていく境内に、力の無さを突きつけられて打ちのめされていく自分がいました。

お四国遍路も第八十七番札所まで来てしまいました。気持ちの面で、「終わつてしまつ」という寂しさや虚無感に近いものが押し寄せていました。結願の喜びを近くに感じることはなかつたような気がします。大きな木と小さな自分を比べてしまい、ますます心中はどうぞと渦巻いてしまいました。



ルート検索。

うだうだと悩んだのは、ついでにデータがあったからです。もしもデータがなかったら、悩むことはできません。ありがたいくらいでした。客観的に物事を判断しようとするのは僕の努力目標です。この時のルート選択は正しかったと思っております。寒い寒い夜だったけど、予想していた通りのちょっとした軒下を発見することができたし、便座の温かい公衆トイレまで発見できたからです。自動販売機で買った温かい飲み物を個室に持ち込み、地図を眺めながらお尻のぬくもりに感謝しました。

次の日の朝は、早く起きて歩き始めるつむづです。

トに攻めるコースを進みたいと思いました。でも、攻めすぎて道に迷うのはかなりイヤなことです。それに、夜寝る場所も決めていないんだから、大冒険はできません。となると、ちょっとした軒下がありそうな場所を目標にしつつ、七・八キロのコースを選ぶのが最善の策になりました。ストレートだけで勝負するのは危険な賭けだという判断です。ちょっとだけボール気味の球を投げてみると感じました。

されば直球、ストレート勝負で三振を取りたいモンです。しかも三球三振で実力の差を見せつけられたり最高です。

●お手洗は●茶店内です
店の建物右側よりも
ご利用でさます
(但し日中のみ)
長尾寺



怖い、滑る、とあびえながら山道を進みました。風はビュ～
ビュ～吹いていた、寒くて体も動かない、シヤレにならん状
態です。しかも、女体山のてっぺんを回摺すつむつはカラカラな、
最短距離で歩くつもりでした。途中、ちゃんと道標を見て別の道
しべ思つていいたんですね。

あれ？……と思つておした。歩きながら風が強くなつてしまつて、雪は増えてしまつて、何とな／＼自分が聞こ／＼見えてました……、じつも山頂が近いよ／＼な気配を醸し出しておる。そして、ついに山頂。なぜか、女体山は僕に微笑んだのです。わざとくわしくなりてしお／＼した。とりあえず[珍撮影]です。周りに誰もいないのは当たり前、セルフタイマーをセッテ／＼おる。シャッターボタンを押して山頂碑へダッシュ……、死ぬかと思つておした。靴底ツルツルのラフティングショーズがこんなに恐怖を感じやせぬとは……、山の装備はやっぱり大切なモノです。「女体山」に抱きつ／＼変な人になつてしまつておした。ほ、いいか……。

「ここからは下り坂……靴底が滑る僕の憂鬱は続きます……。それでも、一歩一歩が結願の地へと向かってい／＼足取りです。気を引き締め直し、緊張感と共に、いよいよ第八十八番札所を目指しました。



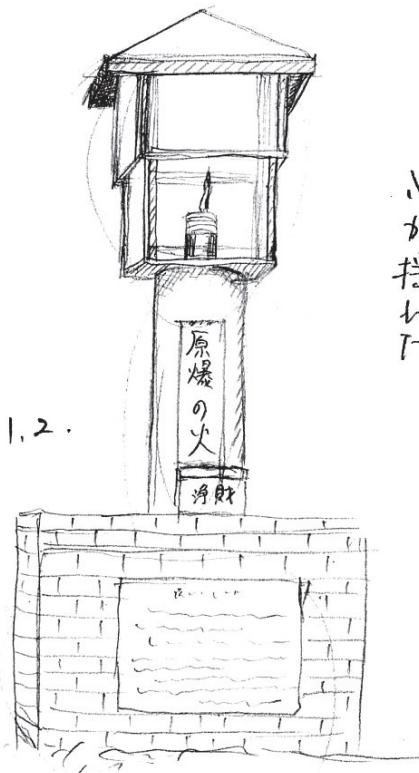
ついにその時がきました……とうほどの感動もなく、僕は第八十八番札所へ到着しました。じいをじう通つたのか、よく分からんんだけど、いつの間にか境内に入り込んでいました。まあ、他のどこであつても同じように、お参りをして納経所へ向かうというだけです。ああ、記念撮影を忘れてはいけません。山門へ向かいます。そいら辺にいたあつちゃんにシャッターを押すようにお願いをしました。階段よりもっと山門を大きく撮つてくれりやあいいのに……と感謝の気持ちも薄いモノです。何なんでしょう。ものすごいことをやっても当たり前のような顔をしている人がいます。○試合連続安打記録更新なんていいながら、自分のことじゃなくてチームについての「メソット」をする野球選手なんてのもいます。記録を意識しないなんてことはあり得ません。なのになぜ記録更新をして大喜びしないんでしょう。僕が思うに、その数字に意味を感じないからじゃないでしようか。いくつの試合連續でヒットを打つたとしても、チームが負けたら意味ないし、ヒットの質が相手のミスによるものだつたりしたら、特にうれしくありません。おしろ記録よりも記憶に残るプレーの方がすごいと思われるこじだつてあります。

僕の遍路にも共通点があります。八十八という数字には意味を感じません。……とにかく「着いた」という記録が残りました。



お札堂の前に
火が掲げていた。
まさか
結願の手で
出合つとは思ひやうが、下
火とともに
火が掲げた。

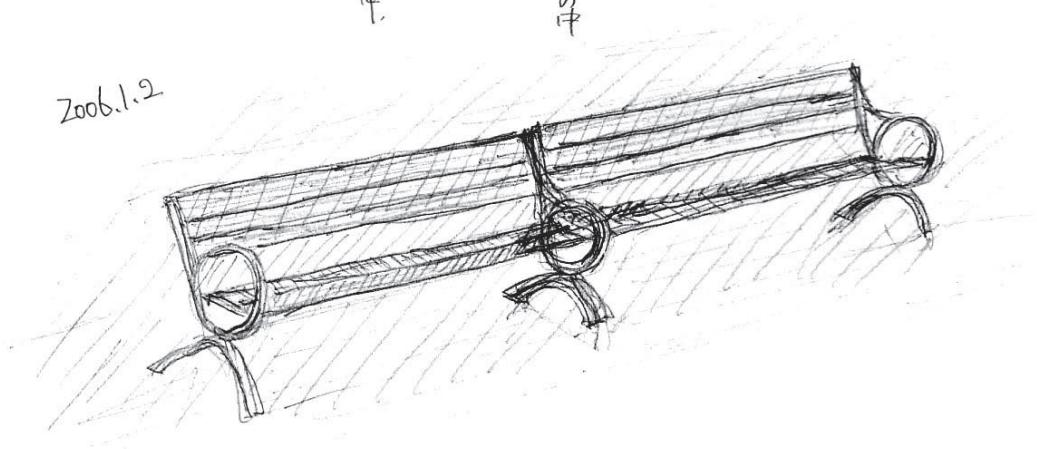
2006.1.2.



忘れてはいけない記憶があり、その記憶を存在として証明しているものだと思えました。一瞬にしてものすごい数の命を奪った火の一部です。人類史上初めて戦いの手段として現れ、日本人を殺していくつた原子爆弾の火です。

記憶に残るのは何だろうと考えます。第八十八番札所で結願の日を迎えたことは記録として残っています。他者からの評価を常に気にしている僕にとっては大切な記録です。反面で、結願の日というものに何の価値があるのか、と疑問を投げかける自分もあります。そりやそりです。結願したことで賞金が出るわけでもないし、僕は熱心な仏教徒というわけでもありません。そこを訪れた記録は「へえ、すごいねえ」と、周囲から少なくとも口先だけでも感嘆の声を聞けむ……そんなアイテムでしかないです。

ゆらゆら燃える火、結願の地にそんなものがあったことさえ、僕の記憶の中では薄れしていくかもしません。そんな僕でも、日本に落とされた凶悪な火についての記憶を簡単に失うことはありません。それに、そこでグチャグチャと物事を考えて何かの思いをもつたという、実体のないかすかな記憶は残つていはずです。きっと体に染みついた記憶が僕を支えてくれる日がきます。お四国をグルグル歩き続けた僕の体に蓄積された、大いなる記憶が僕を高めてくれる日がきます。そつ信じます。



場所

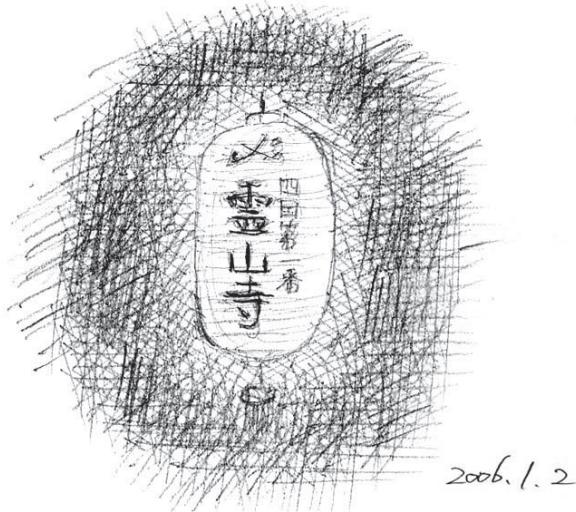
雨上がりの大師堂、僕はまた同じベンチに腰かけていた。あの朝、ケータイ電話が鳴ったのと同じベンチである。そして、泣いた。この世に生かされている自分を振り返って泣いた。この世にいる限り、逝ってしまった命と再会することはない。ばーちゃんの死を知つたベンチに座つて、時を忘れていた。

あの世には何があるんだろう。若くして逝つたユースケは何を急いだんだろう。僕らには急ぐ必要性が見えない。見えない僕らには、大きな悲しみが押し寄せてくる。そして、僕は泣いた。この世に生かされている自分を振り返つて泣いた。この世にいる限り、逝つてしまつた命と再会することはない。残された者の思いを胸に、時を忘れていた。

ふと、我に返る。この場所が、僕に何かを訴えていた。かすかな光を残した大気が僕を呼ぶ。薄暗かりにベンチがぼんやり浮かんで見えた。

人の気配はない。静けさの中でスケッチブックと対峙し、また、自分の心と対峙した。線になつて現れるベンチは、決して全てを伝えない。僕が見た心の中のベンチは僕だけのもの……。いや、もしかしたら、あの世に逝つた命たちには見えるのかもしれない。いつか必ず逝くことになるだろう、あの世。その時がくるまで、僕は僕の眼で、この世を見続ける。

輪廻のあかし。



ある
闇の中に
第一番の
ちょうちんが
浮いていた。

お四国が一つの大きな輪になりました。第一番札所へのお礼参りです。自分勝手な思い込みのお礼参りだから、気持ちだけを伝えて拝んで満足です。僕の歩き遍路は、第八番札所を再訪した時に終わっていました。

結願した時の感動、お四国の輪廻完成……、そんなものよりも第八番札所は遙かに大きく僕に迫ってきました。お四国を歩いて、様々な思いが湧き起つてきたのは事実です。喜怒哀楽が渦巻く遍路でした。でも、一番に深く思うのは第八番札所である熊谷寺なんです。

人によって感じ方は大きく変わります。同じ本を読んでも、同じ体験をしても、それまでの人生や感性によつてモノの見え方は明らかに違うようです。所詮、僕らは感情に支配されている動物ということなんでしょう。その感情というものを大切にしつつ、上手にコントロールしていくことこそ、人間の叡智といえるかもしれません。遍路道を歩き、苦しい思いと闘いながら、感情を意のままに操ることを目指していました。自分の感情と上手に付き合えたら、見える世界はシンプルに透き通つて見えるようになります。お四国を一周してもそんな眼は手に入らず、僕にはまだまだ修行の道が続いていきます。

背後の暗闇に、お四国の入り口を示すあかりが灯つていました。

あとがき

一〇〇五年という年は僕にとつて激動の年になつた。

正月を迎えた日、僕は屋久島の神社で学業成就のお守りを買つていた。担任する中学三年生の合格祈願である。受験生を担任することは初めての経験で、彼らのためにできることが何なのか分からず、できることを手当たり次第にやつておきたかった。困った時の神頼みとはまさにこのこと……、神様に頭を下げていた。

三月、彼らは無事に卒業していく。卒業式では感動の涙、涙……。我慢することなど到底できず、顔はグシャグシャである。卒業記念の合唱でも彼らの雄姿を一瞬でも見逃したくなくて、ハンカチで涙を拭うこともせずに、ひたすら顔を前に向けていた。合唱では、秋のコンクールの時から泣かされっぱなし……、運動会でも泣かされたし、悪さを叱りながらも泣かされた。本当に泣かせてくれた学年だつたように思う。それだけの思いをもたせてくれた彼らへの感謝は尽きない。

彼らを卒業させてすぐ、人事異動で僕は養護学校へと赴任することになる。小学二年生という年齢の学級担任になり、それまでとは明らかに違う環境に身を置くことになつた。体はメチャクチャ元気な、それでも知的にハンディキャップをもつ小学二年生の子どもたちを前に右往左往、何をどうしたらいいのか全く分からぬままに夏休みになつてしまつた。

夏休みに入り、家族の一人に大きな転機が訪れた。弟の結婚である。小さい頃から馬鹿にし続けてきた弟だつたのに、いつの間にか家族の中で一番の常識人になつたような気がする。一般企業に就職して世間の荒波にもまれ、そこで出会つた女性と結婚。順風満帆な人生の歩みである。しみじみと温かい、すてきな結婚式だつた。お四国へは弟の結婚式の次の日に到着した。しかし、さらに次の日には焼津の実家に戻つている。ばーちゃん

んの死が僕の心に激震を引き起こした。本当に何も考えられない、無の心でお四国を歩き続けるしか、僕にできることはなかつた。

追い打ちをかけるかのように、教え子が亡くなる。僕の中から感情が消えていった。分からぬことだらけの仕事をこなし、日々、体に忙しさの負荷をかけ、自分の有り方を模索した。少しづつの連休を使い、お四国へと通つた。

夏から秋にかけて逝つてしまつた二つの命は僕に大きな決意をさせることとなる。「絶対に両親より先には死はない」……もちろん、どこで何があるかは分からぬが……何が何でも生き延びてやろうと思う。どんな手を使つても僕はこの使命を果たす。

冬、結願へ向けて歩き出した。とにかく寒い。雪が多い。泣きそうになりながら僕は歩いた。鼻水もズルズルである。ひざが悲鳴をあげた。右ひざ、左ひざともに激痛が走る。痛みとの闘い、時間との闘い、そして自分との闘い。勝つ必要はない。負けなければそれでよし。後ろに進むことはないから……。少しづつ、お四国の人、お四国的心に温められながら、結願へと向かつていつた。

結願の地で、怒濤のように押し寄せてくるような大きな感動はなかつた。ただ、最終の地を踏んだという安心感からか、もう歩けないのでないかと思うほどのひざの痛みが押し寄せてきた。足を引きずりながら、それでも僕は歩いた。とにかく、あの第八番札所をもう一度訪ねたいという気持ちが僕を支えた。ばーちゃんへの思いをきつちり整理させなければ僕の遍路は終われない。とにかく、モノクロの記憶しかない大師堂をもう一度見ておきたい。

第八番札所へ向かう道のりに土砂降りがきた。氷の粒まで混ざつている。天は僕の気持ちをくみとつたか……。共に泣こう。大師堂の前で時を過ごす。静けさの中で時を過ごす。ばーちゃんと、ユースケも含め、あの世に逝つた命と共に時を過ごす。雨があがつた。僕は歩き出す。不思議なことに膝の痛みがひいていた。

一番札所で気持ちばかりのお礼参りをした後、そのまま僕は和歌山へ渡り、高野山へもお礼参りをした。僕にとつてそれが何の意味をもつのか……。僕の中では、第八番札所を再訪したことで完全に遍路は一区切りしていた。

お四国を振り返りながら、もう一度お四国を巡った。文章による遍路道である。その時々の思いが甦る。涙も流した。文章で遍路道をたどるその間に、また僕に関わりのある命が逝ってしまった。そこには怒りにも近い悲しみがあった。彼は自ら命を絶つたのである。僕に何かできることはなかったのか、僕の決意を伝えることだけでもできたのではないか、やるせない思いが湧き上がる。そして、僕はあらためて決意する。「絶対に両親より先には死はない」と。

お四国遍路は輪廻の道、何度も回ろう。時がくれば、僕の足は何度でもお四国を目指す。

《著者紹介》

じろちょう

現住所：静岡県浜松市

学生時代に放浪癖が現れ、今に至る。

放浪歴

チャリダーとしてつなぎつなぎで日本一周もしているが、軟弱者であるが故に一度にたくさんの距離を走ることはできない。ライダーとしては、毎日、超短距離を乗り回していることの成果か、運転技術は非常に拙い。愛車「赤龍丸」と共に、北海道から屋久島までを何となく走ってきている。国外へも身一つに近い形で度々逃亡を企てている。これまでに19ヶ国へ足を踏み入れているが、言語の壁に阻まれて日本での生活を余儀なくされている。

今回、本格的にトホダーとしてデビューした。ただ歩くだけということに関して甘くみている部分もあったが、お四国遍路を通して「トホダー至上主義」に傾倒しつつある。今のところ学校という場所で「先生」と呼ばれる生活が続いている。

タビのキ 其の参

2007年8月8日発行

著者 —— じろちょう

発行 —— 株式会社 かんぽうサービス

発売 —— 株式会社 かんぽう

大阪市西区江戸堀1丁目2番14号(〒550-0002)

電話……(06)6443-2171 / FAX……(06)6445-2470

印刷／製本……モリモト印刷株式会社